The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	異文化交流の中の茶 : 岡倉天心とアメリカ
Author(s)	大和田, 範子
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54019
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

博士学位論文

異文化交流の中の茶―岡倉天心とアメリカ―

大阪大学大学院人間科学研究科文明動態学

大和田範子

目次

年表 4

序論 6

第1章　開国のあらし―閃光にうごめく竜 22

はじめに
第１節　アメリカ艦隊ペリー来航 24
第１項　国際港横浜 25
第２項　漂流民と英語通詞 26
第２節　壮絶な英雄伝説と繊細な茶碗の国 27
第１項　キリスト教宣教師の視線：『日本教会史』 27
第２項　黄金の国ジパング：『東方見聞録』 33
第３項　ジャポニズムの洗礼：天正の少年遣欧使節団 35
第４項　鎖国の盲点：ケンペルとシーボルト 37
第３節　文明開化とジャポニズム―武士の海外派遣 41
第１項　万延元年の遣米使節団：アメリカ 41
第２項　文久二年の遣欧使節団：ヨーロッパ 46
第３項　その他の使節団 48
おわりに

第2章　岡倉覚三の「国家」と「美術」―National Individuality 51

はじめに
第１節　コスモポリタン天心岡倉覚三 51
第２節　『国家論』の背景 56
第１項　政治と外交 56
第２項　不平等条約の光と影 58
第３節　『美術論』の背景 59
第１項　町田久成の「博物館」構想 59
第２項　ボストンからの来訪者：モース・フェノロサ・ビゲロー 64
第４節　文部省官僚時代の美術行政 71
第１項　九鬼隆一と岡倉覚三 71
第２項　欧州視察旅行 74
第３項　東京美術学校校長就任 75
第４項　シカゴ万国博覧会への参画 76
第５項　中国視察旅行と「生涯の予定表」 78
おわりに

第3章　アメリカへのターニングポイント―空白の 6 年　81

はじめに
第 1 節　東京美術学校校長罷免の謎　81
第 1 項　解任の予兆（1896 年）　82
第 2 項　東京美術学校校長罷免　91
第 3 項　対ロシア外交の悪化と日本の政治動向　94
第 4 項　アメリカ大統領選の行方　98
第 2 節　想定外の「日本美術院」創設　99
第 3 節　突然のインド出発　100
第 1 項　インドでの活動　101
第 2 項　タゴール家との交流　103
第 4 節　『東洋の理想』出版　104
第 1 項　序文の意義　106
第 2 項　理想の範囲―Asia is One　108
第 3 項　アジア（インド・中国・日本）の宗教・芸術論　108
第 4 項『東洋の覚醒』と『東洋の理想』―「本音」と「建前」　113
おわりに

第 4 章　Okakura's America―「ボストンデオカクラガハタシタシメイ」　117

はじめに
第 1 節　日露戦争勃発と伊藤博文の船上演説　118
第 1 項　「第一声」in New York　120
第 2 項　渡米の真意　122
第 3 項　ニューヨークの個展　123
第 2 節　ボストン美術館就任　127
第 1 項　ボストン・ブラーミンズとの交流　130
第 2 項　イザベラ・スチュアート・ガードナー美術館　134
第 3 節　ルーズベルトをめぐる岡倉覚三と金子堅太郎　135
第 1 項　第 26 代アメリカ大統領セオドア・ルーズベルト　136
第 2 項　政治家金子堅太郎の苦戦　138
第 3 項　美術家岡倉覚三と「大統領のテーブル」　141
第 4 節　時を得た『日本の覚醒』出版―黄禍と白禍　142
第 1 項　西洋近代化以前の日本社会　145
第 2 項　アメリカ賞賛と謝意の意図　146
第 3 項　女性問題への言及　148
おわりに

第5章 何故『茶の本』を書いたのか?―文明の打破 152

はじめに
第 1 節　臨時講演「絵画における近代の問題」 153
第 2 節　受けつがれてきた茶道 159
第 1 項　「禅」と「道」 160
第 2 項　茶の歴史 164
第 3 項　千利休 166
第 3 節『茶の本』の戦略的構想 168
第 1 項 「The Cup of Humanity」の雑誌への発表 169
第 2 項　西洋の異空間空想概念―「ガリバー」と「アリス」 171
第 3 項　Teaism と Tea-Cult：近代と前近代 173
第 4 項　究極の絵画 178
第 4 節　『茶の本』の出版―With a smile 179
第 1 項　The Cup of Humanity：暗示 180
第 2 項　The Schools of Tea：ルーツ 181
第 3 項　Taoism and Zennism：宗教 183
第 4 項　The Tea-Room：空間 185
第 5 項　Art Appreciation：藝術 187
第 6 項　Flowers：バリエーション 189
第 7 項　Tea - Masters：一陽来復 192
おわりに

第 6 章　21 世紀の岡倉天心 196

はじめに
第 1 節　異文化理解の方向性 196
第 1 項　SAMURAI IN NEW YORK 2010 197
第 2 項　茶文化に見る日本：The Ideologies of Japanese Tea 201
第 3 項　現象としての茶：Making Tea, Making Japan 205
第 2 節　今後の課題 207

第 7 章　結論 209

参考文献 211

さいごに 219

岡倉覚三年表（満年齢による）

西暦	和暦	歳	岡倉覚三（天心）	日本/世界
1862	文久2	0	旧暦 12 月 26 日(太陽暦 1863 年 2 月 4 日)岡倉角蔵誕生.(横浜市本町一丁目於)	文久遣欧使節団ロンドン万国博覧会に出席.
1868	明治元年	6	弟由三郎誕生.	明治維新. 戊辰戦争
1869	2	7	ジョン・バラーに就き英語学習始める	
1870	3	8	妹てふ誕生. 母（この）死す.	
1871	4	9	神奈川県長延寺に預けられ漢籍を学ぶ.	廃藩置県. 福井藩撤廃
1873	6	11	東京に家族全員移転.日本橋蠟殻町に旅館経営. 官立東京外国語学校入学.	
1875	8	13	官立東京開成学校入学. 覚三に改名.	
1877	10	15	新制東京大学文学部編入. 政治学・理財学を学ぶ.この頃英米小説を耽読.	第一回内国博覧会開催
1878	11	16	森春濤に漢詩を学ぶ.	E・フェノロサ来日
1879	12	17	大岡定雄の娘元子と結婚.	
1880	13	18	東京大学卒業.　10 月文部省に入省	第二回内国博覧会開催
1881	14	19	専門学務局勤務（音楽取調掛兼務）	
1882	15	20	小山正太郎「書ハ美術ナラス」に反論「書ハ美術ナラスノ論ヲ読ム」を発表.	E・モースに伴われてW・S・ビゲロー来日
1884	17	22	法隆寺夢殿を開扉、救世観音を拝す.	フェノロサと共に開扉
1885	18	23	園城寺法明院桜井敬徳阿闍梨よりフェノロサ「諦信」、ビゲロー「月心」を受戒	第一次伊藤博文内閣(1885.12~88.4)
1886	19	24	欧米視察旅行. フェノロサ、ビゲロー同行.体調不良の九鬼隆一婦人を帰国時に同伴.桜井敬徳より「雪信」を受戒.	ヘンリー・アダムス、ジョン・ラファージ来日
1887	20	25	欧米視察旅行より帰国.	東京美術学校設置
1889	22	27	帝国博物館理事兼美術部省に就任.	
1890	23	28	東京美術学校校長就任.（文部省）京都、奈良帝国博物館建設用地見聞に出張.	フェノロサ解雇帰米.第三回内国博覧会開催
1892	25	30	宮内庁の命で京都・奈良へ出張. シカゴ万国博覧会「鳳凰殿」内装・出版物協力.	第二次伊藤博文内閣（1892.8~96.9)
1893	26	31	7/11 東京美術学校第一期生卒業.7/15 帝国博物館(宮内省)の命で中国視察旅行.	シカゴ万国博覧会開催（5/1-10-3）
1894	27	32	10 月黒田清輝らが天真道場を創設.天心著「支那南北ノ区別」が『国華』に掲載.	日英通商航海条約締結.日清戦争宣戦布告.
1895	28	33	3/21 より黒田と西洋画科設置協議重ねる.	日清戦争終焉.三国干渉第四回内国博覧会開催
1896	29	34	黒田清輝を西洋科の嘱託に推薦.九鬼隆一と「古社寺保存委員会」設置、委員と	パリ万国博覧会の評議委員に任命さる.（内閣）

			なる.	
1897	30	35	「古社寺保存法」制定.フェノロサ再来日	日露関係悪化が進む.
1898	31	36	3/21 怪文書配布さる. 3/29 東京美術学校校長罷免. 7 月「日本美術院創立.（ビゲロー2 万円寄付）	柴五郎ロシア横断視察第三次伊藤博文内閣（1898.1~98.6）
1899	32	37	岡倉パリ万博鑑査官を外される. 6 月宝物取調に九州、琉球へ出張.（内務省依嘱）	新渡戸稲造『武士道』出版.モラエス来日.
1900	33	38	4/14 のパリ万博参加のため派遣される事務官らの送別会に橋本雅邦らと出席.	第四次伊藤博文内閣（1900.10~01.6）
1901	34	39	3/28 非職満期. 11/21 によりマクラウド夫人らとインドへ渡る（内務省の命）.	ヴィヴェカーナンダ、アメリカで宗教会議開催
1902	35	40	10/30 岡倉インドより帰国.	1 月日英同盟.8 月ルーズベルト大統領の弟来日.
1903	36	41	『東洋の理想』をジョン・マレー社より出版.新渡戸稲造と帝国教育会で講演	第五回内国博覧会開催
1904	37	42	2/10 伊代丸で渡米.3/25 MFA 勤務開始. 9 月「絵画における近代の問題」講演. 11 月『日本の覚醒』センチュリー社より出版.	2/8 日露戦争開戦. 3/10 米大統領『中立宣言』.ソ連不参加 4/30-12/1 までセントルイス万博開催.
1905	38	43	2 月帰国. 4 月雑誌 *International Quarterly* に「The Cup of Humanity」と「絵画における近代の問題」が同時掲載される. 10 月渡米.	9/5 ルーズベルト大統領の仲介により、ポーツマス会議で日露戦争終焉.
1906	39	44	5 月帰国. 同月『茶の本』がアメリカのフォックス・ダフィールド社より出版.	即ドイツ・フランス語に翻訳され世界が注目す.
1907	40	45	2 月中国より帰国 .11/16 渡米.	
1908	41	46	4 月米国欧州経由中、ルーブル博物館でフェノロサと偶然再会する. 7 月帰国	フェノロサ、9 月ロンドンで客死
1909	42	47	新ボストン美術館の中国日本部の内装に参加し、日本伝統建築を実現させる.	MFA コプリーよりハンティントンへ新築移転.
1910	43	48	9 月渡米. ボストン美術館の中国・日本部キュレーターを受諾	
1911	44	49	ハーバード大学名誉修士拝受.8 月帰国.	不平等条約改正の完了
1912	大正元年	50	8 月インド美術蒐集のためカルカッタ、ブッダガヤを訪問. 11 月ボストン 5 回目の渡米でこれが最終となる	関税自主権撤廃
1913	2	51	2 月『白狐』完成.4/10 帰国. 8 月遣米交換教授推薦受ける. 9/2 岡倉覚三死去.	
1914			横山大観らにより「日本美術院」再興	第一次世界大戦勃発

序論

本論は、150 年前に日本が遭遇した西洋列強の植民地侵攻によるグローバリゼーションの中で、岡倉覚三（天心）がアメリカのボストン美術館に勤務しながら、日露戦争を背景に、東洋美術専門家として芸術文化の分野からどのように活動し近代化に貢献したのかを明らかにするのものである。彼は明治の近代化の中で国家の創生期をになった人物として、思想家、美術史家、教育家、評論家、著作家など、さまざまに取り上げられるが、アメリカにおける政治外交についてはほとんど研究されていない。

明治維新に登場した岡倉覚三は、新政府において伝統文化・芸術美術存亡の危機の中で、前半生を日本美術界に貢献し、後半生をアメリカのマサチューセッツ州ボストン美術館中国・日本部の顧問、後にキュレーターとして活躍した。ボストン美術館ではコレクションとして持ち込まれたかつての日本の伝統美術品の鑑定、修理、蒐集に人生を捧げた。さらに西欧に向けて日本についての三冊の英文著作をイギリス、アメリカから出版し、日本人の立場から日本を西洋に紹介した人物として世界的に知られている。しかし人生後半期の、アメリカにおける岡倉については謎が多い。1904 年のアメリカ渡航前後に『東洋の理想』（1903）[1]、『日本の覚醒』（1904）[2]、そして『茶の本』（1906）[3]を同時期に連続して書きあげている。その中でも特に最後の『茶の本』は政治色が濃い前二冊とは異なり単なる茶文化を紹介した平和的な本であるとされ、現在もその域を越えていない。

本論を書くきっかけは、岡倉が何故日本の茶道とは内容を異にする『茶の本』を書いたのかという疑問であった。西洋文明一辺倒のこの時代に、日本伝統文化をテーマにした『茶の本』を何故出版したのか。そこで彼の前半生にさかのぼり、日本美術界のパイオニアとしての輝かしい活躍が東京美術学校校長罷免により途絶えたにもかかわらず、下野した元官僚としてこの後の 6 年間に「日本美術

---

1 〝*The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan*〟 London, John Murray, 1903.2

2 〝*The Awaking of Japan* 〟 New York, Century Co., 1904.11

3 〝*The Book of Tea*〟 Fox Duffield and Company, 1906.5, New York

院」を創設し、その間にインドへ1年間遊学し、最終的に英語で『東洋の理想』をロンドンから出版してアメリカへの道へとつなげた、という彼の計画性に注目し、岡倉の渡米は日露戦争に踏み切らざるを得なかった日本存亡の危機を回避するための政治的意図が内在したのではないかと考えたことに始まる。

そこで本論では「何故岡倉が『茶の本』を書いたのか」を軸として、先行研究で見落とされてきた日露戦争[4]との関係を背景に、東京美術学校校長罷免と岡倉のアメリカへの拠点移動との関係に焦点をあて、政治外交的視点を加えて今までとは全く異なる岡倉天心像に迫る。問題は、何故この時アメリカに渡ったのか、何故『茶の本』を書いたのか、何故茶であるのかという点である。

日本の先行研究と問題点

日本で岡倉天心の先行研究が本格的に始まるのは第二次世界大戦後である。前半生日本での活動は東京美術学校[5]の業績として報告されており、日本美術界を近代化の中で牽引したパイオニアの記録である。個人的な行動記録は校長罷免により公的立場を退いた後に彼が創立した「日本美術院」[6]の運営記録に詳しい。その後アメリカへ活動拠点を移したため、彼が日本で再浮上するのは、英文著作『茶の本』出版以来23年を経た1929年の村岡博の邦訳、そして『東洋の理想』『日本の覚醒』の邦訳においてである。この時日本は十五年戦争[7]（太平洋戦争）に向かっているまさにその時であったため、『東洋の理想』の冒頭の言葉「アジアは一」が軍部のプロパガンダに利用され、敗戦の屈辱と岡倉のイメージ

---

[4] 日露戦争：1904-05年（明治37-38）日本と帝政ロシアとが満州・朝鮮の制覇を争った戦争.04年2月の国交断絶以来、同年8月以降の旅順攻囲、05年日本開戦などで日本の勝利を経て同年9月アメリカ大統領T. ルーズベルトの斡旋によりポーツマスで講和条約成立.

[5] 東京美術学校：1887年（明治20）日本唯一の国立美術学校として設立. 第一代校長は浜尾新、第二代校長は岡倉覚三（1890－98年）

[6] 日本美術院：1898年岡倉覚三が東京美術学校を辞するとともに創立したもので、日本画を中心に重きをなし、横山大観・下村観山・菱田春草などを輩出して今日に至る.その展覧会を院展と呼ぶ.

[7] 十五年戦争：（1931-45）1931年（昭和6）の柳条湖事件から45年の降伏まで、日本が15年にわたって行った一連の戦争で、満州事変・日中戦争, 太平洋戦争の総称.

が重なる中で岡倉についての先行研究が始まった戦後、岡倉への反発は強く、政治的傾向の強い前 2 冊は別として、『茶の本』に対する彼らの反応は冷ややかである。

1956 年、宮川寅雄は『茶の本』について「この本は、前の三著（『東洋の覚醒』『東洋の理想』『日本の覚醒』）に比べて沈静した書物であり、それはお茶に託して日本の文化と日本人の生活を描き出して見せたエッセイのような小著だった[8]。すべての過激なものは影をひそめて、ユーモアさえ含まれる藝術論であり、日露戦争もおさまり政治的に書き立てるものはなかった」と言い、10 年後、吉澤忠は「…日露戦争前後に書かれた岡倉の『東洋の理想』『日本の覚醒』および『茶の本』は、現在に至るまで岡倉の成果を高めているようであるが、果たしてそれに価するものであろうか。『茶の本』は、外国人向けの日本文化の高級解説書の域を脱していないようであるし、『東洋の理想』や、『日本の覚醒』にしても、ヨーロッパ帝国主義の残虐な性格を暴いていて鋭いが、既に帝国主義国家としての性格を露骨に示しだしている自国に対する反戦は毛頭見られない」とする。同じころ斉藤隆三は「当時手元に携えていたのは陸羽の「茶経」だけであって、他に参考書も無かったが、直ちに案を立てて、茶や花を愛玩する美風のあることを基本に、日常を優雅に活き、平和愛好を国民性として保っているものが日本本来の姿であることを紹介しようと企てたものが『茶の本』の生命とする」[9]とこの本の平和的側面について簡単に触れているが、岡倉が何故このような本をこの時期に出版したのかという点については語られていない。

しかし 1985 年大岡信は、「天心は、『茶の本』の成立の直接の動機は、ボストン社交界の婦人たちを聴衆としてこの本の内容を語り、彼女らを啓蒙することにあったか、ないしはそう推察できそうな事情があったらしいと考え、天心はこれら英文著作のすべてを通じて、多かれ少なかれ、自分の抱壊する美の理想、アジアの理想を宣揚し、訴るという根本的な態度を変えることはなかった。つまり

8　宮川寅雄, 1956,『岡倉天心』東京大学出版会 p.204-5
9　斎藤隆三, 1960,『岡倉天心』吉川弘文館 p.171

何よりもまず、行動的な思想家としてこれらの本を著したのだ[10]」という新たな見解を示した。

2007 年、茶道の専門家の立場から田中秀隆は「『茶の本』はもっとも親しまれている天心の著作であり、長続きする人気の理由は、三部作中もっとも豊富にエピソードがちりばめられていて、『茶の本』が文芸書としても鑑賞に耐えうるためであろう[11]」と『茶の本』の文学性を語る。清水千恵子は、茶室建築計画と『茶の本』、『茶の本』執筆との関係性、アメリカ人の茶道体験を関係付けたうえで、「『茶の本』は二〇世紀初頭のボストン文化の動向を把握した上で執筆されたテキストであった[12]」と解釈する。

2007 年ボストン美術館[13]日本部キュレーターであるアン・ニシムラ・モースは『茶の本の 100 年』[14]の中で、「ボストンにいた時に何故岡倉が『茶の本』を出したのかは今でも私達にとっては大きな疑問として残っている」と疑問を投げかけ、同年大久保喬樹は『新訳　茶の本』[15]の解説ノートの中で、「『茶の本』では、もはや、ほとんど現実政治行動的な関心を失い、歴史的展開にさえあまりかかわらず、もっぱら、時勢、現実を超えた形而上学、美学にふけることになる…さらにインドから帰国後、日本での活動を断念して、亡命者のようにアメリカにわたった時点から、天心は次第にこの世をあきらめ、俗世を離れた老荘的境地に沈潜していくようになっていく」と消極的にとらえている。しかし彼はアメリカ渡航後、英文著作出版や講演等による広報外交で活発に日本主張を行い、ハーヴァード大学で名誉修士を授与されるなどボストンでの行動は積極的である。

何故この時アメリカに渡ったのか

---

10 大岡信, 2006,『岡倉天心』朝日新聞社 p.17-18
11 田中秀隆, 2007,『近代茶道の歴史社会学』思文閣出版 p.194,227
12 清水恵美子, 2012,『岡倉天心の比較文化史的研究―ボストンでの活動と芸術思想』思文閣出版 p.200-209
13 Museum of Fine Arts, Boston, *Art of Asia, Oceania, and Africa*（ボストン美術館アジア・オセアニア・アフリカ部門）2011 年現在の名称.
14 岡倉天心国際シンポジューム,2006,『茶の本の 100 年』小学館スクウェアー,p.018
15 大久保喬樹訳,2007,『新訳　茶の本』角川学芸出版, p.175-176

アメリカの渡航に関して、きっかけとも言える事件は 1898 年（明治 31 年 3 月）におきた東京美術学校校長罷免である。近代美術創世記の美術学校校長として、教育や美術行政の最先端に立って学校運営に意欲を燃やしていた岡倉が、彼を誹謗中傷した一枚の怪文書により即刻校長を罷免された事件である。これにより岡倉は公職を追われ、下野することとなった。しかし一方でこの職から解放されたことで自由に行動する時間を得たともいえる。この時岡倉若干 35 歳であった。

もともと西洋近代化を進める政府の官僚として、日本画を中心に強引に National Individuality の目標を掲げた学校運営に反発する西洋画派との対立があったが、解雇の予兆が現れる 2 年前の 1896 年には校長として西洋画科を新設し、学校内の問題解決に着手して運営はむしろ安定期に入っていた矢先であった。この背景には岡倉を排斥するための陰謀説があったといわれているが、原因といわれた怪文書に関してほとんど調査もないうちに岡倉はこれを受諾したという素早い展開には不可解さが残る。この騒動に関して幸田露伴[16]は、

> 「技術家（美術家）といえば兎も角も一種の天才を備へ、自己の技能に就いて信ずる所あり、又任ずる所あるものたるなり。然るに此等技術家の処為に向かって、妄りに其の方針を云々し、主義を云々するは，是天才に対する俗才の干渉にして、心ある士の軽々看過すべからざるの事なりとす。若し今日の如くにして、天才の軽々しく俗才のために干渉せらるゝが如きことあらん乎、一国文化の開展に於て寒心すべきもの決して十二に止まざるべし」

と確固たる意志を持って行う岡倉の方針にとやかく干渉し、非職に追い込んだ俗才（文部省官僚他）に対して、非職解雇事件直後に『国民新聞』にこの措置に

---

[16] こうだろはん：1867-1947）小説家.『国民新聞』明治 31 年 4 月 14 日にこの件について即刻論評している.『岡倉天心全集別巻』「露伴子の美術学校談」p.172
尾崎紅葉と並び称される紅露時代を築く. 1892（明治 25）年頃、江戸趣味の文化人が多く住む根岸に移り住み、饗庭篁村、森田思軒と共に根岸派、根岸党と呼ばれ、東京美術学校時時代の岡倉と交流をもった.

対する反論文を投稿している[17]。

当時日本政府は、日清戦争[18]後のロシアとの関係悪化で、戦争は時間の問題という事態に陥り、開国以来の危機に晒されていた。そこで戦争勃発時に日本に残された選択は、アメリカの斡旋による戦争の短期終焉であり、そのためにアメリカへの渡航が急務であった。そこで注目されたのが岡倉のボストン人脈であり、岡倉は国家存亡の窮地に立たされた政府と了解のうえ解雇をうけいれたのではないか。ボストンには東京大学の外国人教師のエドワード・モース[19]や恩師アーネスト・フェノロサ[20]の出身校ハーヴァード大学があり、次期アメリカ大統領候補といわれたセオドア・ルーズベルト[21]と同窓のウイリアム・ビゲロー[22]の存在があった。彼は岡倉が文部省入省以来の親交があるボストン美術館の有力理事の息子で、ボストン美術館就職の協力者である。これによりアメリカでの活動拠点を確保できたのである。この職を受理する条件として、岡倉は半年毎の日米の往復という厳しい条件を提示したのに対して、ボストン美術館側はこれを承認している。また顧問ではなくキュレーターとして勤務することを何度も美術館側から申し入れられながら岡倉は拒否を繰り返している。このようなことから、彼のアメリカ滞在が、不透明な政治外交に左右されているとの推測ができる。戦

17『 岡倉天心全集　別巻』平凡社, 1981p.171-172,(『国民新聞』「露伴子の美術談」（明治31 年 4 月 13,14 日）掲載)より.

18 日清戦争：1894-95 年（明治 27-28）日本と清国との間で行われた戦争. 朝鮮の甲午農民戦争（東学党の乱）をきっかけに 94 年 6 月日本は朝鮮に出兵し、同じく出兵した清軍と 7 月豊島沖海戦で戦闘を開始し、同 8 月 2 日宣戦布告、日本は平壌・黄海・旅順などで勝利し 95 年 4 月、講和条約を締結.

19 Edward Sylvester Morse（1838-1925）：アメリカの動物学者.1877 年（明治 10）来日. 2 年間東京大学で生物学を講じ進化論を紹介. 大森貝塚の発見者.

20 Ernest Francisco Fenollosa（1853-1908）：アメリカの哲学者・東洋美術研究家. 1878 年（明治 11）東京大学外国人教師として来日.　岡倉覚三の恩師であり、岡倉の文部省入省後、共に東京美術学校創設に尽力. 1890 年帰米後ボストン美術館が彼のために設けた東洋部でキュレーターとして 1896 年まで勤務後辞職.

21 Theodore Roosevelt（1858-1919）：アメリカ合衆国第 26 代大統領（1901-09）共和党選出. 日露戦争の講和を斡旋.し、その功績でノーベル平和賞を受賞す. アメリカ人初のノーベル賞受賞者.

22 William Sturgis Bigelow(1850-1926)：ボストン美術館（MFA）の有力理事の息子で医師・日本美術愛好家. 1882 年来日し、明治期日本美術界でフェノロサと岡倉覚三に同行しながら日本美術コレクションを行う. 帰国後の 1890 年 MFA の理事に就任. 1911 年コレクションを MFA に寄贈.

争下でロシアの戦艦との遭遇の危機がありながら、太平洋を何度も横断し日本との往復を欠かさなかった岡倉のアメリカ渡航は、日本政府の外交情勢を鑑みた広報外交を推し進めるという目的ある渡航であったのである。

何故『茶の本』を書いたのか？

政治外交的意図の強い『東洋の理想』『日本の覚醒』に続いて文化の薫り高い『茶の本』を出版し文武両道の日本国家を西洋に示す。『東洋の理想』『日本の覚醒』が日本でほとんど書きあげられていた本であるのに対して、『茶の本』はアメリカで構想を練られた。セントルイス万国博覧会[23]で「絵画における近代の問題」を講演で初めて茶の宗教哲学に言及し、反響を得たことも、『茶の本』の出版につながる理由と考えられる。この講演は翌年日露戦争の最中に雑誌 *International Quarterly* に〝The Cup of Humanity” として発表され、翌年戦争終焉後に出版された『茶の本』の第一章、第二章になった[24]。

MFA の日本美術部のアン・ニシムラ・モースは『茶の本』が書かれた理由について、[25]

> 「1906 年の 5 月、岡倉は『The Book of Tea—茶の本』をニューヨークの出版社から出版しました。この本がどのような経緯で書かれたのか、実のところはっきりしておりません。…この『茶の本』においては、岡倉が、アメリカの人たちに対して「自分は東方から来た男なのだ」ということを断固たる主張として取り上げていることがよくわかります。
>
> …岡倉天心はボストン美術館において、茶道の趣味あるいは茶道の趣を持ったものを、特にこだわって集めていたわけではなかったのだということがわかったのです。…1909 年にハンティントン・アヴェニューと

---

[23] Louisiana Purchase Exposition, Expo 1904：ルイジアナ買収 100 周年を記念して 1904 年 4 月 30 日－12 月 1 日までアメリカ合衆国ミズーリ州セントルイスで開催され 60 カ国が参加、会期中 1969 万人が来場した.

[24] International Quarterly (Vol.9, No.1) 1905.4

[25] 2007、『『茶の本』の 100 年』、「〝The Book of Tea〞の時代、岡倉覚三とボストン美術館」小学館スクエアー、p.18

いうところに美術館が移転したときに、ティーハウス（茶室)を作ろうというプランがあったものの、それを断念したという記録が残っております。岡倉はそれよりもむしろ、中国の美術作品を購入していこうといったわけなのです。…このようなことから、岡倉がボストンにいたときに、なぜ『茶の本』を出したのか、実は今でも私たちにとっては大きな疑問として残っているわけです」

また茶の湯研究家の熊倉功は、

「日本の小堀遠州がどうした、利休が最後切腹の時こうした、と天心が書いている話は、われわれの見ている限り出典にあたるような文献はありません」「結果、現実の茶の湯界、茶道界と岡倉天心の『茶の本』は、いまだすれ違い状況にあるといえましょう」そして,

「あまりにも、今の茶の湯を考える時『茶の本』がうまく適合するために、われわれは『茶の本』の持っている一九〇六年の段階の異質性といいますか、その非常に特異な性格というものを見落としがちでございます。我々が違和感なく『茶の本』が読めるということは、逆に申しますと一九〇六年の段階では『茶の本』は非常に違和感のある本であったのではないかという気がいたします[26]」

と『茶の本』の異質性をとなえる。

何故「茶」を選んだのか？

東京美術学校の制服も古代文官の闕腋[27]・折烏帽子[28]を参考にした独特の服装で美術学校の学生であることを自覚させたように、岡倉の外国での和服姿は、語学に堪能な日本人であることを常に主張している。彼にとって服装は重要な自己主張である。彼は西洋に対してアジアにおける日本の国力の優位的存在を語りながら、常に影響を受けた中国とは異なる文化形態であることを強調してい

[26] 2007、「『茶の本』の 100 年」p.93
[27] けってき：束帯や衣冠などの時に切る上衣服で、脇を空けたもの.
[28] おりえぼし：頂をおり伏せたえぼし（烏帽子）

る。インド人と日本人との外見の類似性はほとんど見られないが、顔面だけを比較すれば中国人と日本人の区別がつきにくいように、文化も中国と日本の違いはわからない。茶は中国から伝来したが、日本の気候風土や生活習慣により変化し、畳を敷きつめた茶室で、正座で茶を飲みコミュニケーションをはかる日本の茶に日本の独自性を見出している。

本書の構成

第一章「開国のあらし―閃光にうごめく「竜」」では、日本に対していかに欧米が進出の機会をうかがっていたか。この章では 16 世紀日本に来日したキリスト教宣教師によりヨーロッパに報告され日本伝統文化として現代まで受け継がれてきた日本の茶道文化の原点を彼らの異文化理解から明らかにし、天下統一を遂げ 2 世紀にわたる鎖国から開国までの日本の変化を観る。

開国のあらしの到来は、岡倉が誕生する 10 年前、200 年間の一国支配の中で発展してきた幕末日本への、アメリカ艦隊司令官マシュウ・カルブレイス・ペリー[29]の来航であった。黒船と呼ばれた蒸気船の脅威に、日本人は「太平の眠りを覚ます上喜撰[30]（蒸気船）たった四杯で夜もねられず」の川柳[31]を残している。

日本が西洋文明をはじめて知るのは、第 15 代アメリカ大統領ジェームス・ブキャナンがアメリカ本国での文書交換をもとめたのに応じ、江戸幕府が派遣した武士の正式視察団[32]が最初である。西洋文明との格差を目にした西洋文明への武士たちの驚きの衝撃は、日本の西洋近代化への動機となりその後明治維新にいたる 8 年間に、さらに西洋文明を知るために幕府の視察団や留学生たち

---

[29] Matthew Calbraith Perry （1794-1858）：アメリカの海軍軍人. 1853 年 7 月、日本を開国させるために東インド艦隊を率いて浦賀に来航. 翌年江戸湾に来航し横浜で日米和親条約を結び、事実上日本は開国した.

[30]「 たいへいのねむりをさますじょうきせん　たったしはいでよるもねられず」：黒船来航の脅威を川柳に残したもの. じょうきせんは上等のお茶のことで 4 杯も飲めば寝られない.

[31] せんりゅう：5.7.5.7.7.から成る 17 字の短詩.江戸中期（1764-1772）頃から隆盛. .

[32] 万延元年の遣米使節団（1860）：戦国時代以後、200 年の鎖国を経て、幕府が初めて外国に文書交換のため派遣した武士の正式使節団.

はヨーロッパへと向かった。1862 年ロンドンで行われた万国博覧会で展示された日本美術が評判となりジャポニズムブームがヨーロッパ全体を席巻し、日本文化への関心が一気に広まった。しかしこの時代西洋が植民地支配を目的とした東方への侵略とは如何なるものか。

> 「…オリエントとは、むしろヨーロッパ人の頭の中で作り出されたものであり、古来、ロマンスやエキゾチックな生きもの、纏綿たる心象や風景、珍しい体験談等の舞台であった」のであり、「1815 年から 1914 年までにヨーロッパの直接支配下に置かれた植民地領土は、地表面積のおよそ 35 パーセントから 85 パーセントにまで拡大した。わけても影響の著しかったのはアフリカとアジアであった」[33]

とエドワード・サイードは『オリエンタリズム』の中で述べている。このような状況の中で、日本は開国をせまられた。陸続きの中国清朝は、すでにアヘン（1840）・アロー（1856）戦争によりイギリスに半植民地化されていた。1881 年にソールズベリー卿[34]が述べたように、19 世紀の大半を通じて英仏両国人に共通するオリエント観は、

> 「…信頼すべき同盟国にして、諸君の深甚なる利害関係をいだかざるを得ないある国に対し干渉を企てるものがあるとすれば、諸君に開かれた方策は次の 3 つである。その国を放棄するか、独占するか、あるいは分け合うか。放棄すればフランスをして、わが国（イギリス）のインド・ルートを分断せしめることになる恐れがある。独占すれば、戦争発生の可能性がすこぶる大きい。そこで我々は分かち合うことにした。」[35]

このような西洋列強主導の世界進出の中で、ペリーは江戸幕府と日米和親条

---

[33] Edward W. Said, 2003,『オリエンタリズム』平凡社、p.17,p.102
サイード（1935-2003）はパレスチナ出身のアメリカの批評家、文学研究者. コロンビア大学教授.西欧中心主義をオリエンタリズムとして批判.

[34] Robert Cecil, 3rd Marquis of Salisbury 1830-1903：イギリスの政治家. 保守党党首. 1885-1902 年 3 度首相となり、日英同盟を締結.

[35] 同上 p.102

約を締結し日本は事実上開国した。1860 年と 62 年に派遣された視察団の中に、後の明治時代の教育家となる若き日の福沢諭吉が随行員として同行していたことは、明治の近代化に重要な指針を与えた[36]。福沢は 3 回にわたる国家間の視察団派遣に同行する機会をえて、世界の中に立たされている日本の姿を確認し、帰国後目の前に迫る近代化に必要な人材の教育を目指す。統一国家として成り立っていた武士の封建社会が、ペリー来航により西洋近代化へと道をたどっていく過程を幕末武士の視察団から考察し、文明の動きを探る。

第二章「岡倉覚三の国家と美術—National Individuality」では、岡倉の豊富な感性としたたかな国際性が育った背景と、芸術への関心が育つ経過をみる。

岡倉の受けた言語教育は、幕末の外国人居留地横浜での生活の中で、生活手段として使われる生き生きとした英語力を養い、8 歳の頃には英語塾に通い母国語のように外国語を話すまでになっていた。のちに東京大学で同級生達が英語を異国の言葉として接する状況とは全く異なる生活言語の英語を幼少の頃から身につけたのである。また母の死後一時預けられていた寺の住職から漢語を習い、中国の壮大な風土の言語に、日本語とは異なる表現の世界を身につけた。これと並行して大学で通訳として、西洋人の視点から東洋美術を観るその感性は外国人新任教師アーネスト・フェノロサの東京大学就任に依った。大学の卒業論文に英語で 2 カ月かけて「国家論」を書いたことは、如何に彼が外国を身近に感じ、将来の日本外交に自分の活躍を望んでいたかを示している。しかし「国家論」の消滅で、代わりに「美術論」を書いたのは、日本美術家としての萌芽がこのころすでに内在していたのである。

第三章「アメリカへのターニングポイント—空白の 6 年」では、彼の輝かしい前半生が何故非職による解任で簡単に閉じられたのか。日露戦争という急を

[36] ふくざわゆきち：（1834-1901）思想家・教育家. 豊前中津藩士の子息. 緒方洪庵に蘭学を学び、洋学塾を開く. 1868 年塾を慶応義塾と改め教育家として人材の育成に努める. 『脱亜論』『学問のすすめ』など著書多数.

要する政治危機を背景として、アメリカに協力をもとめるためにボストン人脈を持つ岡倉に白羽の矢が立ち、そのための解任であったとのではないかとの推察からこの章で明らかにする。具体的には校長として美術学校が軌道に乗り始めた時期になぜ解任が行われたのかを出発点に、解任後の 6 年間に彼がどのようにアメリカへ向けて準備を行ったのかを「日本美術院」設立、インド遊学、『東洋の理想』の出版等の関連性から解明する。

1880 年の文部省入省から 6 年後に欧米視察の出張を命じられ、約 1 年間にわたる美術調査を行った。帰国後文部官僚として東京美術学校の設立に奔走し、翌年 1890 年校長に就任した岡倉は、西洋画派との激しい対立の中で日本美術の方向性は、国家と美術との親密な関係が必要であるという結論に達し、National Individuality を目標に掲げて美術学校の方針としたのである。帰国後東京美術学校の校長として、さらに東京帝国美術館の部長を兼任してシカゴ万国博覧会の内装や展示品の協力を行うが、政治状況は容赦なく彼にふりかかり、日清戦争から日露戦争に至る経過の中で、岡倉のボストン人脈は彼を美術教育家から、政治外交へと傾倒させる。謎とされる東京美術学校校長罷免はこのような状況の中で行われた。

アメリカ行きのきっかけとも言える岡倉自身の東京美術学校校長罷免の予兆は、中国視察旅行後、1895 年の日清戦争の三国干渉後のロシアとの外交摩擦の悪化と並行するように現れる[37]。日本画優先の東京美術学校運営は、安定期へと向かっていたが、西洋画派との対立が問題として残されていた。そこで岡倉は 1895 年から問題となる西洋画科の新設に向けてフランスから帰国した黒田清輝[38]と話し合いを重ね、西洋美術に関する意見の一致をみて、翌年黒田を西洋画科の教授に迎え対立を軽減した。またこの年ボストン美術館のキュレーターを辞職したフェノロサが新妻とハネムーンの途中に来日し、日本へ再就職を強く希

[37] 1895 年（明治 28）日清講和条約締結後にロシア・フランス・ドイツの三国が日本に干渉を加え、条約によって得た遼東半島を清国に還付させた事件.

[38] くろだせいき：(1866-1924）洋画家.フランスから帰国後、洋画団体の白馬会を設立.近代日本洋画の父とよばれる.

望して岡倉へ斡旋を依頼したことでフェノロサの来日は、東洋部[39]のキュレーターの空席を意味し、ボストン美術館が日本美術の専門家を必要としていることを岡倉は知る。同年、岡倉が終生委員として関ることになる「古社寺保存会」を上司九鬼隆一と共に設立し、翌年の 1897 年「古社寺保存法」として制定された。これにより岡倉は、ボストン美術館に勤務しながらも、帰国時には日本美術界との関わりを委員として終生続けることが可能となった。政府にとってボストンに人脈を持つ彼は最適であり、そこで彼に白羽の矢が立ったのであろう。

日本美術院の運営の傍らで 1901 年 3 月に非職満期 [40]となった岡倉は、7 月に仏僧堀至徳[41]がインド行きの相談のため何度も来訪し、11 月にはアメリカ人マクラード女史や堀至徳らと共にインドにむけて新橋を出発する。自由の身でのインド遊学は、『東洋の理想』の完成につながり、アメリカ渡航への岡倉の東洋美術史家としての自信を深めたのである。1903 年 2 月に出版された初めての英文著作『東洋の理想』の原稿は、岡倉がインドへ向けて出発する以前にほとんど書きあげられており、後はインドでの体験を残すばかりとなっていた。そうだとすれば岡倉のインド行きは美術学校解雇の時点で、もしくはそれ以前から計画されていたのである。やはり岡倉の解任は、次のステップへのきっかけであったのである。『東洋の理想』の著者として、岡倉はアメリカへ発つ。

第四章「Okakura's　America―「ボストンデオカクラガハタシタシメイ」では、6 年間の準備を終えて日露戦争勃発の日に横浜をたった岡倉が、どのような戦略的意図でアメリカのボストンで活動するのかをみる。

1904 年 2 月 10 日、日本がロシアとの戦争に踏み切った日、伊藤博文はヨー

---

39 ボストン美術館が、1890 年に帰国したフェノロサのために開設した部門．夥しい数の日本コレクションを整理するために、日本美術の専門家を必要としたことによる．

40 官吏の地位がそのままで職務だけ免ぜられる非職期間が切れること．

41 ほりしとく：（1876-1903）宝生寺の丸山館長に指示し、若くして仏教研究を志す.天心に同行して渡印．カルカッタでタゴール家の面識を得て、サンスクリット語の研究を深める．1903 年インドで伊藤忠太と旅行中馬車衝突の事故にあい破傷風にかかり 27 歳で没す．

ロッパへ軍資金の調達に派遣される女婿で政治家の末松謙澄を見送りに来て船上で戦争開戦の演説を行った。その後アメリカに到着するまでの約 1 カ月間末松と岡倉は、ロシア戦艦と遭遇するかもしれない太平洋上で日本の勝利に向けた話し合いに終始したことは間違いない。

彼の表向きの渡米は、ボストン美術館に招聘され日本コレクションを調査することであり、ニューヨークにおける弟子たちの日本絵画の個展の開催であった。伊藤博文から要請を受けてルーズベルトの接近を目的にアメリカへ派遣された政治家金子堅太郎とルーズベルトとの会談は、広報記録として残されている[42]が、岡倉とルーズベルトとがどのように会談したのかの記録はほとんど残されていない[43]。

岡倉の目的はボストンであった。ボストン美術館の面接で岡倉は、自分が東洋・日本美術の専門家であり、ボストン美術館にとって必要な人間であることを強く主張し、日本とアメリカを半年毎に往復するという条件で採用されている。岡倉の来館は待たれていたのである。横山大観は『大観自伝』[44]の中で、インドでの計画がキャンセルされ菱田春草[45]と帰国後、岡倉がボストン美術館の嘱託として日本部の整理をする仕事があり、漆の専門家の六角紫水を蒔絵の修理や整理のために同行するから一緒に行かないかと誘われたものであり、ニューヨークでどのように展示するのか未定であったと回顧している。弟子たちの同行は計画的ではなかったのである。

ボストンに到着した岡倉は、ラファージ [46]の忠告通り、ボストン美術館の面接のまえに美術愛好家のイザベラ・ガードナー夫人を表敬訪問して、まずボ

---

42 松村正義,1980『日露戦争と金子堅太郎』新有堂

43 横山大観と六角紫水の対談には、ルーズベルトが毎月著名人を招待して夕食会を開いていたところに岡倉が呼ばれそこで岡倉の著書についての話が行われていたという記録がある。

44 横山大観『大観自伝』講談社,1981, pp.63-64

45 ひしだしゅんそう：（1874-1911）日本画家. 長野県飯田市生. 1890 年東京美術学校入学. 岡倉の校長非職に殉じて辞職し日本美術院に参画. 岡倉のもと個展を研究する一方で、「朦朧体」線法で日本画の新しい表現を追求した 1911 年 38 歳の若さで死去.

46 ジョン・ラファージ（1835-1910）：アメリカのジャポニズムの画家.1886 年来日し、ビゲローの友人で、岡倉のボストン滞在に全面的に協力している.

ストン・ブラ―ミンズと呼ばれる上流階級との親睦をはかっている。ボストン・ブラ―ミンズは上流階級の集まりであり、彼らとの付き合いの中で、岡倉が茶会を実際行っていたことが記録にある。彼らにとって日本人のイメージは、幕末武士の視察団が訪れた時（1860）の正式衣装の着物姿であり、茶道は着物で行う身体動作を伴うことから、アメリカで日本らしさをみせるには、茶道のパフォーマンスは分かりやすい日本表現であった。

ボストン社交界の花形イザベラ・ガードナー夫人は、ボストンのハンティントン通りに個人住宅兼博物館を持つ文化人であり、開国後の日本へ来日した経験もあり、英語に堪能な東洋の美術家岡倉を気に入って、以後彼のアメリカでの擁護者となった。岡倉のボストンでの使命はどのように進んだのか。第 26 代アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトにとって、1904 年は 11 月の大統領再選が行われる重要な年であり、彼は世論を意識して 3 月には「中立宣言」を発布し日露関係について沈黙を保った。岡倉の『東洋の理想』の読者であり、岡倉の『日本の覚醒』の出版にも関心を持っていたルーズベルトは、11 月の再選と同時期にニューヨークから出版された『日本の覚醒』を絶賛するなど、ビゲローを介した岡倉との交流は順調に進んでいた[47]。

第五章　「何故『茶の本』を書いたのか？―文明の打破」では、社会情勢を背景に岡倉がどのように文化から日本を主張したのか、しなければならなかったかについて明らかにする。

岡倉は渡航の 1 年前に『東洋の理想』を出版し、英文著作による広報外交を始めるが、アメリカで実際にボストン美術館の顧問として仕事を得るほかに、どのように政治外交を行うかの計画は未定であったと思われる。とりあえずフェノロサの残した日本美術コレクション整理の仕事に忙殺される中でラファージからセントルイス万国博覧会の臨時講演を依頼され、岡倉はこの講演の成功からアメリカでの広報外交活動の方向性をつかむのである。この頃の岡倉の挑

[47] 『岡倉天心全集 月報 3』「資料Ⅲ　隣のうわさ（岡倉先生の近著について）より

戦的、戦略的構想が『茶の本』の背景にある。

第六章　21 世紀の岡倉天心では、2010 年ニューヨークシティミュージアムが開催した SAMURAI IN NEW TORK 展の資料から幕末の侍の様子とアメリカ人の異文化交流を観る。
また 2009 年に出版された Tim Cross , 〝*The Ideologies of Japanese Tea*〞、と 2013 年の Kristin Surak, *"Making Tea, Making Japan"* から、21 世紀から茶の文化を通して、岡倉天心を再考（検証）する。

第１章　開国のあらし―閃光にうごめく竜

はじめに

日本への西洋社会の視線は、13 世紀マルコ・ポーロの『東方見聞録』に始まり、16 世紀にはキリスト教宣教師の布教目的のために彼らは詳細に日本社会を調査した。その中で特に戦国大名の行う茶による「もてなし」は、彼らにとって全くの異文化体験であった。この茶文化を利用して布教の目的で、教会の儀礼に茶の風習を取り入れるなど支配者との関係を強化していく中で、偶然にも彼らはこの報告の中に、茶文化が飲料から文化に発展していく源流を書き残している。この記録は 21 世紀の茶会の茶事に観ることができる。戦国大名たちが天下統一を競う中で、茶会を許される光栄、茶道具の茶道具による「もてなし」等は、戦国武将の重要なコミュニケーションとなっていた。その後の徳川幕府による弾圧や鎖国の間も日本の情報は集積され、ヨーロッパは日本の情報を蓄積していった。そのような中、200 年間の一国支配の中で発展してきた幕末日本へのアメリカ艦隊司令官マシュウ・カルブレイス・ペリー[48]の来航は、日本の開国の到来を告げる。

岡倉誕生の 10 年前のペリー来航は、日本の事実上の開国となり 1860 年（万延元年）にはアメリカの迎艦パウアタン号に乗船した正式な服装の武士の視察団が、米修好通商条約の文書交換を携えワシントンに派遣された。第 15 代アメリカ大統領ジェームス・ブキャナンが本国での文書交換をもとめたとから幕末江戸幕府は武士の正使[49]をアメリカへ送り出しこの時はじめて日本のサムラ

---

[48] Matthew Calbraith Perry ：アメリカの海軍軍人.1853 年 7 月、日本を開校させるために東インド艦隊を率いて浦賀に来航. 翌年江戸湾に来航し横浜で日米和親条約を結び、事実上日本は開国した.

[49] 万延元年の遣米使節団（1860）：戦国時代以後、200 年の鎖国を経て、幕府が初めて外国に文書交換のため派遣した武士の正式使節団.

イが西洋文明に直接触れたのである。勝海舟[50]とジョン万次郎[51]が乗船した咸臨丸[52]は、この船に同行し日本最初の太平洋横断を果たした。東西文明のあまりにも異なる格差を目にした彼らのカルチャーショックは、日本の西洋近代化を決定する動機となり、その後明治維新にいたる 8 年間に幕府の視察団は欧米へと向かい、個人留学も頻繁に行われる状況を生み出した。

その 2 年後幕府は条約を交わしたヨーロッパへ条約変更を求めて遣欧使節団[53]を送り、ロンドン万国博覧会（1862 年）開会式に招待される機会を持ち、他国の作品と比較して日本の優位性を確認したのである。博覧会の会場で日本の出品物への賞賛は、陶器、茶、生糸などの輸出の拡大ともなった。視察団の中に、後の明治時代の教育家となる若き日の福沢諭吉が随行員として同行していたことは、明治の近代化に重要な指針を与えた[54]。福沢は数回にわたる欧米への視察団派遣に随行し、欧米主導の世界情勢を鑑みて今後日本が直面する危機感から、帰国後、近代化に必要となる人材の教育を目指して教育家として慶応義塾を設立し、多くの門下生を育成した。その中で九鬼隆一が頭角を現し文部省で力を発揮し、配下の岡倉覚三へと続くのである。

---

[50] かつかいしゅう：(1823-1899)：幕末・明治の政治家．咸臨丸を指揮して渡米．帰国後海軍操練所を設立し軍艦奉行となる。幕府代表として江戸城明け渡しの任を果たす.維新後政府役人として活躍する.

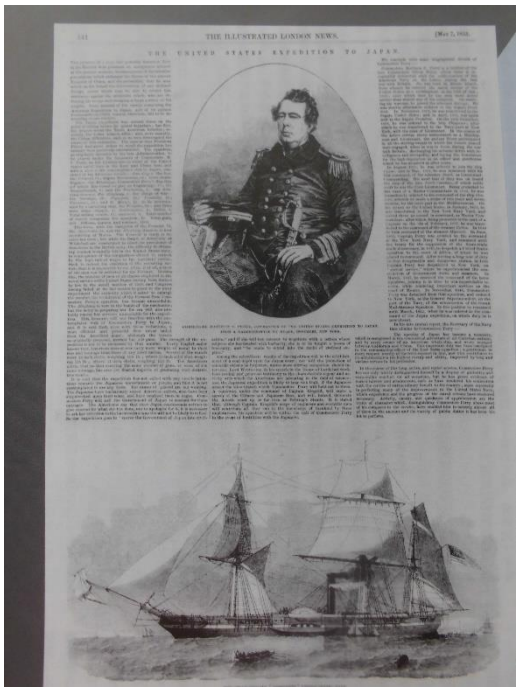
[51] 中浜万次郎（なかはままんじろう）：(1827-1898）もと土佐国の漁師で幕末・明治の語学者．1841 年出漁中に漂流し、アメリカ船に救助され米国で教育を受け 51 年帰国．土佐藩、幕府に翻訳・航海・測量・英語の教授として就任．後に岡倉が入学する開成学校教授.

[52] 1857 年日本がオランダに発注した軍艦.原名ヤパン号．蒸気機関を備えた全長 163 フィート.

[53] 文久の遣欧使節団(1862 年)：オランダ・ロシア・イギリス・フランスとの修好通商条約（1858 年）で約束した開市（江戸・大阪）・開港（新潟・兵庫）の延期交渉を―ロシアでは樺太国境交渉―が主要任務であった．迎艦によるアメリカ訪問とは異なり、遣欧使節は幕府の一方的な国家間の視察であり、最初は冷淡な扱いであったが、イギリスのロンドン万国博覧会(1862)の開催参加により状況は好転する.

[54] ふくざわゆきち：(1834-1901）思想家・教育家．豊前中津藩士の子息．緒方洪庵に蘭学を学び、洋学塾を開く．彼の海外渡航は 3 回に及ぶ.1868 年塾を慶応義塾と改め教育家として人材の育成に努める．『脱亜論』『学問のすすめ』など著書多数.

第１節　アメリカ艦隊ペリー来航


THE ILLUSTRATED LONDON NEWS.

THE UNITED STATES EXPEDITION TO JAPAN.

（ペリー日本遠征「ロンドンニュース 1853.5.7」）

1853 年、アメリカ東インド艦隊司令長マシュウー・ペリーは開国を求めて浦賀に来航し、1 年後の 1854 年 3 月 8 日(嘉永 7 年 2 月 10 日)正午、随員を従えて横浜に上陸した。彼らは横浜応接所に入り日米和親条約締結のための会談が開始され、ペリーは横浜で日米和親条約を締結調印し日本の開国の先鞭を切った。続けて 1858 年（安政 5）7 月 29 日、開港・開市・貿易を求めたアメリカ合衆国総領事タウンゼント・ハリスの要求に応じ、幕府は日米修好通商条約を締結した。数カ月の間に同様の条約を他の 4 カ国オランダ、ロシア、イギリス、フランスと締結した後、幕末最後の 10 年間に日本は他にポルトガル・プロシャ・スイス・ベルギー・イタリア・デンマークを含め、総計 11 カ国と通商条約締結を完了した。

日本の開国は中国と異なり二段構えで行われた。1854 年にペリーと交わした日米和親条約はその最初で、漂流民の救助やアメリカ船の下田・函館二港への入港と薪水・食糧の補給を取り決め、ペリーとの和親条約の条項にもとづいて総領事ハリスが下田に就任した。当時アメリカは太平洋で多数の捕鯨船が操業する最大の捕鯨国であり、鯨油をとるために鯨肉を煮つめる薪と水を必要としていた。幕府のこの決断の背後には、ペリー来航より 15 年前のアメリカのモリソン号事件、13 年前の中国とイギリスのアヘン戦争といった周辺の緊迫した状況があり、今までの外国船に対する無関心な態度を変化させ西洋との外交へと幕府は動いたとみられる。日米和親条約は貿易のためではなく、下田・函館は入航と補給のみを認める文字通りの開港上であったため、貿易にはさらに通

商条約の締結が必要であった。そこでハリスが幕府と交渉して 4 年後 1858 年に日米修好通商条約を締結するという段階を踏んだのである。

第 1 項　国際港横浜

日米修好通商条約の締結は、横浜を国際港として世界周回ルートに組み込み、日本はほぼ完全にヨーロッパ諸国の交易戦略に組み入れられた。諸外国が日本に求めたものは、開港による貿易の拡大の利益であり、一端開港された横浜はまたたくまに国際港に成長し、幕府が望む鎖国への回帰は不可能となった。横浜の貿易は開港直後から本格的に始まり、生糸の輸出が盛んであった。このころイタリアでは生糸の被害が発生し、良質の日本の生糸を求めていたため、その後は茶や蚕種（蚕の卵）の輸出も始まり 1867 年には生糸が全輸出量の約 50%、蚕種が約 20%、茶が約 15%を占めた。

（ペリー提督・横浜上陸の図（ハイネ原画）

横浜がひなびた一漁村から国際港に急速に発展した理由は、大型船の入港に適した良港であったこと、外国人に開放された唯一の居留地であったこと、そして江戸東京に近かったことである。

実際に貿易が始まったのは日米修好通商条約締結の翌年の 1859 年 7 月 1 日で、この時の諸外国との貿易の舞台は横・長崎・函館の三か所で、1864 年には輸入と輸出とは肩を並べ 1868 年（明治元年）には輸出価格が約 1769 万ドル、輸入価格が約 1239 万ドルに達した。1860 年には輸入貿易が活性化し、注目すべきは他の綿製品や毛織物とともに船舶・武器等が輸入されていることである。1864 年には輸入と輸出とは肩を並べ 1868 年（明治元）には輸出価格が約 1769 万ドル、輸入価格が約 1239 万ドルに達した。居住する外国人の数は 1861 年には 136 人であったが 1864 年

末までに駐屯部隊を除いて 300 人に達した。中国人も居留地に住んでおり、その数は優に 1000 人を超えていた。このような横浜の状況は、幕末から日本が西洋文明に開眼していく時代と、武士国家の封建社会が急速に消滅に向かう時代交差が一気に渦巻く時代の接点であり、近代日本における岡倉覚三の前半生の歴史的背景となる。

『父天心』で岡倉一雄[55]は日本人街の様子について、「新開の港町とは言いながら、文久年度の横浜は、すでにほぼ街区の形態が整って、大型船舶の輻輳する海岸通り、碧眼金髪の紳士麗人が織るが如く来往する住宅街の山手、その二つの通路の間に挟まって、一条のメーン・ストリートが東西に走り、商業区の心臓を形作っていた。メーン・ストリートである本町通りに軒を連ね、庇を接して店舗を構えた幾十件の中には独力鋭意自己の福運を開拓せんと試みるものと、隠れたる後援者庇護の下に、その運命を開かんとする者と、二つの種類があった。」と記憶をたどっている。天心が 1862 年に横浜に誕生し幼少時代を送った頃には、まだ開国して間もない横浜は各国の商人達がしのぎを削る生活感あふれる生き生きとした国際都市として発展していたのである。

第 2 項　漂流民と英語通詞

アメリカが捕鯨のため日本近海に航海し始めると、彼らは漂流民に遭遇する。中浜（ジョン）万次郎は 1841 年に出漁中漂流しアメリカ船に救助された。アメリカで正式な英語教育を受け、近代航海術を身につけて、死を覚悟のうえで 51 年に帰国した。本場の英語を習得した万次郎は通詞を必要とする土佐藩、幕府に仕え、その後の日本外交の語学教育に大きく貢献したが、武士でないため、正式な条約締結場面には同席できなかった。しかし開国後の幕府の遣米使節団派遣には、伴走した咸臨丸に同乗してアメリカ人との交流や、巧みな航海術を駆使して日本初の太平洋横断を果たした。そして幕府はかろうじて国家の威光と外交を進める面目を保ったのである。漁師出身の万次郎の活躍

[55] 岡倉天心の長男

は、階級社会である日本にとって異例のことであったが、武家社会の掟を覆してでも、開港をせまられる徳川幕府にとって、英語と最新の航海術を身につけた中浜万次郎の存在は、欠かせない存在であり、1862 年の遣欧使節団、更には開国後 1871 年の岩倉使節団の外交につながる貢献となった。

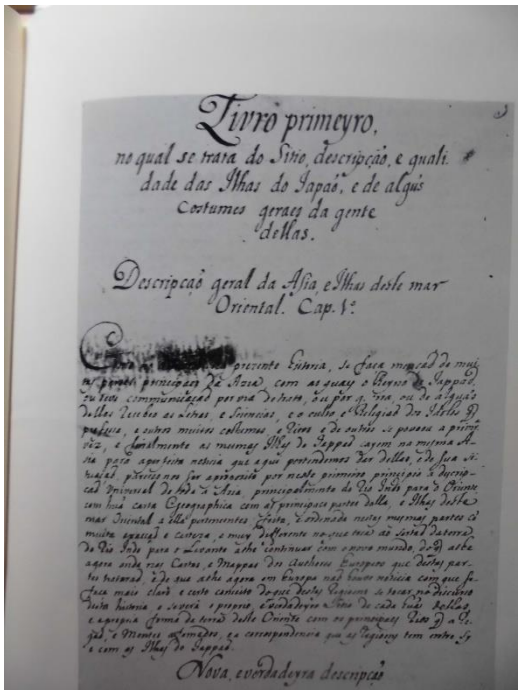
第 2 節　壮絶な英雄伝説と繊細な茶椀の国

1467 年の将軍足利義政の後継者問題から端を発した応仁の乱は、100 年に及ぶ混乱した戦国時代に発展したが、16 世紀に天下統一を狙う戦国大名織田信長や関白豊臣秀吉は、千利休を筆頭とする禅茶を通して上下社会の均衡を保っていた。この時代を記録したのがキリスト教宣教師達のイエズス会への報告である。1543 年種子島に漂流したポルトガル人の鉄砲伝来に続き 1549 年のイエズス会士フランシスコ・ザビエルが渡来し、それに続く多くの宣教師達が支配者からの布教を目的として戦国大名と交流を行った。その中でジョアン・ロドリゲスの報告をまとめた『日本教会史』には、当時の日本社会が詳細に記録されている。

第 1 項　キリスト教宣教師の視線：『日本教会史』

『日本教会史』は、日本での布教状況をイエズス会へ報告する目的で書かれた本である。この本は、キリスト教通詞伴天連ジョアン・ロドリゲスによって 1600 年以前に書かれ、1620 より事実上マカオで編纂が始まった。

『日本教会史』の構成は、上巻第 35 章、下巻第 28 章からなり地理・風土・気候、建築、儀礼、支配者の衣食住、接待、風俗、都市空間、学芸・技芸、等広い分野に分かれている。この本の特徴は来日以前にロドリゲスが中国（シナ)に 2 年間滞在研究調査をしていたため中国と日本を比較している点であり、シナ人及び日本人の間では、茶を飲む習慣は王国全土にわたって共通で、客人をもてなす主な礼法の一つであるとしながらも、中国には存在しないもう一つの日本人の茶について語っていることである。その中で注目すべきは、戦国武将の生活と茶の湯についての多くの記述である。


Livro primeyro,
no qual se trata do Sitio, descripção, e qualidade das Ilhas do Japão, e de alguns Costumes geraes da gente dellas.

Descripcaõ geral da Asia, e Ilhas deste mar Oriental. Cap. 1.º

Nova, e verdadeira descripção

ロドリゲスは 1562 年ベイラ地方生まれのポルトガル人で、語学の才能に恵まれ通詞として、当時天下を支配した豊臣秀吉や、徳川家康とイエズス会との外交折衝にも参加した。100 年もの間、戦乱に翻弄された世にもかかわらず、規則を守り整然と行われる権力者の茶の儀礼について、建築から食事法に至るまであらゆる方面から分析し、日本が開国する 260 年前の活き活きとした日本伝統社会の様子を『日本教会史』に記録し異文化への疑問を明らかにした。

（日本教会史　第一巻　第一章 Ajuda 写本）　茶は 7 世紀頃唐の時代に飲み物として流行したものが中国からもたらされたが、日本では平安時代、天皇貴族僧侶の間で貴重な外国文化の儀礼として受け継がれていた。茶に注目がいくのは、最初の武士政権である鎌倉幕府の三代将軍源実朝（1192-1219）が体調を崩した際に、禅僧栄西が茶を献上し『喫茶養生記』を進呈したことにより、これ以後日本中の武士が茶を始めたことにある。鎌倉以前の平安時代に天皇・公家が 400 年以上かけて築き上げてきた貴族文化に対し、新しく勃興した武士政権には、彼らの文化教養が必要であった。歌人であり歌集「金塊和歌集」の作者として知られる将軍実朝は、茶を新しい文化として取り入れた。茶の儀が支配者の頂点にある将軍から始まったことで、日本の茶は最高の階級に位置するものとなった。将軍が行う「真の茶」とは、貴重な中国道具（唐物）を使う茶が基本となり、14 世紀室町幕府の三代将軍足利義満[56]は、中国の明に入貢して勘合貿易を開いて独占的に茶道具を蒐集して将軍の茶を確立した。孫にあたる 15 世紀八代将軍足利義政[57]の時代には、多くの唐物道具が集まり、義政の文化集

56 あしかがよしみつ（1358-1408）：京都北山に金閣寺を創り、北山文化を形成したことから北山殿と呼ばれる.

57 あしかがよしまさ（1436-1490）：京都東山に銀閣寺を創り、東山文化を形成したこと

団である同朋衆がこれらを東山御物としてまとめ、東山文化を生んだ。実朝から既に 200 年の茶文化を築き、遊戯性を含んだ華美な茶が頂点を極めていた一方で、質素な中に洗練された感覚を作り上げる村田珠光による全く逆の茶が現われ、精神的な茶が起こる。それから約 100 年間の戦国の世の中で、足利将軍の華美な茶から質素な茶に変化するのにそう時間はかからなかった。武士の忠義と奉公の中で、茶は文化から武士の魂に通じる独特の茶となり、戦国武将織田信長と豊臣秀吉に仕えた千利休により質素でありながら繊細な感性の侘茶が完成されるのである。

ロドリゲスの『日本教会史』は、義政から 100 年を経た 16 世紀の戦国社会の中で、戦国武将が熱狂的に行う茶の湯の「もてなし」に武士の真髄を見いだし、茶の儀礼をイエズス会に報告している。これは茶文化創生期の記録として現代との比較ができる貴重な史料であり、これらの記録は茶会や茶事の中に現代もほとんど変わらず何百年も受け継がれてきたことを証明している。

ロドリゲスが出会った茶は、ちょうど戦国の世の終盤で変化が起こっている時期であり、幕末欧米が出会うことになる日本人の原点を書き残している。

戦乱で荒廃する都をのがれた貴族達により京都の雅な文化は地方に分散し、将軍家の所蔵する唐物茶道具も京都の文化と共に日本中に広まった。戦争に明け暮れ将軍の血統が途絶えた時に、下剋上を繰り返して他者に勝利し、秀吉のように足軽から天下統一の勝者になるためには、信長から褒美として贈呈された茶道具は一国一城を与えられるよりも価値ある物であったのである。竹本千鶴は『織豊の茶会と政治』[58]の中で、「御茶湯御政道」の言葉と家臣団統制としての「ゆるし茶湯」について言及している。「御茶湯御政道」とは秀吉の書状にみられる言葉であり、秀吉の造語である。信長から茶を行うことを許され、唐物茶道具を使用して茶を行うことが権力を象徴し、それが周囲に対する自分の地位の証明となるのである。そのために彼らは競って「真の茶」（将軍の

から東山殿と呼ばれる.

[58] 竹本千鶴、2006『織豊期の茶会と政治』思文閣出版

茶）を求めた。この時代貴重な唐物茶道具を所有し、茶を行うことは最高の権力者であることを意味したのである。

『日本教会史』の中で注目すべきは、「第 32 章　茶の進め方、および茶とは何であるかということについて、また日本人の間でかくも重んぜられるこの儀礼について」の章である。

> 「日本人は茶に大きな価値を求め、茶を最高度のものであると考え重視するため、客がたとえ高貴な人であっても天下殿(秀吉)であっても茶で客人に敬意を表し歓待した。そのことを余り重視し、評価するので、その茶に自分の主な財宝、高貴な宝物を遣い、金、銀、宝石のために使うことはしなかった」[59]

何故か？それは最初の武家政権である鎌倉幕府において、茶をはじめたのが武士の最高位である将軍であったことから、茶の文化が武士にとって頂点に位置したこと、また茶に使う道具は中国のもの（唐物）が最高とされたため、茶に唐物道具を使用することを第一目的とし、唐物を持つことに執着したからである。更に続けて「第 33 章　日本人の間で茶に招待する一般的な方法について」の中でシナ人も行う一般の茶のもてなしとは異なった招待の茶について、

> 「日本人には茶のこの一般的な用法の中に、シナ人にはない別の特殊な用法をもっていて、客人がどんな階層や身分の高い人であろうとも茶でもてなす。…彼らは万事について非常に謙虚で静寂に振舞う。…華美壮麗なところがなく、隠遁的孤独的であって、世俗的儀礼的交際から遠ざかって茅屋の中に閉じこもり、自然の事象の観照に浸る僻地の隠者を真似た孤独の様式なのである。…他民族が宝石、真珠、古い勲章においている価値と評価とを、日本人は彼らの刀や短剣においた。…とりわけこのような古風と野趣の中で清浄であることに熱情を傾ける。…日本人は茶にこのような方法で招待することをたいそう喜

59 『日本教会史』p 566

び、重視しているので、あるがままで人工を加えない家を造る事や、茶にこのような方法で人を招待するのに必要な品物を買い求めることに大金を費やす。そのためにとるに足りない陶土でできているにもかかわらず1万2万3万クルザード、さらにそれ以上の価格に達するものもある。他の民族がこのことを聞けば、狂気で野蛮なことと思うであろう」

と、異文化の中の茶の動きに注目し、ヨーロッパと日本の価値観の違いを述べている。では何故戦国大名達がとるに足らない陶土でできた茶道具に大金をつぎ込み、茶湯を熱心に行ったのか。「第33章　第一節　茶に招待する起源、及びそれに用いられる器物が何故これ程に高価なものになったのかという理由について」の章で道具につけられる値段について、

「茶の湯（chanoyu）の道具を探し求める人の数が多い上に、それが外国製であり、またその用途にふさわしくて好適といえるものは稀であったので、そのたびごとにその数も少なくなってゆき、この時から、これに熱中していた人々の間でその道具の値段が出てくるようになった。それゆえ裕福であったものは、何か良い品を見つけると、その値段にこだわらなかったし、それを所蔵していた者は、大変大事にしていたので高い値段でも手放したがらなかった。だから、しつこくせがまれて誰かにその品を譲るときには、同じ品でも大変良い値段、しかも法外な値段であった。なぜならその品について売買される「基準」となるものが、当事者双方の趣味であって、品物そのものによらなかったからである」

と鋭く分析している。この数寄者の頂点にいるのが公方（cubo）－東山殿－といわれた将軍足利義政である。黄金そのものに価値を見出す西洋人にとって、日本の戦国大名と茶との関係が理解できないのは当然であるが、ロドリゲスは異文化理解の最もわかりにくいところを見事に言い当てている。東山御物といわれる義政の茶道具の宝物は、応仁の乱で分散しながらも、将軍の持ち物であったという歴史的付加価値をつけながら、信長、秀吉、利休、徳川幕府に受けつがれ、

茶は様々に日本人の精神性に影響を与えていくのである。

さらに彼は「第二節　現在流行している数寄と呼ばれる茶の湯の新しい様式について、また一般にその起源と目的について」において、日本文化となる茶の精神性に言及する。

> 「…数寄という芸道は、禅宗という宗派に属する孤独の哲人達にならって、この芸道に最も優れた人々によって創り出された、孤独な宗教の一様式であり、この芸道に打ち込んでいる人々にかかわる事柄すべてにわたって、よい習慣をつくり、節制を保つことを目指していた。…有名な師匠や哲学者の記した書物や論述によって哲学的思索に耽ることをないのを本分とし、俗世間のことを蔑んで、それから遠ざかり、そして特定の瞑想と、最初に手引きとして役立つ、謎めいた比喩的な文句とによって、情欲を抑制し、自然の事象についての観照にふける。この宗派の教師は、果敢で断固たる意思を持ち、無気力、不熱心さもなく、女々しいこともなくて、人付き合いにまつわる多くのことは、無駄であり不必要であるとして拒否する。そして何事についても、精神の十分な安らぎと静けさ、および外面の謙虚さ――あるいはむしろ、完成した人間は情欲も持ってもいないし、また感じもしないと考えたストア学派の人々のように、完成の域に達した偽善といったほうがよかろう――をもって、質素で地味であることが、僻地にあっては重要であって適していると考える」

日本と違って中国の茶が、日本のような発展を遂げなかったのは、もちろん風土や生活習慣の違いはあるが、茶が特別なものとして始まったのではなかったことや、自国の茶道具を使ったこと、椅子に座り、茶のための特別な場を必要としなかったこと、茶は広く一般人に広まり、茶を通した格差はほとんど生じなかったこと、茶を通して将軍と家臣の団結を強める習慣は無かったこと等があげられる。

日本の茶は飲み物から文化に発展し更に精神的宗教性をその中に求めるよう

になっても、茶道具の多くは中国で作られ、唐物（中国産）が和物（日本の茶道具）に勝る最高のものとされたのである。

『日本教会史』の中で、ロドリゲスはヨーロッパの日本への関心を揺さぶる重要な情報を残している。まず 13 世紀マルコ・ポーロの『東方見聞録』に記されたジパングの存在への言及である。この本はクリストファー・コロンブスに刺激を与え、大航海時代新発見へとつながるが、17 世紀のヨーロッパでは、ジパングの存在は疑問視されていた。ところがロドリゲスがこの中でマルコ・ポーロの「黄金の国ジパング」の記述に言及したことで、ジパングの信憑性が改めて確認され、さらに 1582 年にヨーロッパへ派遣された天正少年遣欧使節についてロドリゲスが『日本教会史』の中で、宣教師アレッサンドロ・ヴァリニャーニと、キリシタン大名大友宗麟らが協力して準備したことをイエズス会へ報告し、そこに彼らがローマに到着したことで、ジパングの存在が現実となったのである。

第 2 項　黄金の国ジパング :『東方見聞録』

日本が歴史文献に現われるのは、B.C. 100 年頃、前漢時代の『漢書』地理史に、「倭国が百余国に分立、漢に献見する」と中国の文献に登場するのが最初であり、A.D.57 には更に「倭奴国王が後漢に朝貢、光武帝より印綬を受けるという中国の史書『後漢書』東夷伝に残されている。日本と中国との関係は、日本から中国の王朝へ出向き、貢物を奉るという朝貢の形式を保った外交関係であり、平和的な均衡を保ちながら、更にシルクロードなどの交易西方文化と融合した大陸文化を日本へもたらし、新鮮な異文化を日本は十分に受け入れた。このバランスが崩れるのが 13 世紀の元寇である。元は 13 世紀に中国の北方の民族出身のジンギスカンが大帝国をたて、その孫モンゴル帝国第 5 代フビライ・カーンが中国を平定して国号を元として建てた中国王朝の一つである。元は強大な勢力を駆使して 1274 年鎌倉幕府の執権北条時宗の時代に九州へ 2 度

の出兵を試みたがいずれも失敗に終わっている[60]。その後 1368 年明に滅ぼされ、消滅した。元王朝のフビライ・カーンと日本への襲撃を記録したのが『東方見聞録』である。モンゴル帝国元の王フビライ・カーンの行政官として重要な地位を与えられたマルコが、政務官の立場から周辺国との交流を伝えたこの本は、東方に位置する島国日本を世界に紹介することになった。

（『驚異の書』（fr.2810 写本））

ヨーロッパの日本への視線は、13 世紀マルコ・ポーロ（1254-1324）の『東方見聞録』にある黄金の国サパング（日本国. 仏語でジパング）に始まる。1271 年、17 歳のマルコ・ポーロはヴェネチアの証人の父ニコロと叔父マフィオに伴われて東方へ旅立った。すでに父と叔父は 60 年代南ロシアから偶然にフビライ・カーンの宮廷まで旅し、フビライからローマ教皇への使者の役目を託されるほどの信頼を経て役目を果たし、カンバルク（北京）へ帰国する二度目の旅行にヴェネチアで母を亡くしたマルコを同伴して、フビライのもとに帰国した。1274 年にフビライの謁見を許され、任官得て約 20 年間中国各地を見聞した旅行記が『東方見聞録』[61]であり、極東に位置する「黄金の国ジパング」について、

> 「サバング（ジパング）は、東方の島で、大洋の中にある。大陸から 1500 マイル離れており住民は肌の色が白く礼儀正しく、偶像崇拝者である。島では金が見つかるので彼らは途方もなく金を所有しているが、大陸からあまりにも離れているのでこの島に向かう商人はほとんどおらず、そ

---

60 元寇：蒙古襲来. 元王朝のフビライが日本の入貢を求めたが鎌倉幕府に拒否されたため 1274 年から二度にわたり元の軍隊が日本に襲撃を加えた事件. 文永・弘安(1281)の役

61 『東方見聞録』は 1298 年、ジュノヴァの牢獄にあったマルコの体験を同房の作家ピサのルスティケッロがフランス語で書き記したものだとされる. マルコはこの原本をもってヴェツィアに戻り、1307 年フランスのヴァロワ伯シャルルの臣下ティボー・ド・シュポワがヴェネツィアでマルコから写しを入手し後に清書されティボーの子のジャンからヴェロワ伯に献上された. これが中世フランス語版『東方見聞録』の起源である.

のため法外の量の金で溢れている。この島の君主の宮殿は、私達キリスト教国の教会が鉛で屋根をふくように、屋根がすべて純金で覆われているので、その価値はほとんど計り知れない。床も二ドワの厚みのある金の板が敷きつめられ、窓もまた同様であるから、宮殿全体では、誰も想像することができないほどの並はずれた富となる。またこの島には赤い鶏がたくさんいてすこぶる美味である。多量の宝石も産する[62]」（原文訳 月村）

と紹介し、フビライ・カーンはこの島の豊かさを聞かされてこれを征服しようと思い、二人の将軍に多数の船と騎兵と歩兵をつけて派遣した、と 13 世紀の元寇について語っている。14 世紀の初頭に記述された『東方見聞録』の信憑性は、元[63]の皇帝フビライ・カーンが、1274 年日本を襲撃した二度にわたる歴史的事実（文永・弘安の役）の元寇を、フビライの側から詳細に記録しており、日本の記録と一致するところにある。また黄金にあふれるといわれたジパングは、大いにヨーロッパ人を刺激し、クリストファー・コロンブス達冒険家をアジアへの大航海時代にいたらせる要因となったといわれる。15 世紀中頃の大航海時代に羅針盤の発明による航海技術の向上は、さらに遠く離れたインド・アジア大陸・アメリカ大陸への進出を可能にした。一方宗教改革によりプロテスタント諸派の出現に脅威を感じたローマ法王は、キリスト教宣教師を新天地へと派遣し、そこでの布教情報を詳細に報告させた。

第 3 項　ジャポニズムの洗礼：天正の少年遣欧使節団

西洋とは全く相いれない日本文化の中で、キリスト教宣教師は戦国大名との接触を通して権力者からの布教を試みる。イタリア人宣教師で東インド巡察師アレッサンドロ・ヴァリアーノは、異国で布教が捗らない中、支配者の熱狂する茶に注目し、それを取り入れ布教を進めたことである[64]。ここで注目したい

---

62 マルコ・ポーロ/月村辰夫・久保田勝一訳『マルコ・ポーロ　東方見聞録』p.197
63 元（1271-1368）：フビライが建国した東アジアの大帝国。
64 キリシタン研究 第 22

のは、ヴァリアーノが教会施設に茶の湯ができる座敷を設け、茶の湯に心得のある者を置くことを使命したことである。南蛮屏風には、聖堂施設における抹茶を運ぶ情景がはっきりと描かれている[65]。さらに彼はキリスト教に改宗した九州の戦国武将大友宗麟[66]と共にローマ教皇の謁見を求めて天正遣欧使節1582~90(天正 10~18)[67]を派遣し、ヨーロッパにジパングの足跡を残している。マルコ・ポーロの『東方見聞録』から 300 年後、イタリア人のキリスト教宣教師アレッサンドロ・ヴァリニャーノは、キリシタン大名大友宗麟と協議してローマに四人の少年遣欧使節を送ることを企画した。この時天正の遣欧使節団の四少年が時のグレゴリオ 13 世に献上すべく携行した「安土山屏風」について、吉田富子は『四少年のローマ詣(1585)とヨーロッパ最初のジャポニズム』(2008)の中で、「今日惜しくも失われたこの絵屏風は、織田信長が狩野永徳（又はその父松栄）に依頼し、自ら構図や表現について細かく指示しながら描かせたもので、1580 年 8 月以前には完成していたとされる。その画題については彼我（ひが）の初期録が全て一致している。即ち，城館の聳え立つ安土山の麓にイエズス会の銃院を配し、これに続く山下町の市外をできる限りあるがままに描かせたと伝える」と説く。

（「南蛮屏風」部分　南蛮文化館蔵）

四人の少年使節団の 8 年に及ぶヨーロッパ滞在は、極東の島国への関心のはじまりであり、19 世紀のヨーロッパを席巻するジャポニズムの萌芽を残す。彼らの残したジパングの足跡は、幕末の250年後には多くの資料として蓄積され、

---

65 1998,『茶道誌　淡交』淡交社 p.89-90

66 おおともそうりん(1530-1587)：戦国時代の九州の武将.

67 1582 年、ヴァリアーノの企画により、九州のキリシタン大名大友宗麟・有馬晴信・大村純忠はローマに派遣した使節.伊藤マンショ・千々石（ちじわ）ミゲルを正史、中浦ジュリアン・原マルチノを副使とし、教皇グレゴリオ 13 世に謁見.1590 年帰国.

一部の知識人に関心が深まったのである。

彼らが持参した屏風は日本で発明されたものであり、現代でも茶室の風炉先として受け継がれている。18 世紀から 20 世紀にかけてのヨーロッパの絵画―『お化粧』(1742,Boucher)，『お産の後に』(1757,Trrost)，『モリエールの作品朗読』(1728 頃,Troy)，『居室の装飾配置法』(1889,Maincent)，『かくれんぼ』(1877,Tissot)，『遊ぶ子供』(1893, Beggarstaff)，『ウサギのいる屏風』(1906,Bannard) ―には確かに遣欧使節団の四少年の影響が残されている。少年使節が持ち込んだ屏風等の日本製品がヨーロッパ美術界に影響を残したのとは対照的にヨーロッパから彼らが持ちかえった活版印刷は、アルファベットと違い多くの文字を要する漢字には不向きで日本では木版印刷の発達にかわり、後の江戸時代に浮世絵が木版印刷により大量生産されることになる。

1603 年に始まる徳川幕府は、1635 年の海外渡航禁止令、1639 年のポルトガル船来航禁止令を発令し、一部の外国人との交流を除いて事実上日本は外国との交流を立ち鎖国体制に入った。この後の徳川幕府 260 年間は、この武士と茶の関係を引き継ぎながら、この習慣を利用して武士の思想を統一し、身体動作をきわめ、幕府に対する全体意識を高め、武士に深く浸透させた茶を作り上げた時代といえる。

第 4 項　鎖国の盲点：ケンペルとシーボルト

1635 年の海外渡航禁止令、1639 年のポルトガル船来航禁止令を発令し、一部の外国人との交流を除いて事実上日本は外国との交流を立ち鎖国体制に入った。以後幕末ペリーが来航するまでの 215 年間、外国人に対して幕府は厳しい態度で応対する。しかし鎖国を遵守していながら、意外と多くの正確な日本社会の情報が、幕府の盲点をついて長崎の出島からヨーロッパに流出していた。彼らの目的は 17 世紀イギリス、18 世紀ヨーロッパの産業革命による貿易の拡大のために、ジパングとして知られた極東日本の豊富な資源の獲得と領土の拡

大そして最新の情報と地図であった。

この頃徳川幕府の鎖国体制下で貴重な資料を広範囲にわたって学術的な研究と蒐集を行ったのは、ドイツ人エンゲルベルト＝ケンペルである。長崎・出島のオランダ商館付きの医師のポストを得て 1690 年に長崎に上陸したケンペルの注目すべき仕事の一つは、日本地図を作成したことである。また日本人の生活と茶に関する記述が少なくない。何故オランダ人以外の西洋人ドイツ人が日本国内に潜入でき、まして江戸幕府にまで同行し、資料を蒐集できたのか。彼は 1690 年から 92 年にかけて徳川幕府の鎖国の盲点をついて資料を蒐集し『日本誌』を作成した。また長崎滞在の経験と江戸参府の見聞から『廻国奇観』『江戸参府旅行記』を著している。ケンペルは日本滞在中、江戸参府の途中日本地図を手に入れ、東海道や山陽道の旅行案内等当時の貴重な旅行案内記を参考にして、江戸との往復に使われた東海道の道中について書かれている文中の場所を地図ではっきりと示している。密かに羅針盤による計測を行いこれらの資料をもとにして『日本誌』のきめ細かい旅行記と並んで、地図を使って具体的に内容を補ってい資料として持ち帰った。

エンゲルベルト＝ケンペルは、オランダの東インド会社に雇われた医師として 1690 年に来日し 1692 年まで出島のオランダ商館に滞在した。1651 年 9 月 16 日、北ドイツのレムゴーに牧師の子息として生まれた。恵まれた環境の中でドイツでも知られた大学を次々と回り最後には中部ヨーロッパおよび北欧の権威ある大学に遊学もしていたので、日本についてある程度の知識を持っていたと思われる。17 世紀、ヨーロッパでは既に数多くの日本に関する旅行文や紀行文の書物が出版されていたが、彼ができるだけその土地の風俗習慣を学び、客観的にそれぞれの国や町について説明している点が、18 世紀に現われる主観的に書かれた旅行文学とは大きく異なる点である。彼は在日中、商館長の江戸参府にしたがって、二度同行し、街道の茶店の様子を記している。

「徒歩の旅行者に出すこの手のお茶の入れ方は大変簡単である。ひとにぎりかもうすこし多量の茶の葉を小さい袋に入れるか、あるいはそのま

ま鉄の薬缶の中に入れ、水を加えて煮るのだが、同時にその中にちいさい籠が入っていて、それで葉をおさえておき、いつでもきれいな茶を汲むことができるようになっている。それから柄杓で茶碗に半分ほどつぎ、つめたい水をたして温度を下げて客に出す」（『江戸参府旅行日記』）[68]

これは煎じ茶（葉茶）であり、庶民の飲み方である。この頃は利休を受け継いだ徳川幕府初期の元禄時代であり、「若葉」の項のところでは「これは大抵高貴な人々の食卓に出される」と、武士の抹茶（粉茶）を書いて、階級により異なる二種類の茶を区別している。

ドイツ人のシーボルトは、日本に始めて医学を伝えた西洋人として有名であるが、一方で「シーボルト事件」でロシアのスパイであるという疑いをかけられ、国外追放を命じられたことでも知られている。徳川幕府初頭の鎖国が始まった頃ケンペルが日本事情を江戸参府の途上で蒐集したように、徳川時代後期シーボルトも江戸参府の滞在を利用して浮世絵師葛飾北斎と接触し、実際に江戸の絵画師と交渉して手に入れるという大胆な行動をとっていた。

日本近辺に外国船が現われ始めた頃、出島[69]からもち帰る日本製品の包装紙に描かれた浮世絵に関心が集まる。マティ・フォラーは図録『北斎』「葛飾北斎とシーボルトの出会い」の中で、ヨーロッパ人が 19 世紀の初頭に、浮世絵が北斎から購入する様子を語っている。

「1826 年フィリップ・フォン・フランツ・シーボルトとデ・スチューレル商館長は長崎から江戸へ四年に一度の江戸参府を行った。江戸滞在中彼らは浮世絵師葛飾北斎と会い、1822 年に発注されていた絵画を一揃い受け取った。またこの時シーボルトも新たに北斎に絵画を注文してい

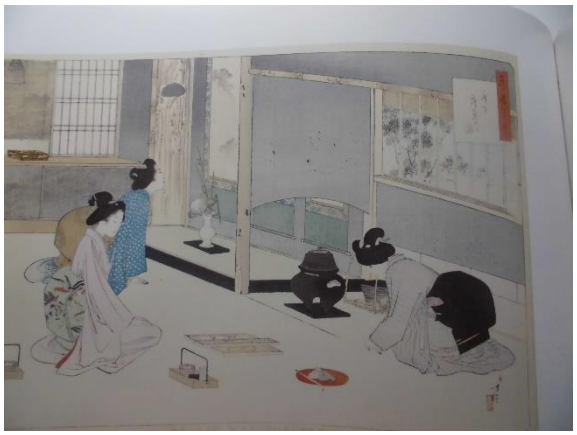
[68] 1988、『淡交』p.63

[69] 長崎市南部の町名. 1636 年（寛永 13）ポルトガル商人を置くために造成した約 4000 坪の扇形埋立地. ポルトガル船渡航禁止後、1641 年平戸にいたオランダ人を移転させ、鎖国中唯一の貿易地とした.

たようにみられる」[70]

フィリップ=フランツ＝バルタザル＝フォン＝シーボルトは 1796 年 2 月 17 日、ドイツのヴェルツブルグに誕生した。祖父も父も医者でヴェルツブルグ大学の教授という名門の医者一家であった。彼は 1815 年にヴュルツブルグ大学に入学し、医学に加え、化学・解剖学・薬学・物理学・人類学・人類学等を学び 1820 年内科学・外科学・産科学の学位を授与され、ハイディングフェルトで開業医を始めた。2 年後オランダ軍に総監フランツ＝ヨーゼフ＝ハウバウルを紹介され、「軍医としてオランダで勤務に就き、東インドの植民地へ行く」ことを勧められ、その決心をする。どこであれ学問的に未知の土地で研究を行うことが目的であったという。[71]彼はまた日本のチャの木とその製法について詳細な記録を残している。

「茶樹が頻繁にみられるのは田畑の小道・道・畔に沿ってであり、それらはあたかも放置されているようでもある。またあまり肥沃でない場所の田畑の真ん中にも植えられている。農夫はこのような方法で生垣をつくり、しかもそこかしこにある二、三の空き地で、農作にあまり適していない田畑に茶を植えるのである。一般に、下層民が日常使用している茶は、大部分これらの栽培からえられ、それらは日本の旅行者には生垣や分散した藪のように見える」



（江戸時代の茶の風景「茶の湯日々草」[72]）

ケンペルとシーボルトまでは 200 年余りの鎖国時代が横たわるが、彼らの記録を比較することで茶が階級により区別されながらも、日本人の生活に欠かせない生活習慣となり、幕末には文

[70] マティ・フォラー「葛飾北斎とシーボルトの出会い」、2007-2008 図録『北斎』東京都江戸東京博物館

[71] 松井洋子、2010,『ケンペルとシーボルト』山川出版社、p48

[72] 2015,『今日庵文庫所蔵明治期の作品を中心に　錦絵に見る茶の湯』茶道資料館

化に発展し、浮世絵にも残されている。
そのころ北斎は、ヨーロッパ美術界では有名な絵画師であり、江戸で多くの外国人と接触していた。浮世絵は江戸時代に始められた庶民の絵で、日本の様子をさまざまな側面から書き表し、斬新なデザインで西洋人を魅了した。ちょうどこの頃、茶道具の陶磁器が不完全の美学をヨーロッパにもたらしていた。

第3節　文明開化とジャポニズム―武士の海外派遣

幕末から明治維新を経て、近代国家に移行した明治時代前後の日本ほど強引に自国の文明社会を 180 度転換して、欧米列強に追随しようとした国は世界に類を見ない。平和を 200 年以上維持してきた日本が外からの圧力により開国に至り、幕府が欧米社会と日本の国家レベルの格差に危機感をつのらせたのは、欧米へ派遣された武士の視察団の現実の生々しい報告であった。

第１項　万延元年の遣米使節団：アメリカ

はじめて公式に国家として西洋に招待されたのは万延元年（1860 年）にアメリカへ派遣された武士の使節団であった。日本との貿易に関して、ペリーとの日米和親条約締結だけでは不十分であったため、最初の駐日総領事のタウンゼント・ハリスは、幕府と日米修好通商条約を締結した。この時の文書をアメリカで交換するためにアメリカ大統領は迎鑑パウアタン号を幕府にさしむけ、1860 年には武士の正式視察団が太平洋を横断してアメリカへ到着した。約 200 年にわたる幕府外交の空白は、アメリカ大統領の招待で初めて西洋文明に遭遇した武士の使節団に強烈な衝撃を与えたが、同じように東洋に浮かぶ島国から開国により世界に登場した武士の

（NCM の資料より　2011.2）

一団に、西洋も強く衝撃を受けたのである。視察団は格式高い伝統的衣装を身にまとい、統一された儀礼で各国を訪問し、最後の武士の姿を彼らの記憶に残した。

1858 年の日米修好通商条約の第十四条（末条）に、「本条約は 1859 年 7 月 4 日(安政 6 年 6 月 5 日)に発行し、この日もしくはそれ以前にワシントン市において批准書を交換するものとする」[73]との文面から、批准書交換のために遣米使節をワシントンへ派遣する必要が生じたためである。万延元年（1860 年）幕府は正式に武士使節団をアメリカへ派遣する。日本から外国へ使節を送るのは、天正遣欧使節、慶長遣欧使節(1613-20)のヨーロッパ派遣以来で、使節団のアメリカへの出航には米艦パウアタン号が迎鑑として来航し、出帆時マストに「日の丸」の旗[74]を翻して、正使新見豊前守を筆頭にした正使 77 名を含む使節団総勢 170 名以上の遣米使節団が乗船し横浜から出航した。彼らはサンフランシスコからパナマを通って、ワシントン、フィラデルフィア、ニューヨークと合計約 3 ヶ月滞在し、初めて西洋文明社会に遭遇した。

パウアタン号に同伴する日本の咸臨丸にとって、初めての太平洋横断であり、勝麟太郎を艦長として、アメリカ人将校ジョン・ブルック大尉が部下と共に客人として乗船後、パウアタン号に先立つこと 9 日前に品川沖を出帆し、太平洋上で難航を続けて満身創痍のうちようやくサンフランシスコに到着し、先の使節団と交流した。護衛艦咸臨丸の主な任務は、もしアメリカにおいて使節に疾病や予期せぬ故障が生じた場合、軍艦奉行の身代わりになることや使節の一行の安着を見届け、それを日本に伝える通報艦の役割を担っていた。咸臨丸の航海については、日本人が海軍諸術の伝授をオランダの教師団から受けるようになって、わずか 5 年しか経っておらず、今回使節団をアメリカに派遣する機に、伝習生の遠洋航海の技能を試させる意図も幕府当局にあった。ジョン・

---

[73] 宮永孝, 2005,『万延元年遣米使節団』（講談社）p.293

[74] 「日の丸」の起源は古く 14 世紀前半後醍醐天皇の時代にすでに白地に赤の日章旗が用いられていたらしい（会田倉吉「総船印」）.しかし日の丸を国旗として主導し、それを最初に用いたのは、薩摩藩島津斉彬であった（石井研堂『明治事物起源下巻」）

マーサー・ブルック大尉の「咸臨丸日記」には、「浦賀出帆後ほどなく艦長勝麟太郎は下痢を起こし提督木村は船酔いし、その後も両人は寝床に伏せることが多かった。日本人の技能は未熟であり、荒天の中での操縦は不可能であり、客として便乗させていたブルック大尉以下のアメリカ人の手を借りなければならなかった」と日本人が航海に慣れていないことを報告している。太平洋横断は日本人にとって初めての航海であり、咸臨丸にジョン万次郎が同乗していたことは、サンフランシスコに入港後、先任士官が彼と同伴してブルック大尉の案内で市庁舎を訪れ到着を報告に残されている。サンフランシスコ滞在中の万次郎の話す英語について、サンフランシスコ・ヘラルド紙は、「当市の日本人」という見出しの中で「…文房具商は来訪者の一人から、ウエブスターの辞書がほしい、とすばらしい英語で云われたとき、少なからず驚いた。その者はこの辞典の値打ちをよく知っているようだ」と述べ、偶然その場にいた福沢諭吉は、英辞典を買った日本人第一号について、「その時に私と通弁の中浜万次郎という人と両人が、ウエブストルの字引の輸入の第一番、それを買ってもう外には何も残ることなく、首尾よく出帆してきた」（『福翁自伝』）と、日本で最初の太平洋を横断した咸臨丸に英語と最新の航海術教育を受けた中浜万次郎が同乗していたことを伝えている。咸臨丸は使節の護衛艦としてアメリカまで就航したのであるから、当然パナマまで行くべきであったが修理に手間取ったため、提督の木村やパウアタン号に乗る同僚たちはワシントンまで行くことを希望したが、艦長勝海舟の決断で、目的を終了したとして帰航することとなった。

ワシントン到着後、日本使節は本来の目的である大統領と批准文書交換を行うための準備を始め、大統領謁見の儀式について日本の習慣を伝え、「わが国は儀礼を重んじますので、大切な謁見を控え、ぜひ前もって練習しておきたいのですが？」とか、「日本では大礼の節は鳥帽子を脱がぬことになっております。が貴国では敬礼の節、帽子を取る慣わしと存じますので、この段一応お断

りいたしておきます」[75]と臆することなく日本側の意向を相手方にはっきり伝えている。

日本使節は当日イグゼキュティブ・マンションと呼ばれたホワイト・ハウス官邸で第 15 代米大統領ジェイムズ・ブキャナン（1857~61）と条約批准の文書交換を行い、無事役目を終了した日本使節団は、目的を無事完了し帰国を申し出るが、大統領から他の都市への訪問を要請され、フィラデルフィア、ニューヨークと訪問する。ワシントンでの大役を果たした使節は、次の訪問地フィラデルフィアへ行く途中メリーランド州のボルチモアへ向っていた。ほとんどのアメリカ人が日本人に接したのは始めてであったためにか、使節団は行く先々で多くの観衆に迎えられ、日本人ブームが沸き起きていた。何故これほど多くのアメリカ人が日本使節の訪問を歓迎したのか。考えられるのは、一つには文明の機器の蒸気機関車と新聞報道との連動がより早く彼らの行程を次の駅に伝え、前もって大々的に歓迎の準備を可能にしたこと。それともう一つは、最近まで日本の漂流民が教育を受けて過ごしていたボルチモアへの停泊である。ここは数年前まで日本人の少年で漂流民彦太郎（浜田彦蔵、ジョセフ・ヒコ）が教育を受け住んでいた所で、彼は数年前にアメリカへ帰化して当時日本へ帰国したばかりであった。日本人の遣米使節団の宿泊はボルチモア市民にとって、懐かしい日本人の住民を思い出す良い機会であり、フィラデルフィアからニューヨークまでの中間点での滞在は、より一層盛り上がりをみせたのである。各市では市長達が出迎える等その勢いはフィラデルフィア、ニューヨークと雪だるま式に膨れ上がり、最後にはニューヨーク市民を巻き込む大ブームとなった。このころニューヨークは最後の歓迎を開催するのに十分ワシントンよりも大都市であった。工程の変更の背景には大統領の政治的意図があったと考えられる。この年は大統領再選の年であり、最恵国として日本と条約を交わした実績を世論に示す絶好の機会であった。これは大統領の宣伝をこめた広報活動であり、この劇的な歓迎は再選への戦略である。この時代アメリカ経済の発

[75] 宮永考, 2005,『万延の遣米使節団』講談社学術文庫 p.111-112

展を左右する南部と北部の政治状況の深刻な状況があり、南北の戦争まで一触即発の政治的激動のさなかに、大統領は多額の費用をかけて日本人を招待し、華々しく歓迎して大統領の威厳と業績を訴えたのである。しかし翌年エイブラハム・リンカーンが第 16 代大統領に就任し、結果的に南北戦争（1861~65）に突入する。結果的にはこの歓迎の記憶は、40 年後の日露戦争におけるアメリカへの斡旋として影響を残すことになる。

サムライたちの興味の的は、日本にはないものすべてに驚きを示している。たとえば自動的に動く機械類により屋内ではいっさい人の力を借りずに蒸気により物が動き、水をポンプで上階までひきあげ、火はすべてガスを用いている。[76]灯台、天文台、造船所、音楽、消防車、巨大建築、造幣所、病院、獄舎,双眼鏡、ガラス、写真機、幻灯、蒸気機関車、風力発電、群集から注がれる視線、氷塊、マッチ、生の風景、食べ物、マナーの違い、ジャーナリズム等、手当たり次第の見るもの聴くものすべてが驚愕の連続であり、さすがの豪放な福沢諭吉も、自分が借りてきたネコのように小さくなっていたという。アメリカ滞在中、日本使節は大統領から一般の市民に至るまで実に多くの日本の品々を贈呈している。大統領への贈り物は、真太刀一振り・馬具一揃（鞍と鐙は蒔絵）・掛け軸十幅（いずれも狩野、住吉両派の絵）・翠簾（緑色のすだれ）・屏風十双・錦の幔幕・蒔絵の硯箱・蒔絵の書棚・同料紙箱など最新の技術の品物であり、これらはホテルの一室に 3～4 日かざられ、連日多くの見物人に披露された。アメリカからの歓待を受けて使節団も、行く先々で関係する多くの上級官吏達に、縮緬（反物）、白鞘の刀、日本陶器といった日本美術品を献上している。また下級武士たちは市民の要求に対して、身につけている身近な品物をいたるところで与え、日本品は最上のものから小物にいたるまで彼らの行く先々に残されてきたのである。使節が大統領や高官達に贈呈した品物は 1860 年当時作られた最新の日本伝統美術であり、この後に始まる日本の開国と武士社会の崩壊とが一度に到来した明治維新の混乱で武家などから家宝の歴史的伝

76 『亜行日記』勘定組頭森田岡太郎

統美術が海外に流出した品物や、さまざまな種類の日本美術は博物館や美術館に最終的に持ち込まれ、後年フェノロサの後を受け継いで岡倉天心がボストン美術館で出会う美術品の多くは、このような状況下で持ち込まれたのである。日本伝統美術品としてすでに 2 万点以上が当時コプリー広場にあったボストン美術館にはこれらの多くが収納されていたのである。アメリカからの帰国後、使節団の持ち帰った報告と贈呈品から、幕府はさらに西洋列強の視察のためにヨーロッパへ条約延期を求めることを表向きの目的として同じく武士の正式使節団を送り込む。

第 2 項　文久二年の遣欧使節団：ヨーロッパ

1862 年 5 月 1 日から始まったロンドンの「万国博覧会」は 11 年前の水晶宮で成功した展覧会以来のもので、ヨーロッパではこのような展覧会が各地で頻繁に行われていた。万国博覧会への参加はさまざまな異民族の出会いでもあった。ヨーロッパに大陸続きである中国は、1840 年以降半植民地化が進み、ヨーロッパ人にとって大陸を同じくする中国の製品は見慣れていたが、中国展示場のとなりにおかれた日本の展示物は、200 年の鎖国から目覚めたエキゾチックな神秘的な物であり大反響が起き、ヨーロッパを席巻した。

1867 年の大政奉還により天皇を頂点とした明治新国家が作られるまでに、あと 5 年を残した 1862 年（文久二年）、幕府はヨーロッパに総勢 38 人の遣欧使節を派遣した。2 年前にアメリカへ同行した武士を含め[77]、アメリカで体験した西洋社会をヨーロッパでもう一度体験することで、より一層日本の将来性を見極めようとしたのである。

使節団は 1862 年 1 月に江戸を発ち、4 月 3 日にマルセーユに到着、パリ（4 月 7 日～29 日）、イギリス（4 月 30 日～6 月 12 日）、オランダ（6 月 14 日～7

[77] 鈴木、スノードン、ツオーベル著、2008『ヨーロッパ人の見た幕末使節団』講談社. 諭吉（27 歳）川崎道民（31）佐野縣（31）日高圭三郎（25）益頭駿次郎（33)を含む.

月 16 日)、ドイツ（プロイセン、7 月 17 日～8 月 5 日)、ロシア（8 月 8 日～9 月 17 日）を訪問しその後は岐路を辿り、再び、ベルリン、パリを通過し、リスボンに立ち寄って、1863 年 1 月 29 日に日本に帰着した。日本人の乗った帝国軍艦ヒマラヤ号のメーンマストには、白地の中央に大きな赤い丸がある日本国旗を掲げてヨーロッパに到着した。交渉の目的は、オランダ、ロシア、イギリス、フランスとの修好通商条約〔1858 年〕で約束した開市（江戸・大阪）・開港（新潟・兵庫）の延期交渉であり、ロシアでは樺太国境画定交渉をも含む政治上重要で難解な役割を担った使節団であった。前年の日普修好通商条約で開市・開港問題自体が除かれていたドイツを除いて、イギリスでの「ロンドン覚書」(1862 年 6 月 6 日）を基準として、1863 年 1 月 1 日より開市・開港の五ヵ年延期の結果を出して帰国の途についた。

開市・開港の延期の理由は国内の政治経済問題により、履行が難しくなったことを各国に求めるための派遣であると同時に、戦略的にアメリカに続き西ヨーロッパ諸国を視察しておく必要があった。最初の訪問国フランスでは、アメリカと違って日本人への興味は薄く、外相との交渉が不調に終わり、日本使節団に対する扱いはかなり冷淡であった。まだ日本が一般に知られていない時代に、異様な外観のアジア人の集団が交渉に訪れたことに対して、渡欧後フランスでは冷遇されるなど苦戦を強いられていた。

イギリス人が日本についてもっていたイメージは、極東の海を隔てた島国から来た珍しい訪問者であるといった軽い認識であった。異様な服装、刀、髪型、中国人に似た女性のような顔面、軍隊のような規律正しい身体動作などは、その頃のヨーロッパ人が好んで読んだ『ガリヴァー旅行記』[78]を連想させたのである。

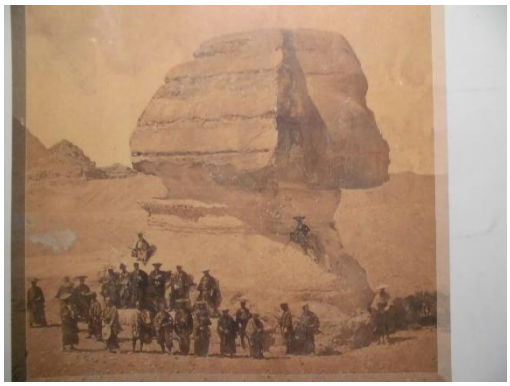
海の向こうから突然現われた異文化圏の使節団の外観は、ヨーロッパ人にとってなんともいえない異様な姿であったことをイギリスの『タイムズ』紙は伝えている。一方日本人から見た西洋社会の仕組みについて、前回アメリカに続いて

[78] 1726 年に出版され、当時「内閣評議会から子供部屋にいたるまで読まれていた」といわれている

ヨーロッパ使節団に同行した明治時代の教育者福沢諭吉は、「…例えばココに病院というものがある。ところでその入院費の金はどんな塩梅にして誰が出しているのか。また銀行というものがあってその金の支出入はどうしているのか。郵便法が行われていて、その法はどういう趣向にしてあるのか、フランスでは徴兵令を励行しているがイギリスにはその徴兵令がないという徴兵令というのは、そもそもどういう趣向にしてあるのか、その辺の事情が頓とわからない。(『福翁自伝』)」と苦悶している。

使節団の何人かが教育施設を訪問した際に、彼らが腰に差す刀についてイギリス人が感嘆し、誰かが武士の刀の刃の部分を見たいと望んだところ、丁寧かつ、きっぱりと断られた。日本人はこういったのである。「われわれは敵の前でのみ刀を抜くのです」。日本社会では武士のみが刀を持ち歩くことができる代わりに、めったに人前で刀を抜くことはない。刀を持つ武士も、持たない庶民もお互いがこの条件を暗黙のうちに了解していて始めて、平和な社会を作り上げていたのである。前述の開市・開港を五ヵ年延期する申し入れは苦戦を強いられていたが、ロンドンで行われた国際万国博覧会[79]の開会式に出席し、日本製品の展示が彼らの称賛を集めそれらが世界に認められる瞬間を目にすることで状況は変化した。

第 3 項　その他の使節団



（1864 年第 2 回遣欧使節一行とスフィンクス）

幕府は 1862 年に続いて、1864 年（フランス）、1865 年（フランス、イギリス），1866 年（ロシア）、1867 年（パリ万国博覧会）と頻繁に近代ヨーロッパ社会に視察団を派遣し開国後は 1871-73 年岩倉使節団が新政府から欧米に長期にわたる視察を行った。中でも 1864 年の池田筑後守長発

[79] 国際博覧会は、1851 年に水晶宮で開かれた万国博覧会の 11 年後に開かれた.

一行は、今までの使節団の行程とは全く違なり、第 2 回遣欧使節団として、横浜鎖港談判団として 34 名がフランス船で横浜を出港しインド洋を経てスエズにつき鉄道でカイロに入り、スフィンクスを背景に写真に収まっている。彼らはイギリス船でマルセーユに到着後、パリで 2 カ月間滞在中、ナポレオンに謁見したが、この間に一旦開港した港の鎖港は不可能であることを実感し、すべての訪問予定を中止し幕府に無断で帰国を断行した。帰国後政府に開国、西洋文明の吸収、軍事力の強化を進言したが、正使以下 3 名は厳罰に処せられている。時代の急進性が武士の間にも広がり始めていた。しかし日本は開国後に国内では佐幕と勤皇の武士の内乱が起き、このあとアメリカとの関係をしばらくすえおくことになるため留学生による海外渡航が頻繁に行われた。文久の遣欧使節団の帰国後、幕府は伝統美術に優秀性を見いだし西洋との美術工芸の貿易の糸口をつかみ、開国後の明治新政府は博物館や東京美術学校祖創設に向けて準備を急速に進めることになる。

おわりに

本章では、ヨーロッパの視点からみた日本を、マルコ・ポーロの『東方見聞録』に捉え、政治的側面からはジパングへの布教を試みてキリスト教宣教師ジョアン・ロドリゲスの『日本教会史』を通して戦国武将と茶の関係が、天下統一を争う中でいかに重要であったかを論じた。

「伝統の崩壊とは基準を設定する「始元」に頼れなくなったということであり、権威が終焉した―そして行為の究極的根拠が消滅した―結果、形而上学にもとづく自由や行為や判断の概念は明らかに考え直さなければならない[80]」とはハンナ・アーレント[81]の言葉であるが、16 世紀の天下統一の時代にロドリゲスが『日本教会史』に書き残した茶の形態は、日本伝統文化基準を設定する「始元」であ

[80] D・R・ヴィラ/青木隆嘉訳、2004、『アレントとハイデガー』

[81] ハンナ・アーレント（Hannah Arendt1906-1975）：ドイツの政治思想家。ユダヤ人であるためアメリカへ亡命した．『全体主義の起源』『人間の条件』『イェルサレムのアイヒマン』等.

り、開国による近代化が封建社会を崩壊させて以後も、生活の中に隅々にまで浸透し、儀礼や挨拶の身体動作に受け継がれたために、文明開化といわれた大転換期にも変化しにくく日本文化の究極的根拠は消滅することなく、日本人の判断概念は以前にもまして深まったのである。

第 2 章　岡倉覚三の「国家」と「美術」—National Individuality

はじめに

（文部省入省の頃の岡倉覚三）

岡倉覚三は東京大学文学部の卒業論文に、まず「国家論」を二カ月かけて英語で書き上げた。ところがその論文が新妻により過って焼却されたために、急遽「美術論」を二週間で仕上げ提出した。結果文部省に入省し、日本美術界で活躍することになるが、彼の当初の論文が「国家論」であったことから、官僚として政治外交に係る希望は、生涯持ち続けていたと考えられる。

50 年の岡倉の人生は大きく二分して捉える事ができる。前半生は、幕末の横浜での誕生から東京大学でのフェノロサとの出会いによって始まる日本美術への覚醒と、1880 年の卒業と文部省入省、1886 年の欧米視察旅行、1890 年の東京美術学校校長就任と東京帝国博物館理事兼美術部長から 8 年後の 1898 年東京美術学校校長罷免迄の 36 年間と、官僚を罷免され下野した後の自由な行動に動く 6 年間を加えた日本における 42 年間である。後半生は 1904 年に渡米してマサチューセッツ州北東部のボストン美術館を拠点とした国際的活躍から 1913 年に逝去するまでの 9 年間のアメリカ時代である。第 2 章では近代化日本における美術行政を官僚として遂行した岡倉の前半生に焦点をあてる。

第 1 節　コスモポリタン天心岡倉覚三

岡倉覚三は、1862 年（文久 2）12 月 26 日横浜[82]本町の貿易商石川屋（岡

[82]日米修好通商条約では最初神奈川を開港する予定であったが、幕府の事情で横浜に変更され、それ以降横浜は急速に発展し、当時外国人と日本人の商人のみが居住を許された場所であった.

倉）勘衛門の次男として誕生した。父親は元福井藩士で、藩主松平春嶽[83]の命により横浜で貿易商を営んでいたが、廃藩置県により 1873 年（明治 6)、石川屋を閉じ、藩に利益を返還した後東京に居を移転した。教育熱心な父親勘衛門は、岡倉にジェイムズ・バラーの塾で語学を、漢籍を神奈川県長延寺の住職に学ばせた。

数え年 12 歳で官立東京外国語大学に入学後、1875 年 14 歳で東京開成学校に給費生として入学したが、開成学校は東京大学と改称され、1877 年 4 月東京大学文学部第二年級第一課に移籍した。この年の 6 月、エドワード・モースが来日し、1878 年 8 月アーネスト・フェノロサが東京大学のお雇い外国人教師として新婦を伴い来日した。

ハーヴァード大学哲学科を卒業したフェノロサは、スペンサーの進化論とヘーゲル派の唯理哲学の折衷調和を学生に講義した。学外では美術に関心が深く、東京大学で政治学や理財学を教える傍ら、日本美術の研究のため英語に堪能な岡倉を伴い京都、奈良の古社寺を頻繁に訪れていたが、特に奈良法隆寺夢殿の救世観音（観音菩薩像）開帳に立ち会った経験は、岡倉に「実に一生の最快事なり」といわせるほどの衝撃をあたえ、その後の日本伝統美術への開眼につながったといわれている。

「美術論」を 2 週間で書き上げ東京大学を卒業後、文部省御用掛・音楽取調掛に入省となったが、直後にアメリカから帰国した上司伊沢修二と意見を異にし内記課に配属となり、文部少輔九鬼隆一の配下に入る。この頃 1882 年に来日したボストン美術館の有力理事の息子ウイリアム・ビゲローと出会い、以後彼との関係は公私にわたって終生深い親交をもち続ける。

1886 年 2 月、図画取調掛主幹となり、9 月美術取調委員としてフェノロサと共に欧米視察旅行に出発し、各地の美術、美術行政、学校制度などを視察し、National individuality　が一国の統一の大原案であると九鬼宛の手紙で報告す

[83] 松平春嶽（慶永）：幕末の福井藩守。将軍跡継ぎ問題、条約締結の件で大老井伊直弼と意見を異にし、隠居・閉門を命ぜられたが、後赦免. 明治政府の議定・民部卿・大蔵卿を歴任した（1828~1890）.

る。ヨーロッパからアメリカ廻りで帰国する途中、ワシントンで特命全権大使を務めていた九鬼を訪問し、体調不良のはつこ夫人を伴い 10 月約 1 年ぶりに帰国する。ここから後に東京美術学校校長罷免のスキャンダルとなる岡倉と九鬼夫人との交友関係が始まる。

1889 年、東京美術学校が開設され美術部長となった岡倉は、『国華』[84]を創刊する。翌年 29 歳の若さで校長に就任し、1898 年に校長を解任されるまで、西洋画と日本画との対立の中で美術行政に敏腕を振るう。数年後の日本と中国清との戦争前夜 1893 年 7 月、岡倉は弟子の早崎梗吉を伴って不穏な中国奥地に視察に入り 12 月に帰国する。この調査で彼らは洛陽近辺で大仏像群を発見し、帰国後「支那の美術」を報告する。ここから岡倉の中国美術蒐集への足がかりが始まる。一方で 1896 年 5 月古社寺保存委員を命ぜられ、以後アメリカボストン美術館に職を得た後も、生涯にわたり日本伝統美術に関わりをもち続ける。

1898 年、さまざまな問題が起因して東京美術学校校長を解任され、下野する。彼は沈黙を守り解任を受け入れるが、岡倉を師事する教授たちの辞職を受けて直後に「日本美術院」を計画する。しかし資金が調達できないため、かねてから親交のあったボストン美術館のビゲローに寄付[85]を依頼し何とか創設にこぎつける。

1901 年、経営不振の「日本美術院」をほうり投げて突然インドへ約 1 年の遊学に出かけ、帰国後 1903 年『東洋の理想』[86]（The Ideals of the East）をロンドンのジョン・マレー社[87]から出版する。岡倉の東京美術学校校長の解任から、1904 年 2 月のアメリカへの到着までの 6 年間は彼の人生の岐路に立たされた時期であり、アメリカボストン市における彼の行動の複雑さの前触れとして注目すべき時代である。

---

84 創刊号に「円山応挙」、第二号に「狩野芳崖」を発表.

85 当時の金額で 2 万円をビゲローは岡倉に送金した.

86 インドへの渡航以前から書き始めていたといわれている．冒頭の言葉〝Asia is one.〟は有名.

87 紹介者は『東洋の理想』の序文を執筆したニヴェディタことイギリス女性マーガレット・E・ノーブル.

1904 年 2 月、43 歳の岡倉は、美術学校の弟子達[88]を連れてアメリカに向かう。3 月、ボストン市の有力女性イザベラ・ガードナー夫人を訪問し、23 日のボストン美術館の面接の後、顧問として職を得、かつて流出した日本美術の鑑定、修復、復元など行い信用を得る。9 月、セントルイス万博に急遽代役として日本美術についての講演『絵画における近代の問題』を流暢な英語で行い日本への注目をもたらした。11 月には第二番目の英文著書『日本の覚醒』（The Awakening of Japan）をニューヨークから出版[89]し好評を得て、『東洋の理想』と共に岡倉の名を世界に知らしめた。

1905 年 2 月、岡倉は帰国の途につき、『国華』の発行権を売却して債務を整理し体調を整え 10 月ボストン美術館に帰任する。この後毎年、6 カ月を同館で執務する契約を結ぶ。この年五浦（いずら）を増築し、六角堂[90]を庭先の岸壁に立てる。1905 年 9 月、日露戦争は第 26 代アメリカ大統領 T・ルーズベルトの斡旋によりポーツマス[91]で講和条約が成立し、日本の存亡の危機は勝利[92]をもって回避された。

1906 年 5 月、『茶の本』（The Book of Tea）をニューヨークから出版[93]し帰国する。6 月腎臓炎を発病し、入院手術する。この頃から体調を崩し始める。9 月日本美術院の第一部（絵画部）を東京に、第二部（彫刻部）を奈良に置き、橋本雅邦に代わって日本美術院の主幹となる。10 月ボストン美術館の依頼で中国を視察する。

1907 年中国から帰国して以降、岡倉は日本美術界との関係を深くする。社会

---

88 日本美術院の弟子達、横山大観、菱田春草、六角紫水はニューヨークでの展示を目的としていた.

89 The Century Co.(センチュリー社 1904 出版)

90 2011 年の東北大震災により、福島のすぐ下方に位置する茨城県北部五浦の六角堂が崩壊したが後に再建された.

91 アメリカ北東部、ニューハンプシャー州の都市.ポー ツマス条約は日本主席全権小村寿太郎、ロシア首席全権ウィッテ. 小村とルーズベルトはボストン市にあるハーヴァード大学で同窓. 日本はルーズベルトの介入を強く求めていた.

92 勝利とはいえ賠償金は得られなかったため、海外からの資金援助の返済は至難をきわめた.

93 Fox Duffield and company

的に落ち着きを増してきた日本で、政界が日本伝統美術の保護、蒐集に関心を持ち始めたことがその原因と見られる。11 月ボストン美術館に帰任。

1908 年 6 月、パリのルーヴル美術館でフェノロサと再会するが、旧交を暖める暇もなくベルリン、中国東北に入り北京から 7 月帰国。9 月、フェノロサがロンドンで客死する。遺言で遺骨を近江の三井寺園城寺法明院に葬る。11 月東京美術学校主催のフェノロサ追悼法要に出席。この年の岡倉は文部省展覧会（文展）との交渉に多くの時間を割きながらもヨーロッパを訪問し、かつての恩師に再会するが、その後フェノロサの死去で幕を閉じてしまう。岡倉は体調不良の中、西洋の視点から日本を捉えていく視点を強める。

1909 年はボストン美術館が、コプリー広場から現在のハンティントン通りに.移築された年で、岡倉は設計から関わり、中国・日本部門に宗教空間を作り、日本らしさを作品展示に表現する。特に仏像展示について、「日本の寺院におかれているように」という意向は、現在も厳守されている。

.1910 年 4 月東京帝国大学文科大学で東洋美術史について講義し、7 月には文展の審査委員に任じられたが渡米のため辞退。9 月渡米後 10 月ボストン美術館中国・日本部のキュレーター[94]に任命され承諾する。

1911 年 1~3 月ヨーロッパを歴訪し、4 月ハーヴァード大学からマスター・オブ・アーツ[95]を贈呈され 8 月帰国。愛弟子の菱田春草を亡くす。この年ボストンでの一連の講演を同館の Bulletin に発表し、岡倉のボストンでの地位は確立した。

1912 年 1 月日本で論文を発表後、5 月中国で早崎梗吉に迎えられ北京に入る。6 月帰国後 8 月インドに出発しカルカッタでプリマムヴァダ・デーヴィ・パネルジー夫人[96]と出会う。11 月ボストン美術館に帰任、マサチューセッツ市の保養

---

[94] 岡倉は 1904 年のボストン美術館面接でキュレーターを打診されたが、その器ではないと辞退した. その後の岡倉の美術館への貢献が 1910 年のキュレーターにつながったものである.

[95] 岡倉が大学外の人物でありながらもボストンでの活躍を評価して大学が贈呈した修士.

[96] 彼女とのプラトニックな恋愛は、夫人の死後、岡倉との交換手紙が発見され、知られることとなった.

所で静養するなど体調は悪化の一途をたどる。

（「菩薩坐像」2011.1.撮影）

1913 年 2 月、詩劇「白狐」（the White Fox）をイザベラ・ガードナー夫人に献呈する。8 月遣米交換教授の推薦を牧野伸顕よりうけ受諾するが 9 月 2 日心臓発作をおこし岡倉覚三は逝去した。享年 51 歳。この知らせを聞いたボストンでは急遽追悼文[97]が Bulletin にのせられ、彼がかつて中国で発見しながら購入を逃した石仏「菩薩坐像」が岡倉覚三に捧げられた。現在もアジア・オセアニア・アフリカ部[98]の入り口に置かれている。彼の遺骨は染井、五浦、赤倉に分骨された。

第 2 節　『国家論』の背景

1854 年にアメリカと日米和親条約を締結した徳川幕府は、約 2 世紀の鎖国体制に終止符を打ち開港に踏み切った。その期間に西洋は飛躍的な発展を遂げ、欧米諸国は表向き日本への貿易を口実に横浜港から一斉に戦略的経済侵攻を始めたのである。

第 1 項　政治と外交

日本の開国は、外交に不慣れな日本にとって言葉においても駆け引きの激しい外交面においても、欧米の不平等条約を締結させられた結果となり幕府の負担は増していく。不平等条約改正は 40 年後の 1911（明治 44）小村寿太郎の条約改正まで引きずることとなり、日本は戦略的政治外交が急務であった。中国

97 ウイリアム・スタージス・ビゲローとジョン・エラートン・ロッジによる追悼文が『ボストン美術舘紀要』（1913 年 12 月 p.72~75）に記載.

98 フェノロサのためにつくられ岡倉が籍を置いたかつての東洋部が、日本・中国部と名前を変え、現在はこの名称になっている.

の南京条約よりは有利だったといわれる日本の修好通商条約は基本的に南京条約の「日本版」であるといわれる。というのもこの条約が当時の東西関係によって条件つけられた領事権、借地権、関税自主権の不備など構造的な問題によったからである。

アメリカが開港により日本に求めた要求は、日本国沿岸で遭難するアメリカ船舶の乗組員と財産の救助保護, 日米両国の自由貿易、そしてカリフォルニア・支那間定期航海に従事するアメリカ汽船のために日本国海岸に貯炭所を設置するという三項目が主な要求である。当時最盛期のアメリカの捕鯨漁にとって、日本列島沖は最大の漁場であったため、遭難救助の確保を求めたのは、それだけ頻繁に日本に接近していたためである。また当時の西欧先進国が自由経済の全盛期にあり、極東日本への貿易の市場開放要求は、優秀な日本製品への期待から求められたものである。さらに大型蒸気船が、サンフランシスコから太平洋を横断して中国貿易を可能にしたため、途中での燃料補給が必要だったのである。翌年ペリーが持参した第 13 代アメリカ合衆国大統領ミラード・フィルモアから日本の将軍に宛てた親書の内容が、航海についてかかれていることから見ても 200 年に及ぶ鎖国の空白は、欧米社会との格差を拡大し彼らは変化していたのである。

アメリカ合衆国はかつてイギリスの植民地であり、独立宣言により東部 13 州が成立し、1783 年各国が承認、以後領土を拡大すると共に急速な発展を遂げた。1861 年南北戦争が起こり、65 年の南軍の降伏により合衆国の統一が維持された。北東部マサチューセッツ州ボストン近郊のセーラム市は、19 世紀に中国貿易と捕鯨でにぎわった町である。ピーボディ・エセックス博物館には当時の交流の品々が現在も展示されている。蒸気船で太平洋を横断し、アジアへ向う航路は、イギリスに遅れを取っていたアジアへの進出の近道であり、アメリカは日本周辺に鯨を求めて頻繁に来航していた。そのため彼らに必要な物は石炭、漂流民の救助、食料の充足であった。実際日本の漁師が彼らに救助されたことはしばしばあり、鎖国体制下で、日本に帰国できない若者の漂流民はア

メリカへ彼らと共に渡り、現地で教育を受けたものもいた。

第 2 項　不平等条約の光と影

日米修好通商条約締結から八年後の 1866 年以後に海外へ赴く日本人によりようやくこれが「不平等」であることに幕府は気付かされた。開国後の外国人居留地における領事権裁判制度、協定関税制度、そして片務的最恵国待遇は、西洋人の傲慢さを浮き彫りにし、傍若無人な行動は頻繁に弊害を起こしていた。1865 年まで横浜の居留民は各国領事によって管理され、必要に応じて日本側奉行と協力し合っていたが、居留民の増加と市街の拡張に伴い、法律的に擁護されない日本人と、日本の干渉をうけない外国人とのトラブルはさまざまな形で問題化し、こまごまとしたもめごとの処理のために各国から選ばれた委員によって市政委員会が設けられ、機能を果たしていた。

条約の光の部分を横浜の外国人居留地に見ると、外国人が何を好み、何を必要としているかを日本人が知ることは比較的容易であり、近代化で急速に変化する日本人の生活に対応して、舶来品の製造を学び国産化を目指す機会を与えたことである。日本人商人との生活区域は分けられていたが、外国商館や外国人が経営する造船、機械工場に働く日本人は多く、外国人が日本人と普段から共に働く場所であった。また外国人は多くの物を横浜に持ち込んだため、異文化交流によるさまざまな外国製品との出会いは日本人を刺激するに十分であった。1862 年にはイギリス公使オールコックによりもたらされた西洋野菜が栽培され、試作地が設けられた。乳牛の飼育や天然氷の製造と保存、ビールの製造は日本で初めて作られている。日本人は西洋技術を学び、造船、期間技術等を習得し、優秀な職人は造船所を開設している。また医療機械、製図機械を習得した職人は独立し内国博覧会等に出品して横浜の工業化を進めた。生活用品の中でも石鹸の製造の成功やピアノ製造にまで進出している。

このような状況で明治維新に不平等条約改正への動きがおこり、改正は 1871～72 年にわたる岩倉具視使節団の対米交渉から始まり、最終的に周辺国

との摩擦から日清・日露戦争の国家存亡の危機を挟んで、1911 年小村寿太郎の関税自主権の回復まで半世紀にわたって行われた苦渋の明治近代史であった。それはこの時代を生き抜いた岡倉覚三の生きた 50 年の人生そのものである。

第 3 節　『美術論』の背景

1882 年（明治 15）年には東京上野に、コンドル設計の「博物館」[99]（館長町田久成）が開館し、紆余曲折の末に 1900 年（明治 33）東京帝室博物館として皇室に献上された。「博物館」構想は、幕末薩摩藩の名門に生まれ藩の命でイギリスに留学後外務省に入省し、将来を嘱望された一人のエリート藩士が、新政府の藩閥構想に巻き込まれ外務省から大学（文部省）へ更迭を受けた外交官の挫折から始まった。

第 1 項　町田久成の「博物館」構想

（町田久成　前列中央　薩摩藩英国留学生）

岡倉が東京大学でフェノロサの通訳として日本美術の研究に同行している 1878 年頃、明治維新直後の美術界は、万国博覧会で優秀性を認められた日本美術への需給による新作品の制作におわれるとともに、外国人コレクターによる日本伝統美術品の海外流出に苦慮し文化財は危機的状態に陥っていた。そこで大学大丞町田久成（1837-97）らの建言により 1871 年（明治 4）に「古器物保存方」を設けて全国の古文化財の調査を行い、1882 年（明治 15）年には東京上野に「博物館」（館長町田久成）が開館した。また外国人教師ゴッドフリート・

[99] 「其堅牢なる実に他に比類なし」といわれたコンドルの代表作。関東大震災で倒壊したが、彼はその三年前の大正九年（1920）に東京で亡くなっている.

ワグネルは、政府が伝統的美術工芸を保護し、振興するために美術学校を開設すべきであると進言し、政府はその方向に動き出す。この頃の美術行政は、九鬼隆一、浜尾新が中心となって進められていた。

1871 年（明治 4)、町田は「博物館」構想を打ち出した。国家が買い上げたコレクションを保存、公開するロンドン大英博物館や、フランス革命後の貴族から没収した宝物を公開する博物館とは異なり、博物館をまず創るという発想から生まれたもので展示する内容は全くの未定であった。博物館完成には明治政府が町田久成の博物館構想に応じたことと、維新後政府の中枢にいた公家岩倉具視が大久保利通を通して維新当時ほとんど資産のない「皇室」の財力を強化する理由で、博物館の完成を応援したという背景がある[100]。町田は薩摩藩大目付として幕末活躍し、明治元年新政府参与から内務省ほか各省の要職を経て内外博覧会用務や博物館創設準備に携わり文部省で、九鬼隆一、浜尾新、岡倉覚三、フェノロサへと強い影響をあたえた人物であった。

町田久成は 1838(天保九)1 月 2 日に鹿児島城下の千石馬場で、島津一門の三名家の一つである町田家に久長の長子として誕生した。町田の氏祖は 1197 年に薩摩・大隅の守護に任命された島津忠久の孫島津常陸守忠経の三男島津五郎太郎忠光で、家名の「町田」はこの島津忠光が薩摩に日置郡の町田邑を領し、町田島津を名乗ったことから起こっている。久成が家督を継いだ幕末の町田家は、私領地として千七百五十石と曾祖父が受けていた国家老の役料二千石が加わり支族のいる琉球諸島との交流もあって第一級の家臣として経済的に裕福であった。十九歳（1856）で江戸へ出て昌平坂の学問所に入り、学問を治めたが、二年目に藩主斉彬が急逝し江戸から呼び戻され、藩内の闘争の結果、久成は二十六歳で大目付の役職に就いた。

薩英戦争（1863）の終了と共に、開国近代化に変化が現れ藩主久光は新技術の習得を目的とする英国への親善使節団と留学生の派遣を決定し、1865 年 3 月久成は使節の副使として鹿児島を出帆したが、幕末藩の財政が逼迫し 1867 年に

[100] 関秀夫 2005『博物館の誕生―町田久成と東京帝室博物館―』岩波新書 p.139

帰国した。その四ヶ月後の慶応三年十月に将軍が大政を奉還し、十二月に王政復古が宣言された。公卿、薩摩、長州、土佐、肥前で樹立した新政府の国家の統治機構は、総裁、議定、参与の三職を設け、薩摩藩は議定に藩主島津忠義をあて、七人の参与の中に支配層から町田久成が割り当てられた。彼は二月に最終的に参与兼外国事務掛から外国事務局の、参与兼外国事務局判事に指名された。同時期に伊藤博文（1841-1909）は兵庫裁判所の判事として兵庫へ赴任した。1865 年のイギリス留学期間に、町田は長州ファイブと称された伊藤博文らと合流し、伊藤との親睦を深め、明治維新後の日本の政治、美術界との密な人脈を作り上げていた。

維新の混乱の中で町田久成は順調にのぼりつめ、岩倉具視や木戸孝允などの要人と頻繁に接触し、対外的な重要会議に同席する等日本の代表的な外交官でありこのままいけば外務大丞筆頭から外務卿に就任する地位にあった。

彼の失脚の直接の原因は、英国第二皇子への接待の過剰であった。戊辰戦争終焉二カ月後（明治 2）の 7 月に明治政府がはじめてむかえた英国ビクトリア女王の第二皇子エジンバラ公アルフレッドの来日における接待の内容が過剰であったとの見解による。政府内部には薩長の急激な開化政策に抵抗する勢力があったが、大納言岩倉具視は国をあげて丁重な対応を取るように求めた。国内ではすでに攘夷から開国に転換していたが、アルフレッド王子は 7 月 22 日に軍艦ガラティア号で横浜港に到着し、天皇との謁見をはじめとする第一級の接待を受け、8 月 3 日に東京を離れ横浜に戻り、22 日に神戸から帰国の途についた。賓客接待の実務をとりしきる責任者であった町田が工夫を凝らし十分に職務を全うしたことはミットフォードの回想録に詳細に記録されている。しかし賓客は英国の皇太子ではなく第二王子であったため、この接待方法や内容について尊王攘夷派の政治家や、在野の志士から激しい非難の声が上がり、親英的外交をとる大久保利通や岩倉具視を快く思っていない外務卿沢宣嘉吉らが強い不満の声をあげ、政府内外の批判は一向に収まらなかった。外務卿沢にとって野蛮な異民族を大げさに歓迎する英国帰りの町田久成は不快な存在であり、こ

の時の過剰な接待に対する沢宣嘉吉と町田久成との意見の食い違いが謹慎の直接の原因とされている[101]。結局町田は 1870 年（明治 3）9 月 2 日、大学大丞として閑職と称された大学（文部省）への移動が発令され謹慎処分の一年後に外務省を去った。33 歳の短い政治の表舞台からの更迭であった。

大学での町田の仕事は、1873 年のウイーン万国博覧会参加の準備に始まる。彼は幕末の英国留学中に二度パリにわたり、一度目は 1867 年のパリ万国博覧会へ薩摩藩参加の準備、二度目はパリ万博への現地参加である。パリ万国博覧会への日本からの参加は非公式であったため、幕府、薩摩藩、佐賀藩が展示するという現象が起きた。そこで新政府は正式出品の要請が来たウイーン万博を、日本を世界に誇る場として受諾し新政府の威信をかけて外務省始めとして全省挙げて準備にかかり、パリ万博で経験のある町田も文部省から参加したのである。

1873 年（明治 6）のウイーン万国博覧会を視察した官僚たちは、欧米で日本の美術工芸品が高く評価されていることに驚き、殖産興業のためにも伝統美術を守る必要があると政府に進言した。明治政府は、そこで 1877 年日本国内で、第一回内国博覧会を開催し、ひろく一般市民に日本美術工芸への関心の高まりをもたらした。これは欧米で行われる万国博覧会の経済効果と、ひろく日本人の技術や美術品を紹介することを目的としたもので、第五回まで開催された。大久保利通は外遊中にロンドンでブルームズベリーの大英博物館やサウス・ケンジントンの博覧会、ベルリンの大博物館を見学し、対外的な国家文化戦略として博物館の存在が重要であるとの認識をもった町田の処分の陰には大久保の博覧会への関心があったのではないかと考えられる。

政府は博覧会の前身である内国物産会を開催し、博物館へ意識を高めていくが、1873 年大久保の外遊からの帰国を待って町田は「大博物館建設の必要」を太政官に上申し、博物館と書籍館の建設を進言した。目標は大英博物館であった。欧米の博物館は、内国勧業博覧会とは全く異なるとして、大久保は帰国後岩倉具視の同意を得て町田の博物館をつくる方向に賛同し、1877 年(明治 10)11 月第一

101　関秀夫、2005『博物館の誕生』p.18

回内国勧業博覧会終了後の翌月、太政官は上野寛永寺本坊の跡地に博物館の建設を許可し、大久保の指図で総工費 10 万円、展示館設計コンドルと決定した。しかし大久保の死と共に工事が中断したため、町田は工事再開のために岩倉具視と大隈重信に接触し、予算獲得のために、建設続行に反対する内務省や追加予算に消極的な大蔵省に対して「皇室」を持ち出すこととした。というのも明治初年の皇室資産は 10 万円と少なくこのままいけば憲法制定後には「皇室」の弱体化が目の前に迫っていたのである。皇室の経済的にみじめな状態を見てきた岩倉具視はこの機会に「完成後は皇室資産とする」ことで工事を再開させようと大隈重信に迫ったのである。

こうしたさまざまな妨害を経て 1882 年（明治 15）3 月 20 日、上野に「博物館」が開館した。初代の博物館館長は、農商務省博物局長の町田久成が就任し、開館式には明治天皇も行幸し、式典には皇族や外国使臣、政府上層部、設計者コンドル、関係者多数が参列した。この時館が保有していた資料は天産 71,362 点、農業 4960 点、工芸 13,830 点、芸術 1900 点、史伝 11,619 点の、合わせて 103,671 点である。このうち現在国宝の「普賢菩薩像」、天平勝宝八年の法隆寺献物帳などがあり、本阿弥光悦の舟橋蒔絵硯箱、尾形光琳の八橋蒔絵硯箱、等が含まれており、明治五年の壬申検査で調査されその後皇室に献上された三百数十点の法隆寺の宝物も博物館の展示資料に組み込まれた。また埋蔵物として扱われた考古学関係の出土物の中には、熊本県菊水町の江田船山古墳から出土した五世紀の鉄刀や冠帽など豪華な副葬品や壬申の乱で天武天皇を助けて武勲のあった文禰麻呂（ふみのねまろ）の墳墓から出土した慶雲四年（707）製作の墓誌とガラスの骨蔵器等も現在国宝である。図書館はできなかったが、町田の構想した「図書館を併設する一大綜合博物館に近づけるための工夫として、歴史資料と図書のために広いスペースをさいた[102]。

開館から七カ月後、彼は農商務少輔品川弥二郎により突然解任された。皇室博物館建設という町田と政府との伏線を理解する余地もなく、過去のいわれの

[102] 関秀夫 2005『博物館の誕生―町田久成人と東京帝室博物館―』岩波新書 953 p.158-159

ない確執による町田への反撃であり町田久成 45 歳、度重なる無念の幕引きであった。このあと東京上野の博物館は、1889 年帝国博物館と改称され 1900 年（明治 33）東京帝室博物館として皇室に献上された。この事業構想はこのあと九鬼、浜尾、岡倉と引き継がれることになる。岡倉は 1882 年頃九鬼隆一の配下となり 1890 年文部省官僚として東京美術学校校長に就任し帝国博物館の理事兼部長を引き継いだ。1893 年 5 月開催のシカゴ万国博覧会に向けて室内装飾や展示物選考の準備にかかり、町田が構想した「博物館」の所蔵物を日本館に展示し、また学生の美術教育の一環として博物館の所蔵品の模写模倣、再現など鳳凰殿の室内展示に十分生かせたのである。岡倉の美術プロデューサーとしての才能が新たに芽吹き、日本らしさを極めた展示により西洋諸国が集まる万国博覧会で東洋文明を引き継ぐ日本の威信はこのような背景があったのである。

第 2 項　ボストンからの来訪者：モース、フェノロサ、ビゲロー

政府が博物館構想により日本の伝統文化財の保存の場を模索しているのと同時期、教育の場では東京大学にアメリカのボストン市からハーヴァード大学研究助手モースが外国人教師として来日し、彼は膨大な日本美術の蒐集を始める。その背景にはボストン美術館の存在があった。この頃アメリカの大都市は、人口の多さに加えて博物館とオーケストラを持つことが条件であったことからボストン市民はボストン美術館の充実をめざし、日本や中国に注目していた。モースは 1877 年 6 月に来日し 1878 年 8 月アーネスト・フェノロサが東京大学のお雇い外国人教師として新婦を伴い来日した。彼らは南北戦争後 10 年を経て、ボストンの知識人として日本伝統文化と国家経済に関心を持って来日し、優秀な学生通訳の岡倉覚三を同伴して蒐集に没頭していた。

ドロシー・ウエイマンは『モース伝』[103]の中でモース、フェノロサ、ビゲローの古美術蒐集旅行の様子について、こう伝える。

「夜になると三人はいつも宿の蝋燭を灯し、半透明の障子を閉めまわし

[103] ドロシー・ウエイマン著、蜷川親正訳、『モース伝』中央公論美術出版

て柔らかい畳の上に寝そべり、お互いにその日の収穫を見せ合ったものであった。通訳の岡倉は、英語の力をつけようと黙って耳を傾けていた。ビゲローは大小の名刀を握っていたかもしれない。フェノロサは掛物、モースは茶瓶か茶碗だった。ある夜、モースは『こうしてわれわれが買っているような日本の立派な美術品がどんどん市場に出回っている。まるで隠れた傷口から日本の生血が流れ出るようなものだ。日本人は自分たちの美い宝を国外に流出させていることがいかに悲しいことがわかっていない』とモースは答えた。その言葉は、蔭に坐っていた若い日本人の心にぐさりと突き刺さった。その瞬間、岡倉は一つの使命に目覚めたのであった」[104]

ドロシーの描写の真実性は別にしても、彼らがこのような状況の中で美術品を蒐集し、ボストンに運んだのである。

（エドワード・S・モース）

エドワード・S・モース[105]は、アメリカのメーン州ポートランド出身でセーラムに住む腕足類を研究する生物学者であった。彼は 1877 年 6 月 17 日日本を訪れ、19 日の朝東京に向かう汽車の車窓から、日本の考古学の始まりといわれる大森貝塚を発見した.

この発掘は日本で最初に行われた本格的な学術調査となり、「縄文土器」の名はこの時初め使われた言葉である。この発掘調査報告は東京帝国大学理学部から出版されたもので、東京大学にとって初めての学術出版物となり、報告書は大英博物館を始め世界の各地の関係機関に知らされた。モースは東京大学から物理学と政治学の教授の推薦を依頼され、そこで彼が推薦したのがフェノロサであった。

---

[104] 堀田勤吾著, 2001,『名品流転』日本放送協会 p.84

[105] Edward Sylvester Morse （1836.6.18-1925.12.20）

（アーネスト・F・フェノロサ）

アーネスト・フランシスコ・フェノロサ[106]は、ハーヴァード大学哲学科を首席で卒業し東京大学に着任した。彼はスペイン出身の父マニュエルとメアリー・シルスビーを両親として 1853 年にボストン近郊のセ―ラム市に誕生した。父親は軍楽隊の一員としてアメリカに渡りセ―ラムでヴァイオリンやピアノの教師として旧家に出入りしていたが、ピアノの弟子のひとりでセ―ラムの名門の子女メアリー・シルスビーと結婚しフェノロサが誕生した。翌年には弟ウイリアムがうまれ、彼らはセ―ラムでも裕福な階層の住む高級住宅街に住み、フェノロサはハッカー初等中学校からセ―ラムの高等学校、ハーヴァード大学というコースに進んだ。

ハーヴァード大学入学後、彼は哲学を専攻し 1874 年夏平均 98 点という完璧に近い成績で卒業するが、続いてさらにパーカー奨学金を受けて大学院で哲学を研究した。2 年間の大学院の課程を終えて彼はとりあえず神学部の大学院へ進む。この背景にはフェノロサがスペイン人の息子であったため、ボストンでは「プロテスタントでアングロサクソン系の白人」以外には厳しく、彼にとって教育界、学者への道は閉ざされていたのである。結婚についても同様で、高校時代の同級生のリジーとの結婚も当時の社会ではほとんど不可能であった。そこにモースが日本で最高の教育機関である東京大学の教授の職を依頼したため、高額の給料を約束されたフェノロサはリジーとの結婚が可能になった。

1878 年 7 月 20 日、フェノロサはセ―ラムから日本に向けてアメリカを後にし 8 月 9 日に横浜に到着した。翌 10 日に東京大学法理文学部と正式の契約をむすんだ。雇い期間は 1880 年まで 8 月 9 日までで東京大学との契約は 2 年であり、その後 2 年ごとに契約を更新し、東京大学には四期 8 年間、明治 19 年 8 月まで在勤している。フェノロサの哲学史はデカルトに始まり、スピノザ、ロック、

[106] Ernest Francisco Fenollosa（1853.2.18-1908.9.21）

ヒューム、ライプニッツを経てカント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルに至る近代哲学史の体系を論じ、現代における哲学の重要性に説き及んだ。講義の重点は、カント、ヘーゲルを中心とするドイツ観念論哲学と、ミルのイギリス功利論、スペンサーの進化論哲学との対比にあった[107]。

「契約書」によると、月給は金貨 300 円、母国に帰国する旅費 900 ドルが約束されていた。モースと同じくフェノロサの出身地セ―ラムは 19 世紀の中ごろまで中国との貿易ではアメリカの中心であり、ペリーの艦隊が日本を訪れる 50 年も前にセ―ラムの船が長崎に航海しこの船の船員が日本の土を踏んだ最初のアメリカ人となったといわれている。モースが館長を務めたセ―ラムのピーボディー博物館には、現在でも江戸時代の日本の物品が多く所蔵されている。彼の日本美術への関心は、フィラデルフィア万国博覧会に参加した日本に魅了されたことに始まる。

フィラデルフィア万国博覧会は、ボストン美術館の創立より 2 カ月前の 1876 年 5 月 10 日から 11 月 10 日迄建国の町フィラデルフィアで開催された。博覧会への参加国はイギリス、フランス、オランダ、ノルウェー等ヨーロッパの国々の他、ブラジル、中国（清）、日本である。ハーヴァード大学神学部の大学院に進学したばかりのフェノロサは弟とともに、開催期間の 9 月 26 日から一週間の間、時間をかけて見学している。四年前の 1873 年に開催されたウイーン万国博覧会における日本文化ブームに続き、フィラデルフィア万国博覧会会場で日本館の人気は尋常ではなく、日本会場に立てられた 2 件の日本式家屋を仕上げる大工、左官、植木職人手際のいい仕事ぶりに見物人が詰めかけ仕事が中断されるほどであったという。フェノロサは万国博見物の前後にハーヴァード大学神学部の大学院に通う傍らボストン美術師範学校にも籍をおいていたため、彼も日本文化に魅了されたであろう。フェノロサが東京大学の政治学の教授就任の話をモースから打診されたのはちょうどこの美術師範学校[108]在学中の 1877 年（明

[107] 山口静一、1982,『フェノロサ・上－日本文化の宣揚に捧げた一生』三省堂 p.55
[108] この学校は博覧会の翌年 1877 年 1 月 2 日に正式に開校し、その年に入学している.

治 10）8 月頃といわれており、日本への就職は彼にとって願ってもない申し入れであった。

モースは科学者の目で日本人の生活と社会を観察し膨大な日本各地の焼き物や陶器を蒐集し、ボストンに持ち帰った。彼の著作『日本の家とその周囲』[109]は当時の日本人社会を詳細に描きだしている。帰国後セーラムで科学アカデミー（現在のピーボディ・エセックス博物館）に 36 年間勤務し、彼は館長として 10 回を超える日本紹介を連続講演として二回行い、ボストンで日本ブームを起こした。帰国の際 105 個もの梱包にぎっしりと陶磁器を詰めて持ち帰ったといわれている。

モースが 1879 年 8 月に 2 年間の契約期間を終え、東京大理学部の教授を辞任して日本を発ちセーラムに帰郷した。翌年故郷のピーボディー科学アカデミーで多くの学者や有力者がモースの講義に興味を持って日本を訪れる中で、1882 年に来日したのが､ボストン美術館の有力理事の息子で医師のウイリアム・S・ビゲローである。彼は来日後、常にフェノロサ、岡倉らと行動を共にした。

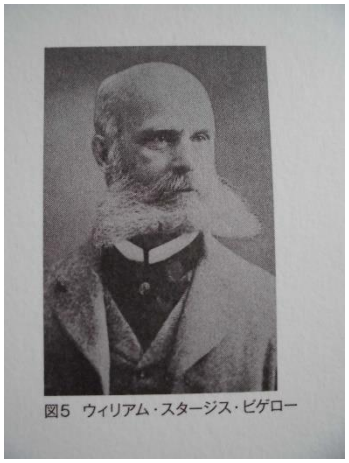


図5 ウィリアム・スタージス・ビゲロー

(ウイリアム・S・ビゲロー)

ウイリアム・スタージス・ビゲロー[110]は、内科医の祖父と外科医の父と同じくハーヴァード大学医学部出身の亀鑑の医者の家系で、父の希望で 1871 年にハーヴァード大学を卒業し 173 年には医学博士の学位を取ってヨーロッパへ旅立った。この頃から根付けなど日本美術に興味を持ち、パリでは美術商ビング達から日本美術を購入していたボストンの富裕な市民であった。1881 年の夏に彼はモースを、メルビルの『白鯨』[111]で知られるマサチューセッツ州ナンタケット沖のタクナ

109 ほかに『日本その日その日』がある.
110 William Sturgis Bigelow(1850.4.4-1926.10.6)
111 ハーマン・メルビルの作品. アメリカが当時油を採取するために頻繁に行っていた捕鯨船の水夫の物語.1851 刊.

ット島の避暑地に招き、一カ月間かけて日本行きの計画を練り、翌年 6 月には彼らは横浜に到着した。フェノロサの着任から四年ほど経ていたが、ビゲローは日本の古美術品を徹底して購入すると同時に、困窮する寺の援助にも手を差し伸べる。

（修験中のビゲロー）

モースとフェノロサと、ビゲローの三人がそろって日本に滞在していた期間は、1882 年 6 月から 11 月までの短期間であったが、この間彼らはそれぞれに日本美術コレクションの蒐集に奔走したのである。もちろん岡倉は通訳として同席していた。フェノロサ、ビゲロー、岡倉の関係は芸術ばかりでなく宗教でも結束していた。古美術研究に没頭していたフェノロサは 1880 年（明治 13）に初めて関西に旅し、京都や奈良に残る古社寺を訪れるうちに、日本美術を理解するために仏教研究を始めた。そこで西本願寺の僧侶赤松連城と知り合い、浄土真宗に傾倒しながら、岡倉覚三の影響で密教に引き込まれる。

フェノロサは仏教とヨーロッパの哲学の共通性に惹かれていた。中でも彼が主義としているヘーゲル派の、物はすべて「三個あい依りて成る」の理を説き、「たとえば神があれば魔がある。もしこの二つなら終始、相闘わざるを得ないが、第三位に前の二者を兼ねるものがあって、それがうまく作用している」と赤松に語ったところ、赤松は仏教にも同じような考え方があると答え、「仏教者は、有空中の三諦ということを説く。勢至[112]（菩薩）が知恵をつかさどり、観音が慈悲をつかさどる。この知恵と慈悲を兼有するのが阿弥陀であると説くのが、私達浄土真宗の常道であり、西洋の『三を以て成る』の理にあたるのではないか」と説いた。これを聞いたフェノロサが、東洋では、はるか昔からこの理が言われていたのかと感銘をうけた。

文部省で九鬼の上司である町田久成は、長年博物館の設立に力を尽くしてき

112 阿弥陀如来に脇侍する菩薩

たが、古美術の蒐集家としてフェノロサと相通じるところがあった。フェノロサ、ビゲロー、岡倉の三人がそろって天台密教に入信したのは町田久成の薦めによるものだった。薩摩藩の名門の出の町田は、維新後外務大丞（今日の局長にあたる）、大学大丞、文部大丞、内務大丞、内務大書記官、農務省大書記官となり、国立の博物館（現在の東京国立博物館）創設、万国博、内国勧業博覧会事業に参加し、元老院議員となった後、1885 年（明 18）突然辞職し仏門に入った。町田はフェノロサに当時高僧として名高かった滋賀県三井寺園城寺の桜井敬徳師を紹介して、敬徳師により天台密教に導かれフェノロサは生涯の師として仰ぐようになり 1885 年（明治 18）の秋、帰依を決意し,ビゲローとともに菩薩戒をうけた。戒を授けたのは、桜井敬徳である。岡倉はもともと仏教徒であったが、この時正式に戒律を守ることを誓って 9 月 15 日桜井敬徳から法号の「雪信」を授かった。その六日後 9 月 21 日に同じように戒律を受けて仏教信者になったフェノロサの法号は「諦信」、ビゲローは「月心」[113]である。彼ら 3 人は天台密教を通してさらに深く親交を深めていたのである。

ビゲローは東京に家を購入して住み、フェノロサとの連絡をかかさなかった[114]。後にボストンで岡倉の擁護者となるガードナー夫人も、モースの講演を聞いて 1883 年 6 月 18 日世界旅行の途上に夫と共に横浜に到着し、彼らはビゲローに迎えられている。この頃のアメリカにおける日本文化への理解は非常に低かったため、日本の美術品に興味を持つ知識人達にとってモースの講演は貴重な日本情報であった。1889 年にビゲローは帰米し、翌年 8 月には岡倉と共に欧米視察旅行から東京美術学校建設にいたるまで協力を惜しまなかったフェノロサも、政府との契約更新がかなえられず無念のうちに帰国する。1890 年岡倉は初代校長浜尾新に続いて第二代目の東京美術学校校長に就任した。

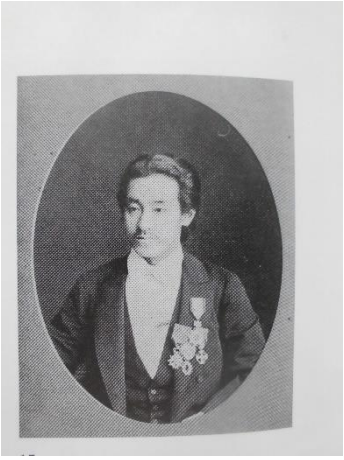
---

113 久我なつみ,1999,『フェノロサと魔女の町』河出書房新社 p.100
114 堀岡弥寿子『 岡倉天心―アジア文化宣揚の先駆者』

第４節　文部省官僚時代（1880-1898）の美術行政

1880 年卒業した岡倉は 10 月文部省御用掛・音楽取調掛となったが、この直後にアメリカから帰国した上司伊沢修二と意見を異にし、内記課に移転配属となり、そこで一生を通して公私ともにかかわりを持つ文部省少輔九鬼隆一の配下となった。

第１項 九鬼隆一と岡倉覚三



（1887 年頃の九鬼隆一）

1860 年の遣米使節団に同行しアメリカ文明に衝撃を受けて帰国した中のひとり福沢諭吉は、旺盛な好奇心から 2 年後の条約遵守延期を求めてヨーロッパへの使節団派遣にも参加し、ロンドン万国博覧会におけるジャポニスムの高まりを現地で体験した。明治維新後の 1868 年に塾を慶応義塾に改名し、教育家として人材を養成していたが、その中に後の文部省少補九鬼隆一が頭角を現していた

九鬼隆一は三田藩の重臣・星崎貞幹の次男として 1850 年摂津三田藩（現在の兵庫）に誕生し、八歳の時に十三代三田藩主・隆義の推薦で三田藩九鬼家の分家、綾部藩家老の九鬼隆周の養子となり家督を継いだ。幸運にも福沢諭吉の口利きで 1871 年（明治４）慶応義塾に入学を果たし翌年文部省に出仕した。

岡倉は東京大学の学生の頃から正阿弥という茶の師匠に教えを受け、また官僚の友人今泉雄作から茶道の知識を深めていたが、文部省入省後は九鬼隆一の傘下で茶に親しむことになる。九鬼は、千利休の子孫の裏千家13代円能斉（1872-1924）と関係が深く、京都にある裏千家茶道の円能斉宗匠に紹介された後、本格的な茶事に招かれることが多くなり茶禅一味を提唱していた[115]。

---

115 茶道と茶の湯の違いについて、京都大学「心茶会」の倉澤行洋教授は、「茶の湯」とは「茶を入れたり飲んだりに関わる事・物・人をみんなひっくるめて『茶の湯という言葉を使うということ」であり「茶道」とは、ただの茶の湯ではなくて何か精神性がこも

九鬼隆一は、裏千家十三代宗匠円能斉夫人・綱子との関係が深い。九鬼と綱子は共に摂津三田藩出身であり、隆一は三田藩の重臣・星崎家にうまれ、八歳の時に十三代三田藩主・隆義の推薦で三田藩主九鬼家の分家、綾部藩家老・九鬼隆周の養子となった。綱子夫人の母は 11 代三田藩主九鬼隆徳（たかのり）の姫お岩の方の娘で、父は三田藩筆頭家老九鬼兵庫の長男西貢（にし・みつぐ）であり、2 歳まで三田に住み 18 歳で裏千家 13 代円能斉に嫁いだ。綱子夫人の父の姉さつが、隆一の実兄・星崎琢磨に嫁いでいることから、円能斉夫人綱子と、隆一は親戚関係となる。このような関係で九鬼は茶道に関して深い知識を備えていた。九鬼は古社寺監査や博覧会の用務などで入洛するたびに、円能斉を旅館「柊屋（ひいらぎや)」に招き、あるいは今日庵を訪れて茶を談じ、茶味に親しんでいたのである。[116]

当時の官僚の教養の一つとして茶は身近なものであり、茶禅一味に心酔し、茶事を通した修行の場として訪問しあう機会をよく持っていたのであるが、このような親密な交流が始まったのは、隆一が明治 20 年（1887）にアメリカより帰国した後の頃であり、岡倉もちょうど欧米視察旅行から帰国した前後の、最も九鬼と岡倉の関係が進展する時期である。岡倉を連れて京都や奈良方面に調査に訪れた際には、京都の千家家元の茶会に招かれて、岡倉も一通りは心得ていたものの、茶禅一味に惹かれ茶事を通して茶道の真髄を一層深めることとなった。

当時彼らの周辺では日常的に茶が語られていたのであろう。九鬼隆一は著『茶徳談片』の中で「茶の湯は心が第一であり形は心に調和して趣を表すものであり、慣習を気にして規則に縛られるよりも、まず心を主として行うことであり、さらに茶事の効力は大変なもので、その茶徳により世道を高め、人心を温厚にさせ社会の百弊を正す多くの力となる」とまで茶道を昇華している。

明治 44 年(1911)には、東京に出張した円能斉が九鬼男爵家を訪れ、円能斉の長男政之輔に「淡々斉」[117]の号を贈っていることから、両家のつながりは深く岡

っている」と定義する。(『茶の湯文化学会　十七号』)

116 茶道誌『茶道月報』

117 裏千家第 14 代宗匠

倉の茶道具や歴史資料などの本格的知識は、九鬼と共に仕事で関西に入洛した際に充足されていたのである。政界にもひろく人脈を持つ福沢諭吉の人脈により九鬼は文部省入省後 30 部省少補（現在の事務官）に栄進し、文部行政への絶大な影響から「文部省の九鬼か、九鬼の文部省か」と言われるほど敏腕をふるった。九鬼は故郷が京都に近いこともあって幼いころから文化芸術への関心が高く、少年から青年期に体験した明治初年の廃仏毀釈運動の悲惨さは、後に深く美術行政に関わりを持つきっかけとなった。この頃まだ古社寺を保護する分野に行政の介入がされておらず、短期間のうちに九鬼はこの分野の権威となっていった。1938 年頃、円能斉の催した茶事に岡倉のあとを継いだボストン美術館中国・日本部長のデンマン・ロスが招かれている。岡倉の死後も彼の縁でボストンからも客が訪れていたのである。

岡倉と九鬼が文部省で両輪のごとく動き出す中で、東京大学の前身である開成校の時代から校長として岡倉を擁護してきたのが、浜尾新である。東京美術学校の初代校長であり岡倉の文部省入省後は、上司として終生岡倉を庇護した人物である。彼は三田藩に近い但馬豊岡藩出身で九鬼隆一より一歳年上であるが、温和な性格で九鬼とはウマが合い、長く文部行政を支えた。浜尾は九鬼とともに岡倉を配下におき文部省内で一派を形成した。1886 年に岡倉がフェノロサとともに政府の命で欧米視察旅行に出張中も、浜尾はヨーロッパに滞在中で岡倉達と共に美術と国家の構想を練っていたのである。その頃九鬼は駐米特命全権公使としてアメリカにいて、世界的視野で日本の美術行政を思索していた。その後九鬼夫人と岡倉との関係が取りざたされる中で、九鬼隆一は岡倉の死去まで交流を続け、浜尾新も岡倉への追悼文を残している。

（アメリカでの九鬼初子夫人）

第 2 項　欧米視察旅行

1886 年 2 月図画取調掛主幹となり、同年 10 月 2 日文部、宮内両省の命で、美術取調委員として岡倉はフェノロサと共に約 1 年間の欧米視察旅行に出発した。彼らは、ボストンの友人ビゲロー、ジョン・ラファージ、ヘンリー・アダムスらと共に横浜を出発し、サンフランシスコ、ニューヨークを経て、1897 年 1 月ヨーロッパに渡り、フランス、スイス、ドイツ、イタリア、スペイン、イギリス等を視察し、同 10 月 11 日に帰国した。視察項目は美術学校、美術学会、美術博物館、公設美術博覧会、工芸美術の改良、装飾術における日本美術の需要、美術品の模造、欧州美術史などである。二人にとってヨーロッパは初めての土地であり、彼らは美術学校のために多くの参考図書や写真を購入し、種々の施設を充分見て回っている。帰国一週間前の 10 月 4 日に東京美術学校が設置され、1889 年（明治 22）2 月 1 日東京美術学校が開校した。視察旅行ではボストンにも立ち寄りフェノロサは故郷のセ―ラムで日本での活躍を報じられている。岡倉はドイツ・フランス・イギリスの三国がそれぞれの国の特徴を維持していることを視察し、異文化としての独自性を打ち立てるため National Individuality が一国の統一の大原案であるとアメリカに滞在中の上司九鬼隆一宛に手紙で強く語っている。この時期大陸での取調委員長は教育視察のため渡欧中の浜尾新であった。芸術教育視察と並行してウイーン滞在中、岡倉は浜尾新に同行して伊藤博文の憲法起草に助力したウイーン大学教授ローレンツ・フォン・シュタイン（1815-90）と毎夜面会し、この中で国家における美術の役割を National Individuality として確信を持ったのである。欧米視察旅行の最後にヨーロッパからアメリカ回りで帰国する途中、ワシントンで特命全権大使を務めていた九鬼隆一を訪問し、体調のおもわしくない夫人初子を伴い 10 月約 1 年ぶりに帰国した。岡倉はここで初めて九鬼夫人と出会う。

日本で成功したフェノロサがセーラムに凱旋する時、岡倉はボストン美術館を実際に視察したのではないか。1887 年頃までに価値ある美術品はほとんど持ち出されていてその渦中にいたのがボストン美術館の有力理事の息子のビゲロ

一達であった。夥しい数の美術品を所蔵する場所としてボストン美術館は最適であり、実際フェノロサは 1890 年には東洋部のキュレーターとして着任している。

この視察旅行で個人的に彼はニューヨーク在住のギルダー夫妻と親交を結んだ。リチャード・W・ギルダー[118]は、ニューヨークにあるセンチュリー社の雑誌編集長をつとめていた人物で、岡倉は欧米視察旅行中アメリカで夫妻と知り合い終生交流を続け、後年『日本の覚醒』はセンチュリー社から出版されている。この旅行で欧米の藝術施設の概要を把握し、各国の要人との面会の機会を得て西洋諸国の現状を知るとともに、さらにアメリカの出版界との人脈を作りあげたのである。

岡倉は帰国後フェノロサと共に帰朝報告講演を行い、東京美術学校の草案を描いた。1889 年 2 月 11 日に憲法が発布され近代国家体制が完成すると、内外的に美術に対して近代国家「日本」の文化表象としての役割が求められるようになる。同年開校となった東京美術学校の初代校長浜尾新に代わり 1890 年東京美術学校校長に就任し、同時に帝国博物館（宮内省）の理事兼美術部長となった。

第 3 項　東京美術学校校長就任

岡倉はどのようにして National Individuality を行ったのか？

1889 年東京帝国博物館理事兼部長、1890 年に東京美術学校校長と続けて美術界の中枢に着任した岡倉は、東京美術学校の美術行政の中で、教授の選出は廃藩置県で武士のお抱え絵師から没落した狩野派の絵師や、職人といわれる熟練工[119]をも視野に入れて分野を問わず力量のある優秀な教授を採用し伝統を引き継いだ。人材の育成には、政府が東京に開校した最初の官立美術学校であるため、日本中から優秀な学生を選抜し、伝統的日本美術の教育を教科として履修させ、伝統として受け継がれた日本美術を中心に指導することを徹底した。製作につ

---

118 Richard Watson Gilder (1844-1909)
119 木彫の高村光雲

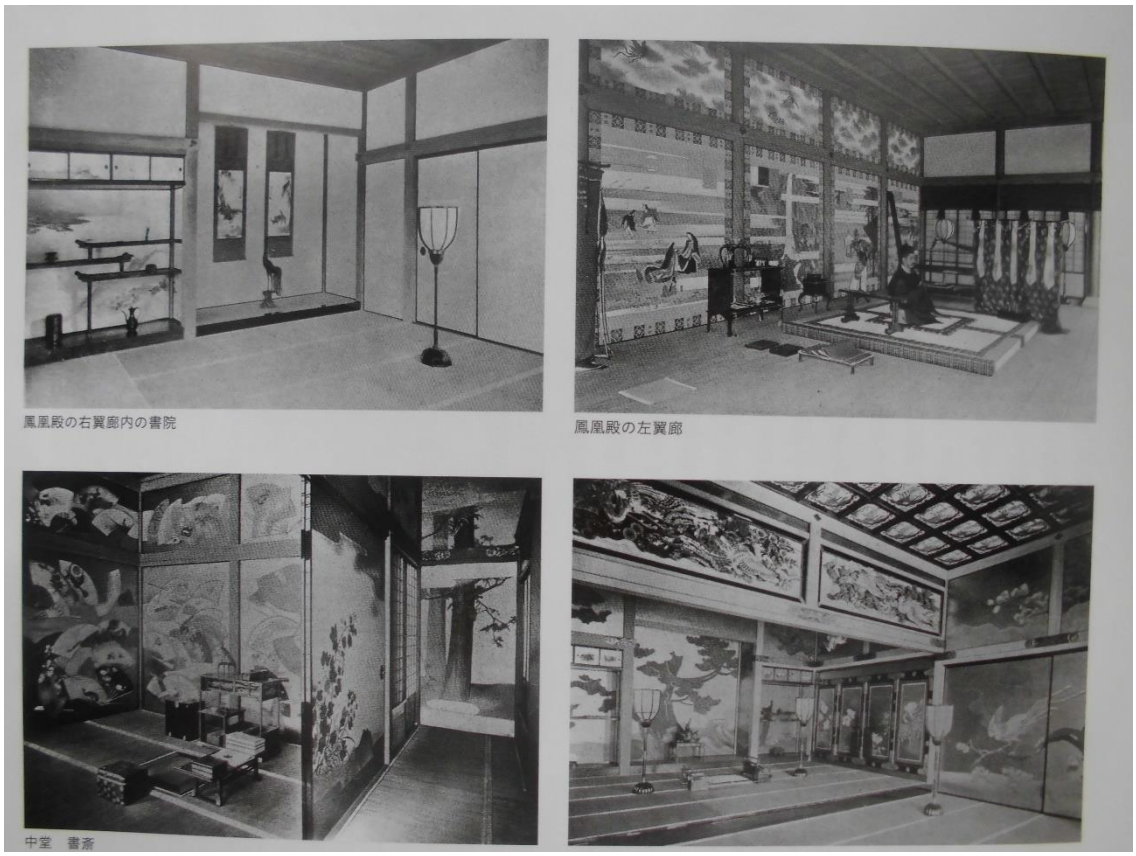
いては、歴史的資料を所蔵する東京帝国博物館と連携し、資料から模写・模刻事業をはじめ、上野の「西郷隆盛」（高村光雲）人物像や「東大寺執金剛神」（竹内久一）を模刻して帝国博物館に収めることで、教師と学生の実力を高めるとともに専門分野を拡張して、National Individuality として成り立つ美術を西洋画達の反対を受けながら急速に定着させていった。

日本が世界に通用する国家として認められるには、ジャポニズムにみられる日本人の感性に西洋が持った驚きと尊敬の念が是非とも必要であった。その意味で西洋の影響を受けない過去の伝統的な日本画を学びとることが最短の方法であったからである。一方で西洋に認められる現代の（明治時代の）日本美術の製作が急がれていた。岡倉は弟子に現代絵画を模索させ、朦朧体と批判された新絵画はお化け絵などと美術界から誹謗されながら、弟子の菱田春草が独自の手法で完成させた手法で高い評価を得ていた。偏見にとらわれない実力ある教授の採用と画学生の参加による人材育成教育、そしてその成果を発表する国際場としての万国博覧会というこの画期的な新システムを岡倉は美術学校に作り上げ、東京美術学校校長、東京帝国博物館理事兼部長の実権を最大限に生かして日本近代美術界を牽引した。さらに旧式封建国家を否定し近代西洋化を肯定する新社会の中で、西洋美術を求める学生や教授の反発を受けながら、教授達への意識改革のために奈良朝の制服を着用させるまでこだわっている。岡倉の示した教育方針は、1898 年の校長解任時はほとんど完成に至っていたのである。

第 4 項　シカゴ万国博覧会への参画

政府がシカゴ博覧会への参画決定後、1892 年 3 月には政府出品物「鳳凰殿」の室内装飾を東京美術学校で引き受け制作に着手し、9 月にはほぼ完成し関係者に公開した。評議委員となった岡倉は、日本が出品する美術品を工芸品ではなく、美術品として認めるようアメリカのシカゴの事務局に請求することを政府に提案し容認された。これ以後ようやく日本作品は美術品として欧米に認められたのである。

シカゴ万国博覧会は 1893 年 5 月 1 日から 10 月 30 日までの期間、アメリカイリノイ州シカゴ郊外のミシガン湖畔で総計 2,752 万人の観客を集めて開催された。シカゴ万国博覧会で初めて日本美術が「美術館」に展示されことにより、1886 年の欧米視察旅行で岡倉の主張した美術による国家の独自性―National Individuality―を、岡倉は東京美術学校の校長として具体的にこの万博で表現したのである。日本館「鳳凰殿」は、開校間もない東京美術学校校長の岡倉覚三に一任され、彼は準備のために政府出品の「鳳凰殿」の英文解説 *THE HO-O-DEN(Phoenix-Hall),AnIllustrated Description of World's Columbian Exposition, Jackson Park, Chicago* を作成し、東京美術学校が室内装飾、帝国博物館が美術・調度品を提供した。岡倉は 1892 年秋に来日したシカゴ万博の



（東京美術学校・帝国博物館が行った鳳凰殿（の内装）1893.5）

準備委員ガワード氏を、今泉雄作らと図って盃流しの風流で豪華な宴を隅田

川で行い元禄時代の豪商紀伊国屋文左衛門を気取ってもてなしている[120]。彼が校長として行った美術行政は、日本伝統絵画に National Individuality を求め、西洋画を退け日本の古典作品による創作を重視し、西洋のもとめる美術製作では無く、受けつがれてきた伝統技術を学生に根付かせることを最重要課題において美術を行った。この結果彼の美術行政は、シカゴ万国博覧会の「鳳凰殿」の建築、内装で実を結んだのである。1893 年の 5 月開催の期日に日本人のみで完成に間に合わせ、岡倉は美術プロデューサーという自身の新しい分野を切り開いたのである。彼はこの成功で美術学校校長から一歩飛躍した。

第 5 項　中国視察旅行と「生涯の予定表」

（中国旅行行程）

1893 年 7 月に第一回東京美術学校の卒業生を送り出した数日後、岡倉は宮内省の帝国博物館の命を受け、清との戦争前夜不穏な中国奥地に美術調査に弟子の早崎梗吉を伴って中国へ入国した。岡倉にとって始めての中国であり、日清戦争直前の入国は危険を伴ったが、早崎梗吉らと共にシナ服にあらため辮髪をつけて清国人に変装し中国奥地まで調査に入った。北京に着くまで惨憺たる 25 日間の旅をへて、8 月 25 日、開封を目指して南下し 9 月 9 日に黄河をわたり、その後 10 日して龍門の大石窟にぶつかった。その近く洛陽の名刹白馬寺で岡倉は、「菩薩坐像」を発見したのである。天心は狂喜し我を忘れて見とれたという。帰国後「支那の美術」にこの状況を報告している。中国に残った早崎梗吉[121]は石仏の発掘をそれ以後写真で岡倉に報告していたが、石仏はす

---

120 色川、1995『岡倉天心』中央公論社 p.26

121 早崎梗吉：岡倉の縁者で東京美術学校の教え子。岡倉と共に 1893 年中国へ調査に入り龍門の石窟に遭遇した。1903~06 まで三原県（現在の西安区）の三つの学校で教鞭をとる。1906～12 まで中国美術の

でに流出してしまった後であった。岡倉はこの時東洋人の芸術性とその表現技術の極致に接し感動したのである。その後内地を巡遊し約 6 ヶ月後の 12 月 7 日に帰朝した。12 月の末に帰国するまでの長期間、彼らは奥地にまで入り調査を続けていった。帰国後の 1894 年初頭、岡倉は「生涯の予定表」を書き「40 歳で九鬼内閣の文相」と政治への興味を見せる。中国視察旅行の意図は美術視察だけではなかったのである。1876 年に開国した朝鮮の内情不安情勢は、清国と日本との関係を悪化させ東学党の乱をきっかけに 1894 年 6 月、日本は朝鮮に出兵し清軍と 7 月戦闘を開始して 8 月 2 日に宣戦布告した。日本の勝利後の 1895 年 4 月中国と講和条約を締結したが、そこにドイツ、フランス、ロシアの三国が干渉を加え遼東半島を清国に返還させた。その後ロシアはその後も満州に居座り南下の危機に見舞われたため、1895 年以降日本政府はロシアを仮想敵国として警戒を強める。この時期岡倉の身辺には政財界との茶を通した関係が始まる。西洋近代化が進む時代に事業に成功し、財力を蓄えた政財界人の中から伝統的な日本美術の保存への意識が高まり財界人との茶道を通した横につながる社会が現れ始める。明治・大正・昭和前期の政財界の大物の益田考（鈍翁）、横浜屈指の生糸貿易商の原富太郎（三渓）や、三井銀行の高橋義雄（箒庵）、元老政治家井上馨（世外）、大実業家の朝吹英二（柴庵）、日本麦酒社長の馬越恭平（化生）、ら財界巨人の茶人達数寄者である。流出する国宝級の美術品の散逸に歯止めをかけるように、特に原は岡倉の日本美術院創立や新進画家の作品の購入、岡倉がアメリカを往復する中で日本での強力な後援者の一人として全面的な擁護者となり自らの鑑識により岡倉の弟子たちの作品を購入することも多かった。

（龍門の石窟の部分）

収集を委任していたため、資料を岡倉に送り続けていた。

おわりに

岡倉が卒業論文で書き上げた『国家論』と『美術論』は、彼の生涯にわたるテーマとなる。国家と芸術の関係は、日露戦争を背景にアメリカへの渡航でさらに密接に関連する。日清・日露戦争の勝利で西洋列強と弱小国の関係は変化し、西洋美術界のジャポニズムによる日本美術へのあこがれは、唯一日本が欧米に誇ることができる分野であった。岡倉の前半生は、急速に日本の近代化を推し進める中で、日本独自の特徴を主張できる美術行政を行うことを目的として邁進するはずであったが、政治外交の影響はいやがうえにも彼を政治の世界に向かわせる。彼の国際的な感性は、美術行政だけではなく政治外交に生かされるべき方向に対応する柔軟性を持ち合わせていたのである。中国視察旅行から帰国後、岡倉は日清戦争後の外交問題に揺れる日本の政治に傾き始める。彼自身の中で茶文化を共通とする横社会と、厳しい上下の縦社会が融合し、急速に政財界に結束されつつあった。1893 年の日清戦争前夜の中国視察旅行は、まさに彼の輝かしい美術界の寵児としての活躍から、国家存亡の危機に直面する政界への精神的な変化の岐路となったのである。

第 3 章　アメリカへのターニングポイント―空白の 6 年

はじめに

1898 年(明治 31)35 歳で東京美術学校を罷免されてから 1904 年 2 月にアメリカへ渡航するまでの 6 年間は、岡倉の放浪の時期といえる。彼の後半生ボストンでの生活にこの期間は重要な意味を持つ。校長として日本美術界の頂点から一転､官僚から下野し一般人として過ごす期間であった｡この間にインドに 1901 年から 2 年まで遊学し､『東洋の理想』をロンドンから出版している。また東京美術学校を辞任直後、多くの弟子や教授仲間が岡倉を支持して辞任を表明したため、彼は「日本美術院」を計画するが、資金のめどがつかずビゲローからの多額の寄付により完成に至った。この章では謎とされる校長罷免後の行方を追うことで､解任理由が岡倉の側にあるのか､それとも政府からの新たな使命を受けて､この解任を受け入れたのか､何故このような形で解任されたのかを明らかにしていく。

第 1 節　東京美術学校校長罷免の謎

1898 年 3 月 21 日「築地警醒会」の名で、岡倉を中傷する怪文書が配布された。西園寺文相[122] 率いる文部省は即刻校長更迭内定の措置をとり、同月 29 日東京美術学校校長の罷免を命じた。これに先立つ 3 月 11 日岡倉は、九鬼の動きに反応して帝国博物館理事兼美術部長辞職願を提出し 22 日には帝国博物館理事兼美術部長が依頼免官となった。彼は 26 日美術学校職員に告別演説を行い、橋本雅邦ら 31 名は連袂辞職の盟約書を作成し岡倉と行動を共にすることを明らかにする。彼は連袂辞職の中止を説得し人数は 17 人に減ったものの連袂辞職は決行された。岡倉の解雇により美術界での政府と連携した公的活動は終止符がう

---

[122] 時の文相. 岡倉が 1984 年（明治 27）に美術学校拡張計画に着手し自民党を動かして計画、実行するために、拡張構想「美術教育施設に付意見」を 85 年に作成し議会に提出した際に、法案審議の過程で東京美術学校を日本美術も西洋美術も同等に奨励する方針の下に拡張する内容に修正されたのは、西園寺公望の介入があったとされ、日本固有美術の発展を旨とする岡倉の路線と相反する決議が導き出された.『岡倉天心―芸術の歩み―』東京藝術大学岡倉天心実行委員会,2007, p.81

たれた。東京美術学校校長と帝国博物館理事兼美術部長の両職は岡倉が欧米視察旅行から帰国後の 1889 年 2 月に東京美術学校が開校し、続いて 5 月には東京博物館は帝国博物館と改称された時に同館理事、美術部長を命ぜられ、1890 年 10 月 7 日には東京美術学校初代校長の浜尾新から引き継ぎ第二代目の校長職を得たものである。1886 年の欧米視察旅行から帰国後の美術学校設立に邁進し、1893 年のシカゴ万国博会への美術協力を成功させ、積極的に美術行政を行っていた矢先の非職解雇であった。

第 1 項　解任の予兆(1896 年)

突然解任される 2 年前の 1896 年、岡倉の周辺に解任への予兆と思われる変化がおきていた。第一に、この年 5 月東京美術学校の西洋画科と図案科が設置され西洋画科の教授に岡倉は黒田清輝を就任させ、それまでの西洋画派との対立を一応収めた。第二に、九鬼隆一と共に「古社寺保存会」設立したことであり、翌年「古社寺保存法」として制定された。文部省に入省して以来、九鬼と岡倉は関西地方への調査旅行を何度も行い、現状の危機的状況を踏まえて早期の文化財保護を求めていた結果である。この会の委員に選出されたことで、岡倉は公的に意見を発表できる場を持ち、生涯にわたり日本の伝統美術にかかわることになる。たとえ美術学校校長の地位を退いても日本美術界での岡倉の存在は維持されることになったのである。そして第三に 7 月フェノロサが新妻とハネムーンの途中に日本での就職探しを目的に日本に再来日した。これはボストン美術館東洋部のキュレーターの席が空白であることを意味し、岡倉に次のステップとしてのアメリカ渡航への可能性を確信させた。

まず第一点目の黒田清輝の西洋画科教授就任について、岡倉は以前から問題とされてきた西洋画派との対立の解消に乗り出し、フランスから帰国した黒田清輝を 5 月 11 日東京美術学校西洋画科の教授に指名した。両名は会談を何度も行い黒田との美術に対する共通点を見つける努力を岡倉は行っている。彼が日本画を美術行政の中心に据えたことで、日本画以外の西洋画派との対立は激し

さを増していたが、西洋画科の新設については、1887 年に欧米視察旅行から帰国した報告講演で、日本画の将来のために適切な方法を探してゆくべきと西洋画からの刺激の必要性を述べていたものであり、将来の美術教育に関する構想「美術教育施設二付意見」において、西洋画、西洋彫刻、西洋美術史の導入を明らかにし、西洋画を受け入れる体制をすでに公表していたのである。またこの頃は、校長に就任してから 6 年間を経てシカゴ万国博覧会への出品など伝統絵画の日本画を通して横山大観、下村観山、菱田春草、らの若い美術家の養成の成果を出し、新しい展望がみえてきた時期での西洋画科創設であった。

（黒田清輝　中段真中）

西洋画科教授に迎えられた黒田清輝[123]と岡倉との関係について、明治 29 年（1896）3 月京都に滞在中の黒田は 11 日および 17 日に手紙を岡倉から受け取り、急遽東京へ戻り 21 日に西洋画科増設の件について上野（東京美術学校）を訪問し、この年の春から秋にかけて黒田はほぼ週に一回の割合で美術学校や私宅で岡倉と会合し、7 月 6 日には美術館の油彩画も観に行きこれを含めて十数回の会合を行ったことがわかっている。また岡倉はパリ万国博覧会のための臨時博覧会事務局評議員に内閣より 1896 年（明治 29）に任命されていたため、2 月には黒田は岡倉とパリ万博の出品について話し合い、翌年までに少なくとも 7 回個人的な話し合いをし、3 月に入って 2 回面会したとされる[124]。これらのことから 1900 年のパリ万博の美術担当を任されていた岡倉は、黒田とその美術考に対して十分な意志の疎通を図り国際的視点からお互いを理解した上での黒田の教授就任であった。自ら積極的に接近しており、彼の中に急速な変化が感じられる。

[123] 人間としての形成期に 10 年間のフランス留学を体験している
[124] 高階絵里加、2000『異界の海』p.219

世間でいわれていたほど水と油の関係ではなかったのである。

ここで興味深いのは、美術に対する彼らの共通点が、明治 30 年（1897)、黒田が第二回白馬会展に出品した≪知感情≫に関している点である。高階によるとこの作品は三体の裸婦像がそれぞれ≪知感情≫の名の下に描かれているもので、この発想は黒田がフランス留学で感じ取った当時のフランス美術界に存在していた美感から発想されたものであった。第二回白馬会展終了直後の『時事新報』に掲載された談話によると、「当初、画科の三派なる理想、引證（印象の誤か)、写実の意を表さんとして筆をとりたるものにほかならず」という言葉から、黒田の≪知感情≫―Ideal・Impression・Real―は 19 世紀フランス絵画の大きな流れである Idealism・Impressionism・Realism にあたるが、当時のフランス美術をこのように三派にわけるやり方は必ずしも黒田だけの発想でなく、「仏国の美術の新運動」[125]には「仏国の美術界を見渡すに真実派（リアリズム)、理想派（アイデアリズム)、感動派（インプレッショニズム)」と始まり、少し先には「写実派のコールベー、感想派のマネー、モネー、デガ―、理想派のガスタフ・モロー、及びブーヴヰ・ド・シャヴァンヌ」という記述があり、翻訳はまだ一定しなかったようだが当時すでに Idealism・Impressionism・Realism という絵画の流派自体は、ある程度一般に知られていたようである。

ではなぜ作品の題名を≪知感情≫ではなく≪理想・印象・写実≫としなかったのか。これは全く黒田の独創ではなく、この作品が書かれる前にすでにこの≪知感情≫の組み合わせを、ノートに書き留めていた人物がいた（高階)。その人物が、当時東京美術学校校長であった岡倉覚三であり[126]、『泰西美術史ノート』後半のメモの一部におわりに近い頁に、はっきりと「知・感・情」が書かれ、その下に contemplation・realistic・ideal とある[127]。三行下には metaphysics・aesthetics・ethics, もう一行下に philosophy・art・religion での文字が見える。黒田の絵画のタイトル≪知感情≫の制作は明治 30 年に開始されたと思われ

---

125 明治 30 年 10 月の『世界之日本』20 号に掲載された評論

126 『異界の海』p.222

127 『岡倉天心全集　第八巻』平凡社、昭和 58 年 p.198

構想自体は遅くとも明治 29 年（1896）の冬には立てられていたと高階が予測するところから、タイトル≪知感情≫の発想は黒田の独創ではなく、岡倉を参考にしていたと考えられる。実際岡倉は後年、アメリカのボストン美術館東洋部に勤務している時にニューヨークから出版した『茶の本』の中で、‘contemplation・realistic・ideal ’‘metaphysics・aesthetics・ethics ’‘philosophy・art・religion’の思想を使い、19 世紀フランス絵画の流れを巧みに取り入れ日本文化との比較において、西洋の異文化理解が容易に進む工夫を行っている。

このように岡倉は西洋画科を新設するにあたり、西洋美術を日本に教科として取り入れるむずかしさを共に国際的視点を持つ黒田と確認し、互いに美術に関する考え方を共有した上で黒田こそ西洋画科の教授として東京美術学校で岡倉の考えを引き継いでいける人物と確信したのである。したがって岡倉と西洋絵画について気持ちを通じあわせた黒田清輝との関係からみて、吉田がいうように東京美術学校の欧化派による攻撃が岡倉の解任理由とは考えにくく、むしろ岡倉は日本画に加えて黒田の教授就任により、西洋画科との問題を一応おさめたのである。こういったことから、西洋画科新設は、岡倉の校長として責任を果たし美術学校での岡倉の役割が一応終焉したといえる。また明治政府がフェノロサを 1890 年に解雇し再登用しなかったことからも、外国人教師に頼った日本の近代化はほぼ終了した年でもあった。

さらに第二点目としてこの年 4 月、岡倉は上司である九鬼隆一と「古社寺保存会」を設立し、5 月古社寺保存委員を命ぜられ、翌年「古社寺保存法」が制定された。明治元年に神仏分離令が布告された後廃仏毀釈運動がおこり、1871 年日本最初の文化財保護制度である「太政官布告」が発令されてから 4 半世紀にわたる日本伝統美術の保護が、九鬼と岡倉の「古社寺保存会」設立から早々の翌年法律として制定され、これにより岡倉は美術界の頂点にいながら、改めて日本での美術界に生涯意見を述べる権利を得たのである。何故 1897 年にこの制定がされたのか。

岡倉が欧州視察旅行に出発する 1886 年の 3 月、博物館が農務省から宮内省に

移管された。これを契機に宮内省では伊藤博文総理大臣兼宮内大臣のもとで古美術保護推進策の検討がはじまり 4 月に国風美術教育の開始にあたって古美術研究が必要とみなされたため、岡倉が狩野芳崖やフェノロサと共に文部省から美術品取調の主張を命じられた。岡倉は調査記録として「奈良古社寺調査手帳」、芳崖は「奈良官游地取」を残している。フェノロサは 1886 年 8 月に東京大学の職務を解かれ、文部省、宮内省兼任として博物館関連事業にかかわることになった。6 月に調査から帰郷した岡倉は、再度関西（京都・大阪・滋賀・和歌山）の古社寺調査に出張し、「美術品保存に付意見」を宮内省図書頭井上毅に提出している（明治十九年の古美術調査）。この出張は当時岡倉が古美術保護行政の中心的位置にあったかを物語っている[128]。この後欧米視察旅行にフェノロサと共に出かけ、帰国から 1 年後の 1888 年の 5 月から 9 月にかけて、政府は今までにない大がかりな関西地方古美術調査を実施した（明治二十一年の古美術調査・臨時全国宝物取調局設置）。首班は宮内省図書取調頭九鬼隆一、文部省の浜尾新、東京美術学校幹事岡倉覚三、同行書記今泉雄作、同行雇フェノロサ達の他に多数の専門家や報道人、写真家が随行し、約四百三〇ヶ所、品目三六、二〇〇点を綿密に調査した。来日中のビゲローも調査に同行した。この時の岡倉は調査記録「近畿放物調査手帳」を残している。またこの調査を経て 9 月には、宮内省に臨時全国宝物取調局が設置され、九鬼が委員長に就任し、多くの役員の中で岡倉覚三が取調掛に任命され、古美術保護行政は制度的に大きく前進した。重ねて岡倉は 10 月 29 日付で博物館学芸員にも任命された。しかし「古社寺保存会」を上司九鬼隆一[129]と共に設立し委員に任命されるのは 10 年後の 1896 年であり、明治 19 年と 21 年と短い期間に集中して調査が完了していたのに何故 1896 年に再度浮上したのか。いずれにせよ岡倉はたとえ校長の地位を失い、アメリカへ拠点を移すことになっても、日本に帰国した時には、岡倉が前半生で築いた豊富な人脈を通して日本で活躍する場が保障されたのである。このことは 1913 年の死去する直前に

---

128 『芸大教育のの歩み　岡倉天心』p.23,p.27

129 くきりゅういち：（1852-1931）帝国博物館館長、古社寺保存会会長を歴任. 近代日本の最初の文部官僚で、最初の駐米特命全権公使.

最後の仕事として「法隆寺金堂壁画保存」について提案し病を押して建議案を作成したことからも、彼が終生日本伝統美術にかかわっていたこと思わせる。その後「古社寺保存法」は 1929 年（昭和 4）に「国宝保存法」となり 1950 年「文化財保護法」となった。その理由は法隆寺金堂壁画が 1949 年に失火により消滅したことが原因とされている。

そして第三点目、1896 年 7 月 7 日フェノロサが新夫人を伴って再来日したことはボストン美術館がフェノロサに代わる日本美術の専門家を必要としていることを意味した。1890 年東京美術学校雇い教師を契約切れで解任され帰米の途に就いたフェノロサは、彼のために設けられた MFA 東洋部のキュレーターとして日本美術コレクションの整理に携わっていたはずであった。フェノロサは東洋部の日本美術コレクションのカタログ作成途中秘書メアリー・マクニールと共に失踪し、また不倫が原因で前夫人との離婚訴訟で敗訴し莫大な慰謝料を支払う義務が生じたため、日本への就職を希望して約 3 カ月間京都に滞在したのである。前夫人との離婚裁判に敗訴したものの 1895 年 12 月にはニューヨークでメアリーと入籍し 1896 年 4 月に理事長に辞表を提出した後、未提出の日本コレクションの目録を持って行方不明になってしまった。いわゆるボストン・スキャンダルといわれるフェノロサへの疑惑である。彼の失踪は MFA にとって大きな痛手となり、東洋部の日本コレクションを維持管理する専門家を、緊急に募集しなければならない事態が発生した。しかし MFA は 1904 年迄日本美術の専門家のキュレーターをおいていない。彼は 1902 年にはビゲローに東洋部の職を打診し承認されている。つまり岡倉は 1902 年の段階でアメリカのボストン行きをほぼ決断していたことになる。1902 年に採用したキュレーターは、江戸時代の欄間を専門とするポール・チャルフィンであり、彼は岡倉が 1904 年 3 月にビゲローの推薦状を持って現れた時には、何も知らされておらず、岡倉の採用とともに解雇されており、岡倉がボストンに来るまでの仮のキュレーターであったのである。東京美術学校校長として革新的な美術教育を行い、日本美術界の頂点を極めていた岡倉はフェノロサに代わるまたとない日本コレクションの専門家で

あった。1896 年に彼はフェノロサの美術館辞職の事実を知り、アメリカへの渡航の可能性を検討し 1898 年の解任受け入れを決断したのではないか。

フェノロサの辞職後、ハネムーンでヨーロッパを訪問し日本にたち寄った京都での思い出[130]の中で、夫の日本での就職の期待が薄れつつある時期の岡倉の来訪をフェノロサがどれほど喜んだかを書き残している。メアリー夫人は 1896 年 9 月 22 日の「岡倉覚三を迎えて」の日記の中で、

> 「岡倉は遅れてきた。彼は遅刻の常習犯だ。六時半ごろようやく現れたが、陽気で熱意と真心にあふれていた。東京であった時よりずっと元気だった。…もっと真剣な話が始まった。アーネストは私達が将来の出版のための情報や写真の入手、日本の詩人、学者、芸術家達と交わり、古代の歴史と文学を学び、岡倉との親密な交際を永続させる、という明確な目的を持って日本に永住するとしたら、可否の可能性はどんなものか、はじめて問い詰めた。彼の答えは私達の予想よりはるかに楽観的で真心のこもったものだった。正しいやり方ではじめれば、以上のことはみな可能なはずだ、と彼はいった。岡倉は、内閣の崩壊[131]、保守的な薩長閥の転覆をアーネストに報じた。一つには大隈重信の実権掌握がある。これは美術運動全体にとっては新たな希望と刺激を意味する。喜んでアーネストの協力を求める新博物館が奈良や京都に開館、もっと近いところで、すでに建設された大きな煉瓦作りの京都大学は比較哲学の教授を求めており、アーネストは多分そのポストにつくことができよう、とも彼はいった。岡倉は一貫して私達に同情的で愛想がよかった」

この訪問での話題は、フェノロサが将来の出版のために資料を求めて日本に移住し、岡倉との親密な交際を永続させるという目的についての可能性について

---

130 村形明子編訳、2008、『フェノロサ夫人の日本日記―世界一周・京都へのハネムーン、1896 年』ミネルヴァ書房　p.179-180

131 明治 29 年（1896）8 月、第二次伊藤博文内閣辞職、同年 9 月 18 日第二次松方内閣が組閣される（外相に大隈重信が就任し、松隈内閣と呼ばれた）.

であった。岡倉は政治と美術の関係について話し、美術運動に関しては新たな希望と刺激が今求められており、フェノロサの活躍できる職が期待できることを述べたため、「オカクラは(夫にとって)殉教者であり、菩薩または英雄に等しい。彼以外は皆裏切り者だ」とメアリーは感じ、岡倉に好意的である。しかしこの時から 4 年後の 1900 年にもう一度来日したフェノロサは、日本永住をあきらめアメリカへ戻る決心をするのである。

久我なつみ[132]はこのころの岡倉の変身をこう指摘する。「ところが岡倉天心さえほどなくフェノロサを裏切ってしまうのである。東京美術学校が紛糾し行き場を失った岡倉は、逃げるようにアメリカへ渡り、フェノロサから仕入れた知識を武器に、フェノロサが追われたボストン美術館のポストを手に入れるのである。…当時は三十九歳。まさに失意の人からいかさま師へ変貌を遂げる境にあった」と岡倉への批判を強めている[133]。二人は岡倉に関して、何故評価がこれほど違うのか。メアリーの日記は 1896 年であり、久我は 1904 年の岡倉を示している。ちょうど彼が東京美術学校を非職される直前から、下野してアメリカへ発つまでの期間である。この間東京美術学校非職解雇、「日本美術院」創立、一年間のインド遊学、「東洋の理想」のロンドンからの出版があった。確かに岡倉はこの間に変化が見られるのである。日本の政治的理由がフェノロサの日本滞在を不可能にしたのであり、岡倉は 1898 年に下野するまで官僚として政治情勢を無視することはできなかったのである。特に注目すべきは第二次伊藤内閣の崩壊を報じていることである。かつてのフェノロサ夫妻と交流の深かった伊藤博文の第一次から第四次までの内閣組閣の期間における岡倉とフェノロサの行動は政府の対日露関係悪化と複雑に関係している。

1886 年から 87 年にかけて岡倉とフェノロサが政府から命を受けた欧米視察

---

[132] 久我なつみ,『フェノロサと魔女の町』河出書房新社 p.170

[133]『茶の本』(桶谷英昭訳)の中で、岡倉の「悲しいことだが、花との友誼にもかかわらず、われわれは獣性をあまり脱していないという事実を隠すことができない. 羊の皮を剝けばわれわれの内なる狼がたちまち牙をむくであろう. 人間は十で動物、二十歳で狂人、三十で失意の人、四十でいかさま師、五十で罪人といわれてきた」から引用している.

旅行にビゲローは個人として同行した。3 人は 19 世紀末のヨーロッパ美術界とアメリカ、日本美術との比較を通して国家と藝術を論じお互いの友情を深めている。ちょうど欧米視察旅行から帰国して東京に滞在していたビゲローが、セオドア・ルーズベルトについて紹介したことを詳細に金子の未公開の『自叙伝』の 1889 年 6 月 11 日に書き残している[134]。それによると、6 月 1 日、日本の美術と仏教を研究するために数年間東京に逗留し、アメリカ人のビゲロー博士がハーヴァード大学同窓の金子を来訪し、「君はアメリカ人に多くの友人をもっているが、もし面識がなければ、友人を一人紹介したい。彼の名はセオドア・ルーズベルトといい、今は世間に知られていないが、我々仲間では、ハーヴァード大学在学中から、彼は将来必ず大統領となる人であるといわれている。よってこの機会に知り合っておけば将来何らかの役に立つであろう」とビゲローは伝えていた。金子は当時伊藤枢密院議長の秘書であり、帝国議会の解説の準備のため、その頃発布されたばかりの明治憲法を基に、欧米諸国における議会制度について実地調査をしてくれるよう政府から命を受け、まさにこれより渡航の途に就こうとしていた矢先であった。当時ビゲローは、大森貝塚を発見して有名であったエドワード・S・モースやアーネスト・F・フェノロサと一緒に東京に来ていたが、おりしも金子の外遊任務が新聞に報ぜられたこともあって、ビゲローがたまたま 6 月 1 日、出立を目前にした金子のところへ訪ねてきて、友人であるセオドア・ルーズベルトについてアメリカの未来の大統領になる信頼できる人物であり、渡航の機会に彼と親交を結ぶことを希望する、と助言したのである。1904 年 2 月金子堅太郎は政府の使命を受けてアメリカへ入国するが、すでに 15 年前にビゲローは金子堅太郎に友人のセオドア・ルーズベルトの名前を将来の大統領候補として告げていたのであり、ビゲローの訪問は金子堅太郎から伊藤博文の耳に入ったに違いない。

フェノロサは 26 歳の時、折から来日していたアメリカ前大統領グラント将軍と日光を訪れた際に、初めて政府高官伊藤博文らと言葉を交わす機会を持った。

---

134 『日露戦争と金子堅太郎』p.42

その後の伊藤との交流は深まり、「1886 年に東京大学（この年帝国大学文科大学と改称）の授業期間中に出張先から宮内省の高官（総理大臣伊藤博文の兼任）に書信を送り、自分がすでに個人としての古美術蒐集を中止していること、それまでの蒐集品はすべてボストン美術館に展示の目的で前年すでに売却したことなど一身上の立場を釈明し、宮内省雇いとして文化財保護に全力を傾注したいと希望を述べた[135]」

その後政府に雇われ岡倉と共に欧米視察旅行にでかけ東京美術学校設立に協力している。伊藤博文の四度にわたる内閣組閣の時期は、岡倉とフェノロサによる欧米視察旅行（第一次伊藤内閣組閣期 1885.12-1888.4）、美術学校校長岡倉のシカゴ万博参加と中国視察旅行（第二次伊藤内閣組閣期 1892.8-1896.9）、そして彼のアメリカ渡航へのきっかけとなる東京美術学校校長解雇（第三次伊藤内閣組閣期 1898.1-1898.6）と伊藤の政治勢力下のもとに岡倉の転機が重なっている。1890 年、さらに第四次伊藤博文内閣組閣(1900.10-1901.6)の時期には、ルーズベルトが 1900 年に副大統領に当選し、1901 年 W.マッキンリー大統領が暗殺され、ついに同年 9 月には副大統領ルーズベルトが大統領に昇格した。

第 2 項　東京美術学校校長罷免

岡倉は 1898 年 3 月 29 日に東京美術学校校長を突然罷免された。

東京美術学校校長と帝国博物館理事兼部長の両職は、岡倉が欧米視察旅行から帰国後、フェノロサと共に準備に邁進、奮闘して 1889 年（明治 22）2 月に東京美術学校が開校し、5 月には東京博物館が帝国博物館と改称された時に同館理事、美術部長を命ぜられたものである、1890 年 10 月 7 日の東京美術学校校長就任後、校長として 1893 年のシカゴ万国博覧会には学生を動員して内装展示物に参加させ、成功に寄与するなど精力的に職務を果たしていた彼が、何故罷免という屈辱的な解雇となったのか。

岡倉の非職解雇直前に行われた九鬼隆一への制裁について、「文部省の九鬼か、

135　山口静一『フェノロサ上』p.288

九鬼の文部省か」といわれるほど権力を発揮した九鬼隆一は、彼に対する周囲の反発が 1898 年 3 月 16 日の帝国博物館総長の更迭問題となった際、総長の椅子に固執し博覧会副総裁を辞任することで帝国博物館総長の地位を固守した。
一方岡倉は九鬼の更迭の翌日 17 日に宮内大臣あてに帝国博物館理事兼美術部長の辞職願を提出し九鬼と行動を共にする意向をみせた。その 4 日後の 21 日、福地復一が女性スキャンダルと個人的怨恨で岡倉を誹謗中傷した怪文書を関係者に郵送し、内容は公開された。

翌日帝国博物館理事兼部長が依頼免官となり、25 日、岡倉は東京美術学校校長職の辞表を提出した。翌日美術職員に告別演説を行い、2 日後の 28 日岡倉は給与二千五百円の一級俸を受け、翌日 29 日、文部省から校長非職解雇を命ぜられた。16 日の九鬼の博物館総長更迭問題―17 日の岡倉の博物館理事兼美術部長の辞職提出―21 日の怪文書の公表―文部大臣西園寺公望による岡倉校長更迭内定―29 日の岡倉の校長辞任。ここまで半月間の動向は、政府と岡倉との連動が素早く、いかにも事前から決定していたかのようである。

第三次伊藤博文内閣の文部大臣西園寺公望は伊藤が最も信頼する側近であり、彼がこの時岡倉を解任したのには、伊藤の意見があったと思われる。西園寺公望は、盲腸炎悪化のためにわずか 3 か月で辞職しているが、その短期の就任の中での岡倉解雇であった。第三次伊藤内閣は 1898 年 1 月 12 日から同年 6 月 26 日までの短期間の内閣であり、この中でのおぞましい怪文書を郵送した人物が福地復一と断定でき、彼の一方的な岡倉誹謗とわかりながら、政府は怪文書について調査もせず岡倉の解雇を断行し、それに対し彼は即刻辞表を提出したのである。しかしこれで彼が公職から離れて自由に行動できることになったことも確かである。

西園寺は第二次伊藤内閣退陣後の 1896 年 11 月に渡仏し、ほぼ同じ時期に伊藤博文は英国ヴィクトリア女王即位 60 年祝典に参列する有栖川宮威仁親王に随行し、祝典終了後に個人の資格で英・仏・伊・墺各国有力政治家を訪問している。この期間に西園寺は伊藤とパリで落合い、97 年 9 月 5 日に伊藤が、10 月 5 日

に西園寺が帰国し、翌年の第三次伊藤内閣の文部大臣として入閣したのである。岡倉の解雇について何らかの話し合いが持たれたと考えられる。

岡倉はこの不当な措置に何故反論しなかったのか。岡倉はかつて文部省に入省した当初、専門学務局兼音楽取調掛勤務であったがアメリカから帰国したばかりの上司伊沢修二とそりが合わず、半年後には専門学務局勤務となり、2 カ月後には内記課兼務に移動となる等、血気盛んな行動をとっている。また美術教育における学生発布以来行われていた洋風図画（鉛筆画）教育の中心的指導者小山正太郎の「書は美術ならず」に対して「書は美術ならずの論を読む」で反論し、小山の理論的未熟さを指摘しその功利主義的開化論を批判し、美術の奨励は経済的観点からではなく文化の観点から考えるべきだと論破する等、納得のいかないものに対して徹底的に反論している。また後半生アメリカへの渡航後ラフカディオ・ハーン（1850-1904）の死去に接し、アメリカの新聞タイムズが彼の生涯について批判したことに対して、投稿した紙上で反論するなど不当な対応には容赦しないという姿勢は常時一貫している。彼の気性からすれば校長非職においても反論の余地はあるはずである。彼が沈黙で解任を了承したということは不可解さを残す。

吉田千鶴子はこの解任劇について[136]、美校騒動の経緯は、帝国博物館において 1900 年パリ万国博出品のため岡倉が主観となって進めていた日本美術史の編纂に携わり岡倉辞職と共に辞職した関如来[137]が、1898 年 3 月 21 日から 5 月にかけて書いた「美術界波瀾の真相」その他に明らかであり、事態の推移を克明に把握していたが、最も根源の問題に触れるのは避けているように見えるという。そして岡倉校長辞任の原因は、1895 年 3 月の議会決議の時点から胚胎していたもので、岡倉が美術学校校長として、1896 年に西洋画と西洋彫刻の課程を加えることを命じ、この時以来学校の運営について西洋式方法の果たすべき役割をどの程度まで教科課程に認めるかという点で、様々な意見の食い違いがお

136　2007,『芸術教育の歩み　岡倉天心』東京藝術大学岡倉天心実行委員会, p.85「岡倉校長辞職とその後の東京美術学校」

137 新聞記者、美術評論家.

こり、1898 年にはついに分裂して橋本雅邦以下数名が岡倉と共に職を辞して同年「日本美術院」を設立したのであり[138]、要するに欧化派の攻勢が原因として、ジャーナリズムにおける岡倉排斥運動や怪文書の配布などはそれに付随して起こされたにすぎない、と彼女は分析するが、果たして解雇の理由が欧化派の攻勢のみであったのだろうか。久保田鼎が総辞職を行おうとする教授人達に向かって、岡倉氏が本校を去る時期はすでに遅く友誼上しばしば同氏に忠告したが種種な事情で延期され時期を誤らせたと述べていることから、政府決定路線による解任がすでに決まっていて、変更しがたかったのではないか。では政府決定路線による解任とは何か。

この事件の歴史的背景として 1895 年 4 月に締結された日清戦争後の下関条約に関して、ロシア・フランス・ドイツによる三国干渉が行われ、日本は遼東半島を返還した。明治政府はその時から仮想敵国としてロシアへの警戒を強め、そのまま南下のために満州に逗留を続けているロシアとの交戦は時間の問題であった。

第 3 項　対ロシア外交の悪化と日本の政治動向

美術学校校長の罷免解雇が行われた 1898 年という年は列国の帝国主義活動が活発化した年である。ロシアは明治維新後の 1892 年（明治二十五年）、ウスリー鉄道の起工式を行い、日清戦争後には 1895 年の三国干渉翌年にはカシニ―条約によって満州における鉄道敷設権と、戦時における旅順、大連の使用権を得て 1898 年には旅順、大連の租借条約が清国との間に締結された。これにより東清鉄道[139]は大連で終点となりヨーロッパから韓国までロシア人が一気に移動可能になり日本にとってかなりの脅威となった。1898 年 3 月にドイツは膠州湾を租借し、4 月にはアメリカがスペインに宣戦布告し米西戦争がおき、6 月に入ると「英清九龍半島租借条約」、7 月には「英清威海衛租借条約」が成立しイギリ

138 1980,『岡倉天心全集』2 巻 p.5
139 日清戦争後ロシアが中国北東部に敷設した鉄道.日本では東支鉄道、北満州鉄道と呼ぶ.

スの対華進出は一段と積極化した。8 月にはアメリカ軍がフィリピンのマニラを占領し、9 月にはファショダ事件で、英仏関係が険悪化したという戦争状況が世界に広まりを見せる[140]。

1898 年の岡倉の解任に関系してさかのぼれば、1895 年 3 月の議会決議は日清戦争講話条約締結の一か月前に行われ、三国干渉へと急激に動く時期であった。日清戦争以前、東アジア海域における有力艦隊はイギリスの中国艦隊だけであったが、日清戦争の戦況により既得権益の侵害への恐れからヨーロッパ各国の海軍の配備が進み、東アジアにおける変動に対処するため、ロシア太平洋艦隊が戦艦と巡洋艦を、フランス・ドイツ・アメリカ・イタリアなどが巡洋艦を派遣して日清両国の監視にあたることとなった。この状態で日清講和条約調印から六日後、ロシア・ドイツ・フランスの公使が遼東半島変換の文書を提出する。日本は露・仏・独三国に対抗するため英・米・伊三国の援助を得ようとしたが失敗に至った。清国が三国干渉を理由に講和条約の批准延期を提議したこともあり、三国の忠告を受け入れるとして無条件受諾した。このような結果は三国による中国分割に、日本とイギリスが提携して対抗するという関係が生まれ、これにより日英同盟から日露戦争に至る流れができる。[141]

ロシアのアジア進出は 1680 年に始まる。1858 年（安政五年）の愛琿条約[142]によって黒龍江以北の地域を獲得し、さらに 1860 年（万延元年）には黒龍江以北ウスリー河[143]以東の地域を領有し、韓国とその境界を接するに至りペリー来航と呼応するかのように日本の近辺に現れる。1900 年（明治 33）、北清事件（義和団事件）が起こるとロシアはこれを機に東清鉄道の工事を進め、この年に大半を完成して周辺の馬賊を打ち払う名目で軍事力により鉄道沿線の所要地を占領

---

140 中村菊男, 1970,『伊藤博文』p.170-172

141 山室信一, 2005,『日露戦争の世紀』岩波新書 p.56

142 あいぐんじょうやく：1858 年中国黒龍江省北部の愛琿においてロシアと清国との間に結ばれた条約.黒龍江を両国の国境と定め、ロシア人の航行権を認め、沿海州は共有とした.

143 中国黒竜江省とロシア沿海州（シベリアの南東端、黒竜江（アムール川）・ウスリー川、日本海に囲まれた地方）との境をなす川

した。東清鉄道は 1901 年 11 月に全通し 1902 年、ロシアは日英両国[144]に遠慮するかに見せかけて清国との間に満州還付に関する条約を結んだが、撤兵期日になっても実行せず、ロシアによる満州経営は積極化し,1903 年 7 月には文武の全権を持つ極東太守アレクセーエフ（E.L. Alekseev）を任命した。さらに急速に進出をはかり鴨緑江[145]沿岸に軍事上の使節を作り勧告を制圧する勢いにあり、我が国の安全保障に有害となった。

日露両国ともに戦費を外債に依存しなくてはならなくなる日露戦争においては、いずれ欧米との共感を得て外債の募集をいかに進められるかが勝利への決め手であり、それが軍事的な結果を決めることになるのは必定であった[146]。

ロシアとの関係悪化で日本がアメリカに講和の斡旋を依頼する意図を持つ理由は、イギリスは日本と同盟を結び、フランスはロシアと同盟し、ドイツはロシアの外債募集に応じていたことから、残るはアメリカであったのである。1898 年のアメリカでセオドア・ルーズベルトが米西戦争で活躍し注目を浴びてきた頃である。ビゲローが金子にかつてルーズベルトを訪問するように助言したように、ルーズベルトはボストンのハーヴァード大学出身者であり、ニューヨーク出身の若年の議員でありながら、有事の際における活躍により国民の人気が高く、最も大統領出馬に近い人物であった。日本政府にとって問題は政府官僚以外で一介の国民としてアメリカ大統領との個人的人脈を持つ英語に堪能なという条件を満たす人材の必要性であった。伊藤博文は長年フェノロサ夫妻との交流を公私にわたり深め彼らを通して学生時代から岡倉と面識があった。アメリカの政治家を多く友人に持つビゲローやフェノロサを通した岡倉のボストン人脈は、まさに適材であった。

罷免前の 1897 年の半ば頃の 36 歳の父天心を一雄はこう回想している。

「不羈とも放縦とも、言はふやうなき狂態に始終して、まったく世間の

144 ロシアのアジア進出を牽制する目的で日本とイギリスとの間に締結された軍事同盟.
145 おうりょっこう：挑戦と中国東北部との国境をなす川. 朝鮮第一の長流.
146 山室信一『日露戦争の世紀』、岩波新書 958 ,p.142

軌道をはずしてゐた。だらしなく袴を後ろ下がりに穿いたまゝ、深夜の坂本通りを目的もなく彷徨日歩き、酒屋を叩いて枡酒を仰いだり、宿酔ひ未だ醒めやらぬ面を美校の校長室に晒すことも、決して一再には止まらなかった」[147]

実際この時期には九鬼婦人初子との恋愛問題はあったようだが、そのような私的な問題が原因でこのような失態を起こしたのかは疑問であるが、いずれにせよ罷免前年の岡倉は非常に荒れていたのである。

岡倉にとっても政府からの申し入れは難しい問題であったに違いない。しかし岡倉の最初に書きあげた東京大学の卒業論文は『国家論』であり、英語に堪能な彼の希望は政治外交であったのである。久保田鼎が、解任という政府決定路線が変更しがたいと述べていることから、理由が何であろうと岡倉の政府による解任はすでに決定済みであり、吉田千鶴子が言うように岡倉の校長辞任の原因が 1895 年 3 月の議会決議の時点から胎胚されていたのであれば、解任への動きは三国干渉[148]の頃からはじまっていたのである。

政府は、当時黄禍論で沸くアメリカ世論を日本側に好転させ、ルーズベルトとの何らかの交流を求めていた。彼は解任からアメリカへの渡航までに、「日本美術院」を設立し、其の経営不振を投げやってまで突然のインド訪問を 1 年間行い、失敗に終わったものの宗教家ヴィヴェカーナンダと東京での宗教会議を政府に打診して企画し、名門タゴール家との交流も果たしている。この間インド芸術、宗教を現地で視察し若者への思想的影響を強めている。これらの結果最もアメリカ行きに功を奏したのは、以前から日本で執筆していた英文著書をインド旅行インド中に書き上げ、『東洋の理想』としてロンドンから出版できたことであった。

147 『岡倉天心全集 1』平凡社 p.457
148 1895 年 4 月 23 日にフランス、ドイツ帝国、ロシアが日本に行った勧告

第 4 項　アメリカ大統領選の行方

当時のアメリカの状況は、大不況（1873-96）からの脱出をスローガンにした1896 年の大統領選挙に始まり、広告スタイルや、キャンペーン技術を駆使した選挙戦を繰り出したウイリアム・マッキンリーが民主党候補ウイリアム・ジェニングス・ブライアンを破り、当選し、金本位制を導入して新たな時代に入っていた。1898 年に勃発した米西戦争では、第 25 代アメリカ大統領マッキンリーは、スペイン艦隊を壊滅させ 90 日間でキューバとフィリピンを占領してアメリカを勝利に導いた。この年のパリ協定の結果スペインの植民地であったプエルトリコ、グアム、フィリピンはアメリカ合衆国に併合され、キューバはアメリカの占領下におかれた。マッキンリーは同年ハワイ共和国を併合、同国のすべての居住者がアメリカ国民となった。つまりマッキンリー大統領統治の時代アメリカは抜群の東アジア諸国における最大の支配勢力となっていたのであり、強力な武力戦略を展開していたのである。1900 年マッキンリーは再びウイリアム・ジェニングス・ブライアンと大統領選で打ち勝ち再選されたが、1901 年無政府主義者により暗殺され、昇格して後任となったのが副大統領セオドア・ルーズベルトである。彼は政治家としてばかりでなく、軍人、作家、狩猟家、探検家、自然主義者として名声を得、ひろくアメリカ国民に人気を博していた。

ルーズベルトは、ニューヨークボストン市にあるハーヴァード大学の卒業 1 年後の 1881 年に最年少議員としてニューヨーク州下院に選任されたが、初めて名声を得たのは、1886 年にニューヨークで警察の腐敗と戦ったことが始まりである。1898 年の米西戦争勃発時には陸軍士官としてキューバで小さな連隊を率いて参戦し活躍したことが、マッキンリーの信頼へとつながり、戦後ニューヨークに戻り知事選に出馬して 2 年後の 1900 年に副大統領に選出されたが、マッキンリーが暗殺されたため、1901 年ルーズベルトは 42 歳で大統領に昇格した。

岡倉の東京美術学校校長解任とアメリカのマッキンリー大統領からルーズベルトへと移行する流れが重なるのは、まさに日本が日清戦争後のドイツ、フラン

ス、ロシアによる三国干渉で南下をもくろむロシアが以後も満州に停滞し、政府が仮想敵国としてロシアを警戒する時代であった。当時アメリカは米西戦争で拡大を図っていたが、極東では遅れをとり、日本との関係はアメリカにとって特に重要な意味をもっていた。日本は短期間で戦争を有利に終了させるためにアメリカ大統領の斡旋が必要であり、両国の思惑は一致していたと思われる。岡倉のルーズベルトとの共通点は、ボストン市の共通の友人のビゲローであり、フェノロサであった。

政府がセオドア・ルーズベルトへの接近者として送り込んだ金子堅太郎がルーズベルトとハーヴァード大学同窓生としてルーズベルトの関係を記録されているが、一方で岡倉がアメリカ社会の水面下で、ボストン・ブラ―ミンズの社交界の花形イザベラ・ガードナー夫人を通した上流社会との付き合い、ボストン美術館東洋部顧問としての日本文化主張、そしてアジアの一員として『東洋の理想』を発表した日本伝統文化専門家として、英語力を存分に発揮しながらルーズベルトに接近を図ったことは、ほとんど知られていない。彼は東京美術学校校長解任により、官僚から外れた身分であるにもかかわらず、アメリカで行ったルーズベルトとへの影響は、金子堅太郎をはるかに超えている。1898 年の校長解任は、6 年後に勃発する日露戦争への準備であり、1903 年から 06 年にかけて彼が行った出版物が与えた影響は、一気に世界中を駆け巡り欧米列強にひろく日本を印象づけた。しかし岡倉のルーズベルトとの文化を通した外交力についてほとんど記録されていない。

第 2 節　想定外の「日本美術院」創設

岡倉が校長罷免を命ぜられるや否や、天心に従って橋本雅邦以下 17 名に及ぶ教授が連袂辞職を決行した。それに伴い 7 月 1 日「日本美術院」創設の趣意を公表し、10 月 15 日、新築の同院で開院式を行った。岡倉の解雇後、反旗を翻したのが橋本雅邦以下教授陣である。岡倉は彼らの連袂辞職回避を説得したが、結局 17 名が岡倉とともに美術学校を去り、美術学校の授業が成り立たなくなった。

当初から最も身近に岡倉の東京美術学校設立を見てきた橋本雅邦らがこのような行動を起こしたことからも、この罷免解雇は不当であったのである。この時横山大観は絵画『屈原』を発表し恩師岡倉の無念を表現している。1898 年（明治 31）3 月に東京美術学校校長非職解任となった岡倉覚三は、同年 7 月、本郷湯島天神町に事務所を設置し、初めての私立の美術学校として 10 月には谷中に「日本美術院」を開校した。辞職した教授達の活躍する場として日本美術院第一回展覧会を開催した。

「日本美術院」設立が想定外であったことは、建設資金が政財界の数寄者や、原富太郎（三渓）ら多くの援助者の寄付にもかかわらず不足し、アメリカのボストン美術館理事のビゲローに援助を依頼し、彼から即刻 2 万円の寄付を受けていることからも明らかである。この多額の寄付は図らずも岡倉とビゲローの親交が、彼が帰国してからも以前と変わらず続いていることを浮き彫りにした。

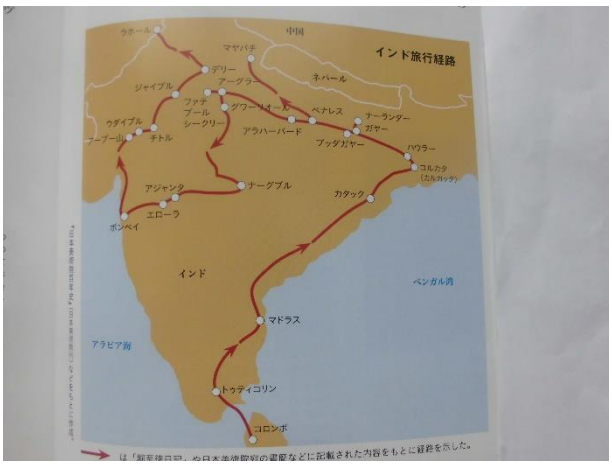
日本美術院は、春秋に展覧会を開催するため全国各地を巡回することを主要目標とし、横山大観、下村観山、菱田春草ら美術学校卒業生らと伝統的日本画継承と、新しい日本画の創作に力を入れた。開校当初、1898 年（明治 31）11 月から仙台を皮切りに、盛岡・秋田・大曲・横手と地方巡回展を開催し、岡倉は各地で公演する[149]。翌年 2 月には福岡展、1900 年 9 月には新潟展、1901 年には神戸・前橋・岡山・津・高松・10 月には和歌山、そして札幌と精力的に巡回展を開催している。後に朦朧体 といわれる新しい絵画手法が世間から批判を浴びたこともあり、設立から 3 年後には経営が行き詰り、このような状況の中で 1901 年突然インドへ 1 年間の遊学に出る。

第 3 節　突然のインド出発

民間人として自由の身になった岡倉は、新たに活動範囲を広げ始める。美術院の運営が芳しくないにもかかわらず、それを投げ出してのインドへの旅は、岡倉への批判を強めることとなった。

---

149 『岡倉天心全集』平凡社 p.478



（インド旅行行程）

ミス・マクラードに日本文化を講義していた岡倉は、彼女がイギリスへ帰国する便に同船し、周囲からすれば突然のインドであった。1 年間の長きにわたり遊学し、日本帰国後にロンドンから英文著作『東洋の理想』を出版したのである。この旅行は内務省の命によるものであり、政府の意向もあった。岡倉は目的もなくただ思い立って渡印したのではなかった。彼にとってインドは、彼が将来東洋美術家として活動する上で、中国に続いて視察しておかなくてはならない重要な国であった。すでにほとんど書きあげていた『東洋の理想』を携え、あとは現地へ赴いて人脈を広げ、宗教、文化について資料を蒐集するだけであり、インドは彼にとって外せない国であった。

第1項　インドでの活動

インドでは東洋美術の源流を捉えるために単に視察するだけにとどまることはなかった。西洋の列強に支配される社会は、日本の将来の姿であるかもしれないのである。

1901 年 10 月 21 日、ミス・マクラードと共に東京を後にし、12 月下旬にコロンボに上陸し、インド南端から北上し、ボンベイ、デリーを経由して 1902 年 1 月 6 日、四十一歳になったばかりの岡倉はカルカッタに到着した。渡印の目的はベルル僧院の聖者スワミ・ヴィヴェカーナンダを訪問する事であり、彼はここを拠点として東洋宗教の理想を追求していたのである。

ヴィヴェカーナンダは岡倉誕生の一か月後の 1863 年 1 月、カルカッタ市北部のシャンバザール地区で生まれた。17 歳で近代ヒンドゥー教の最大の聖者であるラーマクリシュナと出会い、神秘的な体験を通して彼の弟子となりアドヴァ

イダを体得した聖者の教えを世界に広めることに生涯をささげた。アドヴァイダ（不二一元論）の思想は、バラモン教六派哲学の一つ、ヴェーダーンタ学派により確立された者であり、自己（アートマン）と宇宙の根本原理（ブラフマン）が同一だとする主張で、八世紀前半のインド哲学者、シャンカラにより理論化されていて、これは三千年にわたりインド哲学が追求してきた哲学である。アドヴァイタの思想は「世界のすべての宗教は、唯一の真理の異なった現われにすぎず、全宗教の真理は同一である」との思想につながる。西洋近代化のグローバリゼーションに攪乱され、列強を強く意識する日本から東洋の思想・宗教を求める変換期にインドで遭遇し、岡倉は東洋文明の根本理念をヴィヴェカーナンダにより確実に覚醒するのである。

岡倉にあった彼は、同じ世界に属する人間であると感じた。そして『東洋の理想』という言葉は、ヴィヴェカーナンダが好んで用いた言葉で、「東洋の理想は、西洋の理想と同じように人間の進歩にとって必要である」と教えたのである。さらに「西洋の人々は組織、社会制度、軍隊、政府等に立派であるが、宗教を説くことになると、常にそれが仕事であったアジア人のそばにも寄れない」と説いた。この思想を岡倉が世界に広め、その後も詩人ラビンドラナート・タゴールらによって継承されたのである[150]。岡倉と対面した時、ヴィヴェカーナンダの病は、彼に教えを受けに来たマハトマ・ガンジー[151]の訪問を受けることができないほど重症であったが、「インド人は有史以来国境を越えて他を征服したことのない民族である」と言い、この思想の核心である「平和な東洋」の真意を最後まで語ろうとした。そこで死期の近づいたヴィヴェカーナンダは岡倉にタゴールをひきあわせる。

---

150 坪内隆彦、1998『岡倉天心の思想探訪－迷走するアジア主義』勁草書房

151 ガンジーはヴィヴェカーナンダの教えを受けたいと願っていた。彼は弁護士をめざし19歳でロンドンに留学し、異国にあってインド宗教に目を向けたのである.

第 2 項　タゴール家との交流

（ラビンドラナート・タゴール）

その頃タゴールは、ベンガル近郊のシャンティニケタンに野外学校・平和学園を設立し、自然の中で全人教育と農村改革運動を始めようとしていた。彼はベンガルのエリートの家に誕生し、カースト[152]の因習を改革する運動を始めていた父の影響を受けながら英才教育を受け、八歳の頃から抒情詩を作り始めた、ベンガル最大の詩人であり、音楽家・画家である。インドではイギリス支配から独立するために、相手の懐に入るため極端な西洋文明を導入していた。しかし同時にイギリスの帝国主義支配前にふみにじられ、民衆が自信を喪失したのも事実である。インド滞在中、鼓動を共にしたのがタゴールの甥、スレンドラナート・タゴール（以下スレン）、タゴールの姪、ショローラ・ゴーシャルら若き民族主義者であった。岡倉はいきなりスレンに「あなたは祖国のために何をなさろうとかんがえていますか」と尋ねた。彼らは岡倉と話すたびに、気持ちを高揚させた。岡倉は一日中寝台の上の長枕に凭れかかって書き続けていたという。その表紙には、“We are one”と記されこう始まる。

> 「アジアの兄弟姉妹たちよ!
>
> 大いなる苦痛が我々の父祖の地によこたわっている。「東洋」は今や衰退の同義語となった。「原住民」とは奴隷の別名である。称揚された我々の温順さは、礼儀正しさが所詮臆病から来ているというアイロニーなのである。商業の名のもとにわれわれは軍人を歓迎した、文明の名のもとに帝国主義を抱擁した、キリスト教の名のもとにわれわれは無慈悲なる者の前にひれ伏したのである」（坪内訳『東洋の覚醒』）

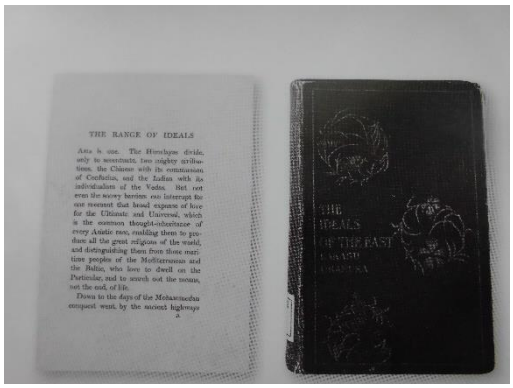
岡倉はこうした言葉により、ベンガルの若者に多大な影響をあたえ、これに応

152 ポルトガル語で「血統」の意. インドに見られる社会集団.儀礼的な観点から序列されており、各集団間は通婚・食事などに関して厳しい規制がある.

じて彼らは覚醒して 1902 年 3 月には革命的組織「アヌシラン・サミティ」が結成されて、其の中心的存在がスレン達であった。岡倉は激しい怒りをあらわして『東洋の覚醒』を書き、その後、この激しさを極力おさえてスタンダードな『東洋の理想』を書き上げ 1903 年 2 月にロンドンから出版する。色川は、このノート（『東洋の覚醒』）が『東洋の理想』の前に書かれたという何よりの証拠は、その全体の内容にあるが、もう一つの証拠は「アジアは一つ」なるキャッチフレーズが、このノートにはまだ全く現れていない点である（色川『岡倉天心』）と指摘する。この二冊に見られる心情の急激な変化は、政治的な彼の広報外交の意識下にあると考えられるが、『東洋の覚醒』の冒頭の「アジアの兄弟姉妹よ！」の呼びかけは、『東洋の理想』の「アジアは一つ」に明らかにつながっている。1904 年にアメリカで出版された『日本の覚醒』は、このノートの「覚醒 Awakening」であり岡倉の思想はインドでの活動、タゴール達との交流から、より深まりを見せたのである。

タゴールは岡倉の死去した 1913 年にアジアで最初のノーベル賞受賞者となった。岡倉がインドからアメリカへ渡った意図を彼が理解していたかどうかはわからないが、日本が日露戦争後に西洋列強と同じ道を歩むとして、批判を強くしたのも事実である。

第4節　『東洋の理想』出版



（THE IDEALS OF THE EAST ）

インドへ渡った岡倉は、タゴール一家をはじめとした交流を行い、インド思想家ヴィヴェカーナンダとの出会いをもつ。その紹介でニヴェディタと知己となり、1902 年 5 月ごろ『東洋の理想』を脱稿してニヴェディタを通じて、ロンドンのジョン・マレー社に送り[153]、帰国後の 1903 年に出版され

[153] 『岡倉天心全集　別巻』平凡社、1981,p.417

たのである。日清戦争に勝利した日本に脅威をもつ欧米列強が日本に対して興味を抱く中で出版されたこの書は、瞬く間にブームとなり岡倉の名を国際的に知らしめることになった。これで彼はアメリカ渡航の第一歩を美術芸術家としてスムーズに始めることに成功したのである。

岡倉は欧米視察旅行で、西洋文明の限界を知り視点をかえて、西洋の人口的文明とアジアの豊かな自然的文明を比較し、日本が自国を卑下する必要はないことを確信したが、問題は東洋としての地理的広さ、宗教、思想、芸術をいかに表現すべきかであり、そこに東洋の理想を描こうとした。

1903 年（明治 36 年）2 月に英国のロンドンのジョン・マレー社から出版された原題 *THE IDEALS OF THE EAST WITH SPECIAL REFERENCE TO THE ART OF JAPAN* BY KAKUSU OKAKURA, London, John Murray, 1903.[154] (『東洋の理想―とくに日本美術について』)は、彼の英文著作の第一作目である。

本書の原稿が、イギリス人のインド研究者ニヴェディタ女史の協力で、1902 年岡倉がインドに滞在中に完成し、その後にロンドンの出版社に送られたのはほぼ間違いないとされる。『東洋の理想』の内容は序文の岡倉覚三への紹介と賛辞、第一章の西洋に対する東洋の地理的範囲の確認、第二章の日本の神道・古墳・埴輪による原始藝術の発展、第三章から五章までの中国の儒教・道教・仏教の紹介と日本への流入を前半として、極東の島国日本のアジアの中の存在を宗教、文化、歴史比較により明らかにする。仏教を媒体としたインド、中国の歴史文明を述べ、アジアの一体を主張しながら、国家として強調するのは日本一国についてであり、アジアの代表である日本国家を歴史的視点から詳細に西洋に向けて主張する。第六章以下はインド、中国との宗教的関連から、仏教の伝来が始まる飛鳥時代から日本国家を明らかにしているが、『東洋の理想』の後半部分、特に「豊臣および初期徳川時代」から「明治時代」では西洋からみて日本がどう映るかを意識して表現して書いている点で戦略的である。最終章の「展望」では、アジア

154 『 岡倉天心全集　1』p.475

の簡素な生活がヨーロッパの蒸気と電気との生活と比較して、際立った対照となることを恥とすることは全くない、とアジアの劣勢を否定し、「東洋の流儀にならって、我々が偉大な理想の民主化が小康をきたしたところで、一つの活動のリズムを終わらせていることは明らかである[155]」と日本が自国の意思により開国したと言い切り、将来の日本の行く末について「内部からの勝利か、それとも外部からの強大な死か」と問う。

第１項　序文の意義

（ニヴェディタ）

『東洋の理想』の特徴は、他の 2 冊（『日本の覚醒』『茶の本』）にはない序文の存在である。著者のニヴェディタは、岡倉が西洋のウイリアム・モリスであり、彼の創設した「日本美術院」がマートン・アベイ[156]であると称して西洋との共通点を示し、まず異文化を身近に感じさせる効果を引き出す。彼女はアジアの文化は中国の学問とインドの宗教に大別され、日本の芸術活動の高まりは常にインドの精神活動の高まりの後に続くとする。インド仏教がヒマラヤの峠を越え中国に入り日本に伝わって影響を与えた。つまり、日本の表現方法は中国に教わったが、思想はインドに仰いでいると東洋の根源を中国ではなくインドにおくのである。彼女の『東洋の理想』の概要は、岡倉の目的がインドの精神活動の高まりがどのように働いて諸民族を鼓舞したかを正確に示すことであり、まず日本の大和民族から始め、次に北方中国の素晴らしい倫理的天才と南方中国のゆたかな想像力を理解しながらインドの仏教がそこへ流れ込み、全体に広がり統一されていく過程で普遍的な信仰が生み出されたと説く。この流れが学問においては宇宙的諸

155 色川大吉『岡倉天心』p.196
156 ウイリアム・モリスの商会の工房があった場所の名前

観念を、芸術においては盧舎那仏[157]を生み出し、日本の平安時代の汎神論、藤原時代の主情主義、鎌倉時代の英雄的雄壮へと大きな影響を及ぼしたとニヴェディタは語る。インド研究者として、『東洋の理想』を通して、岡倉がこの本に意図する世界の世論に向けた壮大なアジア論と日本主張に、ニヴェディタはインドへの理解をこの序文に組み込み、彼の思想紹介とともにインド思想へも言及するのである。もし岡倉が、英文著作『東洋の理想』を外国から出版することをインド遊学の最大の目的としていたのであれば、ニヴェディタの岡倉の英文への添削や、出版社の紹介は必要であったであろう。残されたノートに残る彼女の添削や文章の確認などから岡倉は相当妥協をしながら、出版にこぎつけたのである。

序文の著者ニヴェディタ[158]はヒンズー教の中に入り、インド思想と生活を研究していたイギリス人女性で、本名をマーガレット・E・ノーブルという。ニヴェディタ序文では、日本美術界における地位や業績から岡倉の知識の確かさを紹介している。岡倉が文部省官僚として中国視察旅行を行ったことや、解任後にインドへ 1 年間の遊学で彼女たちインド宗教学者たちと出会ったことに加え、ヨーロッパにおけるウイリアム・モリスと岡倉覚三、マートン・アベイと日本美術院を比較して西洋と日本の美術レベルを対等に評価したと紹介する。この序文により岡倉は海外で自己紹介をするまでもなく、後半生のアメリカのボストンにおいても、『東洋の理想』の作者として絶大な信頼を得ることができたことに間違いはない。イギリス人の敬虔なインド研究者と、若年でありながら近代化の中で政府官僚として日本伝統文化の近代化を先導してきた美術専門家岡倉との出会いが、この序文をニヴェディタに託すことにつながった。西洋人がイギリス人彼女の言葉に従って東洋人岡倉への信頼を高め、日本に対する偏見を一掃できるところに序文の意義がある。

---

157 毘盧遮那仏に同じ．旧約（くやく）華厳経で用いられた音写語．華厳経などの教主で、万物を照らす宇宙的存在としての仏．密教では大日如来と同じ．

158 アイルランド出身で 1898 年にはインドに到着しヴィヴェカーナンダに帰依し、ヒンデュー教徒となった．

第 2 項　理想の範囲―Asia is One

『東洋の理想』の第一章「理想の範囲」で、岡倉はアジアをインド・中国・日本の三国であると明確に「地理的範囲」を定義することから始める。ヒマラヤ山脈が二つの偉大な文明である中国文明とインド文明を分かつとして、地理的・宗教的にアジアの統一（Asia is One）を印象付ける。特にここで彼が語るのは、西洋列強に対して地理的広さ、宗教的統一による東洋(アジア)の同等性であり、軍事力を除けば東洋は西洋より歴史が長く芸術が連綿と受け継がれていることを彼はまずここで明らかにし、壮大なアジアの中ですでにイギリスに支配されているインドやアヘン戦争で植民地支配されている中国と比較して、日本をその中心に据えることである。次にアジア（インド・中国・日本）を儒教、道教、仏教の成り立ちから「宗教の範囲」とし、島国的孤立が日本をアジアの思想と文化を託する真の貯蔵庫としアジア文明の博物館[159]であると「文化の範囲」を明らかにし、王朝の変遷をくりかえした中国にはその文献と廃墟の他には、唐代の帝王たちの栄華や宋代の典雅を思い起こさせるものは何も残っていないが、かつて栄えたインド・中国の歴史的文明遺産を受け継いでアジアに貢献している存在であると総合的に Asia is One を語る。

第 3 項　アジア（インド・中国・日本）の宗教・芸術論

第二章から五章までは岡倉が定義した新しいアジア（日本・中国・インド）の宗教・芸術論を語る。第二章「日本の原始藝術」では、民族の起源はいまだ明らかではないが古墳、埴輪などを大和民族の残した起源とし、そこに大陸からの漢王朝、仏教の影響を受けて融合しながら日本は異文化を国風に変化させてきた国であり、ギリシア文明がエジプト、ペラスギ、ペルシアに影響されたように、日本も中国やその他の国の影響をうけてきたが、それによって本来の日本の原始藝術が消滅するどころか、それを受け入れて改めて使いこなしてきたとし、岡

159 アジアが一天皇の宝物庫正倉院にインドから中国を経て日本に伝わった宗教、文化が、保存されアジアの博物館として残されている.

倉は過去の歴史から現代の歴史に至る日本のゆるぎない存在を西洋に打ち出し、未来の日本の方向性を明らかにする。

第三章「儒教―北方中国」の章で岡倉は「易」すなわち「変化の書」について語る。中国人は、高原に定着するタタール的農民と、高原を駆け巡るタタール人の遊牧的側面を持ち合わせ、古代の中国ではまず牧者ありで、九つの州の長官は「牧」と呼ばれたと「牧人生活」を暗示する。中国最初の皇帝は「伏義」―牧畜を教える―といい、そのあとに続くのが神農―神聖な農夫―であった。この総合的労働組織を、周王朝の末ごろに解明し要約しすることが孔子[160]の役割であり、孔子の儒教は倫理の宗教を実現し、人間にとって人間を聖化し、人生の調和が究極の理想であった。「易」は中国人のヴェーダというべきもので中国民族の根本思想である。これにより不可知の領域に近づくが、不可知論者である孔子にとって『易』は禁断の書であった。人生における最高の規範は個人の自己犠牲であり、芸術も社会の倫理的行為に役立つという点で尊重されたのである。

一方「道教」について、漢王朝の分裂により道教が進出し、道教の「竜」の意味する変化比喩から、抗争、非難とならない秘訣を屠殺にたとえて表記し[161]、三世紀には道教と仏教は同調し道教と儒教は対立していたが、唐の自由主義によってはじめて儒教、仏教、道教とが相互の寛容により共存できたと「老荘思想と道教―南方中国」の章で語る。岡倉は北方中国と南方中国の違いを儒教と道教で説明し、その融合を孔子と老子の関係で表し、「易」「竜」などをキーワードとしこの後に出版される『日本の覚醒』『茶の本』の中で共通語となるこれらの関連性は、その原点をここで登場させている。

中国の王朝の歴史の中で、500 年続いた周王朝を紀元前 221 年ごろ吸収した秦は、周代の初期の帝王の下で馬の飼育に携わり、御者を務めながら 600 年の間に徐々に増大してついに権力を握った国であり、「中華」の名称は秦帝国の辺

---

160 孔子：紀元前 551-紀元前 479

161 「生活術の秘訣は、抗争非難することではなく、いたるところに存在する隙間に入り込むことにある」としてこれを屠殺の名人に例え、名人は骨を割こうとしないで、骨と骨の間を切ったので、一度も包丁を研ぐ必要がなかった.

境に位置したその領土から名づけられた。秦王朝は周王朝の制度の総仕上げに不可欠の要素であった。秦により中国は一つの帝国として統一され、道路、長城、郡県制度、固化的な統一書体の発明、皇帝の名称・様式の定義が成り立ったが、秦は「焚書」[162]を行うことで学術の破壊をもたらし、3 世 16 年で秦帝国は没落し漢[163]の高祖が台頭したとする。儒教思想について、漢王朝の最大の特徴は三代目の皇帝の時以来、文官試験で儒教の知識を必須とし規定は現在まで受け継がれているが、欠点は批判的な要素が阻止され成長と進化が固定され、儒教自体が硬化したことである。紀元 1 世紀の儒教思想の影響力は強大であり、儒教の支持する伝統にしたがって宰相の王莽が王位を奪って位についた。

岡倉は、「シナ」という呼び名について[164]、王莽の新王朝は貴族勢力の反乱により西暦 23 年に殺害され 14 年の短命な治世を終えたが、その間にその貨幣が当時知られていた世界のあらゆる土地に及んだという事実から、シナ（新の国）という名称はこのころつけられたのではないかと彼は推測する。中国の皇帝は、敗北の時点で宝物ともども焼身して果てる習わしがあり、王朝変化に伴い一切の文物破壊をするため、諸王朝が築いた建築上の業績の多くは文献により言及されるのみで今日ほとんど消滅しているが、日本は中国から漢代美術を受け継ぎ保存し、韓国から儒学が伝わる以前から中国文化に通じていて、それが中国と同様に日本でも儒教が仏教を受け入れる土壌となったとする。皇室の蒐集品や神社の宝物殿や古墳の出土品に、中国王朝の遺産が過去に多く伝わり保存されていることから、日本がインド・中国芸術を引き継いだ博物館であるとして日本の Asia is One を証明するのである。

第四章「老荘思想と道教」では、老子と孔子と荘子について、老子は当時楚といわれた南の地方に生まれ, 楚の書物庫の管理人であった。孔子は二人の協議の違いにもかかわらず、彼を師と仰いだ。孔子は老子をさして「竜」と称し「自分

---

162 書籍を焼き捨てること.

163 漢王朝：紀元前 202－紀元 220

164 シナ（新の国）：岡倉は秦、新を共に Shin と表記している。英語の China は現在では秦に由来すると考えられている.また新王朝の治世は 14 年ではなく 15 年である.

は鳥がよく飛ぶのを知り、魚がよく泳ぐのを知っているが、「竜」の力に至ってはこれを測ることもできない」と評する。老子の後継者である荘子も南方人で、師の後を踏んで事物の相対性と移ろいやすさを説いた。『荘子』という書物は壮麗なイメージに富み、散文的で無味乾燥な姿勢から儒教の書物とは著しい対象をなす。荘子は儒教の制度、慣習は単なる有限の努力に過ぎないと嘲笑し、孔子の次代の儒者孟子は、老子の理論との戦いに生涯をささげた。

第五章「仏教とインド藝術」の章では、仏教はアジアだけでなく遠い昔シリアにわたりキリスト教として発展し、世界中に広まりを見せ、北方仏教と南方仏教とは地理的に分類でき、両派のいずれの解釈に従っても本質的にはブッダの教えは魂の自由であると仏教とインド藝術の関係を詳細に語る。アソカ王がインドを統一し、その帝国の勢威をセイロンからシリア、エジプトの境まで及ぼし、熟慮の上仏教をその帝国を統一する力として認めた[165]時からその関係は始まった。インド初期の仏教藝術は古代中国と同じく粘土、こね土、等永続性のないものが使用されていたが、アソカ王時代はヨーロッパの科学力をしてもまねのできない大鉄柱を作り上げ、マトゥラー、ガンダーラの遺物にも継承され、ギリシア的特徴よりも中国的特徴を強く受け継いだ。仏教の第一期（釈迦の死）は紀元前 6 世紀であり、死後内部で混乱が起こり主として僧院の規則を論じた。仏教の第二期は 4 世紀グプタ王朝に始まる。この時代にはアサンガ[166]、ヴァスヴァンドゥ[167]が、客観的研究の学派を始めている。藝術はアジャンターやエロ―ラの石窟の彫刻にみられる。仏教の第三期（具体的観念論の時代）は 7 世紀に始まり、その影響はチベットに広がり、そこで一方はラマ教となり、他方はタントリズムとなり、さらに密教の教義となって中国、日本に伝わり平安時代の藝術に影響することになった。

インドについて、岡倉は日本、中国よりも多く語っている。これはニヴェディタやヴィヴェカーナンダ、タゴール達との交流により得た知識が影響している

165 色川大吉『岡倉天心』中央公論社、1995,p.131
166 無著（むじゃく）.インドの学僧.(375-430 頃)
167 世親（せしん）.アサンガの弟.(400-480 頃)

のか、それともニヴェディタの指示であったのか。いずれにせよこの本はそれまで西洋からも東洋からも語られることのなかったインドを彼は積極的に明らかにしたのである。

第六章「飛鳥時代」以降では、日本の歴史の発端を仏教が伝来する飛鳥時代にとり、岡倉はここから新しい日本歴史解釈で始める。宗教はインド仏教から入り、日本の神道に仏教が融合され仏教崇拝による国家統一、芸術文化への影響を描く岡倉の歴史分析は、日本初の西洋に向けた新しい歴史解釈である。彼は詳細な歴史区分で日本を語る中で、天皇を頂点に明治時代まで国家としての成り立ちを宗教・絵画藝術・武士道・文学・音楽・建築・倫理など様々な分野から丁寧に紹介しオリエンタリズム的解釈の西洋列強に誤認を避けるかのように、日本人の東洋美術専門家からの学術的異文化理解を目的としたと考えられる。

仏教の影響が強い飛鳥(550-700)、奈良時代（700-800)にはインド・中国に影響されて頻繁に仏像が制作されるが、貴族政治の平安時代(800-900)には密教に移行し、藤原時代（900-1200）には国風文化が表れるとともに紫式部の『源氏物語』が書かれるなど女性の活躍がはじまり、武家政治の鎌倉時代（1200-1400）に新仏教がおこってから、仏像制作は消滅に向かい、15 世紀の足利時代（1400-1600）には禅の影響で茶道や華道を実際に経験することで、仏像崇拝から宗教性を自己修練で体験するという思想に変化する。特に注目すべきは、キリスト教宣教師による西洋人が日本に初めて上陸してきた時代の「豊臣および初期徳川時代」（1600-1700）以降は戦国時代から天下統一された時代で、この時代キリスト教弾圧をイエズス会に報告していたことから、西洋にとって日本と深く関係する時代であり、彼は日本の様子をくわしく描写している。また建築として大阪城、桃山城をヴェルサイユ宮殿と比較し、この時代 19 世紀のヨーロッパより顕著な特色は、誇示することであって簡素さはなかったと元禄時代の華やかさを伝えている。文化は教養としての茶や、西洋人が好んで蒐集してきた浮世絵を取り上げ、この時期の浮世絵が徳川後期の風俗画派とは異なり、平和を迎えた反動で階級差別のない自由さを表現しているとする。しかし「後期徳川時代」

（1700-1850）は統一の強化の時代で、社会全体が型にはめられ、浮世絵は色彩と描写の点では熟達したが、日本芸術の根底をなす理想主義的傾向に欠けるとまで言い切るのはフェノロサの影響がある。

岡倉の芸術観を知るうえで最も重要な部分は、「歌麿、俊満、清信、晴信、清永、北斎らの生気と変通性に富んだ魅力的な色彩の木版画は、奈良朝以後ずっと進化を続けてきた日本芸術発展の主観からは外れているため、西洋で日本の藝術がまだまじめに考究されていない原因は、大名の蒐集品や社寺の宝物に秘蔵されている名品の壮麗さの代わりに、この時代の作品の小奇麗さが、最初に注目を惹いたからである」と明確に述べている点である[168]。さらに驚きは、同時期に書かれた『東洋の覚醒』で徹底して西洋に反発した彼が、「明治時代（1850-現代）」の章では、開国について「アメリカの軍使節と同様長く感謝の念を払うべきである」とペリー来航による開国へ賞賛さえ送っていることである。このアメリカへのへりくだりには、日露戦争を予見してアメリカの仲介を求める為に『東洋の覚醒』ではなくこの本を出版した戦略的意図が見える。

第 4 項　『東洋の覚醒』と『東洋の理想』―「本音」と「建前」

『東洋の覚醒』[169]（*The Awaking of The East*）の原文は、昭和 13 年（1938）の春、千葉県下志津の自宅にあった書類を整理していて孫の岡倉古志郎が発見した草稿である。もともと表題はつけられていなかったもので、岡倉の生前には活字化されておらず、1926 年に岡倉の妻もとが亡くなり、英文のものは一雄のもとに運ばれたが、そのまま整理されることなく十年以上が過ぎていた。同年 7 月 20 日に『理想の再建』（岡倉一雄、古志郎編）として収録されたが、その後、浅野晃が 1940 年翻訳し、独自に『東洋の覚醒』と命名した。この原稿について岡倉一雄は「天心遺文の刊行に語りて」に次のように記している。

「天心が明治 35 年初めて印度に遊んだ際、交を締した詩聖ラビンドラ・

---

[168]責任編集 色川大吉『岡倉天心』中央公論社 pp.179

[169] 『東洋の覚醒』（*The Awaking of The East*）の原文は、現在ではこの 1940 年に翻訳された浅野晃の題名が一般的である

ナース・タゴールの客舎において、或は同氏の令甥スレンダラー・ナース・タゴールを拉して全インドを漫遊中、ジャングルの逆旅においても、藩主の宮殿の裡にありても、絶えずペンを走らせていたという由緒ある遺著であることを認めた。すでに世に示した彼の著作から見れば、最初刊行した『東洋の理想』（*The Ideals of The East*）と次の『日本の覚醒』（*Awaking of Japan*）の間に位するものであることが略ぼ判明した。或は『日本の理想（覚醒）』（ママ）の第一案であったかもしれない）

と記している。一雄は『東洋の覚醒』が『日本の覚醒』の第一案であったと「東洋の覚醒」原ノート１ページ目にも記し、スレンドラート・タゴールの回想からもそれは推測される。しかし同じ時期にほとんど同じ題材で書いた『東洋の理想』を何故選んで出版したのか。六章からなる目次に、第一章から第三章までタイトルはないが、第一章は「黄禍」と「白禍」の問題を語り、第二章は宗教と芸術によるアジアの統一の自由を「ヴェーダ」「道教」にたとえ、第三章は家族愛について東洋の社会で語り、朱熹により大成された宋代の儒学として新儒教がはじめてここで出る。第四章からつけられた題名は「復活」、第五章「剣」、第六章「時は来たれり」と続き、冒頭の「アジアの兄弟姉妹よ！われわれの父祖の地は、大いなるか苦難のもとにある」から最終章の「時はきている」まで、徹底して岡倉の容赦ない西洋批判が厳しい口調でかきつづられている。

『東洋の覚醒』に出てくる「新儒教」・「ヴェーダ（易）」・「道教」はその後の『東洋の理想』・『日本の覚醒』・『茶の本』に共通して出てくる言葉であり、これら英文が同一思想の著作で語られていることを証明している。

『東洋の覚醒』の中で、西洋にたいする岡倉の本音は、

「西洋は東洋についてなにを知っているのか？ヨーロッパ人が東洋学に通じていると称しても、それはまったく幻影に等しい!」「儒教の古典の理解の点で、ベルリンあるいはソルボンヌのだれが、三流の中国の官人と肩を並べることができるであろうか？」「西洋人はまったく赤の他人である。彼らは、自分たちには置きかえる能力のない秩序をくつがえ

し、完全な破壊としか思えない計画をおしつける。勝利か！死か！」

「西洋は無礼にも、われわれを成長のとまった犠牲者と評している。しかし彼ら自身が、特殊的な発展の異常な標本ではないのか？」「ヨーロッパの政策は、支配するために分裂させることを決して忘れない。彼らは、スンニ派（回教の正当派）とシーア派（分離派）が敵対しあい、スルタン（オスマン=トルコの皇帝の称号）とシャー(イラン王の称号)が国境紛争と対立的外交に巻き込まれるように、常に気を配ってきたし、日本と中国の戦争をあおりたてることには、なみなみならぬ熱意を示している」

インドに遊学して現状を体験して書いたこれら 2 つの作品のうち、激しく東洋への侮蔑を非難した『東洋の覚醒』は岡倉の「本音」であり、『東洋の理想』は西洋に向けた「建て前」である。日露戦争直前に出版され欧米で喝采を浴びた『東洋の理想』は、軍事資金の枯渇と短期終了を願った日本に資金提供の申し入れと、誰も勝利するとは思わなかった大国ロシアへの戦いに挑む日本への興味を強める世論に非常な効果をもたらした。岡倉の広報外交[170]の一端として、また日本への協力を海外に求める意味においても、『東洋の理想』は待たれていた本であり、岡倉のアメリカへの拠点移行はこのような芸術、宗教思想と国家背景を背負ったものであった。

おわりに

ターニングポイントとなった 6 年間の岡倉の行動は、日露戦争を背景に照らし合わせてして考えることで、今までから謎とされた東京美術学校校長非職が、岡倉側の問題によるものではなく、政府側からの要請であったと考えるに至った。解任後の 6 年間は、後半生アメリカのボストン美術館へとつながる準備期間であり、アメリカ渡航後の水を得た魚のような活動はそれを証明している。岡倉が何故この時アメリカへ渡ったのかは、日本からの逃避行ではなく、使命を携

[170] 広報外交とは英米に日本人を派遣し、雑誌、メディア、論壇などを通じ、過酷に働きかけ、日本の正当性を主張し、世論により真実を引き出すことである．日露戦争時の外務大臣小村寿太郎が行ったメディア戦略である．

えたアメリカへの飛躍であったのである。

政治家伊藤博文との関係は、学生時代から知遇を得ており、芸術はもとより政治においても関係が深い。第二次伊藤内閣の時代に日清戦争を体験した伊藤の経験が、ロシア外交の悪化に対して躊躇なくアメリカの仲介を求める行動に至らせたのである。背景には日清戦争後の三国干渉で漁夫の利を得たロシアへの警戒があった。1901 年 5 月第四次内閣を解散し首相の地位を去ると、同年 9 月にはアメリカを訪問し、エール大学から名誉法学博士の学位を授与された後、ロシア赴いて日露協商の打診をし、それができなければイギリスに行って日英同盟を結ぶつもりでヨーロッパへ行き、パリにいたとき日英同盟の交渉が順調であることを報告されて、ロシアには行ったが日露協商は進めず、イギリスに渡って外相ランスダウンと会見するという劇的な行動に出ている。そして日英同盟は 1902 年（明治 35）1 月 30 日成立し、日本はロシアに対して有利に立つことができた。岡倉のボストン人脈は、ロシア外交の悪化に伴うアメリカの協力を求める直接的な有効手段であり、伊藤は金子を説得したように東京美術学校校長の彼を説得したに違いない。危機に面した政府にとって岡倉が政治家でなく日本美術の専門家であることも重要な要素であったのである。

第 4 章　Okakura's　America—「ボストンデオカクラガハタシタシメイ」

はじめに

岡倉の 1904 年から 1913 年までの半年毎のアメリカ滞在は五回を数えるが、1904 年 3 月末から 1905 年 2 月までの第一回ボストン勤務は日露戦争開始から戦況の激しさを増した時期であり、最も岡倉の西洋列強への日本主張が高まった時期であった。ボストン美術館東洋部着任後、2 万点に及ぶ日本コレクションを 11 月までに整理し、同時期にニューヨーク、ケンブリッジ、ワシントンで弟子たちの新しい日本絵画のニューヨークの展示即売やボストン郊外での茶会開催による日本文化紹介を行い、地元ボストンでの信頼を得ることに成功する。同年 9 月にはセントルイス万国博覧会[171]で「絵画における近代の問題」（*Modern Problem in Painting*）を臨時講演する機会を得て、日本の惨状を抗議し観衆の心をつかむ。そして 11 月英文著作の第 2 作目『日本の覚醒』をセンチュリー社から出版しアメリカ世論を捉える。同じく 11 月にはルーズベルトが再選し岡倉の英文著作による広報外交や個人的な交流は順調に継続される。翌年 2 月には '*The Cup of Humanity*' を脱稿しそのまま帰国の途についた。第二回目の渡米によるボストン勤務が日露戦争終戦直後の 10 月であったため、第一回目のボストン滞在が最も重要な時期であった。岡倉はこの時日本の望む戦争の短期終焉のために東洋美術家として自由の立場からルーズベルトとの交流を深めたのである。岡倉の帰国後、金子堅太郎の交渉に応じルーズベルト大統領は両国の仲介役を買って出て、9 月に日露戦争はポーツマスで終焉を迎えた。

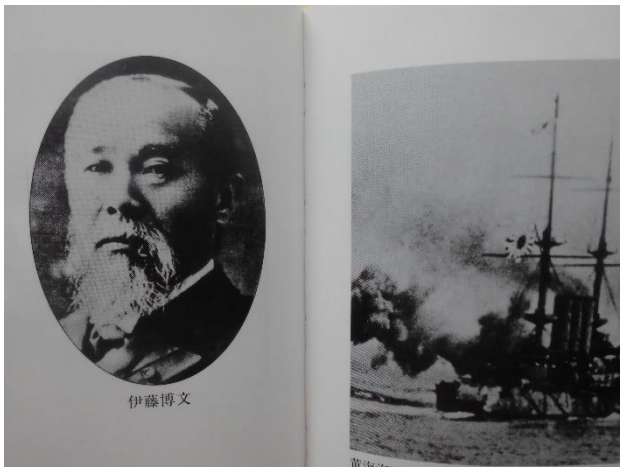
岡倉のアメリカ渡航は日本からの逃避行というのが一般的であり、彼が日露戦争にどのように関係したのかについてはほとんど記録にない。しかし岡倉より 2 週間遅れてアメリカ入りした金子堅太郎の広報には当時伊藤博文が金子にルーズベルトへの接近をハーヴァード大学同窓生の立場から行うことを命じていることが残されている。

---

[171] 1904 年 4 月 30 日～11 月 29 日迄開催

伊藤博文と岡倉の関係は、東京時代のフェノロサとの関係にまで遡る。当時東京大学教師として滞在していたフェノロサのリジー夫人は日本美術コレクションを通して政財界の伊藤博文と親しく意見を交換できる関係であり、フェノロサと共に日本伝統研究の通訳で同行していた岡倉が、夫妻を通して伊藤と面識があったことは確かである。その後岡倉は東京美術学校校長として国家と美術の立場を National Individuality として執行した岡倉にとって、伊藤博文との関係は、フェノロサ夫妻の帰米後も継続していたと考えられる。現に伊藤は金子より 2 週間早く横浜を発つ岡倉に、自分の女婿末松謙澄を同船させ、出航の 2 日前に開戦した日露戦争についての演説で激励を行っている。

第1節　日露戦争勃発と伊藤博文の船上演説



（伊藤博文と黄海海域で交戦中の日本艦隊）

日露戦争は、1904 年 2 月 8 日の日本の連合艦隊による旅順港外のロシア艦隊攻撃に始まり、主に中国東北部（満州）や日本海を舞台にして戦われた日本とロシアの戦争であり、アメリカ合衆国大統領の斡旋で 1905 年 9 月 5 日のアメリカのポーツマスで講和条約が締結した約 1 年 7 カ月間の戦いであった。

日本がロシアとの戦争に踏み切った理由は、1904 年の 1 月になって、日本は戦費を外債により賄うとの方針がほぼ固まったこと、日本が英国の仲介でアルゼンチンから購入した二隻の巡洋艦が 1 月 26 日にコロンボを出港し、シンガポールを経て日本へ向かい回航中であること、 2 月にはウラジオストックの司令官が日本の貿易事務間に対し戒厳命令と同時に日本人の居住を禁止するため引きあげの準備をしておくように通告したこと、 さらに旅順にあったロシア艦隊が、修理中の一隻を残して全て出航し行方不明となり、同艦隊が日本海軍に対する

先制攻撃、あるいは朝鮮占領に向かったのではないかという可能性から海戦の時期は目前に迫っていたところ、2 月 4 日に開かれた五元老と五閣僚の参席による御前会議において山本権兵衛海軍大臣による「戦機すでに熟した」との意見から白熱した論議が交わされた、という以上の結果からロシアに対する国交断絶の最後通告案を日本政府は最終決定したのである[172]。

日本美術専門家としての名を世界に示した『東洋の理想』出版の 1 年後、岡倉は日本画家の横山大観、菱田春草、そして漆専門の六角紫水ら三人の弟子たちを引き連れてアメリカへ出航した。彼は MFA（ボストン美術館）の嘱託として日本部の整理をするため日本郵船最後の伊代丸で横浜から出航するのだが、この日 2 月 10 日、政府から米国経由で軍資金の援助を獲得するため英国へ発つ女婿の末松謙澄子爵を見送りに来た時の首相伊藤博文が、伊予丸の船上で国家の非常時について演説を行った。この時の伊藤の演説の様子を横山大観は「渡米出帆の日」で回想している[173]。

> 「日露の国交もいよいよ断絶となり、本日は宣戦布告のご詔勅が下った。太平洋には、露国の軍艦がしきりに出没しているということだから、この船も果たして無事シアトルにつくことができるかどうかわからない。私の身もまた同然で、この船が太平洋の藻屑になるかもしれないと同じように、私の身もまた朝鮮の土となるかも知れぬ。いずれにせよお互いたおれるまで皇国のために尽くしましょう」

と悲壮な口調の演説であったという。伊藤の船上演説の後、岡倉も同じように演説し、この後彼と末松はシアトルに到着するまでの 1 ヶ月間、勝利に向けた議論に終始する。3 月シアトルに到着後、彼らは汽車でニューヨークへ向かった。ニューヨークは幕末 1860 年に日米修好通商条約の文書交換をワシントンで行うために幕府から派遣された武士の視察団が訪問した最後の場所で、当時の視察団を熱狂的に受け入れた喧騒がまだ残っている土地であった。

172　松村正義『日露戦争と金子堅太郎』新有堂,1980

173　横山大観『大観自伝』講談社学術文庫 p.62「渡米出帆の日」より.

第1項　「第一声」in New York

JAPAN'S GREATEST CRITIC TELLS OF JAPAN'S ART

JAPAN'S GREATEST CRITIC TELLS OF JAPAN'S ART

On His Way to See Rare Boston Collection, Mr. Okakura Stops Over in New York with Three Noted Bijinsin Artists—They Are of the School That Upholds Native Ideals Despite the Westernized Notions of the Mikado's Government.

アメリカ到着時の岡倉は、「岡倉氏は英語を話すだけでなく英文の著書もあり、その文章の純正さはロンドン・アカデミーの賞賛するところである。それは最近イギリスで出版された『東洋の理想』であり、やがてこちらでも翻刻されることになろう[174]」と評価されていた。岡倉らの表面的な目的はニューヨーク、ボストン、ワシントンで彼らの新しい日本絵画の発表を行うことであり、またボストン美術館有力理事であるビゲローの依頼でフェノロサ（BOSTON PUBLIC LIBRARY より 2011.3）の解雇以後そのままになっていた日本美術コレクションの調査に当たることであった。しかし個展の状況や、美術館での調査の結果により、アメリカ滞在するかどうかは未定であるという曖昧さを含んでいた。

3 月 2 日、五つ紋の付いた羽織、着物、袴、雪駄に身を包んだ横山大観、菱田春草、六角紫水が報道陣の写真に収まる中、ニューヨーク・タイムズのインタビューで日露戦争を背景に軍資金の枯渇問題、アメリカの共感の獲得、そしていかに戦争に勝利することを自分が望んでいるかについて「第一声」を発する。

> 「日本ではほとんど話に登らないが我々は戦争を強く感じ、しばしば社会的娯楽―球技やパーティー、レセプション等はすべて中止され、映画館は閉鎖されています。大変な倹約が帝国中の富裕層の間で行われ、戦争資金に貢献するために我が国のすべての階層が英雄的犠牲を払っています…我々日本はアメリカの共感と報道姿勢を高く評価します。土曜のセンチュリー・ホテルにおいては、その共感は大変率直であったため、

174 1904 年 3 月 20 日の *The New York Times* に掲載「日本随一の批評家、日本の美術を語る」（『岡倉天心全集別巻』p.187）

私はこの歓迎ぶりについては礼儀として、ロシア擁護にならなくては！
といったほどです」

とインタビューの中でロシアとの戦争に終始している。さらに日本の女性はロシアを打ち負かすのを大変切望して、すべてを犠牲にして新しい着物を買うことさえ控えており、公的機関の協力については、日本では戦費調達のためにはどんな犠牲でも払おうとするほど、深刻な国民感情が広まっている、と大倉美術館の犠牲を例に挙げる。戦費を調達するために収蔵品の売却を提案し、ヨーロッパやアメリカで売り建てを行いその売上金を日本の戦争資金として寄付することを提案している状況であり軍資金調達に苦しむ民衆への理解を求める。そして岡倉は着物を着た大観、春草、六角紫水とともに写真には加わらない理由を、「日本がロシアを撃退したら、私の写真を撮っていただこう」と日本の勝利へ思いで締めくくった。この言葉には、岡倉のアメリカへ渡航の強い意志が表れている。

彼の表向きの目的は、ビゲローの依頼で、フェノロサの解雇以来そのままになっていた日本美術コレクションの調査に当たることであることと、ニューヨークで彼らの新しい日本絵画の発表を行うことであった[175]。しかし大観達の渡米については、漆の専門家である六角紫水はボストン美術館で蒔絵の修理や整理をする仕事が決定していたが、大観と春草はインドから帰国して成すこともなく困惑していたときに岡倉が「ひとつ、アメリカに行ってみたらどうか、幸い自分も来年早々にアメリカに行く用事があるから、一緒に行くことにしよう」と誘ったのだという。個展の状況や、美術館での調査の結果により、アメリカに滞在するかどうかは未定であるという曖昧さを含んでいたのである。岡倉は渡米以前の 1903 年にはボストン行が決定していたが、そこでどのように日本主張の活動を行っていくかは未定であったのである。

[175] ニューヨークでの評判が良かったため、第二回目のニューヨークでの個展を開催し、その後ボストン、ワシントンでも開催している.

第２項　渡米の真意

横浜を出港して十日後、太平洋において仁川戦勝の祝賀会が開催され、岡倉は末松と共に演説した。注目すべきはその内容であり、ここに岡倉のアメリカ行きの覚悟が表れている。

> 「思ふに、現今の如き国家死活の大問題二逢着しては、我国民が身をすて家をすてて顧みず一片の丹心敢えて邦家の為に尽くさんとするの熱情決心二至り、即ち一ならん。されとも尚和するべからざるは、其の赤誠の溢るる余り、往々にして偏狭に失し、広き世界の民なるに反する思想之為に出でざる事是なり。吾人は今や一躍して世界の一等国二位せんとするの希望なき二あらず。是に於いてか吾人はますます此国家の面目を維持するの決心を養ひ、常に大国民たる二恥ぢざる態度を保たざる可からず」（『岡倉氏演説大意』）

この時明らかにした岡倉の使命感は、ニューヨークでのインタビューに現れた着物姿の第一声、セントルイス万国博覧会の臨時講演へと徐々に彼の中で広まり始めるのである。

伊藤は、何故アメリカ合衆国に仲介を依頼することになったかの理由について、

> 「日露戦争が何年続くかわからないが、もし勝敗が決しなければ両国の中に入って調停する国がいる。イギリスは我が国と同盟国であり、同じくフランスはロシアの同盟国であり、ドイツは日本に対してよくない態度をとっており、今回の戦争もドイツ皇帝が多少そそのかした形跡があるので、ドイツの調停の地位には立てない。故に残るのはアメリカ合衆国だけである」

と腹心の金子堅太郎に伝えている[176]。

岡倉のボストン人脈は、モース、フェノロサといったボストン出身の外国教師はもちろんのこと、ハーヴァード大学出身のアメリカ大統領に最も近いビゲローの存在である。政府の対ロシア外交の悪化が、政治家ではなく英語に堪能で美

---

176 『日露戦争と金子堅太郎』p.8

術専門家という立場の岡倉へのアメリカ派遣について、会議で検討され美術学校の校長解任につながったと十分考えられる。岡倉の東京美術学校校長非職とマッキンリー大統領からルーズベルト大統領へと移行する流れが重なるのは、まさに日本が日清戦争後のドイツ、フランス、ロシアによる三国干渉で南下をもくろむロシアが満州に停滞し、政府が仮想敵国としてロシアを警戒する時代といえる。当時アメリカは米西戦争で拡大を図っていたが、極東では遅れをとり、日本との関係はアメリカにとって特に重要な意味をもっていた。日本は短期間で戦争を有利に終了させるために、アメリカ大統領の斡旋が必要であり、アメリカは極東進出を望んでいたことから両国の思惑は一致していたのである。岡倉が東京美術学校の校長を罷免された 1898 年はアメリカもスペインとの戦争を開始し、国内事情も悪化していた。マッキンリー大統領時代に副大統領として頭角を現してきたのはセオドア・ルーズベルトである。

岡倉の渡米の目的は、ビゲローの推薦状を持参してボストン美術館東洋部の仕事を引き受け、長期にわたりボストンに拠点を移動することであったが、個展の状況や、美術館での面接の結果により、アメリカに滞在期間は未定であった。

第 3 項　ニューヨークの個展

岡倉のアメリカ渡航のもう一方の目的は、日本美術院の海外展を催し、彼らの作品の評価をアメリカで問うことであった。

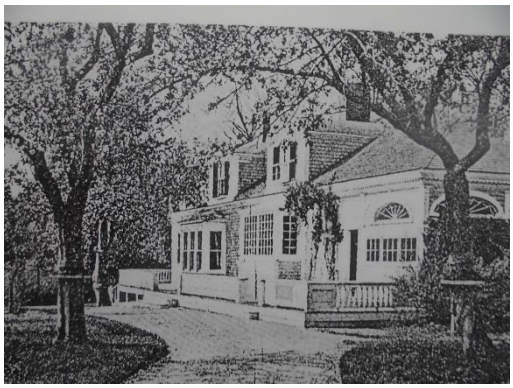
インド旅行からの帰国と『東洋の理想』の出版により、1903 年の岡倉は非常に忙しい年となった。『東洋の理想』の出版は成功し、この本の書評は、イギリスでは、「「アジアは一」の言葉により、広大なテーマから始められており、アジア文化の宝物は日本に存在することは事実であるが、さらに多くの古美術が中国に保存されているという根拠から、中国、インドに重点をおきすぎている[177]」と評価され、アメリカでは、「日本がアジアの理想と文化の宝庫となった理由は、島国により先祖伝来の本能が保存され、征服されたことのない民族の誇らしい

[177] ロンドン「タイムズ」紙 1903 年 3 月 6 日付

自己信頼があり、不断の君主制という独特の条件のために、日本は現代の強国に列しながらも依然としてアジアの精神に則っている[178]」、と評価された。いずれにせよ東洋の日本人が英語で自国を主張した『東洋の理想』の出版後の岡倉の海外での評価は高まり外国での活動基盤ができたのである。

（センチュリー・アソシエーション）

第一回日本美術院展覧会はアメリカで第一流のセンチュリー・アソシエーションでの開催（1904.4.12-1904.5.1）に決定したが、開催の決定には難しい規定があり、当時ニューヨーク第一流の画家ジョン・ラファージの協力を得ることになる[179]。センチュリー展の批評の真っ先にやり玉に挙がったのは、作品そのものではなく展示の仕方であった[180]。作品は掛け軸に表装されず額にも入っていない状態で、絹に描かれた絵は四角い木の薄板に張られ、金色の紙で縁取りされているが、およそ絹地の絵にとって不適用であるというのである[181]。内容ではなく形式を批判したのは、日本画について理解できなかったのか、それとも自分達の形式を重んじるべきであるとしたのかわからないが、とにかく展覧と即売を期待してきた客は、価格の高い方から購入した。



（ケンブリッジのオリ＝ブル邸）

日本美術院の初めての海外展覧会出品に大観と春草はホテルの床に新聞紙をひいて精魂こめて描き、絵画の表層は、横一尺八寸（54.5cm）縦二尺七、八寸（約 87cm）のスケッチブックに仕立て、約 2 カ月間に二

178 ニューヨーク「ザ　アウトルック」1904 年 4 月 9 日付

179 ジョン・ラファージ（1835-1910）：アメリカ美術協会会頭。当時アメリカ最大の画家で日本美術について造詣深く、岡倉一行のために熱心な援助を惜しまなかった. 彫刻家、装飾美術の大家

180 1904 年 4 月 29 日付　ニューヨーク・タイムズ紙

181 堀岡弥寿子, 2000,『岡倉天心との出会い』近代文芸社, p.83

人で 20 枚ずつの作品を描き、額仕立てにした。価格については、一番高くて 1 万 2 千ドル、一番安くて 3 千ドルとした。日本では 20 円（10 ドル）の値段しかつかない彼らの絵に、岡倉の指示通り高価格を付けたのである。センチュリー・アソシエーションでの展覧目録によると、絵は 3120 ドルを筆頭に、平均 1200 ドルで大観は 10 枚、春草は 5 枚が売れた。売買された金額は莫大なもので、この一回の展覧会だけで 3 万ドル（現在の 1 億 2000 万から 24 億円にあたる）という[182]。大観によると、この莫大な収入の中でその三分の一を岡倉に渡し、あとは生活費に充てその中から経営の苦しい日本美術院に送金したという。岡倉は何にこの莫大な金額を充てたのであろうか? この当時大観と春草は、朦朧体という絵画に取り組んでいた。彼らは古画研究から一種の自覚を促され、岡倉の指導により絵画制作に一つの新しい手法を試みようとしていた。その朦朧体で、空気とか、光線とかの表現に、空刷毛を使用して一つの味わいを出すことに成功していた[183]。日本では穏健な土佐派の画風が喜ばれていた時代に、彼らの絵画は、橋本雅邦や狩野芳崖の絵とは一線をひいた斬新な新しい画風であったが、新しさゆえに保守的な美術界からは注文は一切なく、罵倒以外には何もなかったと大観は回想している。この新規な試みは急進派として日本ではほとんど売れることはなかったが、アメリカでは新しい日本画としてこれを受け入れたのである。しかし近代化の日本に活躍する時期を待たずに、菱田春草は明治 42 年に彼の一大傑作といわれる「落葉」を出品し、翌年「黒猫」を最後に、眼病の悪化により 1911 年（明治 44）9 月 16 日に 38 歳で死去した[184]。岡倉が大観、春草、下村観山などを海外留学に頻繁に送り、彼らが西洋の博物館の絵画に接すことで日本画の幅を広げ、また朦朧体により古典的日本絵画からの脱脚にこぎつけることができたのは、弟子の将来性や国際的視点から見た先見性であり、貴重な指導や機会を彼らに惜しみなく与えた結果であったのである。

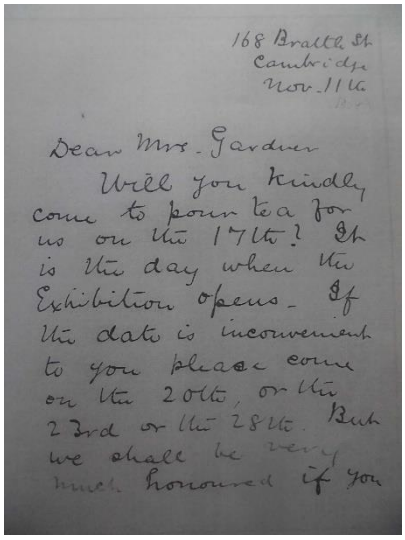
第一回目のセンチュリー・アソシエーションの成功により、第二回目のナショ

---

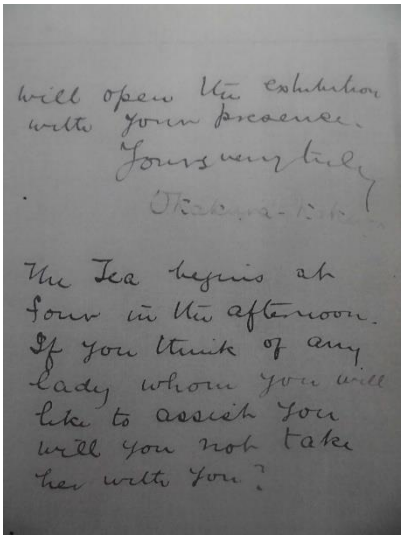
[182] 2001,『名品流転』日本放送出版協会 p. 190-191
[183] 1981,横山大観『大観自伝』講談社 p.84
[184] 春草の死は岡倉にとって打撃でありその才能を非常に惜しんだといわれている.

ナル・アーツ・ギャラリーでの展覧会が決定していたが、その間にボストン郊外のケンブリッジ市ブラトル街のオリ＝ブル邸で２回目の海外展が開催された。期間は 11 月 17 日から 28 日迄で、大観 25 点、春草 21 展、英国から下村観山の 2 点が加わり紫水の漆器 5 点を合わせて 53 点となった。新しい日本画はアメリカで大成功を収めた。

岡倉はこの時もう一つ新しい企画として茶会をオリ・ブル邸で開催している。


168 Brattle St
Cambridge
Nov. 11th

Dear Mrs. Gardner
Will you kindly come to pour tea for us on the 17th? It is the day when the Exhibition opens. If the date is inconvenient to you please come on the 20th, or the 23rd or the 28th. But we shall be very much honoured if you


will open the exhibition with your presence.
Yours very truly
Okakura-Kakuzo

The Tea begins at four in the afternoon. If you think of any lady whom you will like to assist you will you not take her with you?

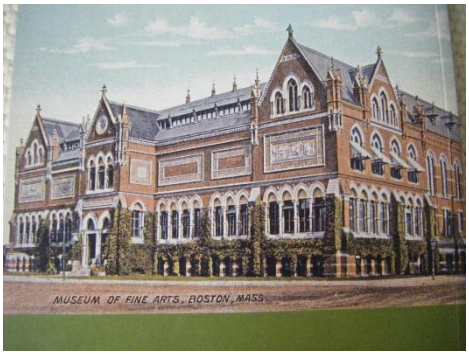
日本式のもてなす側の主役にイザベラ・ガードナー夫人を招待したもので、ボストンで初めての正式な茶会として招待状が残されている。此の記念すべき茶会が日本から来た若い画家

1904.11.11 ガードナー夫人への茶会招待状（B. P. L より.2011.2 ） たちのアメリカでの即売の成功もあって開催されたことは、新しい日本画と日本らしさをアメリカで問い、受け入れられたといえる。ボストン美術館日本部の活動として 1905 年 12 月 18 日、岡倉は館蔵品の主として茶道具の仕覆[185]などの制作奉仕を、美術館の友の会メンバーの婦人達に呼びかけたスピーチを行っている[186]。岡倉の英語は大げさであり、芝居がかったものであったが、着物姿の英語スピーチ[187]は彼女たちに人気をはくし、館の所蔵する品々の一点ずつをそれぞれ婦人達に担当してもらい、茶道具に触れ仕覆を制作する実践的な方法で彼らの異文化理解を進めている。

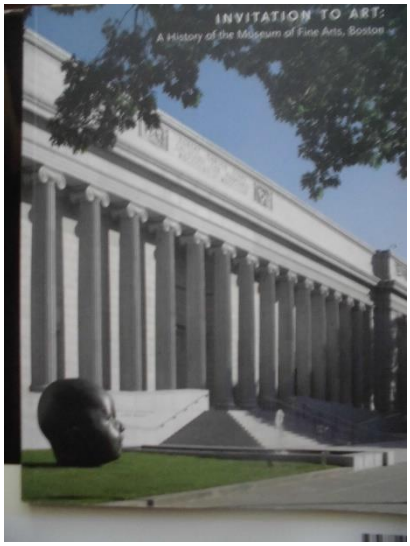
---

185 茶碗や陶器の茶入れなどを絹の布で包む袋のこと.
186 岡倉天心, 1980,『岡倉天心集　2』平凡社 p.491
187 岡倉天心, 1980,『岡倉天心集　2』平凡社 p.92「ボストン美術館中国日本部の仕事に協力する夫人たちへの談話」

第 2 節　ボストン美術館就任[188]



（コプリープレイスの旧 MFA）



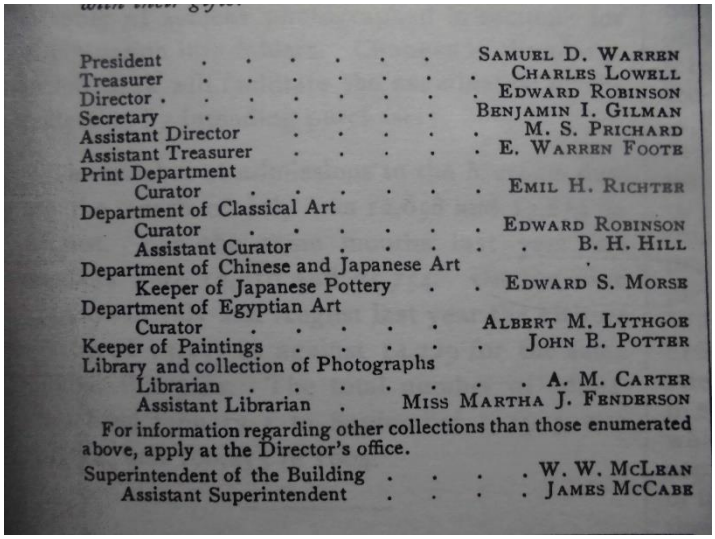
（ハンティントンの新 MFA,）

ボストン美術館（MFA）は、1876 年にコプリープレイスに正式に美術館として開館し、収蔵品の増大にともない 33 年後の 1909 年、当時急速なテンポで発展しつつあった現在のバックベイのハンティントン通りに移動した。神殿風の建物の設計は G・ローエルによる。1981 年には中国系建築家 I. M.ペイのデザインによる西館が加わり、2010 年秋に増築のアメリカ館が新ウイングとして加わった。日本の開国は、ヨーロッパを中心としたジャポニズムに魅せられた人々を刺激し、多くの日本コレクターが名品を競って蒐集し、さまざまな美術館に収めた。ボストン美術館紀要には、館がこの時代にエジプトの発掘にかかわり多くの遺産を収集したことが記載されているが、中でも日本国外では質と量ともに最大の日本美術コレクションを所蔵するボストン美術館を誇る。

実際に美術館が開館したのは、1876 年 7 月 4 日のアメリカ建国 100 年を祝う独立記念日の当日だった。ヨーロッパの大都会に比べてボストンに欠けているものはフル編成のオーケストラとミュージアム（美術館または博物館）であり、これを建設することで世界の大都市の名を得ようとした市民の意見を背景にして創設が決定されたのである。ボストンに美術館を作ろうという計画は、南北戦争後 5 年を経た 1870 年に起こった。当時文化の中心はアセーニアム（学芸協会）であったが、貴重なコレクションが 1869 年に寄贈されることになり、また、ハーヴァード大学のハーヴァードカレッジでも所蔵品を「展示する場所がない」と

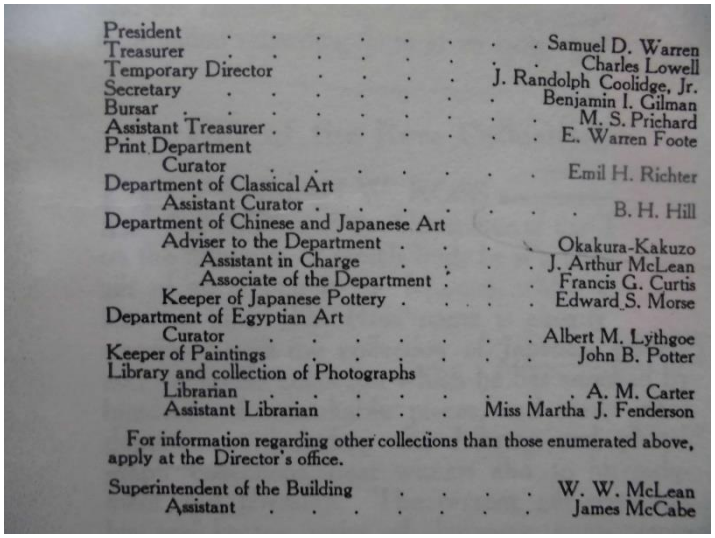
188 The Museum of Fine Arts, Boston

いう要望が起きたことからマサチューセッツ州議会は「美術作品の保全と展示、美術作品を蒐集し、そのコレクションを維持発展させ、美術教育を施すための母体として美術館を創設する法律」を 1870 年 2 月 4 日にわずか 1 日の審議で成立させた。その美術館組織法によって美術館は財団となり、地元の有力者 12 人の理事と、ハーヴァード大学やマサチューセッツ工科大学等から選ばれた 17 人のあわせて 29 人の理事によって理事会は構成されることになった[189]。岡倉はニューヨークでの個展準備をそこそこにして、早速ジョン・ラファージの紹介状をもってボストンへ立ち、彼の助言通りまずイザベラ・ガードナー夫人のもとを訪問しボストン社交界の花形への挨拶を終えた後、ビゲローの紹介状をもってボストン美術館面接を受け、現職のキュレーターのチャルフィン[190]の代わりに職に就いた



President . . . . . Samuel D. Warren
Treasurer . . . . . Charles Lowell
Director . . . . . Edward Robinson
Secretary . . . . . Benjamin I. Gilman
Assistant Director . . . . . M. S. Prichard
Assistant Treasurer . . . . . E. Warren Foote
Print Department
Curator . . . . . Emil H. Richter
Department of Classical Art
Curator . . . . . Edward Robinson
Assistant Curator . . . . . B. H. Hill
Department of Chinese and Japanese Art
Keeper of Japanese Pottery . . Edward S. Morse
Department of Egyptian Art
Curator . . . . . Albert M. Lythgoe
Keeper of Paintings . . . . . John B. Potter
Library and collection of Photographs
Librarian . . . . . A. M. Carter
Assistant Librarian . Miss Martha J. Fenderson
For information regarding other collections than those enumerated above, apply at the Director's office.
Superintendent of the Building . . . . W. W. McLean
Assistant Superintendent . . . . James McCabe

（MFA 紀要 1905.10 中国・日本部 Edward Morse）



President . . . . . Samuel D. Warren
Treasurer . . . . . Charles Lowell
Temporary Director . . . . . J. Randolph Coolidge, Jr.
Secretary . . . . . Benjamin I. Gilman
Bursar . . . . . M. S. Prichard
Assistant Treasurer . . . . . E. Warren Foote
Print Department
Curator . . . . . Emil H. Richter
Department of Classical Art
Assistant Curator . . . . . B. H. Hill
Department of Chinese and Japanese Art
Adviser to the Department . . . . Okakura-Kakuzo
Assistant in Charge . . . . J. Arthur McLean
Associate of the Department . . . Francis G. Curtis
Keeper of Japanese Pottery . . . . Edward S. Morse
Department of Egyptian Art
Curator . . . . . Albert M. Lythgoe
Keeper of Paintings . . . . . John B. Potter
Library and collection of Photographs
Librarian . . . . . A. M. Carter
Assistant Librarian . . . . Miss Martha J. Fenderson
For information regarding other collections than those enumerated above, apply at the Director's office.
Superintendent of the Building . . . . . W. W. McLean
Assistant . . . . . James McCabe

（MFA 紀要 1906.4　中国・日本部 Okakura Kakuzo）

---

189 掘田謹吾,2001,『名品流転―ボストン美術館の「日本」』NHK 出版 p.43

190 ポール・チャルフィン：1902 年に雇われた東洋部の部長で、専門は江戸時代の欄間であり、綜合的な日本美術の専門家ではない.この時期岡倉はビゲローから東洋部への職を承認されていることから、何故日本美術家でもないチャルフィンを雇用したのか疑問である．さらに岡倉が来館することは彼に知らされておらず、いきなりの岡倉登場により彼は同時に解雇されたといういきさつがある．岡倉のボストン美術館雇用はビゲローに

のである。チャルフィンは 1905 年まで MFA の紀要に東洋部のキュレーターとしてモースと共に名前が記載されていた[191]。

1905 年 10 月の中国日本部にはモースの名前が記されているが、同年の 5 月には日本美術院のメンバーである Okakura Kakuzo がアドバイザーとして採用したと報告され、1906 年（Vol.IV-no.19）4 月の紀要に初めて岡倉一人が顧問として役員欄に名を記載された[192]。ボストン美術館で当初任された仕事は、フェノロサの残した日本美術コレクションの目録の作成であったが、赴任してすぐに中国・日本部に対する独自の構想を定義し、自分の存在の必要性を強く押し出す。

エドワード・ロビンソン館長の記録によれば、岡倉は、

> 「この美術館において日本美術は、真面目に取るに足らないものとして、まるで気まぐれか冗談のように扱われている。私は、館の東洋美術コレクションが西洋において代表的なものになるよう切に願っている[193]」

と語っている。つまり彼はここで一時的なコレクション作成の仕事をするのではなく長期的に目標を掲げて日本美術コレクションを充実させていく旨を最初に掲げたのである。この件に関して有力理事のビゲローは彼への推薦状に「東京

より個人的に決まっていたが、それほど不確定であった.「ビゲローが急に岡倉を呼んだ動機は確かではない」と現在のボストン美術館日本部のアン・ニシムラ・モースは図録(p.138)で述べているが、岡倉は自分こそが日本コレクションを適切に保存し、理解、判断することの確実にできる人物であるとしてボストン美術館に職を得ることが必要であった. 彼は画家の横山大観、菱田春草の他に漆工芸専門家の六角紫水を同行させており、他のルートで刀剣専門家の岡部覚弥も加えて、すでに修理に準備を整えて計画的にアメリカに渡航している.

[191] 1903 年 March から始まるボストン美術館紀要 Vol.1-no.1 と Vol.I-no.2, May には、Department of Japanese Art― Curator *pro tempore* に Paul Chalfin が、Keeper of Japanese Pottery に Edward. S. Morse の名が記されている. Vol.1-no.3, July から Chalfin は Curater に昇格する. 1904 年 Vol.II-no.1 から部の名称が Department of Chinese and Japanese Art に変更される.1904 年 5 月の紀要（Vol.II-no.3）に、"The Museum has secured the service of Mr. Kakasu（ママ）Okakura…" とあり、彼の採用を報告している. 1905 年の 10 月からチャルフィンの名は消え、モースの名だけ残る.

[192] '*Museum of Fine Arts Bulletin*', VoL.IV. Boston, April, 1906 No.19

[193] 名古屋ボストン美術館図録,1999,『岡倉天心とボストン美術館』p.131,138

美術学校校長である岡倉覚三氏が当館のコレクションを調査できるようできるだけ便宜を図るように」と指示し岡倉が必ず採用されるように配慮している。同じくビゲローは3月16日付の理事・評議委員会委員ジョセフ・クーリッジ宛の岡倉の紹介状には、彼が日本で最高の美術評論家で英語学者であり、評議委員会が給与を支給しないなら、自分が支払うとまで断言する[194]。岡倉の着任はMFAのためでもあり、アメリカでの仕事の拠点を求める岡倉のためでもあったのである。1904年3月25日から岡倉はMFAでの勤務を開始する。彼は中国・日本美術部を東洋美術発信拠点として発展させるために、まず美術館に働きかけて予算を獲得し、それを資金に良質なコレクションを蒐集し、このコレクションを展示して刊行物を紹介するとともに、教育プログラムを通して参観者の東洋美術への理解を促進していった。

ボストンは、南北戦争（1861-65）後依然としてアメリカ第二の大都市であった。政治はワシントンに、経済、文化、藝術はニューヨークに、工業は中西部に移行したが、ボストンは学術文化、ハーヴァード大学、マサチューセッツ工科大学等が存在する学術文化中心の都市であった。ボストン交響楽団もその頃設立されている。産業では漁業、造船業、中国貿易を中心とする海運業が盛んになり、アメリカにおける「産業革命」が始まった。セーラムにあるピーボディ・エセックス博物館にはその頃の中国貿易の痕跡が多く残されている。セ―ラム出身の若きフェノロサが育った環境は、中国貿易や、日本近海への鯨漁産業が隆盛であった極東アジアが身近に存在したのである。

第１項　ボストン・ブラーミンズとの交流

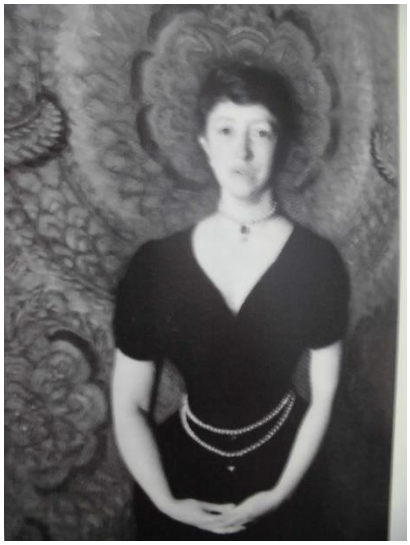
ボストン・ブラ―ミンズとはボストンに根を張っていたハーヴァード大学出身の日本研究者・日本愛好者に対して使われた用語で「ニューイングランドの名門（貴族）の出で何世代にも及ぶ知的環境の家庭に育った人々」と定義される[195]。

---

194 図録『岡倉天心とボストン美術館』p.130

195 岡倉登志,「岡倉天心とボストン・ブラ―ミンズ（1）―ジョン・ラファージを中心に』東洋研究, 2003

その中でビゲローをはじめとして、画家のラファージ、ガードナー美術館オーナーのガードナー夫人は彼のアメリカ滞在を非常に擁護した人たちである。ボストンでの活動に、ガードナー夫人との　親交は何においても重要であることをラファージは岡倉に伝えていた。



（イザベラ・ガードナー夫人）[196]

1850 年生まれのウイリアム・S・ビゲローは、ボストンがアメリカ第一位の大都市を目指して、美術館を通して文化芸術に力を入れようとしていた頃に MFA の有力理事の息子として誕生した。彼はハーヴァード大学を 1871 年に卒業後医科大学に進み、1874 年 に卒業後はヨーロッパへ留学した。そこでの 5 年間の遊学中に、当時パリで広まっていた日本の浮世絵や根付などに興味を持ち、東洋の精神的美学に魅了され、日本への動き を見せるのであるが、そのきっかけとなったのは、大森貝塚を発見した動物学者エドワード・シルベスター・モースが 1881 年にローウェル協会で行った日本についての連続講義であった[197]。1982 年 5 月に三度目の来日をするモースに同行して 6 月 5 日初めて横浜に到着した。ビゲローはその夏モース、フェノロサと共に京阪旅行を重ね、その後はフェノロサの教え子でもあった岡倉覚三を通訳として伴って蒐集を広げる一方で、岡倉が文部省官僚としてフェノロサと共に 1886 年欧州視察旅行にでかける際にも同行している。ビゲローの蒐集は多岐にわたり、MFA 日本部の基礎となっており、彼の日本コレクションは東洋部全体の半数以上に上るといわれている。彼がこのようなコレクションを MFA にもたらすことができた背景には、父親が MFA の有力理事であり、美術館として成功するための自覚を自ら持ち、個人的には日本

[196] Isabella Stewart Gardner（1840-1924）: アメリカの大富豪. 若い頃から美術に興味を持ち、ヨーロッパ旅行などで美術品を蒐集し、ボストン時代の岡倉に大きな庇護を与え、生涯深い交流を持った.自宅兼美術館としてガードナー美術館（フェンウェイ・コートと呼ばれた）を 1903 年 1 月 1 日に設立.

[197] 松村正義、1980『日露戦争と金子堅太郎』新有堂 p.363

美術コレクションへの興味が強く、富裕であったことがある。質の高い蒐集物に恵まれた理由は、モースやフェノロサといったハーヴァード大学卒業生が実際に日本へ高給取りの教師として派遣され、集中してコレクションを蒐集できたことや、明治維新からまだ間もなく、良質な日本伝統絵画がかつての武士階級に多く残されていたことから、政府高官とも親睦を深めていた外国人教師達は、多くの政治家との人脈を持ち、彼らの紹介で質の高い日本伝統美術の蒐集機会を持てたのである。ビゲローはまさに最も外国人に有利な時に来日し、あらゆる伝統芸術を求める。彼はそれから 7 年間日本に住み、東西文明が動態する激動の時代に、伝統の崩壊や美術運動の中で、経済的援助をおしみなく提供しながら、ビゲローは、日本とアメリカ両国の政治的動きの中で、1889 年（明治 22）6 月に米国へ議員制度調査のために渡航する金子堅太郎や、後に帝室博物館総長になった九鬼隆一などのために、セオドア・ルーズベルトをはじめ母国の有力な知己あてに最新の便宜を図って紹介状を書いたのである[198]。

(ジョン・ラファージ)

アメリカのジャポニズムの画家として著名なジョン・ラファージ（1835-1910)と岡倉の関係はラファージが 1886 年(明治 19)にジャーナリストで政治家のヘンリー・アダムスと日本を訪れ、ビゲローと親しかった岡倉との交流を持ったことが始まりである。岡倉とは 20 歳の年齢差のあるラファージは、彼のために日本美術院の二度の海外展を準備し、セントルイス万国博覧会における代理講演を岡倉に提供した人物である。9 月 24 日、セントルイス万国博覧会の藝術・科学会議において絵画における近代的課題」“Modern Problems in Painting”のテーマの講演は、美術・科学のセクション C であり、近代美術の部門で行われたものである。

198『日露戦争と 金子堅太郎』p.364

セントルイス万国博覧会はルイジアナ買収 100 周年を記念して 1904 年 4 月 30 日から 12 月 1 日迄の期間、アメリカ合衆国ミズーリ州セントルイスで開催された。日本にとって有利であったのは、日本よりはるかに大国で富裕なロシアが日露戦争による国家財政の困窮を理由に、参加を取りやめたことで、美しい日本文化を印象付ける効果が生まれたことである。この博覧会は米国で開催された世界博覧会の中でも最も優れて雄大で壮観なものであったといわれている。日本庭園には紫宸殿や金閣寺に似せた建物を配し、日本建築の粋を極めたこれらの建築物はその後の米国の建築業界に多大な影響をおよぼし、また万国学術会議における我が国の学者の講演は賞賛されるなど、全てにおいて日本への賞賛の的となった。この壮大な博覧会に日本は戦費を割いてまで約 82,3000 円を投入して参加し、建築物や準備が遅滞することなく、全て日本人の職人により開幕に間に合わせ、邦人の文化的創造能力の高さを披露することになった。
ここで行われた岡倉の臨時講演「絵画における近代的課題[199]」(“Modern Problems in Painting”) の成功は岡倉に自信をつけさせ、その後の彼の論文に影響を与えた岡倉の講演は、招待されたのではなくフランスのルーブル博物館館長が、都合で出席できなくなり偶然欠員ができたためラファージが天心を推薦してくれたもので、「彼にこの仕事をとってあげるのにだいぶん苦労しました」とガードナー夫人に報告している[200]。

「絵画に於ける近代的諸問題」は東洋画、日本画について講演したもので, 後に「日本的見地より観たる近代藝術」と改題されクォータリー・レビューに記載された[201]。これは特に好評を得て独・仏の二カ国に翻訳された。講演の成功により岡倉が、英文著書『東洋の理想』の作者であるばかりでなく、流暢な英語で日本を主張できる人物であることを内外に示した。

---

199 岡倉天心,1980,『岡倉天心集 2』平凡社 p.62
200 堀岡弥寿子,2000,『岡倉天心との出会い』近代文芸社 p.87
201 横山大観『大観自伝』p.73

第 2 項　イザベラ・スチュアート・ガードナー美術館

（イザベラ・S・ガードナー美術館内部）

イザベラ・ガードナー夫人と岡倉の関係は、彼がボストン美術館の初めて面接に訪れた 1904 年 3 月に始まる。彼女はかつて日本に来日したことがあり、日本美術に興味を抱いていたが、彼女の住居兼美術館であるガードナー美術館は 1862 年の英国のロンドン万国博覧会の水晶宮の外観に似せて作られており、ガラス張りの大天井や内装はイタリア風である。また彼女が特に日本美術に影響されて蒐集を行っていたのかといえば、そうでもなく彼女には専門の美術アドバイザーがおり、日本美術の知識は岡倉によるものであった。特にボストン美術館がハンティントン通りに 1909 年に移転してからは、ガードナー美術館とはたとえ厳寒の季節でも歩いて通える 500m ほどの距離であり、岡倉が茶会をここでよく催していたという記録もあり、企画実行するには近くて便利な距離である。

（MFA ジャパニーズ・コート 1909）

またボストン美術館が 1909 年の新築移転時に建築した中国日本部のジャパニーズ・コートであるが、内装は回遊式になっており、ガードナー美術館の内装と非常によく似ている。これは岡倉が日本空間にこの風情を融合させて、アメリカ人の日本への興味を高めようとしたと考えられる。現在では上部は仏像展示となり、吹き抜け中間に敷板を敷き詰め一階と二階に分けられている。

ガードナー夫人がいかに彼を擁護していたのかは、岡倉と同じくボストンで

ルーズベルトへの接近のために広報活動を行っていた金子堅太郎への対応に現れている。金子は日露戦争が起こると渡米し、ハーヴァード大学の同級生ではあったが面識のなかったセオドア・ルーズベルトと折衝にあたり、アメリカ国内の世論を日本に有利に導く工作を行っていたが順調にルーズベルトとの面会が進まない中で、彼はワシントンで晩餐会を開き、ボストンにいた岡倉にも「燕尾服着用」と服装を指定した招待状が届いた。岡倉は公式の場でも羽織袴で通していたため洋服を持たず、晩餐会に出席できなかった。岡倉からこの話を聞いたガードナー夫人は、自宅で開く晩餐会に「民族衣装」と指定し彼を招待し、着物を持ち合わせていない金子は欠席を余儀なくされたという話が伝わっている[202]。社交界の花形といわれたボストンでのガードナー夫人の権威は高く、ポーツマス講和条約に赴く直前のロシアの外相ヴィッテもボストンの彼女を訪問したが、面会は許されなかった。ガードナー夫人は徹底して岡倉への擁護の姿勢を生涯崩さなかったのである。

第3節　ルーズベルトをめぐる岡倉覚三と金子堅太郎

伊藤博文枢密院議長は、日露戦争開戦が決定した直後に渡米する金子に次のように訓示した。

> 「今度の戦に就いては一人として成功すると思うものはない。陸軍でも海軍でも大蔵でも、今度の戦に日本が確実に勝つという見込みを立てて居るものは、一人として有りはしない。此戦を決める前に、段々陸海軍の当局者に聞いて見ても成功の見込みはないという。併しながら、打ち捨てておけば露国はどんどん満州を占領し、朝鮮を侵略し、遂には我が国家を脅迫するまでに暴威を振うであろう。事茲に至れば、国を賭しても戦うの一途あるのみ。成功、不成功など眼中にない。……（中略）……眼中にないから、君も一つ成功・不成功は強いて措いて問わず唯君があらん限りの力を尽して米国人が同情を寄せるようにやって呉れ。それ

202 『名品流転』p.207

で若し亜米利加人が同情せず、またいざという時に大統領ルーズベルト氏も調停してくれなければ、それは固より誰が往っても出来ない。斯く博文は決意したから、君も是非奮発して米国に行ってくれよ」

この覚悟で日本はロシアと戦争をし、一か八かルーズベルトに折衝を望んだ。欧米の黄禍論を抑えながら、両国の対日友好世論を盛り上げ呼び起こし、日本の立場を有利に展開させようという裏方ながら非常に重要な任務に岡倉をあたらせることにしたのである[203]。

1904 年に政府がセオドア・ルーズベルトへの接近を目的に送り込んだ金子堅太郎は、ハーヴァード大学同窓生としてルーズベルとの関係を記録しているが、すでに 15 年前にビゲローは日本から帰国してすぐに（1882 年から 7 年間日本に滞在した）金子堅太朗に友人としてセオドア・ルーズベルトの名前を将来の大統領候補として告げていた。これが金子のアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトとの会談につながったのであろう。一方岡倉はボストンでの人脈を生かし、MFA を拠点としてボストン・ブラ―ミンズの大物イザベラ・ガードナー夫人と交流し、ボストン美術館東洋部顧問としての日本文化主張、そして『東洋の理想』を発表した日本伝統文化専門家として、英語力を存分に発揮しながらルーズベルトに接近を図っていた。ビゲローはもちろん岡倉にもルーズベルトを紹介していたのである。

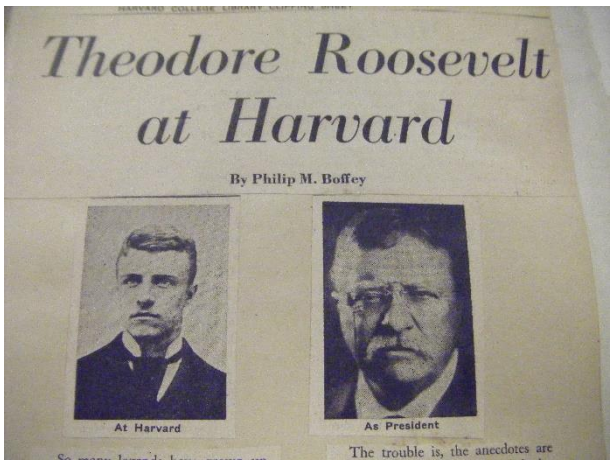
第 1 項　第 26 代アメリカ大統領セオドア・ルーズベルト

ルーズベルトは、ニューヨークボストン市にあるハーヴァード大学の卒業 1 年後の 1881 年に最年少議員としてニューヨーク州下院に選任されたが、初めて名声を得たのは、1886 年にニューヨークで警察の腐敗と戦ったことが始まりである。1898 年の米西戦争勃発時には陸軍　士官としてキューバで小さな連隊を率いて参戦し活躍したことが、マッキンリーの信頼へとつながり、戦後ニューヨークに戻り知事選に出馬して 2 年後の 1900 年に副大統領に選出されたが、マッキ

203　横山大観『大観自伝』ｐ.7

ンリーが暗殺されたため、1901 年ルーズベルトは 42 歳で大統領となった。

1904 年 3 月 10 日、ルーズベルトは、米国のあらゆる公務員や軍人に対して、「中立宣言」し、「日露両国の交戦期間中は局外中立の諸条規を厳守し、言語動作などについても慎重に中立を旨として敢えて偏頗に渉らないように」訓戒した。この年の 11 月はルーズベルトにとって重大な大統領改選の投票日を迎えるため 10 月頃から日露開戦についての仲裁論議についての意見や、日本への同情論的な見解を発言することに全く口を閉ざすようになった。岡倉は 3 月 2 日ニューヨークに到着後これを知る。このような状況の中で、彼は 7 月にセントルイス万国博覧会の臨時講演の依頼を受け 9 月に講演し、一方で 9 月には『日本の覚醒』を脱稿して 11 月の出版に備えた。「中立宣言」の背景には、米国の世論が日露両国の開戦以来、特にアメリカの陸海軍将校の間で急速に日本贔屓へ傾斜することを妬み憂えて、ロシアの駐米大使カシニー（P. Cassini）がルーズベルト大統領に布告せしめたものであった[204]。



（HARVARD UNIVERSITY ARCHIVES より 2011.3）

開戦当初の米国人の対日感情は意外と日本への同情であった。小さな島国の日本が陸の大国ロシアに立ち向かって戦争を始めたと、その勇気は見上げたものであるとたたえていた。米国人の強い気質としてアンダードッグ（負け犬＝弱者）への同情心があった。ルーズベルトのロシアに対する感情を友人に述べた手紙には、ロシアへの批判が述べられている。そして 11 月上旬の大統領選ではそれまで米国始まって以来の高得票で再任が決定した。これは引き続き日本への協力をルーズベルトに依頼することを意味し、「今回当選したことは、将来日本

204　松村正義, 1980,『日露戦争と金子堅太郎』新有堂 p.19

のために必ず援助となるであろう。これは私の最も楽しみなことである[205]」との返書が金子に伝えられたと記録されている。

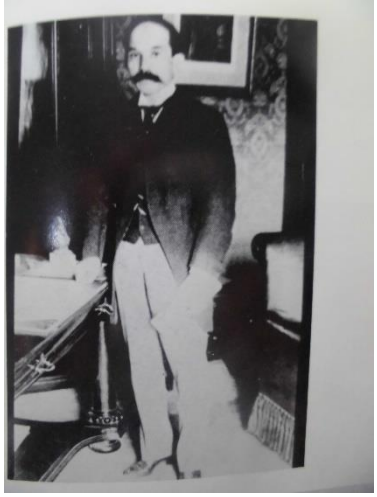
当時のアメリカの状況は、大不況（1873-96）からの脱出をスローガンにした1896年の大統領選挙に始まり、広告スタイルや、キャンペーン技術を駆使した選挙戦を繰り出したウイリアム・マッキンリーが民主党候補ウイリアム・ジェニングス・ブライアンを破り第25代アメリカ大統領に就任し、金本位制を導入して新たな時代に入っていた。1898年に勃発した米西戦争では、スペイン艦隊を壊滅させ90日間でキューバとフィリピンを占領しアメリカは勝利した。この年のパリ協定の結果スペインの植民地であったプエルトリコ、グアム、フィリピンはアメリカ合衆国に併合され、キューバはアメリカの占領下におかれた。マッキンリーは同年ハワイ共和国を併合、同国のすべての居住者がアメリカ国民となった。つまりマッキンリー大統領統治の時代のアメリカは、東アジア諸国における最大の支配勢力となっていたのであり、強力な武力戦略を展開していたのである。1900年マッキンリーは再びウイリアム・ジェニングス・ブライアンと大統領選で打ち勝ち再選されたが、1901年無政府主義者により暗殺される。それに伴い後任となったのが副大統領セオドア・ルーズベルトであった。彼は政治家としてばかりでなく、軍人、作家、狩猟家、探検家、自然主義者として名声を得、ひろくアメリカ国民に人気を博していた。

第2項　政治家金子堅太郎の苦戦

このような中で金子は着任直後からルーズベルトとの接触の困惑さを政治家として味わうことになる。金子堅太郎は、アメリカ周りでロンドンに赴く末松謙澄や岡倉覚三から 2 週間遅れて高橋是清とともにアメリカに到着した。金子堅太郎にこの命令が下った理由は、ハーヴァード大学を卒業し、同国の事情に詳しく、ルーズベルト大統領をはじめ重要な地位にいる人物との人脈によるものである。当時の桂総理大臣は、任務の困難さから彼に特命全権大使、あるいは枢密

205　松村正義, 1980,『日露戦争と金子堅太郎』新有堂 p.193

顧問官など希望通りの地位を与えるとしたが、金子の希望は無官の一人として米国に飛びこむ。そうすれば自分のすること、云うこと、全て自分の責任であり、



決して政府に迷惑はかからない、という理由からであった。もし官職をもっていけば金子の行動は政府からの訓令となる。彼の演説は政府の命令となる。また外国人と有っていろいろ議論した場合、いいすぎたりロシアを攻撃すれば政府に跳ね返って来る。これは地位が高ければ高いほど政治との関係が取りざたされて、使命が果たせないということであった[206]。予想通り金子は、かつての社会地位の高さから、

（1905.8ニューヨークでの金子堅太郎） 執拗に今回の渡米の使命は何かと聞かれ、セントルイス万国博覧会の視察と米国の農工商の現状研究であり、政治的意思をもって渡米したのではないときっぱり報道人の取材に答えたが、この発言はすべて紙上に公開されるほど政治的であった。彼の渡米の重要目的の一つであるルーズベルト大統領との会見は、彼の到着の二週間前に公布された「中立宣言」のために拒絶されていたが、3 月 25 日にはニューヨークからワシントンに乗り込んでいく。この頃ロシアのマカロフ提督の戦死の報告が入り金子が彼を讃えた哀悼の意を表した態度は金子自身に対する人格的尊敬となりその後のアメリカでの評判を高めたが、毎日のように政財界からの食事に招かれ、アメリカ入国への真意を執拗に正されロシア側の報道作戦による世論のロシアへの傾斜や、広報活動にかなり疲弊した様子を見せる。ルーズベルト大統領が、11 月の再選選挙とアメリカの親露派の勢力に対し神経をとがらせ、政治家との会談をほとんど行わなかったため、金子は取り付く島もなくルーズベルトの周辺に近づくのが精いっぱいであった。

金子が入国してからホワイト・ハウスでの大統領との会食は、1904 年 3 月 28 日、6 月 7 日、12 月 19 日の 3 回にすぎない。渡米の表向きの目的は、セントル

206 松村正義, 1987,『日露戦争と金子堅太郎　広報外交の研究 』p.11

イス万国博覧会の視察となっているため、6 月 9 日にセント・ルイスに到着し 2 週間視察のため滞在し、7 月 1 日には休養を兼ねてメイン州のハープスウェルに 4 週間滞在している。年が明けて 1905 年 1 月 7 日には、夜遅く大統領をホワイト・ハウスに訪問し、ドイツ皇帝から同大統領あて親書の内容につき質している。翌日 8 日の深夜、田中盛秀海軍中佐を伴って、前日と同じく大統領をホワイト・ハウスに訪ねて、黄海の開戦の実践談をかたらせるなど、異常と思える行動をとっている。彼はついに渡米から 1 年たった 1905 年 2 月 10 日、小村寿太郎外相に一時帰朝の希望を発電するに至ったが、翌日小村外相は金子の一時帰国の希望表明に対し、暫時待機をもとめる返電を送ったと記録されている[207]。

岡倉は 2 月に帰国の途に就いていた。金子は 2 月 14 日、共和党大会に出席のためニューヨークに来訪したルーズベルトと、ルーズベルトの妹宅で会談する。26 日、大統領とホワイト・ハウスで懇談するも、日露間の平和斡旋に「暫ク超然ノ態度ヲ採リタシ」と告げられる。3 月 20 日のルーズベルトとの午餐会では、何故か日本美術収集家のビゲローもこの会食に陪席しており、引き続きタフト陸軍長官も交えて同大統領と懇談する。ビゲローは政治も語るのである。

金子は 5 月 28 日、午後 11 時にニューヨークの鈴木随行員より、日本艦隊大勝利の電報に接し、6 月 7 日の正午、ルーズベルトと午餐を共にし、同大統領から樺太島の占領を勧告される。14 日、再び首府ワシントンに入り、ルーズベルトと会見する。その後数日間、首府に滞在してニューヨークに戻る。7 月 8 日午前、大統領より「アジアにおける日本モンロー主義」の構想についてうちあけられる。午後には、オイスター・ベルからニューヨークに戻り、25 日の小村寿太郎全権一行のニューヨーク到着を出迎え翌日には対露講和条件につき聴取すると共に帰国の希望を表明するが容れられずニューヨークで小村とルーズベルトとの間の「連鎖の任」に当たることを要請される。29 日にルーズベルト大統領から、日本の対露講和条件に関する前日付親書を受領。8 月 7 日、オイスター・ベイのサガモア・ヒル邸に再びルーズベルトを訪問する。14、18、21 日と同邸

207 『日露戦争と金子堅太郎　広報外交の研究 』年譜 p.551-570

宅に大統領を訪問し交渉する。22 日、深夜ルーズベルトから「日本は賞金のために戦争を継続するなかれ」との機密書簡を受領。27 日、米国通信協会ストーン会長がルーズベルト大統領の親書を携えて来訪。29 日、ポーツマスの小村全権から講和成立の報知に接する。新聞記者が来訪しインタビューを求む（金子堅太郎年表)。岡倉が帰国して大統領との接触は途絶えたが、ビゲローがその直後に金子とルーズベルトとの会食に出席していて、その席で双方の進展を取り持ったと思われる。しばらくして日本が海戦で勝利したため、本格的にルーズベルトは金子と交渉を始める。小村は最後まで金子に交渉させ、戦争終焉に向けて戦略的に動く。ポーツマス講和条約が 1905 年 9 月 5 日に締結した。岡倉と金子へとつながる緊迫した日米交渉には、岡倉の友であるビゲローの存在が大きかったのである。

第 3 項　美術家岡倉覚三と「大統領のテーブル」

金子が苦戦を強いられる中で岡倉は、意外なところからルーズベルトに接近していた。この頃の様子について大観と紫水の対談では、ルーズベルトは毎月一回の「大統領のテーブル」と称する夕食会を開き、各界の有名人を招いては話を聞き、天心は毎月それに呼ばれていたと回想し、さらに大観たちは、天心先生はおそらくその会の席上であらすじ(『日本の覚醒』)を伝えたのではないか、とまで話している[208]。岡倉のそばにいて行動を共にした弟子たちの言葉には、真実味が伝わってくる。

『日本の覚醒』出版がほかの 2 冊（『東洋の理想』『茶の本』）と全く異なる特徴は、この本が日露戦争の真最中の 11 月にニューヨークから出版されたこと、そしてルーズベルト大統領が 11 月の再選に向けて準備していた時期と重なっていることである。ルーズベルトの再選が果たせないことも十分考えられた 1904 年の 11 月に出版されたこの本は、8 月に極東派遣を決定されたロシアのバルチック艦隊が 11 月 3 日に北アフリカのタンジールに入港し、4 日には米国大統領

[208] 岡倉古志郎「ワタリウム美術館の岡倉天心・研究会」p.23

選挙でルーズベルトが再選された、という軍事、政治の両方面において緊張感高まる時期にあたる。日本政府はアメリカの仲介の協力を必要とし、ルーズベルトは再選のために国民の支持を必要とするという理由から、この時期の『日本の覚醒』出版は、岡倉にとってルーズベルトと同じくアメリカの世論を捉える絶好の機会でもあった。

ルーズベルトは 3 月に「中立宣言」を交付したことで、公的に日本の政治家と表立って接触することができない状態であったが、ビゲローをはじめとするボストン・ブラーミンズの推薦する MFA の東洋美術専門家の岡倉覚三との交流は日本人からの状況を直接得るうえで貴重であった。米西戦争などによる中国大陸への進出の遅滞は、政治外交の重要課題であり、日本によるロシアの排斥はアメリカにとって有益であった。日本とロシアの戦争は選挙結果に関係なく継続するため、11 月の再選の有無を念頭において、岡倉が MFA の日本美術専門家として「大統領のテーブル」に招待されることは、アメリカ世論の求める問題を知るうえで重要な機会であり、『日本の覚醒』にはそれが反映されている。特に日本のミカド、サムライ、将軍の社会組織といった日本の支配者とその統治を主に紹介し理解を求め、アメリカへの賞賛そして女性問題への言及といった内容である。

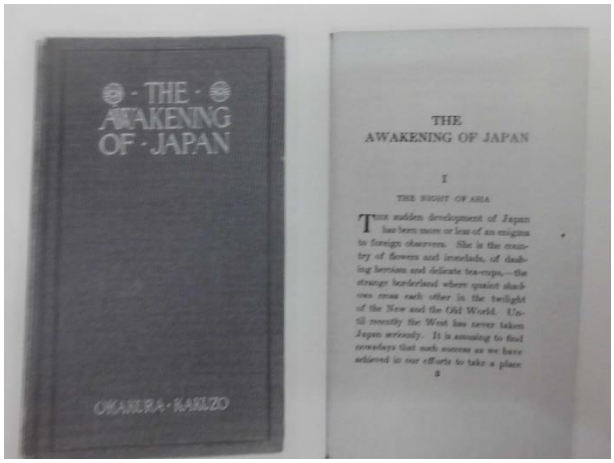
彼は第一回のボストン滞在を翌年の 2 月に終え帰国する。岡倉はなぜこの時帰国したのか。MFA における日本美術コレクションの整理の他に、渡米の目的であった政治外交の激務が 1 年間続き、帰国後体調を崩し入院・手術を受けている。重大な責任を果たした岡倉はアメリカ滞在の成果を多大に残した 1 年であった。

第 4 節　時を得た『日本の覚醒』出版―黄禍と白禍

岡倉の第二作目の英文著作『日本の覚醒』(The Awakening of Japan) は 1904 年 11 月にニューヨークのセンチュリー社から出版された。この本は黄禍論が巻き起こり、日露戦争による日本存亡の危機に直面する中で岡倉覚三がアメリカ

の世論を強く意識して書き上げた本である。

ここに取り上げられた黄禍と白禍について、この本は黄禍論に対して白禍論で反論しているが、『日本の覚醒』の書かれた意義は、アメリカ世論を日本への好意的感情へと動かすことが目的であり、アメリカへの描写は好意的である。



（The Awakening of Japan 1904）

第一章「アジアの夜」の冒頭、西洋の東洋に対する激しい植民地侵攻よる破壊と横暴さを棚に上げて、東洋の動きを「黄禍」として非難する西洋の態度に怒りを覚えた文章から始まる。そして第二章では、徳川の鎖国による安泰な200年の平和に包まれてきた日本社会を蛹（さなぎ）に例え、十分熟成された民族文化が存在し、支配者が仏教思想を統治に役立てたと、キリスト教社会に対して日本の仏教社会を明らかにする。第四章ではでは日本の近代への覚醒は日本人自身の中に存在し、外国からの圧力ではないとする。第五章は西洋の黄禍に白禍で対応する。多くの伝統ある東洋民族は戦闘を好む西洋により迫害を受け、18 世紀のヨーロッパの産業革命が西洋の拡大を起こした結果により、どのような権利があって外国に望みもしない通商、頼みもしない友好を押しつけるのかと抗議する。この時初めて日本は先祖伝来の国を守るために一体となった、と国民の団結を語る。第六章からは飛鳥時代から明治まで日本の歴史を区分し時代を語る。第七章は、アメリカへの賛辞から始まり、岡倉の世論への戦略的描写が続く。全体としては『日本の覚醒』の前半は黄禍論への反発を貫き、後半に白禍論で日本主張を行い、特にロシアを非難しながらも、アメリカに対しては好意的な態度に終始する。

1905 年(明治 38)の『日本美術』第七十五号[209]には、『日本の覚醒』出版のニュ

[209] 『岡倉天心全集』月報 3、昭和 55 年 2 月、平凡社、「資料 III　となりのうわさ(岡倉先

ーヨークの各紙新聞社の批評を、「くれがし」[210]が掲載している。グローブ紙は、もし日本歴史の大勢と日本勃興とについて知ろうとするなら、故ラフィカディオ・ハーンの著(その最後の作、“Japan Attempt at Interpretation”)と共に、“The Awakening of Japan” を読むべきでありとし、東洋の古物学及び美術に関する現代の大家でありかねてから英文で書き物をする岡倉覚三氏の著であるとし、さらに

> 「著者は黄禍よりもむしろ白難を恐れる人々の一人であり、また日本人のその美術、服装、倫理その他のものを以て、好みて欧風ならしめんとするを軽侮するものの如し。岡倉氏は、西洋との接触によりて、日本に入り来たりし美風を認むると同時に、日本の思想にして、之を将来に保存するに足る者あるを感ぜり(原文による)」と岡倉は日本の進歩発展を哲学的に著述しているという。タイムズ紙は、「東洋の現勢について書かれた著は浜の砂のかすより多いが、甚だ有要にして趣味ある数種をあげる中に本書は数えられる」

と説く。またニューヨークの雑誌クリチックは、「著者の意見によれば、黄禍とは東洋に於ける自家の企画と関係せる白難より、世人の注目を移さむが為目に、魯独の両国によりて念じ出されし幽霊なり。本著はその前著に比すれば、一層簡単にして且つ具体的なり。岡倉氏の英文に長ぜる最適例としては、吾人はその日本の王陽明学の見地よりし龍を解説せる章を推さざるを得ず、これ実に一遍の散文詩に外ならず」ととりわけ陽明学と龍を関連づけているのは岡倉の意向を的確に論評していて面白い。

「くれがし」はルーズベルトの『日本の覚醒』出版の反応にも及び、

> 「大統領ルーズベルト、また本書を得るや、即夜之を読了して、翌朝直にその批評をものして著者のもとに至せりといふ。ルーズベルトは嘗て

生の近著について）くれがし」

210　弟の岡倉由三郎のこと

“The Ideal of the East”をよみて、其の東洋の夫人に何等論及するところなかりしを、怪しみ者、本論をよむに及び、日本婦人の地位を明らかにし得て、満足の色ありしと云ふ。本書の「幕閣と大奥」なる一章が、海外の読者によりて、如何に注意を以て読まれしかは、蓋し邦人の思ひ及ばざる処なるべし」

と当時のアメリカの様子を『日本の覚醒』が出版された翌年に伝えている。この本の内容には、ルーズベルト夫妻と岡倉との交流の跡がみえる。ここで言われる女性への言及は、特にこの本の中で『東洋の理想』よりいっそう具体的に幾ページにも及んでいる。11 月の大統領選では女性の権利について重要な問題としてとらえており、ある時金子堅太郎との会食で話題に出しているが、金子は突然の女性問題の話題に明瞭な意見を返していないことが、記録に残されている。それと比較して岡倉が『日本の覚醒』で女性問題を十分にとり入れ、大統領がこれを賞賛していることは、弟子たちが言うように岡倉との交流が出版前から行われ、様々な問題を議論していたと考えられる。

第 1 項　西洋近代化以前の日本社会

1903 年の『東洋の理想』に書かれた「日本の原始藝術」の日本描写は、中国、インドの宗教・文化を多く紹介しているのと比較してインド・中国の中で、唯一自力で開国した実力ある国家であると主張する日本の紹介としては簡単な紹介にとどまっている。そこで岡倉は『日本の覚醒』で特に西洋近代化以前のミカド、サムライ、徳川幕府の社会組織への言及を徹底して強めている。西洋的視点から見て、日本が 10 年前に日清戦争に勝利し、今また大国ロシアとの戦争を始めている日本という国への彼らの興味の真相は、西洋の脅威でありジャポニズムの文化を持つ日本人を理解することであり、それに答えた日本の姿を岡倉は『日本の覚醒』で西洋近代化以前の日本社会を補填しているのである。

神道におけるミカド、新渡戸稲造の『武士道』の描いたサムライなどの問題は、200 年に渡る鎖国により外国からの侵略を拒んだ徳川幕府の社会組織を明らか

にし、開国後半世紀に満たない日本人の戦力を知るうえで十分興味ある内容となっている。日露戦争を背景に書かれた『日本の覚醒』は日本人の著書がアメリカで多く出版される中で、岡倉は強く世論を意識している。

第2項　アメリカへの賞賛と謝意の意図

アメリカ渡航を前に出版された『東洋の理想』において、「アメリカの武装した使節（ペリー来航）には長く感謝をささげるべきである。アメリカの国策は我が国の門戸を開いたが、それは自己の勢力拡大にあらざる啓蒙の精神によるものであった[211]」と謝意を表している。彼のアメリカに対する感情は本当にこのようなものであったのだろうか。岡倉がアメリカに拠点を移して日露戦争中に出版した『日本の覚醒』においては、アメリカへの謝意は『東洋の理想』よりさらに誇大に表現されている。日本の開国は内からの蓄積された国力によるものであることを『東洋の理想』において主張し、『日本の覚醒』でもその姿勢をとりながら、そのきっかけを作ったアメリカに対して、第六章「幕閣と大奥」の冒頭で岡倉はアメリカを賛辞する。

> 「米国使節の時宜を得た来訪と、使節が日本の対外関係についてとった断固たる態度とがなかったならば、おそらく日本は国内不和が高じて、1868年の維新の前よりはるかにひどい内乱に陥っていたかもしれない。米国使節渡来の直接の効果は、急落しつつある徳川幕府の権勢を食い止めたことにあった[212]」

さらにペリー来航時の将軍に着く有能な阿部正弘について語り

> 「我々はまた、よくこらえて相手の弱味に付け込もうとしなかった提督ペリーにも感謝するものである。東洋の民族は恩義を忘れない。しかも国際上の恩義というのは不幸にして古来まれである。ペ瑠璃の名が日本人にとって忘れ難いのは、彼の 50 周年を記念してその上陸地点に石碑

---

[211] 岡倉天心, 1968,『岡倉天心　明治文学全集 38』筑摩書房 p.52-53
[212] 岡倉天心, 1968 ,『岡倉天心集―明治文学全集 38』筑摩書房解題 p.419

が建てられた事実によってもうかがうことができよう[213]」

と、アメリカのペリー来航への感謝であり、日露戦争勝利に向けて日本がヨーロッパとは異なる意識をアメリカにもっていることを明らかにしている。これはアメリカの世論に対する日本からの賞賛と謝礼の言葉である。

『日本の覚醒』についての宮川寅雄は興味深い分析をしている[214]。つまりこの本がアメリカ人に対してへつらってさえいる。しかも日露戦争における日本帝国主義の主張を代弁し、こじつけ、『東洋の覚醒』ではあれほど激しく帝国主義列強を攻撃した天心が、この著では「列強」の中からアメリカを除外したことは事実であった、と指摘する。確かに岡倉が日露戦争勝利のために『日本の覚醒』を書いたのだという視点に立てば、岡倉は当然アメリカへの好感を示すべきであり、その意味で言えば、戦略的に宮川の指摘は、的を射ている。

小島恵三は、岡倉を評して矛盾撞着の存在とするのは、おそらく妥当であろうといい、その理由について、「『東洋の理想』の１年前に書いた『東洋の覚醒』では、西洋に対するアジアの隷属を嘆き、「寄生虫に侵されるのは、おおかた高等な有機体の悲しい運命である、としてアジア文明の優越を説き、「我々を回復させるもの、それは自覚であり、われわれを救うもの形式的な会食にとどまって疎遠な関係であった、それは剣であると絶叫していながら、この主張はその後の著書では、西洋に対して「愛と美の精神をもってたたかえ」となり、「東西両大陸は相互に補い合うことが当然」という妥協の立場となる。これが岡倉の変節非難されるポイントである」と、これら英文著書に現れた彼の心情の変化を捉えている。この背景には広報外交といううべき政治的意図があったのである。

たとえば『日本の覚醒』、第五章「白禍」では、冒頭から西洋について、

「多くの東洋民族にとって、西洋の到来は、まったくの幸運とは決して言えなかった…大きいだけでは、真の偉大ではない…贅を尽くした生活

[213] 同上 p.103
[214] 同上 p.104

がすなわち文化であるとはいえない…その広大な地域で無数の犠牲者を出してもなお満足せず、西洋は東洋までも餌食にしようとしている…ふみにじられた東洋にとって、ヨーロッパの栄光は屈辱に他ならない」と始め、「アメリカの軍艦が江戸湾にあらわれたことは、大きな衝撃であった…江戸からわずか一日で行けるところに、恐るべき黒船の艦隊が現れて、条約を結ぶまでは帰らないと頑張っているのだ[215]」、

とアメリカ艦隊への恐怖を表明しながら、直後の第六章「幕閣と大奥」では

「アメリカの使節来日の直接の影響は、急速に衰えつつあった徳川幕府の権力が強化されたことであった[216]」

とアメリカに対しペリー来航を歓迎し、日本との対外関係について謝意を表明している。明らかに西洋ヨーロッパへの批判とは異なり、アメリカ世論を意識し日本への好感を引き出す意図がこの本に現れている。ここには政治的理由でアメリカの協力を求めなくてはならなかった岡倉の動揺が見える。

第 3 項　女性問題への言及

『日本の覚醒』に書かれたもう一つの特徴は、女性の権利についての問題である。『東洋の理想』における女性は、6 世紀末から 7 世紀の日本最初の女帝の推古天皇、8 世紀の光明皇后、その娘孝謙天皇による統治に触れる。さらにヨーロッパより 1000 年も早く、日本では平安時代の女流作家紫式部が『源氏物語』の作者としてあり、宮廷スキャンダルを取り扱ったマダムスキュデリーに 700 年先んずる『枕草子』の作者清少納言や、平安前期の女流歌人小野小町、平安中期の女流歌人赤染衛門等を登場させ、彼女らの芸術・文学の世界への影響を紹介している。これに付け加えるかのように『日本の覚醒』における女性像はさらに具体的である。第六章「幕閣と大奥」では、徳川時代大奥における女性の権力について、将軍の跡継ぎの生母による政治への権力問題を取り上げ、とかく遊女のご

---

215 岡倉天心, 1968,『岡倉天心集―明治文学全集 38』筑摩書房 p.230
216 同上 p.231

とく芸者を日本女性として観る欧米に対して、高い水準におかれた女性の存在を物語る。第八章「復古と維新」では、日本の再生に女性の力が必要であると述べ、1630 年に父の後に皇位についた女帝明正天皇が、女子大学の設置など女子教育に力を注いだことに言及する。これまでに習慣を引き継ぎ何らかの特権を女性に与えることを学ばなかったのは、言うまでもなく日本社会では女性は母性として尊重され、サムライは母の足下に栄誉をささげた。それは妻を軽んじたのではなく、母性の方が神聖であるからだとして、時間とともに日本の女性の未来は、解決に向かうであろうと岡倉は予言している。アメリカでは女性問題がルーズベルトの政治政策として重要な話題として扱われているため、それに対して『日本の覚醒』には女性問題に多くのページを割いているのである。これは岡倉とルーズベルトの頻繁な交流の成果である。

それに対して 1905 年 3 月 20 日ホワイト・ハウスでルーズベルトが家族と共に金子堅太郎と昼食を共にした際、大統領はいきなり女性の地位の改革を希望すると金子に述べた[217]。それに対して女性問題について何の意識もない金子は返事に詰まってしまう。再選されたアメリカ大統領として、国内事情の関心は女性問題であり、日露戦争外交問題とにも匹敵するほど重要であった。金子と違い岡倉は美術家として広く話題を話題を世論の動きに求めルーズベルトに接していたのである。

彼が『茶の本』の第一章と第二章となる“*The Cup of Humanity*”を雑誌 International Quarterly に発表するのも 1905 年の 4 月である。彼はこの時点でフォクス・ダフィールド社と次の本を書き上げる契約を済ませており、帰国前に次作への準備はすでに整っていたのである。

おわりに

アメリカでの使命は、ボストンの人脈を生かしてルーズベルトの接触を図り、日本への協力への動きをもたらすことであったと思われるが、彼はそれだけでな

217 『日露戦争と金子堅太郎』p.303

く、できる限りの可能性を試していたのである。その中で世界に向けた日本主張のできる場としてのセントルイス万国博覧会への講演参加は、自分の言葉を駆使することで世論を捉える機会であり、講演の成功が岡倉のアメリカでの活動の方向性と自信につながったことは間違いない。

9 月の「絵画における近代の問題」の題名の講演の最後に、西洋と東洋にみられる藝術鑑賞の普遍性について、初めて東洋文明の生み出した日本の「茶道」について語り、西洋の藝術観との融合性を暗示している。一方で 9 月に『日本の覚醒』を脱稿した岡倉は、冒頭で日本を「繊細な茶椀の国」として登場させ、東アジアの文明史が、西洋社会にとって依然として神秘の書であるという事実により西洋の日本への無関心、誇張、誤解、人種的偏見、東洋に対する漠然とした憎悪感を外部の世界に抱かせたのではないかとこの 2 冊を関連づけている。ここにはすでに岡倉のある傾向が表れている。それは著作を社会背景に順じて共通語や思想で関連性を強め世論への主張を強める方法である。この後出版される本は、すでにこの時に構想が練られていたと考えられる。彼は 11 月センチュリー社から『日本の覚醒』の出版後、翌年 1905 年 2 月には The Cup of Humanity の論文をフォクス・ダフィールド社の雑誌 International Quarterly に発表している。これは 1906 年に 5 月の出版となる『茶の本』の第一章と第二章と全く同じ論文であることから、『茶の本』は少なくとも 1905 年 4 月以前に書かれたと先行研究では言われているが、筆者はその構想はセントルイス万博の臨時講演依頼された「絵画における近代の問題」を発表した 1904 年 7 月に現れていたと考える。この時期彼は 3 月から MFA で夥しい日本コレクションの整理の仕事に就き、日本文化の隅々にまで影響した茶道道具の数々に触れ、「茶の文化」の影響による日本を西洋文明の中で再確認した時期であったからである。

岡倉は『日本の覚醒』において、アメリカの世論を意識して日本への共感をために、今までの歴史認識に不自然さを残してまで描きあげている。内容は国家を優先して政治社会外交問題についてかかれており、そこに岡倉が著作を通してアメリカ世論を動かそうとする意図がある。岡倉と同じくルーズベルトの

接近を目的にアメリカへ派遣された金子堅太郎のルーズベルトとの会談は、広報記録として残されている[218]が、岡倉とルーズベルトとどのように会談したのか詳しいことは残されていない。しかし岡倉はボストン美術館で顧問として働きながら、1904 年 9 月のセントルイス万国博覧会の講演に続き、同年 11 月のニューヨークのセンチュリー社から英文著書『日本の覚醒』を出版することで、日露戦争交戦の高まりを背景にして確実にアメリカの世論を捉えていったのであり、岡倉のアメリカでの成果は、次に出版される『茶の本』に受け継がれることになる。

[218] 松村正義, 1980,『日露戦争と金子堅太郎』新有堂

第 5 章　何故『茶の本』を書いたのか？―文明の打破

はじめに

岡倉にとって、日露戦争の勝敗を背景とした中で、文化国家としての日本のイメージ作りは、重要な問題であった。東京美術学校罷免の翌年の 1899 年、新渡戸稲造の『武士道』*"BUSHIDO The Soul of Japan"* がアメリカのフィラデルフィアの書店から出版された。直後にドイツ語、ポーランド語、フランス語、ノルウェー語、ハンガリー語、ロシア語、イタリア語に翻訳され、瞬く間にヨーロッパに広まり世界の注目をあつめた。新渡戸は一国民の立場から『武士道』を描き、欧米の注目を浴びることとなり、この本から日本人をイメージづけたといっても過言ではない。しかしここに書かれた日本人のイメージは、日本の急速な発展と日清戦争への勝利に対する西洋の注目に答える日本人像を彼らにもたらすことになった。これに対して岡倉は文化国家としての日本のイメージを、『茶の本』に主張するのである。新渡戸の『武士道』の出版は岡倉が『東洋の理想』を出版する 4 年前のことであり、英語に堪能で強くアメリカを意識していた岡倉にとって新渡戸に対して先を越されたという意識は強くあったであろう。また西洋のオリエンタリズム的理解に対して、ジャポニズム的理解から主張をしようとしていた矢先の新渡戸の『武士道』の出版は、彼を大いに刺激したであろう。『茶の本』を書いた理由についてその第一章で、「われわれの兵士たちを喜んで自己犠牲におもむかせる「死の術」について多くの論評が行われているが、われわれの「生の術」について多くを語っている茶道にはほとんど注意がはらわれていない」、と新渡戸の『武士道』を暗に批判しながら『茶の本』を書いた動機を示す。このことから、この本が単に茶道文化をそのまま日本の伝統文化の姿として紹介するのではなく、「死の術」と表裏一体として「生の術」に標準を合わせ、バランスの取れた文武両道の国家として主張する岡倉の戦略的な意図がここにうかがえる。

何故岡倉が『茶の本』を書いたのかは、これまで謎とされてきた。しかし『茶の本』はアメリカのボストン美術館に勤務してから構想されたものであること

は間違いない。岡倉は日本中から蒐集されたボストン美術館の日本コレクションの質の高い美術品や茶道具群に触れ鑑定、整理、分類する過程で、アメリカにいたからこそ比較文明として日本文化を再確認できたのである。そして思いもかけず着任から 3 か月後の 7 月にセントルイス万国博覧会の会場で講演する機会を与えられた。世界の知識人が一堂に集まるこのチャンスを生かすために、『絵画における近代の問題』の構想を練り、アメリカ世論に日本の惨状を訴えかけ、日本への理解と協力を求めたのであり、この本が前二冊の流れをくんで政治性を秘めていることは明らかである。『茶の本』のキーワードは「変化」である。

第 1 節　臨時講演「絵画における近代の問題」

1904 年 9 月に講演された「絵画における近代の問題」は、ロシアとの戦争開戦から日も浅く日本の勝利に向けて外国の協力を仰ぐことが重要な時期にセントルイス万国博覧会の会場で世界から集まる入場者に向けて岡倉が講演したものである。ロシアは戦争を理由にセントルイス万国博覧会に不参加であり、戦争の相手国である日本に関心が集まる中、この機会を生かして彼は世界に向けて東洋思想を明らかにし、藝術と社会の問題にたとえて西洋近代化の現状と東西文明の問題点を、東洋に対する西洋の理解を強く求めたのである。

セントルイス万国博覧会はフランスからルイジアナ買収 100 周年を記念して 1904 年 4 月 30 日から 12 月 1 日までミズーリ州セントルイスで開催された。

「絵画における近代の問題」が行われた経過について六角紫水[219]の『紫水自叙伝』によると、美術・科学のセクション C 近代美術の部門で、たまたまフランスからの公演予定者であるルーブル美術館館長の急な欠席により、当時万国会議の議長にあたる任意にあったジョン・ラファージが岡倉のために用意したものである[220]。セントルイスの学術大会は、万国博覧会の開会を機に開かれた

---

[219] 漆の専門家で岡倉の東京美術学校時代の弟子. 横山大観、菱田春草と共にアメリカ渡航に同伴した.

[220] エクスポの当時者から招かれたのではなく、偶然欠員ができたので、ラファージが岡倉を推薦してくれたのである.彼は講演がすむとすぐにラファージに手紙を出し、それを受け取ったラファージはガードナー夫人に、無事岡倉の講演が済み、お礼の五百ドルを

ものであって、集まったのは世界各国の学会の権威者であった。日本からは理学博士箕作佳吉[221]、法学博士の穂積信繁[222]、医学博士の北里柴三郎[223]が参会した中で、岡倉は 11 月に『日本の覚醒』が出版される直前の 9 月に、思いがけなく「絵画における近代の問題」を講演する場を得た[224]。そこで岡倉は、専門の日本絵画において問題となる芸術と国家の問題を東西文明の比較により世界に公にし、日本の近代における問題を訴えるのである。

この講演でまず芸術と社会との関係は別問題であることを述べ、芸術について作品が作品として存在するには、過去から現在、西洋から東洋といった分類された定義の中で生まれるものではなく、作品は芸術家個人の精神の表現以外の何者でもなく、芸術家の心と観賞者の心の感動から生まれるものであると東洋と西洋比較しながら美術史家の立場で藝術論を展開する。では、完全に個人の主観的問題であるという藝術に、近代的社会はどう客観的に問題を提供するのか。それは藝術と社会それ自体との関係であると岡倉は説く。

社会は藝術が生み出されるための条件を、またある程度までは提供するが、世間との闘いが藝術を押しつぶそうとする圧力を生みだす、と藝術と社会の相互関係を一般的藝術論として紹介する。ロマン主義、写実主義、といった分類は社会による分類であり、藝術は自由な感性の中で育まれるものであると人間性を強調する。そこで社会の問題として、政治体制の変化による戦争による悲劇が、藝術の美の花園を荒廃させたことに言及し、西洋や東洋、そして日本の藝術がいかにして戦争に影響されたかを語る。社会的条件により藝術にもたらされた災厄はそれだけではなく、自己満足に溺れる社会は、藝術の「保護」こそすべてで

受けとたことを伝えた. その同じ手紙には岡倉にこの仕事をとってあげるのに大分苦労したことを書き添えている.(堀岡弥寿子, 2000,『岡倉天心との出会い』近代文芸社 p.86-87

221 みつくりかきち：(1857~1909) 江戸生まれの動物学者.イエール大学で動物学を学び、東京大学で日本人最初の動物学教授.

222 ほずみのぶしげ：(1855~1926)愛媛県宇和島市出身の日本初の法学者の一人.

223 きたさとしばさぶろう：(1852~1931)肥後出身の細菌学者.破傷風の純粋培養に成功.ベーリングと共に血清療法を創始. 伝染研究所長、のち北里研究所を創設

224 「日本的見地より見たる近代美術」(福原麟太郎訳) は美術院版全集の原文による訳.

あると信じ込もうとするところにあり、「保護」という言葉そのものが屈辱であり、我々に必要なのは共感であって、恩恵の押し付けではない。よい藝術を大切に思うなら人生の高貴な役割をもつすべてのものにふさわしい畏敬の念をもってこれに接するべきであると力説する。

このように藝術から社会問題へと移り戦争にまで話が及ぶ中で、藝術とは平等で、自由であるからこそ藝術なのであり、メーテルリンクの花物語を導入して、人間世界に縛られる藝術を花にたとえ、羽がないゆえに飛び立てない花の嘆きを暗に世界情勢の動きにたとえる。そして近代日本の社会状況は藝術に重大な問題を提起し19世紀の中ごろからの戦争と国民生活の西欧化により現在の日本絵画は完全に破壊されようとしていると、いよいよ岡倉が主張する核心に迫る。

ここで彼が講義しようとするのは、西洋文明の東洋蔑視への世論の覚醒、西洋近代化のグローバリゼーションにおける支配と被支配の問題、そして西洋近代化のグローバリゼーションの是非を絵画と社会の問題にたとえ、東西社会の歩み寄りの可能性を問うことである。これらの問題を基軸にして文明比較を論じる。そして西洋人に理解しがたい日本絵画の東洋的性格の無限の暗示性にあり、西洋と同じ程度に深い人生哲学と美の宗教があると説く。それはレオナルドの「モナ・リザ」やレンブラントの百フロリン版画の中に見られる自己従属性と同じであると東西の共通性を比較し、人間の求める藝術における普遍性を明らかにする。社会と藝術の関係について、画家の問題は個人的であり、主観的であり何ら外部から干渉は許されない。では客観的な意味を持つ問題とは何か。それは絵画と社会それ自体の問題だと答え、ここではじめて茶道に触れる。

> 「藝術家と観衆のあるべき姿は、藝術家が故意に空白のまま残した背景を自らうずめ、それに共感する能力が観衆の方にも存在していることが重要である。観衆は画家自身と同じ程度に画家でなければならない。というのもひとつの理想を完成するには両者が必要であるからだ。日本では共感の藝術を完成する真剣な試みとして茶の湯が広く行われる。茶の

湯は儀式ではないからこそ儀式と呼ばれ、世間のさまざまな事実を、調和を保ちながら味わっていくための重要な方法であり、客と主人とが一緒になって部屋の統一と会話のリズムを作り出していかなければならない」

真の藝術とは、製作者と観衆との間の暗黙の理解の中にこそ双方の喜びがあるとして主張し、観衆の前ではじめて茶道哲学に触れかなりの反響を得た。
そして自分が強く抗議したいのは、「個性を破壊するような模倣の態度に対してである」と東西文明のアンバランスな関係を国家と藝術の問題にたとえ、「暗示の価値はそれが伝える思想の深さにある」と訴え、西洋列強の傲慢さをきっぱり言い放った。

「茶の湯は儀式でないからこそ儀式と呼ばれるのである」について、岡倉と同時期の哲学者西田幾多郎[225]は、「無意識」と「意識」の問題として、

「主観的統一作用は常に無意識であって、統一の対象となる者が意識内容として現れる。われわれが主観の位置に立ち、活動の状態にあるときはいつも無意識である。これに反し或る意識を客観的対象として意識した時には、その意識は己に活動を失ったものである。たとえば或る藝術の修練についても、一々動作を意識している間はいまだ真に生きた藝術ではない。無意識の状態に至って始めて生きた藝術となる」

と言い当てている。さらに岡倉より 8 歳年下で同じ時代を共有する西田幾多郎を恩師と仰ぐ久松真一[226]は、著書『茶の哲学』の中で日本人の茶道における人間

---

225 （1870-1945）哲学者.京大教授. 禅の宗教性と生の哲学やドイツ観念論を思弁的に統合し、「純粋経験」から出発して「無」の哲学と場所の論理を開拓した.それは「西田哲学」と呼ばれ、京都学派を形成して近代日本の思想に大きく影響した.著『善の研究』他.

226 明治 22 年（1889-1980））岐阜県に生まれる.京都帝国大学文学部哲学科卒業.元京都大学教授. 京都帝国大学の文学部助教授であった頃、学生たちの要望で「京大心茶会」、FAS 協会を創立した. 実父の大野定吉は八百庵椿翁と号する茶人で、久松は幼少の頃からその強い影響を受けた. 京都帝大卒業後、恩師西田幾多郎の勧めで京都妙心寺僧堂師家・池上湘山のもとで臨済禅を修行. 西田幾多郎より抱石庵の号を受け禅修行の傍ら

形成の在り方をについて、

「茶道は文化の面からみれば禅のインカーネーション（受肉）であり、仏教用語でいうと禅の化身である。禅は古来仏を外にもとめるな、ということを非常に強調する。仏を外にもとめるのは仏をもとめる道ではなく、道をもとめるということになると、もはやそれは本当の道ではない。仏は自覚であり、禅の自覚とは形のない無想の自覚である。否定を重ねればその果てに絶対の否定があるというのではなく、絶対の否定は現在にありそれが自覚である」と。一切の否定は現在であって未来にあるのではない。もし未来にあるような否定であれば、その否定は一つのイデアとなり、現実の自覚とはなってこない。だからこの自覚は決して求めて得られるものではない。求められるところに仏はなく、求める側に仏はある。故に禅では外に仏をもとめるな」という。さらに久松は、「自覚することが茶道の目的であり、このような自己が成り立ち、自覚されることに茶道における人間形成がある。禅で「なり切る」というのは、仏教ではこれを「三昧」といい、物と一つになることを意味する。禅でいう「三昧」には形がなく、無想の全く形のない自覚である。さらに「仏が内にあるという場合の内とは、非内・非外の現在ということであり、「ここに今」あるのである。今ある自己とは形のない自己であるから、端的に形なくしてここに今あるというあり方である。普通に個々に今あるというならば、空間的・時間的に限定された形ある自覚ということになるため、ここに今という時の「今」は、永遠といわなくてはならない。当然そこには時間の限定はない。今という時の「ここ」にもまた空間の限定はない」。つまり「茶の湯は儀式でないからこそ、儀式とよばれる」のである。

久松は西田の説をさらに深めて意識と無意識の問題から、自己の自覚へと発展

学究並びに茶道三昧の生活を送る.「覚の哲学者」といわれる.

させている。真の藝術鑑賞とは、東西を問わず講演の最後に茶を人間の普遍的な心と心の交流を求めるものであると茶の哲学を語る。

この講演で宗教、空間、藝術鑑賞、花などについて岡倉は早くも『茶の本』とのいくつかの類似点をみせている。藝術はそれ自体ひとつの宗教であり、魂に内在する高貴さと宇宙に対する藝術家の心の謙虚な態度だけが宗教家足らしめるのであり、キリスト教なり仏教なりの主題を型にはまった形式で描き出すのは、宗教のパロディであるだけでなく芸術そのもののカリカチュアであるという（『茶の本』第三章　Taoism and Zennism へ）。

空間の概念について、定義することは限界づけることであり洞察の障害となるとして、17 世紀の日本のある詩人の、「もの言えば　唇寒し秋の風」を例にとり、老子は「語り得ざるもの」こそ至高の尊崇の対象であるべきだとして、家の実体は屋根にあるのでもなければ壁にあるのでもなく、それらが作り出す何もない空間にあると指摘したことをあげる（第四章　The Tea-Room へ）。

同様に絵画の実態は昨比に内在する美にあるのであって、われわれが歴史意識の棚に好んで整理するような流派や時代の名前の中にあるのではないと、分類による格付けの無意味さを岡倉は指摘する（第五章　Art Appreciation へ）。

抵抗のできない者への残酷な仕打ちを、メーテルリンクの言葉に変えて、こういう。「もし花に翼があったら、人が近づいた時、花は飛び去るであろう。花たちが園芸師の暗黒な手から逃れて永遠に飛び去っても、私は彼らを非難しようとは思わない。思想の花である藝術もまた翼をもっていない。その根は、人間世界の中に縛りつけられていて、無神経な手で摘まれ、切られ、拷問に合わされて、一時的な鑑賞のため容器に押し込められている実情を考えると胸が痛む（第六章　Flowers へ）」

この講演の 2 カ月後に『日本の覚醒』[227]がニューヨークから出版されたが、この本は欧米を席巻していた黄禍論に対して、白禍論で反論する等、西洋に対す

[227] 『日本の覚醒』は 1904 年 11 月に出版されたが、本書の原稿は 1903 年から 04 年の前半にかけて完成されていた.(,1983,『東洋の理想他－岡倉天心』平凡社 p.294

る反発を前面に出し、政治色を強めているのに対して、同じ時期に講演した「絵画における近代の問題」は、日本絵画を通して東洋における藝術と社会との関係から日本への同調を求めている。つまり岡倉は日露戦争を背景に政治論と藝術論を同時にこの時期に行ったのである。

この講演は西洋が考えてもみなかった東洋文明からのメッセージであり、観衆の圧倒的支持を受けた。講演の成功は「The Cup of Humanity」の雑誌発表となり西洋に向けた戦略的構想の『茶の本』出版につながることになった。アメリカへ拠点を移してから数か月、MFA での日本コレクションの整理以外に、日本主張の具体的な行動を模索する中、彼はこの講演でアメリカでの広報外交の糸口をつかんだのである。

講演当日には、オリ=ブル夫人をはじめとして支持者一同が会場に集まり、岡倉のために大講堂の外にまであふれた聴衆は深く感動し、超満員の聴講者で会場はうずまった。岡倉は流暢な英語で社会と藝術の関係から東洋における重大な状況に対して西洋の覚醒をうながし、人間性における世界的問題の解決のために藝術家や愛好家に呼び掛けた。このエキゾチックで東洋的な表現に満ちた講演は、ただちにフランスとドイツの新聞に翻訳され、岡倉のアメリカでの知名度を高める結果となった[228]。

第 2 節　受けつがれてきた茶道

岡倉がアメリカと日本を往復し『茶の本』の構想を練っていた頃、時期を同じくして在神戸ポルトガル領事ウェンセスラウ・デ・モラエス[229]が 1905 年（明治 31）に出版した著書『茶の湯』の中で茶についてこう語る。

> 「東洋、特にこの極東では、ごく普通のものやありふれた日常生活の風習が、精神的な荘厳さと儀式的な祭典の精髄ともいえるものになりやす

[228] 『岡倉天心全集 2』平凡社、p.503

[229] ポルトガル人（1854-1929）．1889 年にポルトガル領マカオからはじめて日本へ来航し、その後来日を重ねる中で日本の魅力にとりつかれ、日本の文化や社会に関する文章を書き続けた.

く、正真正銘の祭祀にまでなっている[230]」

外国人の視点から日本人と茶道を観察し、茶の影響がさりげない動作や目に見えない部分にまで浸透し日常生活を感性豊かにしている時代を表現している。

九鬼隆一は上記のモラリスが日本で『茶の湯』を出版し、岡倉覚三がニューヨークで『茶の本』を出版した頃、『茶徳談片』（1905）を著した。その中で彼は、「茶味禅味二境一致、即茶禅一味ということは誠に結構なことである[231]」と記している。さらに

> 「茶の湯は心が第一にて形は之に調和して妙趣を現はすものなれば、慣習に屈託し、規矩に使役せられんよりは、まず格法に主となって、自在に之を操縦してこそ、茶禅一味活機の妙用（不思議な作用）はあるなれ。茶事の効力はたいへんなもので、その茶徳によって世道を高め，人心を温厚ならしめ、社会の百弊を矯める（正しく直す）など、幾多の功を奏することができる[232]」

と茶道を高めている。これを円能斉に送り大賛同を受け、ともに茶道界を盛り上げていこうと共感した。

茶道界は明治期に一時衰退していたこともあり、実力者九鬼隆一との交流は、茶道隆盛の再燃のためにもとめられていたと考えられる。隆一と、20 歳年下の円能斉とのこのような茶の湯の交流は、文部省官僚として 1886 年から 1888 にかけて何度も行われた京都、奈良などへの古社寺調査の出張時に、隆一がたびたび京都の裏千家訪問していることが記録に残されていることから、常時同伴していた岡倉は九鬼の供をして茶会に招待され、茶道具の鑑定や茶の思想を深めていたのである。

第 1 項　「禅」と「道」

「禅」について、岡倉は『茶の本』の第二章の終りで、

---

230 村井康彦「茶の湯人物伝 11　モラリス」淡交タイムズ 11, 2013 472 号 p.9 に紹介している.
231 『今日庵月報』による.
232 『淡交』淡交社,2010,p.30

Teaism was Taoizm in disguise.（茶は身をやつした道家の教であった）と第三章 Taoism and Zennism に続ける。そして第三章の終りに

Taoism furnished the basis for aesthetic ideals, Zennism made them practical.(道家は美の理想のためにその根底を与え、禅はそれを実践に移した)

と Teaism-Taoism-Zennism の循環性を強調し、第二章と第三章のつながりを明らかにする。岡倉はこの革新的な利休の茶の心を受け継ぎ、第二章以降の茶の異空間に日本人の原点として Zennism を表現する。

禅の教えにより仏像崇拝が消滅していく段階で、自己の中に仏を見いだす禅と茶が結びつき戦国乱世の中で茶道が形成されていった。禅は一切の形あるものの否定であり、目に見える崇拝から、自己の中に形なき人間を自覚するという信仰が生まれた。それを体現したのが茶道である。

「道」について、徳川幕府の時代三代将軍家光の武術の師である柳生但馬守宗矩[233]は心の師として二歳年上の禅師澤庵と深い親交があった。剣術と禅の一味であると『不動智神妙録』に記した澤庵は、家光の武術の師として兵法において達人となり出世し地位をかためていく宗矩に心構えとして、御恩を忘れず忠を尽くせ、とその著に歯に衣を着せぬ忠言を残す。先ず自分の心を正しくし、身を収め、毛頭君に二心なく忠を尽くし、主人に対して不誠実で無智若輩のものを弟子や部下にすると、いざという時、命をなげだしてまで働くことなく、結局主人はおろか子のためにもならない、と諭し「心こそ心迷わす心なれ、心に心、心ゆるすな」[234]と説く。

禅宗における「還把鎗頭倒刺人来」[235]とは、剣の奥義であるが、

「相手の刀をみても心に止めず、どう相手を切ろうかとの思慮分別を捨て、心を少しもそこに止めず、一切の我身我満我執はらい、清澄な鏡の

233 柳生新陰流を完成させた名人石舟斉の息子
234 「心こそ」は北条時頼が出家後に詠んだ歌
235 「かえってそうとうをとりさかしまにひとをさしきたる」

ように、対象たる相手の刀を写し取っていくことである。自分と相手が一つになれば、相手の刀をもぎ取り、反対に相手を切る刀とすると同一でありそのままの禅の極意であるとさせる。一瞬一瞬相手を切り裂き、自己を殺し尽くしてそのものになりきってゆくならば、敵対する彼と我、すなわち生と死の相対的な世界は雲散霧消し、そこに絶対的平和が現出する。だからどのような「道」にあっても、一瞬たりとも心を一つ所に止めるな。この境地に至るために、初心から修業を始め、境地に至るとまたもとに戻る。最初と最後は同じような心持で、一から十までいくと、一と十は隣となるようなものである。このような剣禅一如は、どの「道」も極まるところは同じであり、いずれにも通じる教えであるとこの時空を澤庵は「石化之機」と「間不容髪[236]」とする[237]」

茶においても茶祖村田珠光の『心の一紙』にある、「此道、第一わろきことハ、心のがまん（我慢[238]）かしゅう（我慢・我情）也」の歌には、同じ心のいさめであると、「心」のあり方を説かれている。利休の茶の教えの中に、「稽古とは一より習い十を知り十よりかえるもとのその一」の言葉が残されているように、茶道の教えの中にも禅は存在する。世に天下を取ろうとするほどのものは、人格者を目指し修行を行い、臣下はその恩に忠を尽くした。日本人の心情が表れている。

岡倉は『茶の本』第七章の花で北条時頼の「鉢の木」[239]を引用し、武士の世界に伝わる心をこの章で描きその心情を表す。日本の能楽の中で最も広く世人に好まれ話題になって知れわたった曲で、今日（明治時代）もなお東京の観衆の涙を誘わずにはいないと彼は紹介する。

「ある貧窮に陥った武士が霜凍る夜半訪れた旅の托鉢僧をもてなすの

---

236 間髪を入れず

237 泉田宗健（いずみだそうけん）：松源院住持、「犀の角の如く一人歩め―澤庵―剣禅一如―不動智神妙録 1」『淡交』2010,3 p.82

238 この場合の我慢は、我意を張り他に従わないこと.

239 能楽：北条時頼が諸国行脚の帰途、上州の佐野で大雪の夜、佐野源左衛門常世が、愛蔵の梅・松・桜の鉢の木を焚いてもてなすという話.

に、炉に焚く薪がなかったので、秘蔵の盆栽を伐って薪にした。その托鉢僧というのが、実は外ならぬ北条時頼でありこの犠牲は報いを得た」

ここに登場する北条時頼は、鎌倉幕府の執権で出家後ひそかに、諸国を遍歴し治世民情を視察した人物であり、遍歴の中の「ひとこま[240]」であるが、北条時頼が出家後に詠んだ『心こそ』の歌には、武士の心の在り方を表現し戒めている。階級を超えて訴えるものがある。

岡倉はもう一つ、第五章「藝術鑑賞」の中で武士の忠義について日本国民の好んでみる演劇を引用し、武士の献身と、傑作に対して日本人が大いなる価値をおいているかをこの文章に表現している。

「有名な雪村の達磨の絵が秘蔵されていた細川候の御殿が、警護の武士の怠慢のために、にわかに火を発した。ためその武士は、万難を排してもその貴重な絵をすくいださねばと固く心を決して、燃えさかる建物の中へ飛び込みその掛け物をつかんだが火焔に包まれ、脱出できなくなり、その軸を切り裂いた自分の切り口に、布に包んだその絵を押し込み息絶えた。しかし消火後武士の命と引き換えに絵は無事であった」

戦国時代に隆盛を極めた太閤秀吉傘下の大将達は、勝利の褒美として、莫大な所領を賜るよりも、珍奇な芸術品を贈られることの方により満足したという時代であった。戦利品の領地が少なくなり、褒美として茶道具を臣下に与えるという名誉に茶道具の付加価値が付けられた時代に、秘蔵された絵画を死守した物語であり、ここにみられる武士の忠義を紹介している。

人格の育成には、おのずから身を引き締めるべきであると諭す澤庵の「禅と道」は、岡倉の武士道的精神の表れともいえ、日本人の理想とする奉仕の精神である。『茶の本』の花の章で「鉢の木」が示す日本人の心とは、茶禅一味と同意であり、禅の精神性は茶室空間で行われる主人と客のコミュニケーションに表現され、

240 劇や映画などの一場面

この感覚を茶道の決まりごとを身につけることで自覚し人間性を高めることにつながる。このように日本の茶は中国の茶と異なる時空間を取り入れ、いわゆる「不完全から完成」に向かう茶として人間性の「道」を求めたのである。

第 2 項　茶の歴史

茶道は「チャドウ」「サドウ」とどちらにも読める。中国でははじめは茶（タ）とよばれ、さらにチャとなり、シルクロードでヨーロッパとの交流でシャ、英語で Tea となった[241]。

中国で唐の時代に流行した茶の喫茶法は、奈良時代に遣唐使や渡来僧により天皇・貴族の社会に伝来した。茶が日本中に広まったのは、天皇に代わり新政権を樹立した武士の時代である。12 世紀鎌倉時代に宋の文化と共に現在の製法の抹茶を、栄西禅師が中国から持ち帰り、鎌倉三代将軍源実朝に茶を献ずるとともに『喫茶養生記』を進上したことがきっかけである。400 年にわたる貴族社会の豊かな文化世界と比較して、武士の文化がいまだ確立しない時代に、茶は支配者の教養を高める文化となる。宋の時代の抹茶法は短期間で消滅し、中国では湯に浸した葉茶が一般的となり、粉茶である抹茶を引き継いだ日本は、中国とは異なる発展をした[242]。栄西の持ち帰った種は京都栂ノ尾で栽培され、室町時代には京都宇治を中心として茶の栽培の風習が全国に慣習化し、茶は日本人の生活に浸透していった。

15 世紀中期から戦国時代にかけて、「茶」に二つの形式が生まれた。一つは書院台子と呼ばれる最高の格式を将軍の持つ「茶」の様式をいい、八代将軍足利義政と同朋衆[243]と称する藝術集団が造り出した形式である。義政は京都東山に銀

---

[241] 2013.12.16 裏千家第十五代鵬雲斎、現在の玄々斉大宗匠の講義から

[242] 日本の抹茶は茶の葉を挽き粉にして少量に湯を注ぎ、竹の茶筅で混ぜ撹散して飲む茶であり、葉茶は茶の葉に湯を注ぎ、ろ過した茶だけを飲む.日本の茶を点てるには、座る空間と点てる時間が必要なゆったりとした時間を費やし、そういった茶は戦争に明けくれる中国では必要とされなかった.

[243] どうぼうしゅう：室町時代、将軍・大名に仕え、・芸能・茶事・雑役を務めた者の集団.主に将軍に近侍し、取次・お伽衆の役を務めたものは出家して阿弥号を称し、各種芸能に優れたものが多く出ている.能阿弥・芸阿弥・相阿弥の三代は茶の湯、唐物鑑定に優れ、立阿弥は立

閣寺を建立し、東求堂同仁斉に茶室の基本といわれる四畳半茶室を建立して武家貴族の儀式である唐物[244]等の美術品を鑑賞する書院台子の茶の形式を作り上げた。祖父の義満[245]が所蔵した多くの中国美術品は同朋衆により選別され東山御物として所蔵し、書院台子の茶道具として格式を高めた。将軍の行う正式の「真の茶」とは、床の間、壁，ふすま、障子、で囲われた茶室空間で、唐物の茶道具を中心に鑑賞し、主客のコミュニケーションをなりたたせる「一座建立」の茶である。この形式は利休に時代にはますます発展し殿中などで公式に行われる饗応の茶はこの形式で立てられた。

これについて『南方録』には次のように記されている[246]。

> 「書院の正式の飾りなどは、東山殿（足利義政）の御飾りを持って引き本とするもので、四季それぞれについての飾りがあり、あるいはお祝いの儀式、詩歌の会、年中行事の儀礼とか、会の趣旨により様々の飾りがあり、その立派さは言いようがないほどである」

義政の跡継ぎ問題から始まった応仁の乱は、居住する都（京都）の荒廃を招き、都の文化の地方への分散が広まった。10 年に渡る応仁の乱以後、戦乱が続き、将軍義政は京都東山の臨済宗慈照寺銀閣寺に移り住み、唐物の茶道具を豪華に飾り付けた茶とは異なった「茶」の様式へと好みは変化する。

また精神的な支えを茶の内容に示した村田珠光[247]の「茶」は、書院台子の形式を簡略化してはじめたわび茶の原型とするものである。彼は禅により悟りを開

花など、彼らはいずれも室町時代の文化に大きな足跡を残している.

[244] 日本は古来から外国人のもたらした品物を天皇貴族の政権が大切に受け継ぐ習慣をもち、中国の茶道具は唐物として貴重な価値ある物として扱われた.

[245] この源流は京都北山に金閣寺を建造した室町幕府三代将軍足利義満[245]の中国明との勘合貿易である.彼は南北朝内乱を統一するとともに貿易を独占して財政を潤し、多くの茶道具を持ち帰った.

[246] 熊倉功夫,1983,『南方録を読む』淡交社, p.163「書院の飾りは東山殿に始まる正式の儀礼」より

[247] むらたしゅこう（1423~1502）：室町時代の茶湯者.奈良称名寺の僧となり後,京都に住む. 大徳寺の一休に教えを乞い、禅味を加えた点茶法を始めた. 侘茶の祖といわれる.

き、外見より内面を重視した精神的な茶への改革を進めた。珠光は書院の広間を簡素な四畳半[248]の茶室に替え、床の間の空間には禅僧の墨蹟をかけ、茶器は名物よりも侘びた親しみやすいものに工夫するなど質素に飾り付け、内外ともに新しい茶の方向を示した。珠光が目指した精神は、茶を飲むことによって自我に執着することから離れ、物事の真の姿をもとめることを根本の精神としたもので、亭主、客はお互いに尊敬しあい、つつましい心でお茶を行うことが本当の茶の湯の心に到達する唯一の方法であると考えた。

質素であるが物質文化に左右されない無駄をそぎ落とした空間の中で、新しい美の感性を磨こうとした村田珠光に始まり武野紹鴎[249]は、さらに茶を簡素に改革し、茶室の材料を竹や木地に変え、簡略化して禅風を表現した。
紹鴎の禅の心は藤原定家の歌、「見わたせば花も紅葉も無かりけり　浦のとまや[250]の秋の夕暮れ」に現れている[251]。

第 3 項　千利休

『茶の本』の最終章 Tea-Masters に描かれる千利休（1522-1591）は、戦国武将織田信長と豊臣秀吉に仕えた安土桃山時代の茶人で、千阿弥（足利義政・義尚父子に仕えた同朋衆）を祖父に、納屋衆[252]である父与兵衛と母月岑妙珍（げっしんみょうちん）の間に堺に誕生した。姓を田中、名を与四郎といい、後に千姓を名乗るのは、祖父の千阿弥の一字をとって織田信長から与えられたものだと伝えられている。茶を堺の北向道陳（きたむきどうちん）のもとで教わり、のち道

---

248 よじょうはん：茶室における基本的な広さで、広間、小間の両方に属しうる.足利義政の東山山荘東求堂同仁斉が有名.

249 たけのじょうおう（1502~1555）：室町後期の茶人.泉州堺の納屋衆の一人.もと武田氏、のち武野氏. 一閑居士・大黒庵と号.珠光の門人宗陳・宗悟に茶道を学び、侘茶の骨格を造り千利休に伝えた.

250 とま（菅や茅を菰のように編んだもの）で屋根を葺いた粗末な小屋.

251 藤原定家の歌で、利休の師匠の紹鴎が、路地の理想として示したと『南方録』に記されている.「茶話指月集」に依れば、利休は、山家集の「樫の葉のもみじぬからに散りつもる奥山寺の道のさみしさ」という歌を、露地の理想を表すものとして弟子の桑山左近に示している.

252 室町時代、倉庫業を営む豪商.

陳の紹介で武野紹鴎[253]の門に弟子入りした。その頃大徳寺の大林宗套（だいりんそうとう）らに参禅し抛筌斉（ほうせんさい）宗易と名のり、1585 年豊臣秀吉の関白拝賀の禁裏茶会で正親町天皇に茶を献じるために「利休居士」[254]号を賜り以後千利休と名乗る。その後、茶の湯は利休や堺の茶人たちにより広く普及し、1587 年、京都の北野神社で催された北野大茶会では、太閤秀吉が茶を率先して行ったことから、茶を知らなければ武将ではないとさえいわれる茶と支配者との関係は深まった。利休は織田信長に召されて茶頭役となり、信長が本能寺の変で明智光秀に暗殺されてからは、豊臣秀吉に仕え三千石を与えられ、秀吉公認の重鎮として政権のなかで地位を確立した[255]。政権に近く位置した利休は、1591 年 2 月 28 日、秀吉に切腹を命ぜられた。原因は京都大徳寺の山門に金毛閣を寄進し、自分の木造が安置されたことが問題となったといわれているが、確かではない。

利休の死後、茶道界の後を継いだのは、古田織部、細川忠興、蒲生氏郷、高山右近、柴山監物、瀬田掃部、牧村兵部ら利休七哲といわれる有力者が武将茶人として活躍した。このあとを受けて、利休の茶の精神を引き継いだ第一人者は小堀遠州である。彼は江戸時代前期の大名茶人であり、10 歳の時に利休と出会い、15 歳で古田織部に入門、大徳寺春屋宗園の参禅しながら生涯に 400 回に及ぶ茶会を催した。特に好み物は「綺麗さび」とよばれ、所持した道具が中興名物として「遠州蔵帳」に残されている。また徳川幕府の作事奉行として、幕府の十四建造物に関与し、作庭・建築に優れた才能をみせ、遠州好みとして多くの庭や建物を残している。この小堀遠州も『茶の本』に登場する。

利休の自刃後、千家には二人の男子がいたが、長男の道安は飛騨に隠れ、二男

---

253 .安土桃山時代の茶人堺の豪商の子として生まれ、24 歳で歌学を志して京都に上り、和歌・連歌・歌学を学ぶ.その後村田珠光門下の茶人に茶を学び、侘び茶を追求する.紹鴎の茶のおける革新は、当時唐物（中国から輸入された茶道具）が主体の茶に、和歌（連歌）の思想を取り入れ、茶道具をはじめとするわび茶の具現化を目指したことである。彼は、村田珠光のわび茶の継承者としてその精神性を明らかにした.

254 秀吉がはじめて宮中で茶会を催した時に、利休が宮中で茶席を受け持つのに一定以上の視覚が必要とされたため、秀吉が朝廷に願い出て「利休居士」の号をあたえられた.

255 千宗室・千玄室監修, 2004, 『裏千家茶道』在団法人今日庵

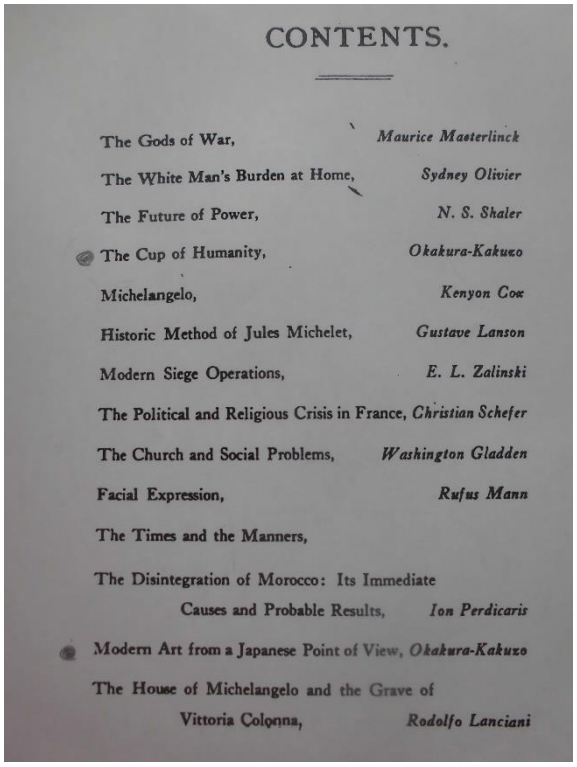
の少庵は会津若松の蒲生氏郷に預けられた。その後朝鮮に出兵する文禄年間に秀吉の怒りはとけ、千家茶道は正式に少庵により再興することがゆるされ、京都に居を構えた。少庵の子で千家茶道の基礎を築いた孫の宋旦は、利休が切腹した時はまだ 14 歳で大徳寺の修業層(喝食)であったが、再興の際に父少庵のもとにもどり、その後「わび茶」を徹底させ茶禅一味を唱えた。彼は一生仕官することなく町人を相手に過ごしたが、息子達には仕官させ京都に在住しながら、それぞれの藩の茶道奉行として仕えさせた。宗旦の長男は早くから家を出ており、二男の宗守は塗の修業をしていた。四男の宗室が二十歳を過ぎた頃から宗旦は彼に自分の茶を譲りたいと考え、不審庵を三男の宗左に譲って四男宗室とともに同敷地内に茶室を立てて移り住んだ。これが裏千家の今日庵である。宗室は加賀の前田家に茶道奉行として仕え、表千家の不審庵、裏千家の今日庵、そしてのちに宗守が分家して武者小路千家の官休庵を立てたことで三千家が誕生した。明治維新となり近代国家として改革が進む中で、1878 年裏千家 11 代宗匠玄々斉宗室は、茶道を遊芸ではなく「道」であるとして「茶道ノ源意」を政府に提出し認められた。彼は外国のために椅子で行う作法「立礼」を考案し、また女子教育の場に茶道を位置付けるなど改革を行い、伝統を活性化して茶道の流れに変革をもたらした。

第 3 節　『茶の本』の戦略的構想

『茶の本』の第一章では、「もしロシアがへりくだってもっと日本をよく知っていたならば、20 世紀の初頭は血なまぐさい戦いの光景を見ずに済んだことであろう」というように、アメリカにいて日本の戦争状態を国際的視点から捉えることが可能な岡倉にとって、西洋の日本への好意的な理解は特に重要な問題であった。200 年間の鎖国状態にあった日本への関心は浅く、幕末のロンドン万国博覧会でヨーロッパを席巻したジャポニズムの影響は、それから半世紀近くを経た日本に対してまだオリエンタリズム的な理解であり変化の兆しがみえてこない。西洋の異文化理解は、岡倉にとって日本の注目を高め、文武両道の国家で

ある事を強調するための重要な問題であった。

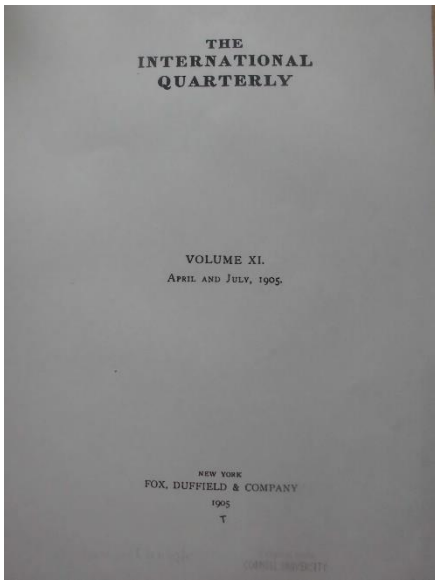
第１項　「The Cup of Humanity」の雑誌への発表



CONTENTS.

The Gods of War, *Maurice Maeterlinck*
The White Man's Burden at Home, *Sydney Olivier*
The Future of Power, *N. S. Shaler*
The Cup of Humanity, *Okakura-Kakuzo*
Michelangelo, *Kenyon Cox*
Historic Method of Jules Michelet, *Gustave Lanson*
Modern Siege Operations, *E. L. Zalinski*
The Political and Religious Crisis in France, *Christian Schefer*
The Church and Social Problems, *Washington Gladden*
Facial Expression, *Rufus Mann*
The Times and the Manners,
The Disintegration of Morocco: Its Immediate Causes and Probable Results, *Ion Perdicaris*
Modern Art from a Japanese Point of View, *Okakura-Kakuzo*
The House of Michelangelo and the Grave of Vittoria Colonna, *Rodolfo Lanciani*

（Interenational Quarterly の目次）



THE INTERNATIONAL QUARTERLY

VOLUME XI.
APRIL AND JULY, 1905.

NEW YORK
FOX, DUFFIELD & COMPANY
1905

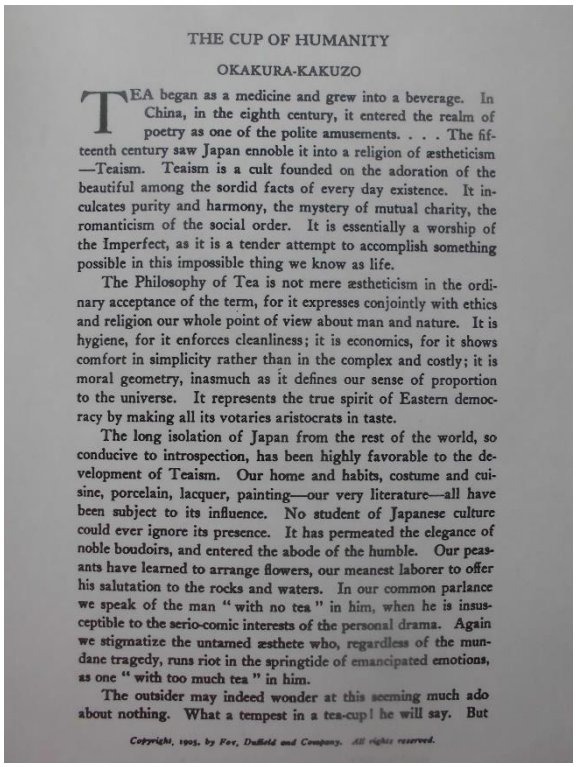
（Interenational Quarterly の表紙）

セントルイス万国博覧会開催中に「絵画における近代の問題」（*Modern Problems in Painting*）を講演し、満場の拍手を得てアメリカ世論の手ごたえを感じた岡倉は、日本の茶の湯をテーマにした *The Cup of Humanity* を翌年２月に脱稿しその直後に第一回のボストン美術館勤務を終えて[256]、半年の休暇のため日本に帰国した。雑誌 Interenational Quarterly には４月に発表された。この時点で日露戦争は継続中であったため、のちに『茶の本』の第一章と第二章となる *The Cup of Humanity* には西洋批判が残されている。

ボストン美術館の夥しい日本コレクションの整理に追われるこの忙しい時期に、1886 年長年親交を深め、『日本の覚醒』を出版してくれたセンチュリー社ではなく、フォクス・ダフィールド社に変更してまで、何故 *The Cup of Humanity* を書いたのか？広報外交のためにさらなる本の出版が必要であった岡倉に、好条件を持ちこんだのがダフィールド社であったのである。つまり雑誌 International Quarterly の目次に、

256　ボストン美術館との半年毎の日米往復勤務の契約

Okakura　Kakuzo の論文「絵画における近代の問題」と The Cup of Humanity（Ⅱを含む[257]）を同時に掲載するという条件であり、さらに新たな本の出版の契約を持ち掛けられたためである。当時日露戦争は激しさを増す一方であり、アメリカでは日本人の英語著者が日露戦争を背景にした論文を投稿するなど、岡倉にとって競争相手が多くひしめくなかで、広報外交のために一冊でも多くの岡倉の本の出版が必要であったのである。The Cup of Humanity を雑誌に掲載するときの契約で、欄外に「1905 年、全版権所有者はフォックス・ダフィールド社である」[258]と但し書きがあり、『茶の本』の第一章と第二章となっている。約 1 年後の 1906 年 5 月、『茶の本』はニューヨークのフォクス・ダフィールド社から出版された。7 章からなる第一章と第二章は、日露戦争中に文化をテーマにして雑誌に発表され、第三章以降を戦争終焉後に加えて執筆から 1 年半後の出版という複雑な社会背景を反映している。いずれにせよ「絵画における近代の問題」がきっかけであり、同じ茶の湯をテーマにした論文 The Cup of Humanity を同時記載したことにより、OKakura Kakuzo の名はもちろん、これらの内容が関連することで主張を強める結果となり、大国ロシアと戦う小国日本の文化への関心が深まったのである。



THE CUP OF HUMANITY

OKAKURA-KAKUZO

TEA began as a medicine and grew into a beverage. In China, in the eighth century, it entered the realm of poetry as one of the polite amusements. . . . The fifteenth century saw Japan ennoble it into a religion of æstheticism —Teaism. Teaism is a cult founded on the adoration of the beautiful among the sordid facts of every day existence. It inculcates purity and harmony, the mystery of mutual charity, the romanticism of the social order. It is essentially a worship of the Imperfect, as it is a tender attempt to accomplish something possible in this impossible thing we know as life.

The Philosophy of Tea is not mere æstheticism in the ordinary acceptance of the term, for it expresses conjointly with ethics and religion our whole point of view about man and nature. It is hygiene, for it enforces cleanliness; it is economics, for it shows comfort in simplicity rather than in the complex and costly; it is moral geometry, inasmuch as it defines our sense of proportion to the universe. It represents the true spirit of Eastern democracy by making all its votaries aristocrats in taste.

The long isolation of Japan from the rest of the world, so conducive to introspection, has been highly favorable to the development of Teaism. Our home and habits, costume and cuisine, porcelain, lacquer, painting—our very literature—all have been subject to its influence. No student of Japanese culture could ever ignore its presence. It has permeated the elegance of noble boudoirs, and entered the abode of the humble. Our peasants have learned to arrange flowers, our meanest laborer to offer his salutation to the rocks and waters. In our common parlance we speak of the man "with no tea" in him, when he is insusceptible to the serio-comic interests of the personal drama. Again we stigmatize the untamed æsthete who, regardless of the mundane tragedy, runs riot in the springtide of emancipated emotions, as one "with too much tea" in him.

The outsider may indeed wonder at this seeming much ado about nothing. What a tempest in a tea-cup! he will say. But

Copyright, 1905, by Fox, Duffield and Company. All rights reserved.

（International Quarterly の第 1 章）

257 後の『茶の本』の第二章のこと. 1905 年 2 月に脱稿した *The Cup of Humanity* にはⅡとしてこれが含まれていた. 帰国後第三章以降が付け加えられた.

258 堀岡弥寿子『岡倉天心との出会い』近代文芸社, 2000, p.95

第 2 項　西洋の異空間空想概念―「ガリバー」と「アリス」

日本を知らない読者に、茶を介して日本の存在を第一章で明らかにしながら、章の最後には、世界を救う救世主が現れるまで茶でもすすろうではないかと茶に誘い、第二章の茶の異空間に飛翔させる。茶室は都会にあって人工的な林の中に建てられた小屋を表し、「市中の山居」といわれる。隠遁者の家をかたどった茶室で気分を変化させ現実から異空間へと自由な行き来を行い、この空間で道具の取り合わせや花を生けることで異空間を楽しむ。戦国時代のキリスト教宣教師ジョアン・ロドリゲスがイエズス会に報告した『日本教会史』にも、このような茶の異空間が報告されているが、西洋人にとっては難しい異空間概念であったに違いない。

ポール・スノードン[259]は、1862 年幕末徳川幕府がヨーロッパへ派遣した武士の遣欧使節団について、19 世紀の西洋にとって日本とは、『ガリヴァ―旅行記』の時代と同じような目で見られていたことを当時のイギリスの『テレグラフ』の記事がはっきり示していると指摘する。武士が初めてヨーロッパの国々を訪問したこの時代、18 世紀に出版された大人から子供まで階級を超えて読まれたという『ガリヴァ―旅行記』を通して、未知の国とは航海と漂流の果てに行きつく島国であるという西洋的異空間空想概念が存在していた。『ガリヴァ―旅行記』の作者の意図は、当時の社会への不満を未知の空想社会に置き換えた国家体制への批判と風刺である。また視点をかえて相手の気持ちを理解しようとする空想的思考は、岡倉が求める彼らへの異文化理解に最適である。西洋との接点を見出し、『茶の本』に取り入れ、新しい視点を切り開いたのである。

岡倉は東京大学文学部時代に多くの洋書を耽読し激しく仲間と論議を交わすことを楽しみ、官僚時代には省略語で会話を無理やり成り立たせるなど、無意味で滑稽な遊びを面白がって気の合う友人達と酔っぱらいながら楽しんでいたという。弟の由三郎は、「兄はユーゴーとかデュマとかフランスの小説をよく読んで夕食の時など、食卓でその話をしてくれ、私はまだ子供だったがおもしろかっ

---

259 ポール・スノードン,2008,『ヨーロッパ人のみた幕末使節団』講談社 p.36

た」と彼が外国の小説で弟たちを楽しませていた様子も回想している。彼の中には日本、欧米、中国の言語世界が同等に存在して、一つのことに対して言語による一体化が可能であり、特に欧米各国の文化傾向には敏感であったと思われる。10 代での外国人教師との出会い、20 代から 30 代にかけて文部省官僚として真剣に日本の将来を見据えた 1 年間の欧米視察旅行、政府の命で日清戦争直前の厳しい国内統制の中での半年間の中国視察旅行、1 年間のインド遊学、これらの経験は常に国家事情が背景にあった。

戦争中であり、西洋読者に『茶の本』を理解させるために『茶の本』の第一章 The Cup of Humanity でロシアへの批判を強めながら、第二章 The Schools of Tea から最終章までは、『ガリバー旅行記』や『不思議の国アリス』『鏡の国のアリス』のような想像の世界で日本を幻想的に描き、独特の言葉遊びや暗示で楽しませ彼らを魅了するという戦略的工夫を行ったのである。

「ガリバ―」から 100 年を経て、岡倉の誕生と同時期に出版された『不思議の国のアリス』[260]『鏡の国のアリス』は「ガリバ―」より進歩した異空間体験である。誰もが経験する「夢」の世界で、自身の意志の拡大・縮小を可能にし、英語圏特有の言語遊び、ノンセンス、頓珍漢で常識外れの面白さは、純粋に空想世界に遊べるゲームである。「うさぎを追いかけて穴に落ちる」という、どこにでもある場面設定は、日本の「茶室で茶を点てる」こととさほど変わらない日常的習慣であり、身近な異空間への入り込みである。

「アリス」はジョン・ラスキンと関連することからもっと岡倉には身近である。インド研究家のイギリス人ニヴェディタ女史は『東洋の理想』の序論の中で、岡倉を「ある意味で日本の国のウイリアム・モリス(19 世紀イギリスの詩人、美術家)であるというならば、日本美術院を、日本の一種のマートン・アヴェイ(モリスがロンドン郊外に創設した美術公房)であると説明することも許されるでしょう」と岡倉のモリス、フェノロサ前派の芸術活動との共通性を指摘するが、フェノロサ前派を擁護したジョン・ラスキンは『不思議の国のアリス』の作者ルイス・

[260] 1865 年今見るような形の作品としてオックスフォードで印刷された初版

キャロルの師であると同時に、「アリス」の主人公アリス・ブレゼンス・リデルに週一回美術を教える教師であり、『不思議の国のアリス』の「海の学校」のビジツの先生[261]として描かれている。

このように「ガリバ―」や「アリス」の西洋の異空間空想概念を持つ彼らに、岡倉は物語風に茶の異空間を設定し、彼らを魅了する。『東洋の理想』『日本の覚醒』『茶の本』と岡倉の連続した英文著作は、東西文明偏重のアンバランスな硬直した力関係に「変化」の動きを求めることになる。

第 3 項　Teaism と Tea - Cult：近代と前近代

岡倉はユーモアを利かせた文章で *The Cup of Humanity* を描き、茶を通して東西を一つの世界に見立て茶の習慣を語ることで東西のアンバランスな世界情勢を問う。

『茶の本』のなかで、Teaism は全章を通してなんども現われるが、特に第一章 *The Cup of Humanity* の Teaism は他の章の 1~2 回に比べて特別回数が多い。Teaism は岡倉の造語であり、伝統的な「状態の茶」を近代的な「一点集中の茶」にし、日本人の茶道を Teaism をとして定義する。さらに「死の術」に対して「生の術」を語る Teaism、「暗示する術」、「ユーモア」の Teaism と自由に発展させる。

その一方で、茶道の精神にもとづく基本概念「和・敬・清・寂」を、この文章の中で harmony・mutual charity・purity ・the romanticism of the social order と言いかえ、19 世紀末の西洋の藝術用語である aestheticism, religion, beautiful に重ねて、Teaism を『茶の本』の冒頭から宗教（道教）的、藝術的に表現する。

彼は第一章で Teaism を定義し東西文明比較を始めるが、まず茶の独特のいいまわしで、日本人の人間性をユーモアたっぷりに語る。

In our common parlance we speak of the man “ with no tea” in him,

[261] 河合祥一郎訳, 2010,『不思議の国のアリス』角川書店 p.180

when he is insusceptible to the serio-comic interests of the personal drama. Again we stigmatize the untamed aesthete who, regardless of the mundane tragedy, runs riot in the springtide of emancipated emotions, as one " with too much tea" in him.

(我々の間では、身上のドラマのなかば真面目で半ば滑稽な味のわからない人間のことを、俗にあの男は「茶気がない」という。また、この世の悲劇に無頓着で、浮かれ気分の渦中で騒ぎまわる半可通のことを、「あんまり茶気がありすぎる」といって悪くいう)

そして括弧でくくるように「茶気がない」、「茶気がある」を逆にして、もう一度順序を登場させる。

You may laugh at us for having " too much tea", but may we not suspect that you of the West have " no tea" in your constitution?

（われわれの「あまりに茶気がありすぎる」のを笑うかも知れないが、我々も諸君には「茶気がない」のではないかと思うかも知れないではないか)

この括弧で括られた中には、イギリスの戯作家シェークスピアの有名な、『から騒ぎ（much ado about nothing)』『あらし（tempest)』が隠されていて、岡倉の言葉遊びの「しゃれっ気」を見せている。

The outsider may indeed wonder at this seeming much ado about nothing.What a tempest in a tea-cup! he will say.（門外漢からすれば、何でもないことにこのように大げさに騒ぎ立てるように見えるのが、如何にもふしぎに思われるかもしれない。それこそ茶一杯での大立ち回りだ)

彼はこの中で Teaism と Tea-ceremony を使い分け、さらに Teaism—Taoism という T の置き換えた Tea や、Tea-を何回も登場させるのは、T 音でリズミカル

な響きをだし耳にも訴え、言葉の関連性を印象づける。岡倉の得意な言葉遊びや音からの茶のイメージ等ナンセンスな面白さは、西洋の異空間空想概念と共通し、異文化理解につながる。

Teaism と tea-ceremony の違いは、日本語では前者には精神性が含まれる「茶道」の意味であり、後者は茶に携わることすべてに使う「茶の湯」の意味である。岡倉はこの違いをはっきり使い分けており、邦訳者に茶の知識がない場合は、異なる内容になる可能性がある。しかし彼は外国人に向けて書いているのであるから、自由な理解はいいかもしれないが、岡倉は Teaism と tea-ceremony の違いははっきり区別して書いていることは確かであり、西洋に対して厳しい批判を展開しながら、一方で英語を楽しんでいる。そして章の最後に「易」の創始者である伝説の皇帝伏犠の妹「女媧」を登場させ、読者を茶の世界に招待する。

19 世紀半ばに開国した日本と国交を結んだイギリスの新聞は、日本について、「世界で最も知られていない国の一つである[262]」と紹介したがそれに対して日本文化の特異性は、島国という孤立した状態が Teaism の発展に好都合であったと開国前の徳川時代 200 年の鎖国を肯定する、と岡倉は反論する

岡倉の Teaism とは、

> 「不完全なもの」への崇拝であり、我々が人生として知っているこの不可能なもののうちに、何か可能なものを成就しようとするにゅうわな企てである」、と西洋の完全主義に対して東洋のあいまいな不完全崇拝を対峙させる。Teaism は、物心に清浄をもとめる「衛生学」、質素をもとめる「経済学」、に対する東洋思想の宇宙感から「精神幾何学」、趣味の上で平等に貴族にする東洋の「民主主義」である。

という簡潔な合理的解明は茶を西洋に異文化理解を促す岡倉の心情の表れである。世界中が戦争下の日本を注目する中で、それでは一体このような不思議な文化をもつ日本とはどのような国であるのか？。

---

[262] Illustrated London News, 1858, Nov. 27

「我々の住居、習慣、衣食、磁器、漆器、絵画―我々の文学でさえも―すべて Teaism の影響を受けてきている。日本の文化を研究しようとするほどの人ならとうてい Teaism の影響を無視することはできない」

岡倉の『茶の本』こそ日本文化を理解するのに最適な本であるといわんばかりの説得力のある言葉で彼らを Teaism の世界に惹きこむ。渡米と同時に勃発した日露戦争は、大国ロシアとの無謀な戦争による日本国の存亡の危機を招き、岡倉に「死の術」に対する「生の術」としての Teaism を語らせる。

「日本が満州の戦場で大がかりな殺戮をおかし始めてこの方、彼らは日本を文明国と読んでいる。「サムライの掟」(武士道)―我々の兵士たちを喜んで自己犠牲におもむかせるあの「死の術」について、最近多くの論評が行われている。しかるに、我々の「生の術」について実に多くを説いている茶道(Teaism)には、ほとんど何ら注意も払われていない。もし戦争をすることで文明国といわれるなら、我々は甘んじて待つことにしよう」

しかし現実の不平等な東西社会への岡倉の苛立ちは隠しきれず、「いつの日に西洋は東洋を理解するのであろうか、つとめるのであろうか」、「諸君は地上で最も役に立たない人種だとみなしていたのだ。というのは、諸君はかつて実行しないことを説教するといわれていたからだ」と陳情を吐露し、ここで感情を高ぶらせ、彼はいきなり「旧い世界」の Tea-Cult を否定し、態度を一変させる。

「我々がひざまづいてまで西洋に近づこうとしているにもかかわらず、ラフカディオ・ハーンや、『インド生活の仕組み』の著者[263]達の東洋理解は極めて稀ではないか」、「このようにあけすけに物をいうことは、おそらく Tea-Cult についての私自身の無知を暴露するものであろう。言うべく期待されていることだけを口にし、それ以上をいわないというのが実にそれの典雅な精神の要求するところであるからだ。だが私はそのような一個の茶人を（Teaist）を気取っているのではない。「新しい世界」

[263] 岡倉の『東洋の理想』の序論を書いたイギリス婦人ニヴェディタ.

と「旧い世界」との誤解により被害をこうむっている以上、容易に理解することを促すのに、それにふさわしい貢献をすることに何の弁解もいらないはずである」

ここで岡倉は、Tea-Cult を否定することで、Teaism、つまり日本は、伝統から脱却した国家であるとする。Tea-Cult は『茶の本』を通して一度だけ現れる言葉であり、「旧い世界」の殻を破るキーワードである。いいかえれば Tea-Cult の否定は、すでに「旧い世界」から「新しい世界」に日本はあり、その立場で自分は語ることを岡倉はここで宣言する。そして戦争について語る。

「もしロシアがへりくだってもっと日本をよく知っていたならば、20 世紀の初頭は血なまぐさい戦いの光景を見ずに済んだことであろう。東洋の諸問題に対する侮蔑的な無知が、人類に対するなんという恐ろしい結果をもたらすことか！　あのばかばかしい「黄禍」の叫びをあげて恥じることのないヨーロッパの帝国主義は、アジアもまた「白禍」の残忍な意味に目覚めるかもしれないということを悟り得ていない」

そしてここで西洋の読者に対して東洋の人間として語りかけるのである。

「両大陸がお互いに警句を投げつけるのはやめようではないか。もっとまじめになろうではないか。諸君は知っているだろうか。東洋は若干の点において西洋に勝っているということを！」

「人間性が茶碗においてかくも遠く相合して来たというのは、実に不思議なことである。茶は全世界が尊重するアジアのただ一つの儀式なのだ。白人はわれわれの宗教とわれわれの遺伝とを嘲笑した、が、この褐色の飲料はためらうことなく受け入れた」

個人の楽しみとして西洋社会の日常生活に欠かせない紅茶の習慣は、東洋の茶にもみえる日常的な風景である。この紅茶と言う飲み物がもはや生活を潤す習慣であり、気楽に茶を楽しもうとする彼らの姿は、「暗示する術」、「ユーモア」といった茶の奥義としての Teaism でもある。

「Teaism は諸君が美を見いだし得んがためにそれを隠しておく術であり、諸君があらわにいうのを憚るようなものを暗示する術である。それはもの静かにだが徹底的に、諸君自信を笑う高貴な奥義であり、だからつまりユーモアそのものであり、哲学(愛知)の微笑である、すべての真にユーモア(洒落)を介する人は、この意味において茶の達人と呼ばれてよい」

このように岡倉は東洋の茶の儀式 Tea-Cult を否定し、茶人になるつもりはないと断言した彼は、茶を論じる場を新しい茶の世界に移す。そこで道教の伝説を引用し、東方から現れた角冠竜尾をもつ女帝女媧を登場させ、天が二つに割れる不倶戴天の闘争を救った神なる救世主であるが、荒廃した天を再建の時に、二つの小さな割れ目を埋め忘れたため、人間は希望と平和の天空を新たに建設しなければならなくなったと東洋の世界を開く。

「東西文明の混迷を救う一人の女媧が現れるのを待つ間、一椀の茶でもすすろうではないか。午後の光は竹林を照らしている。噴泉は喜びの音をたてている。松籟はわれらの茶釜に聞こえている。はかないことを夢みようではないか、そして事物の美しい愚かさについて思い、めぐらそうではないか」

女媧の兄で中国の皇帝伏犠は、三千五百年前、「易」を帝王の学問であるとして創始した。女媧の登場は、「変化の著」である「易」の思想の象徴である。第二章 The Schools of Tea から最終章 Tea-Masters までの茶の世界は「易」に支配される異空間であり、東西文明の混迷を救う一人の女媧が現れるのを待つ間、茶の異空間を楽しもうではないかと非現実的な幻想の社会にユーモアを交えて誘うのである。

第 4 項　究極の絵画

日本絵画と西洋絵画との相違と共通性について、「日本絵画のあるものは極

めて東洋的性格が強いために西洋人に理解しがたいものがある。東洋思想の一元論的傾向は、西洋において拡散的になるところを、集中的になる結果をもたらす。我が国の小宇宙的観念は、最も複雑な観念を最も単純な手段で表現するという傾向を一層強めさえした。ある場合には、観念の純粋さを保ちたいと熱望し、色彩や陰翳を否定するまでになった。それは象徴主義ではなく無限の「暗示性」であり、幼児の単純さではなく、達人の心の率直さである。中国宮廷画家の夏珪や日本画僧の雪舟の水墨山水は、それ自身生命の意味に満たされた一つの世界であり、彼らの自己充足性はレオナルドの『モナ・リザ』やレンブラントの百フロリン版画の中にみられる自己充足性と同じである」と岡倉は共通点を指摘する。さらに西洋画の日本画への影響について、西洋の方式を学ぶことで逆に日本絵画の精神的装備は一層強力なものとなることが必要であるため西洋の方式を学ぶことに対して反対ではないが、中国及び日本絵画の伝統が完全に無視され、個性を破壊するような模倣の態度に抗議すると訴える。

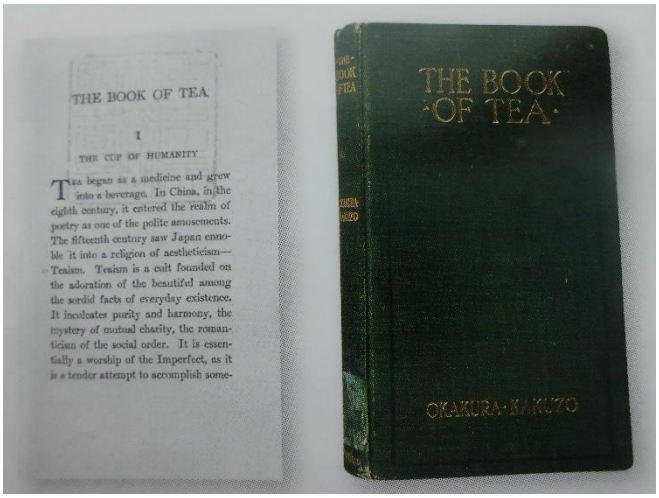
茶の湯と藝術観賞についての共通性を述べながら「暗示」について、「形式だけの無意味なものにもなるが、暗示的なものの崇拝は、われわれの藝術意識の不可欠の要素であり、時に理想に達しえぬ場合があったとしても、理想は常に存在する。暗示の価値は、それが伝える思想の深さの中にある」という。この暗示に満ちた『茶の本』は岡倉の描いた究極の絵画である。

第 4 節『茶の本』の出版－With a smile

英文著作の第三冊目となる『茶の本』は、1906 年 5 月にニューヨークのフォックス・ダフィールド社から出版された。構成は第一章 The Cup of Humanity、第二章 The Schools of tea、第三章 Taoism and Zennism, 第四章 The Tea-Room、第五章 Art Appreciation、第六章 Flowers、第七章 Tea-Masters からなる。

1901 年、インドに渡った岡倉はヒンズー教のスワミ・ヴィヴェカーナンダ（1863-1902）や、詩人ラビンドラナート・タゴール（1861-1941）を訪ね親交

を深めた。そしてインド各地を回る間に“The Ideals of the East"[264]、その翌年に“ The Awakening of Japan”[265]を書き上げている。そして“The Book of Tea” [266]を出版し英文三部作となった。『茶の本』は東洋思想というものを描きながら、人間として西洋と東洋の融合を説いていこうとする天心の日本への思いがあふれている。時代は日露戦争前後、騒然とした社会の中、この本は書かれた。『茶の本』全体の流れの中で彼が貫く主張は、「変化」である。この世界を一個の壊れやすい茶椀に象徴し、「変化」の訪れを暗示する。一方で政治社会の状況下で日本に世界の同情を求めるために、彼らの興味ある日本を描くという藝術性と政治性を『茶の本』に込めている。



（ The Book of Tea ）

第 1 項　The Cup of Humanity：暗示

第一章では、日本の茶道を Teaism で定義し、東西の茶を論じながら、西洋の傲慢さに対し、特にロシアを名指しで批判を強める。第一章の最後に伝説の皇帝女媧を登場させ、茶の世界に誘い、「変化の著」である「易」の思想に支配される茶の世界を暗示する。そして茶道の本質を述べる。茶がもとは薬として用いられ、飲み物異となり精神性、宗教性を帯びた茶道として成り立って行ったという茶の起源の描写は、不老長寿を宗教的理想と説く中国の道教思想の片鱗を暗示し、西洋の優位性をのべるなら、其の西洋の好む茶は東洋が発祥の地であり、太古の昔からアジアでは茶は貴重なものとしてすでに飲まれていたと、東洋の優位性を、茶という飲物を通して述べる。第一章のさいごに現れる「女

264 『東洋の理想』1903
265 『日本の覚醒』1904
266 『茶の本』1906

媧」の登場と、それに続く第二章から最終章にわたる茶の世界が Teaism－Taoism―Zennism と循環し、岡倉が「変化の著」とする「易」思想で支配されていることから、第一章の The Cup of Humanity は『茶の本』全体に貫かれる「変化」を導く章である。

第 2 項　The Schools of Tea：ルーツ

第二章は茶の異空間に飛び、その最初として茶のルーツを紹介する。岡倉の愛読書は陸羽の『茶経』であったと天心の妻元子は語っているように彼は中国の茶の種類や状況を、唐の「団茶」、宋の「抹茶」、明の「煎茶」というように時代を追って説明していく。茶について陸羽が書き記している『茶経』には、中国で隆盛を極めた茶が日本に伝わってきたのが宋の時代の抹茶で、しかしその後すぐにモンゴル民族「元」により破壊され、日本にのみ宋の時代の茶習慣が残り、日本の中で熟成され独自の文化に発展したと解説する。では日本が継承した茶とはどのようなものか。

この章は茶の異空間の始まりであるため、岡倉は中国の茶のルーツを紹介する。「茶は藝術である」という書き出しは、『絵画における近代の問題』で使われた言葉であり、茶を単なる飲み物としてではなく藝術的に表現する。8 世紀中国の易の唐代に活躍し世界で初めて茶についての書をあらわした茶聖陸羽の『茶経』の中で「茶の点て方」について茶を分類する。

> 飲茶である茶の良し悪しは、水と熱の加減により決まる。日本の茶の湯では、「易」の思想に基づく茶の火相と湯相のことであり、いかに上質の水と、最上の湯が、最上の飲茶となるかの問題である。さらに「茶の種類」について、唐の時代の煮る「団茶」、宋の時代のかき回す「粉茶」、明の時代の淹す「葉茶」に分け、古典的、浪漫的、自然主義的、と西洋絵画的に分類する。その「使用」について道家は、茶を不老不死の霊薬

の重要な一成分とし、仏教徒は長時間の瞑想の睡魔を防止するのに活用した

「飲茶の誕生」は、4~5 世紀ごろ.揚子江の住民の間でのまれたことが始まりで「茶」の文字もこの頃に造られた。茶を高価な褒美として贈る習慣はあったが、喫茶の方法は未熟で、茶に他の食物を加えて煮だすという習慣は、チベット、モンゴル、ロシアにも残されている。唐の時代の茶の天才陸羽の登場が、茶道のバイブルと言われる『茶経』を表し、粗野な茶を、易に基づく思想により「茶の掟」を定式化した、と茶のルーツを全般的に説明する。

この章の後半、いきなり新儒教[267]（Neo-Confucian）による人間性にかかわる茶の話に移る。Neo-Confucian は前二冊『東洋の理想』『日本の覚醒』の流れを継ぐ、共通語であり、道教・仏教・儒教思想の融合のキーワードである。この章の最後の「茶道は身をやつした道教である」（Teaism was Taoism in disguise.）とは、道家の教理を多分に取り入れた南方の禅宗が、茶の儀式をこしらえ僧侶たちが達磨の像の前に集まり、聖餐の意味深長な儀礼でもって、ただ一個の椀から茶を喫したものであり、これが 15 世紀に日本の茶の湯となった。つまりこの言葉から単なる飲む茶から茶の思想となったと論じる。飲茶から人間性にまで高められたのが日本の茶であり、中国の茶とは全く異なると彼は説く。

---

[267] 新儒教学派は文学、芸術面で創造的な努力が発揮された注目すべき「啓蒙」時代の産物であり、道教、仏教、儒教の思想の総合を目指し、アジアの精神のすべてをうつしだそうとする輝かしい努力の成果を示している.
朱熹（南宋の大儒。宋学の大成者。後世朱子と敬称。その額を朱子学といい、江戸時代の儒学に多大の影響を与えた））は成人の教義に最も傾倒していたので、新儒教の中心人物を認められた。新儒教は、朱熹もそうだったが、一般的傾向として抽象的、思弁的（実践に対して観念・理論の意味。形而上学の多くが思弁哲学）であり、したがって、その信奉者たちは、仏陀の弟子たちと異なるところが少なく、自己集中を精神鍛練の重要な部分とみなしていた。形式主義の傾向の強かった明の学者たちは、朱熹の教えをドグマ化し、抽象的な徳目や用語の解釈に精力を費やした。この傾向は、日本の正統派の学者たちにも引き継がれた。儒学はこうして、その精髄である実践道徳としての性格を失ってしまった。（色川『日本の覚醒』p.217）

道教から茶道に至る中間に道教の教理を多分に入れた南方の禅宗を置くことで、具体的な茶道を導くことになる途上に新儒教があり、岡倉の造語であるTeaismを明らかにしている。この章で、新儒教の心にとっては「面白いのは過程であって事実ではない。真に肝要なのは、完成することであって、完成ではない」の言葉は、まさしく第一章の「Teaismの本質は、「不完全なもの」を崇拝すること」なのである。岡倉は道教、禅、茶の関連性を、陸羽と易の思想で道理づけ、茶道は身をやつした道家の教えであると残して、第二章を終える。

第3項　Taoism and Zennism：宗教

第三章では茶禅一味といわれるが、根底には道教が存在することを説く。アジアの思想である道教がさまざまに影響を与え、アジアは同じ宗教のもとに志士思想を同じくするという。中国民族はこの「易」によって「理解を超えたもの」に接近する、と『東洋の理想』で岡倉は語った[268]。『東洋の理想』『日本の覚醒』を通して岡倉の主張は、東西文明のアンバランスな状態への批判である。ここでは変化への覚醒を「竜」の動きに例える。

茶と禅の結びつきについて、中国の風俗習慣の起原を説いた本によると　客に茶を供する礼式は、道家の始祖老子に高名の弟子が初めて一杯の黄金の不老不死の霊薬を捧げたことに始まり、道家と禅については、我々が茶道と呼んでいるものの中に体現されており、人生と藝術についての思想そのものである。「道」とは「行路」であり、早く過ぎることから「無限」を意味する。「行路」はむしろ「秩序ある変化」の精神であり、「道」は「偉大な推移」ともいえる。また「宇宙の気」ともいえ、それの「絶対」は「相対」である、と岡倉の意図する「変化」を語り、その象徴として「竜」を描く。

老子の思想について、東洋の「竜」とは、計り知れない力をもつ「変化」の精であり力と善の守護神である。孔子は二人の教義の違いにもかかわらず、老子を師と仰ぎ、孔子は老子をさして「竜」と称し「自分は、鳥がよく飛ぶのを知って

---

268 『東洋の理想』「儒教―北方中国」「老荘思想と道教―南方中国」の章より

いるが、「竜」の力に至っては、これを把握することはできない」[269]と表現した。中国の学者達より進んでいた日本の陽明学者達は動的な宇宙力観においてインド流の諸侯方法、特に仏教の禅宗の考えを好み、「変化」の思想を協調し竜の形象を好み、「変化」の力の恐るべき象徴を雲と霧から生まれた「竜」の形象に見いだした。

そこで岡倉は「変化」の象徴を「竜」とした。

> 「竜とは、その前身の姿を見た人間は、ただちに死ぬという近づきがたい存在であり、東洋の竜は西洋中世の想像が生み出した不気味な怪物ではなく、力と善の守護神である。竜は「変化」の精であり、したがって生命それ自身の精である。竜は最高の力、すなわち、万物にやどり環境に従って新しい姿をとるが、決して決定的な姿をとることはない。竜は大神秘そのものであり、近づきがたい深山の洞窟に身をひそめ、あるいは深海の底にとぐろを巻き時に至れば、おもむろに起き上がる。嵐の雲にそのとぐろを解き、さかまく激流の暗黒にそのたてがみを洗う。その爪は稲妻に似かよい、そのきらめく鱗は雨に現れた松樹の肌かと思われる。その声は森の枯葉を散乱させ、春を呼ぶあらしの中から聞こえてくる。竜は現れたかと思えば、たちまち消える。竜は生気を失った老廃物をはらいおとす有機体の生命力のすばらしい象徴である。自分の力で旧い皮を脱ぎすて、一瞬、鱗の閃光の中にその姿を現す。竜は一瞬といえども同じ姿ではないといわれる、花がそうである。全ての生命がそうである。(『日本の覚醒』「内からの声」より)

道家の宇宙感は、「現在」は動いている「無限」であって、老子は「虚」についてただ空虚にのみ真に本質的なものがあるとした。禅は道家と同じく「相対性」の崇拝であり、自分の心と交渉するもの以外に実在するものはない。禅は精神的なものの重要さを世俗にも同等にみとめたことである。

---

[269] 色川『東洋の理想』p.125

茶道 Teaism は Zennism の考え方の結果であり、道家は美の理想のためにその根底を与え、禅はそれを実践に移したのである。

第 4 項　The Tea-Room　：空間

第四章ではその思想を空間の中で捉え、小空間から無限への移行性を述べて空間にとらわれない心の自由を唱える。第三章で述べられた茶道における宗教性はこの章で具体的に語られる。茶室と呼ばれる木と竹でできた小さな空間は、大空間になれた外国人には理解できないだろう。しかしこの空間は質素ながら洗練された印象を受けるように設計されていて、さりげない空間であるが工夫がなされている日本建築である。アンバランスな不完全さが、動を感じさせる。禅の教義を反映している四畳半という限られた空間は、真に悟りを開いた者にはそれは存在しなくなる。また茶道具や身体動作にとって、四畳半は小間でも広間でもあるニュートラルな空間である。茶室で瞑想を行い自己の目覚めへの意向を促す。利休と小堀遠州は、露地の作り方にその違いを見せながらもこの空間での趣向に工夫を凝らした。利休は「見渡せば、花も紅葉もなかりけり　浦の苫屋の秋の夕暮れ」(藤原定家)という古歌に究極の孤独をめざし、一方遠州は「夏の木立の茂み　海がかいまみえる　淡い夕月」（遠州）と、過去のぼんやりした夢の中をさまよいながら、新たな目覚めを迎えようとしている魂の状態を表現した。

日本の建築法の異空間概念は、茶道の空間である茶室に現れる。茶室は俗世間を離れた亭主と客が一座建立するための座敷である。座敷の基本は四畳半であり、これ以下を小間、以上を広間と呼ぶ。四畳半の起源には、仏教の方丈思想の以外に影響以外に陰陽五行説にもとづいた凝縮した小宇宙という考えがあり、茶室もまた易思想の建築物である。茶の湯と易の関係は、茶も同様に易の陰陽思想に基づいた火相と湯相を基準にした初座の陰と後座の陽の和合によってはじめて主客の座が創造される。茶室にこれらが導入されたのは、異空間での形を作り上げるためにであり、一畳台目など極小空間に宇宙の無限を表現したのであ

る。このような小宇宙をかたどった空間の中で主客が相会し静と動のコミュニケーションを繰り広げる。茶室における身体動作は記号となり、言葉は以心伝心に変化する。

「易」は「変化」の象徴であり、中国の「ヴェーダ」と言うべきもので、易の思想では、すべての物事は陰陽の和合によってなされる。

The reality of a room, for instance, was to be found in the vacant space enclosed by the roof and walls, not in the roof and walls themselves. The usefulness of water pitcher dwelt in the emptiness where water might be put, .not in the form of the pitcher or the material of which it was made.

(一つの部屋の実体は、屋根や、壁で取り囲まれた空虚な空間に見いだされるのであって、屋根や壁そのものにあるのではない。水差し（水指）の用は、水を注ぎ込むことのできる空書にあるのであって、それの形だとか、それを作り上げている材料とかにあるのではない)(浅野晃訳)

フランク・ロイド・ライトが感銘を受けたという『茶の本』の茶室における空間描写は、西洋と東洋の建築における空間概念がいかに異なっているかを表している。しかし実際茶室で行う際の空間概念は、易の思想により支配された空間である。

茶の湯と「易」の関係は、四畳半の茶室の空間に「易」の中核思想の一つ「五行」の木火土金水が規範とされていることから，四畳半の空間は、東の木（春で青)、南の火（夏で赤)、西の白（秋で白)、北の水（冬で黒)、真ん中の半畳の土（炉で金)、と配置される空間である。今日でも炉が黄色い土でできていることから、「四畳半の席は元来陰陽五行をかたどりて一室に世界を込めたる」を意図する。

茶室の中の「易」のもう一つの中核思想である「陰陽」は、「初座は陰、後座

は陽」の席のしつらえである。これを身立てる条件は、火相と湯相にあり、最高の茶を点てるための湯に関係する。初座は陰であるため、窓に簾をかけ、床の間には掛け物、釜の火相は衰え、一応陰を表す。後座は、簾をあげ窓を開け、床の間には軸の代わりに花を掛け、釜はよく沸き、陽をしつらえる。「陰は凶」、「陽は吉」とされることから、吉を求めて空間を動かす。岡倉はこの空間に至るまでの俗世間からの離脱に、露地、庭の役割を解き、にじり口からの茶室への入り口には、階級制度の厳しい束縛からの解放の自由を象徴し、都会にいながらにして、なお文明から離れた森の中にあるという、気分転換、心の「変化」を説く。

「好みの住居」(好き家)、「空虚の住居」(空き家)、「非対称の住居」(数寄家)、すべて「すきや」と称するこれらの住居は、「変化」のバリエーションである。「好みの住居」(好き家)は、ある個人の藝術上の要求にかなうべくつくられた家であり、「空虚の住居」(空き家)は、装飾的動因の変化の不断の必要であり、「非対称の住居」(数寄家)は、我が国の装飾法の今ひとつの相を暗示しているという。いずれにしてもこれらの「すきや」は個人の趣味にかなうようにつくられるのであって、「変化」を求めて空間を楽しむ日本人のユーモアである。茶道具のおき合わせについても、四角い棚には、円い水指といった具合に、意匠の一律は想像力の溌剌さには致命的である、と反復の表現をいさめる日本美学に彼は「変化」の兆しをみる。

第 5 項　Art Appreciation：藝術

ここでは道教の「琴馴らし」から芸術を鑑賞するための心の在り方を述べる。藝術鑑賞に必要なものは心と心が共感し通い合うことだが、そのためには互いに謙譲の気持ちを持ち合わなくてはならない。心が心にが語りかけるのであり、われわれは無言の声に耳を傾け、目に見えないものを見つめる美に対する岡倉の姿勢がここに現れている。絵画においても間に見えないものを追求し、それを表現することを絵師たちに求めている。傑作においてはそれに共鳴すると一顧の生きた存在になり、まるで仲間同士のような絆で自分に結ばれていると感じ

られるようになる。ここでは岡倉の理想である空間を超えたアジアの一体感が藝術を通して見られる。

日本では昔から「うぬぼれ男には惚れられないというが、そうした男の心には、愛を受け入れるような余裕がないのだ。藝術においても同様に、自己中心的な虚栄というものは、芸術家、鑑賞者いずれの側であっても共感を育むうえで致命的な障害になる」と岡倉はいさめている。藝術への敬意、鑑賞者の器量の重要性を説き、同時代の藝術こそ自分たちの藝術であり、社会を反映しているという。日本的空間の中で、世界に共通する藝術鑑賞者のありかたを論じる。茶道では亭主と客は両者が歩み寄り共同作業することで初めて成り立つのである。

「絵画における近代の問題」で、岡倉は東西の名だたる画家を比較して、傑作とされる基は何かを問うた。『茶の本』では、芸術はそれが我々に話しかける限りにおいてのみ、価値をもっていると岡倉は結論づける。「絵画における近代の問題」の中で、我が国の文化では、芸術家が故意に空白のまま残した背景を自らうずめ、それに共感する能力が観衆の方にも存在している。観衆は画家自身と同じ程度に画家であり、一つの思想を完成するには、両者が必要である。この観衆を育てる文化が茶の湯であると岡倉は説いている。

芸術への接し方は、

> 「偉大な王侯に接するように偉大な絵画に接しよ。傑作を理解するにはその身をへりくだり、息を殺してそれの最小のささやきをも待つのでなければならない」

まさに茶道具の中で最高の唐物道具の扱いは、傑作を扱うに等しく非常に丁寧な動作で行われる。

傑作であるかどうかの難しさを小堀遠州と弟子の会話で引用している。

> 「どれ一つとして、だれもが嘆賞を禁じ得ないようなものばかりです。先生が利休にも勝る趣味をおもちのことが、これでわかります。なぜか

といえば、利休の蒐集は、千に一人しかわかるものがなかったからです」

すると遠州は、

「それは自分がいかに凡俗であるかを示すだけのものだ。偉大な利休は、彼の心に訴えたものだけをあえて愛好した。しかるに自分は知らず識らずのうちに衆愚の趣味に迎合している。さてさて利休は茶人のうちの千に一人の傑物であったよ」

これは岡倉の藝術観でもある。

傑作を見誤るのは他にもある。藝術を考古学と混同することであり、歴史の中で生き残ったというだけで貴重品として感動してしまう。また高価であるだけで風流でもなく美しくもない産業主義の産物をもてはやす風潮は、作品の質よりも作者の名前が優先させ、「民衆は耳で絵を批評する」。

時代を経て普遍性が「変化」する。純粋な芸術は「普遍」を保てるのか、「変化」するのか。社会と人間が加われば、「変化」は留まってくれない。岡倉は最後に結ぶ。

「だれか偉大な魔法使いが、この社会の幹から、非凡な琴をこしらえてくれぬものだろうか、そうしてその弦が、天才の手に触れて、なりわたってほしいものである」

第 6 項　Flowers : バリエーション

ここでは花にたとえて、自然に対する西洋の支配的扱いと東洋の融合的扱いを比較し、西洋批判を行う。いくら理解しあおうとしても、お互いがかみ合わなければ悲劇であることをここでは述べる。生と死は表裏一体であって梵天（プラーマ : インド神話において万物の摂理を司る神）の昼と夜とのほかならない死への助走を見せる。花に例えて、はかなさを表し、美しさのゆえにそのはかなさはい

っそう深く感じられることを言い、岡倉自身の気持ちと重なるように、激しくどうにもならない世の中を嘆く。

茶人がいける花の種類を自然主義派（浮世絵）、形式主義派（狩野派）と区別して、自然派と呼び、花が枠にはまらないで茶室に存在する自由をめでる。そして茶室では花は独立した存在ではないけれども、ハーモニーを保てば野原で咲いていたように自由に活けられるものであると花の存在を認める。この自然に対する同化感情の日本人の自然観ともいえる。しかし西洋では、使われた後は無残に放棄され、これを顧みるものもない。西洋と日本との花に対する扱いはこのように違うが、日本には茶道の倫理と調和の中で、花にさえもやさしさを表現しようとする国民であると言いたげである。

しかし世界は刻々と進み、日本の将来への暗示も岡倉は含む。日本には武士政権の戦乱の世で茶の師匠が彼らの精神的支えになり、文化で戦乱の世を潜り抜ける精神的支えになってきた。しかし簡単に死を命ぜられる茶の師匠の最後はこの花のように、散り際には、無残に捨てられるときでさえ、自信によって自由な気持ちでその時を作り出し、誇りをもって次の世界に旅立っていくことができるということを最終章で述べる。

この章を書くにあたり、岡倉は先にセンチュリー社の編集者ジョンソンから手紙を受け取っていた。1904 年 5 月 4 日にジョンソン[270]宛てに、彼が送ってきた短編小説について、この作品から日本的な、あるいは日本風な印象は受けないし、作者は本質的なものを何一つ表現することに成功していないと返信する。またその筆者が生け花について語るのに必要な資格を持っていないといわざるを得ないと批判し、花を扱うことは、日本人にとって絵や彫刻と同様、真剣本気に取り組むことであると念を押している。さらに 7 月 21 日には、ジョンソンが同封した生け花に対する論文について、その筆者が生け花について語るのに必要

[270] ジョンソン（Johnson）は、岡倉の欧米視察旅行(1886)以来の知人のボストンのギルダー夫妻（Richard Watson Gilder）に紹介されたニューヨークのセンチュリー社の編集者.

な資格を持っていないといわざるを得ないと批判し、花を扱うことは、日本人にとって絵や彫刻と同様、真剣本気に取り組むことであると念を押している。8 月 25 日には、日本人が日本的ではないと考えるであろう事や、言葉の由来を取りちがえられていることについて註を加えて送り返し、追伸で「もし余裕をいただければ、生け花と日本人の生活との関係について論文を書きましょう」と約束する。10 月 16 日、ジョンソンの「生け花」の論文の完成時期についての問い合わせの手紙に対して、美術館の仕事が忙しく、また帰国命令を受け取ったので美術館の作品目録が完成次第、日本へ帰国しなくてはならず、論文完成の期日は、帰国まで延期できないかと問い、もしどうしても論文が今必要ならば、全力で書き上げる努力をするが、もしそうでないなら待ってほしいと返信している[271]。

このようなジョンソンとの往復書簡から、外国人の日本文化への無知はよほどひどい内容であったとみえ、岡倉は花についての論文を書く意向を強く表している。しかし彼は「来月（9 月）セントルイスに行く約束があるので 10 月後半まで論文を送ることは不可能であるがそれでよいか」と返信する。しかしそれ以後岡倉は彼との約束を守っていない。

その理由を推測してみれば、11 月に『日本の覚醒』を出版してくれたニューヨークのセンチュリー社編集者ジョンソンの期待に添えなかった理由は、9 月にセントルイス万国博覧会での「絵画における近代の問題」の講演が好評で、フォックス・ダフィールド社の雑誌 International Quarterly に記載されることが決定し、「絵画における近代の問題」と翌年 4 月に同時掲載をする約束で The Cup of Humanity を急いで書きあげ、フォックス・ダフィールド社と The Cup of Humanity を本として完成することを契約したため、結局『茶の本』はフォックス・ダフィールド社から出版となった。つまり茶の湯から日本文化を書くことを優先したのである。しかし茶道と花道との関係は深くつながりがあるため、『茶の本』の中では第七章 Tea-Masters の前に第六章として花の章を設けたのであろう。

---

271 『岡倉天心全集 6』平凡社 p.183

この章のはじめに、「原始の人間はその乙女に最初の花束を捧げ捧げることによって獣性を超脱し人間となった」と無垢な花の清らかさを称賛しながらも、その後花は人間世界のさまざまな象徴として描かれ、どうしようもない状況の中で耐えざるを得ない、はかない、無常な世界観を花にたとえる。

> 「晩秋の茶室において「花」は去りゆく冬のこだま（echo）を、春のことぶれ（prophecy）ととりあわせたものである。真夏の暑い日に昼の茶に招かれていくならば、床の間の幽暗慣れ行きの中に掛け花生けに活けられた一輪のユリの花を見いだすことができよう。露に濡れたその「花」は、人生の愚かさに微笑みをもたらしているようにみえる」

茶室の花に寄せて、彼は自然と人間の調和を語る。

岡倉はロマンティックな花物語の始まりから、多様な生きざまを例に挙げ東西を論じた末に覚醒した世界の無常を老子の言葉で嘆き、

> 「流れゆけ、流れゆけ、流れゆけ、流れゆけ、生の流れは逝いて[272]とどまることがない。死ねよ、死ねよ、死ねよ、死ねよ、死はすべてのものに来る」と弘法大師がいう。

「生の流れ」は、たとえ死が訪れても止まることはない自然の摂理の中で、人間の生み出した東洋の四面楚歌な現状に「変化」をもとめるのである。「変化」だけが唯一の「永遠」であり、死は生の始まりであり、生は死の始まりであるという仏教の輪廻（流れるの意）を説き「さようなら、春よ！私たちは「永遠」への旅を続けるのです」の言葉で最終章 Tea-Masters へと引き継ぐ。

第 7 項　Tea-Masters：一陽来復

近世の茶を大成したのは紹鴎に教えを受けた千利休[273]であり、彼の茶は侘び茶道をさらに追求し、何気なく存在する自然そのままの美を見いだした。彼らの

---

272 ゆいて：人が死んで

273 せんのりきゅう：安土桃山時代の茶人．日本の茶道の大成者.宗易と号した.武野紹鴎に学び、侘茶を完成．　織田信長・豊臣秀吉につかえて寵遇されたが、秀吉の怒りに触れ自刃.

革新は、利休の茶の湯に明らかである。利休を最よく表すものに茶室があるが、京都大山崎にある一畳台目の茶室「待庵」には、この空間の簡素で厳しい美から彼の茶の心をよく伝えている。利休の心は、茶の湯の究極を藤原家隆の古歌に託している。

「花をのみ待つらん人に山里の　雪間の草の春をみせばや」

この歌は雪の深い山里を観てみれば、外見は何一つないように見えながら、内部には、最も力の充実した生命が宿り強靭な力が既に芽生えていることを象徴し、外見より内面に重きをおく侘びの精神性を表現している。

Welcome to thee,	「ようこそ、汝、
O sword of eternity!	永遠の剣よ！
Through Buuddha	仏陀を貫き、
And through Daruma alike	達磨をも貫いて、
Thou hast cleft thy way	汝は汝の道を切り開いてきた」

微笑みをその面に浮かべながら(With a smile)、利休は未知の堺へ入っていった。

岡倉は『茶の本』の最後にこの文章を利休の言葉として残した。

たとえ時代ごとに優秀な文化や人物などが表れても、それを帰属できるかどうかは不明である。日本は島国という地理的優位により、自国の文化を熟成し継承することができ、こうした中で発展した茶道や他の日本文化は、西洋に劣らぬ人間性を育むことが可能であった。西洋化のあらしの中で、日本を思うとき彼らの果たしてきた役割は大きい。茶人は死に直面した時、誇りをもって是に挑む自由さがある。千利休は、天下統一という時代において、自刃を豊臣秀吉から命ぜられたが、死に際に茶会を開き自分をこの世で表現しきって、次の世へ旅だっていった。彼は死に際に自由な発想で自分を表現し、それを弟子に残すという演出を自由人として持った。利休に見られるような、危機に面しても心の自由が演出できるような精神性を日本人は茶道の中に見出した。利休の自刃の際に浮かべる

with a smile は、未来への希望と喜びを秘めた一陽来復[274]の喜びである。岡倉は自分のアメリカで果たした役割を利休の最後の言葉に表現して『茶の本』を締めくくる。西洋を意識せずに行動することがなかった岡倉はこれ以後ボストン美術館の中国・日本部門のコレクション充実に力を注ぎ、1909 年のコプリー広場からハンティントン通りへの新築移転には日本部門の設計にもかかわり、展示からの日本紹介を展開して、繊細な日本美術の保存に次々と企画を出していく。1910 年には顧問からキュレーターとなり、1911 年にはハーヴァード大学から藝術修士の称号を拝領し、1913 年には教授としてルーズベルトと同じハーヴァード大学の教授として活躍が約束されていた。岡倉が日本人としてアメリカに残した功績は計り知れない。

おわりに

変化の書の「易」は、西洋偏重の文明を批判し、文明の動きを道家思想で表現する。「絶対」は「相対」であるという彼の主張は、西洋文明の偏重の変化を求める主張であり東洋の逆転の可能性であり、ここに出てくる東洋の「竜」は動きの象徴である。また『茶の本』にちりばめられる「暗示」は、彼が美術家として描いた究極の日本絵画でもある。つまり国家事情を背景に出版された『茶の本』は、アメリカで書かなくてはならなかったと同時に、岡倉自身の日本を書くことであり、その中で彼自身が変化したのである。『茶の本』の不思議さはこの二重性にある。『茶の本』には東西文明の対立と芸術の一体性の問題を描くが、これは現在にも通じる普遍的な問題である。岡倉が偶然アメリカ到着後にセントルイス万国博覧会で発表する機会を得たことは、ここから彼のアメリカでの活動の方向性が決まり、ボストン美術館の夥しい日本美術品に触れる中で、『茶の本』

274 茶は、炉と風炉の二つの時期に大別される．一般的には風炉は五月に始まり、炉は十一月に始まるとされる．易では一月から十二月に六十四卦を配当する。これを消息卦と呼ぶ．五月の消息卦には最下位に陰が現れ毎月陰が増え、十月の卦で全てが陰になる．十一月になると最下位に陽が現れここから炉に代わる.この一陽が戻ってくることから、この卦を一陽来復と呼ぶ．易では陽は吉であり、この陽=吉が復めぐりきたことを茶人は一年の始まりと捉えて「茶人の正月」として祝う習慣がある．

は書かれたのである。この本以後出版された英文著作はない。前二冊と比較して最も政治的でないといわれた『茶の本』は、西洋を魅了する意味において最も政治的あり、暗示において最も藝術的であった。

第 6 章　21 世紀の岡倉天心

はじめに

今、第三の天心ブームの到来といわれている。第一期は、1922 年刊行の日本美術院編集『岡倉天心全集』全三巻をもとにして 29 年に初めて邦訳された『茶の本』を収録した 35 年の聖文閣（全三巻）が出版された時期と、天心死去後に発見された未公刊英文草稿「東洋の覚醒」を翻訳収録した 39 年の六藝社版（全六巻）、44 年の創元版のそれぞれの公刊の時期であり、第二期は、それから 30 年後の 1960 年代から 70 年代の高度成長期の日本ナショナリズム高揚と、72 年日中国交正常化に始まる中国とアジアへの関与を背景に、日本のアジア主義と近代化批判の始祖として天心が再度メディアに登場した 20 世紀終盤の時期である[275]。そして 21 世紀、岡倉天心は第三の注目を集める。

岡倉は東西文明の摩擦と西洋文明偏重の中で、文化と社会の問題を関連して世界で初めて国家を論じた人物である。文化が社会に台頭に論じられる現在、岡倉の行った文化からの発信はどうとらえられるか。

第 1 節　異文化理解の方向性

海外から他国の文化を知ろうとするとき、彼らはどのようなきっかけから異文化を学んでいくのか。異文化理解の過程でおきるさまざまな文化摩擦を彼らはどのように解決していくのか。

第二次世界大戦中、文化人類学者のルース・ベネディクトは『菊と刀』の中で、「或る国民の生活の人間的な日常茶飯事に注意してこそ初めて、いかなる未開部族においても、またいかなる文明の先頭に立つ国民においても、人間の行動というものは日常生活の中で学習されるものであり、軍事的問題としてではなく文化問題として見なくてはならない」との考えの下で日本人を分析した。しかしベネディクトは、日本についての多くの資料から、またアメリカに住む日本人から民族の傾向を調査したが、全く日本人を理解することは難しかったと振り返

275　進藤榮一、2008「岡倉天心と東アジア共同体」KAN vol.35 Autumn

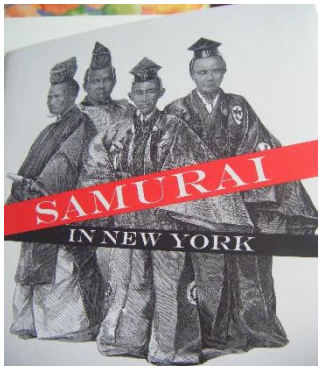
っている。

岡倉はルース・ベネディクトより 40 年前の日本が中国やロシアとの戦いで勝利を得て軍事国家として世界に印象づけたことに対して、文化国家を主張するために茶をテーマとした『茶の本』を出版することで日本の文化国家を主張した。

文武両道の社会を『茶の本』に、「日本を知ろうとすれば Teaism を外すことはできない」と書き、文化が生活と深く関係していることを指摘しているが、『茶の本』には茶道具や茶室内での身体動作をほとんど省略しているため具体的な日本人像は捉えにくい。

そこで 21 世紀の現代から日本人を再評価するため、150 年前の日本人とアメリカ人の異文化交流に当時のサムライの姿から日本人を知ろうという動きがおきている。

第 1 項　SAMURAI IN NEW YORK 2010



アメリカが捉えた幕末の日本人から、日米の接点を考える。

アメリカニューヨークのシティミュージアムは、150 年前に日本の徳川幕府が条約順守のためにアメリカへ招待された万延元年の遣米使節団について特別展を開催した。

SAMURAI IN NEW YORK 展の冊子の表紙には 150 年前の最高儀礼の民族衣装に身を包んでアメリカに乗り込んだ封建社会の上級武士 4 名が写されている。正使は狩衣に鞘巻の太刀（腰刀）、副使も同じく狩衣に毛抜形太刀（衛府の太刀）、監察は狩衣に鞘巻の太刀、烏帽子の姿は、西洋文明にまだ浸食されない日本人の姿である。またアメリカ海軍軍人マシュー・C・ペリーが日本の扇子に移っている写真は、徳川幕府とアメリカ政府の交流の象徴である。

鎖国政策から開国に至り 250 年ぶりの海外への出航となった正使新見豊前守

以下 77 名の遣米使節団は、1860 年 2 月 13 日（安政七年正月 22 日）横浜を出港し 9 か月間の太平洋横断の途中、日の丸の旗がマストに翻ったアメリカの迎船パウアタン号は 3 月 6 日に船舶の修理と燃料補給のためにホノルルに到着した。港には二十六艘もの世界各国の船が停泊中であり、彼らはここで初めて目のあたりにした西洋文明に衝撃を受ける。

2010 年 8 月 27 日金曜日「ザ・ニューヨーク・タイムズ」(“ *When Stoic Samurai Faced the Camera*” The New York Times, Friday , August 27, 2010）には、〝*When Stoic Samurai Faced the Camera*"と題した記事に、椅子に腰かけカメラに向かって腰にさす武士の刀を手に持つ姿は、日本とアメリカの記念的な異文化交流を表しており、アメリカ人が見た最初で、そして 10 年後には消滅に向かう最後のサムライの姿である。旧式の写真機でとった 150 年前のこの写真は武士として始めての使命と経験に緊張しながらも落ち着いた表情をした下級武士の姿を映したもので、動きやすい旅姿で撮られていることから、アメリカ到着直後であると考えられる。また The New York Post は、(2010 年 10 月 31 日付）“Exec's Japan-pics treasure”と題して、多くのフィルムコレクターから使節団訪問の記事を掲載し、2010 年 6 月 25 日から 10 月 11 日までニューヨーク市美術館[276]で開催された SAMURAI IN NEW YORK 展を報じている。

アメリカは多くの武士の姿を写真に撮り、この時代を歴史に残した。この展示はブキャナン大統領の招きで、はじめての日本使節として迎鑑パウアタン号に乗船し、咸臨丸を随行して最初の大洋洋横断を果たした様子と、一人の若武者、立石斧次郎―通称トミーの人気ぶりの記録を通して、幕末の日本を捉えたものである。

ハワイ寄港中に上半身裸身の住民がみた日本人の様子は、頭に妙な髪の束を乗せ、スカートのようなものをはき、上半身に上っ張りのようなものを身に着け、足にはサンダル、腰にはサーベルを持ったアジア人であった。12 日間の滞在を経て、初めて見る灯台の光に導かれて 300 隻余りの世界各国の商船がひしめく

[276] MUSEUM OF THE CITY OF NEW YORK

アメリカ西海岸のサンフランシスコ港に入港すると、各国の船舶や軍艦までが祝砲でパウアタン号を歓迎した。異様な風体の一行は、活気あふれる市街を通り夥しい群衆に見守られて市主催の歓迎式に出席し、この様子は即刻新聞に記載され報道された。パナマ経由でカリブ海を北上し、予定されていたニューヨークを変更してワシントンに到着した。彼らは西洋に派遣された最初の日本人代表派遣者として大統領に謁見し、儀礼の中で批准書交換を行い、彼らは幕府の使命を完了した。

a 150-Year-Old Melody, an Ode to the C

young man mugged for the crowds and blew kisses to them, in stark contrast to the iron faces who formed the rest of the Japanese delegation. And so he had a tune dedicated to him. (This was long before Orson Welles in "Citizen Kane" dismissed such New York tributes, saying, "You buy a bag of peanuts in this town, they write a song about you.")

The piece was played Wednesday in a townhouse on East 67th Street that is the residence of the Japanese consul general in the city, Shinichi Nishimiya.

For Japan, the 150th anniversary of that voyage looms large, a symbol of the country's emergence from a feudal society of shoguns, samurai and noblemen known as daimyo. Japan set out to embrace the world and, often enough, set its own terms. The 1860 journey would not be the last time that it showed it could turn on a dime — or on a daimyo. A few years later, the shogunate was swept aside. So were most of the traveling samurai, with Tommy no exception.

New York's preferred tense is the future. But it, too, is now looking

COLLECTION OF TOM BURNETT

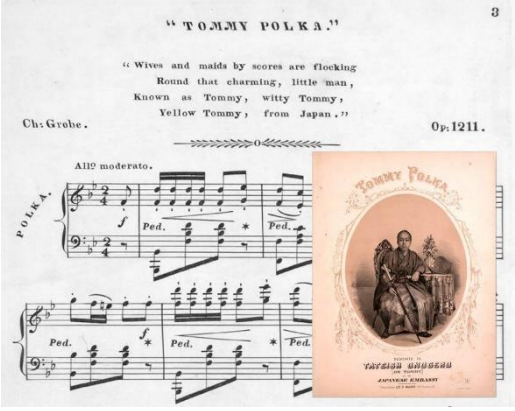
Tateishi Onojiro, who was called Tommy. In 1860, at age 17, he was the youngest of a visiting group of samurai, and a sudden heartthrob.

(Some things do
Times articles on
the city as "the M
World" and as "th
emporium of the
Interest in the s
dinarily high.
After calling on
ington, Baltimore
Japanese entered
to a tumultuous re
mates along a para
Broadway were pu
that number was p
tion, Ms. Henry sai
Even so, she said
how to put on a par
tions and balls duri
Japanese stay were
$82,000, equivalent
today. Walt Whitma
writing a poem for
that began floridly:
from Niphon,/Court
Asia, swart-cheek'd
and on it went like

日本使節の随員の中で最もアメリカ人の人気を博したのは、横浜運上所（税関)通詞見いで今回通弁方として参加した最年少 17~8 歳で使節団に参加した立石斧次郎であった。蘭通詞立石得十郎の甥で養子である彼は、得十郎とともにパウアタン号に搭乗してから乗組員からトミーの愛称で呼ばれていた。窮屈な任務から開放された反動からか、周囲を大いに楽しませたのである。彼は封建社会の日本では想像できない大胆な行動で聴衆と接した。彼が注目された理由の一つは、使節が移動するときに非常に丁寧に扱われていた条約箱を、見物人たちは金貨が入っている箱と思い注目していたが、この箱を護衛していたのが立石斧次郎であった。もう一つの理由として、彼らの歓迎ぶりを当時のザ・ニューヨーク・ヘラルド紙にみると、

> 「…トミーは、かの有名なトミーは誰からも見られていた。その陽気な表情もさることながら、挨拶に対してすぐ答えられるので、誰からも好意を持って迎えられた。みんなトミーのうわさ話をした。ワシントン、ボルチモア、フィラデルフィアでの行動が賛美する者の間で繰り

返し語られた」と親しげに語られているのである。ここから船に乗り換えてニューヨークまで航行するのだが、トミーの船中での様子は、正しい発音でアクセントをつけて話す[277]トミーのすばらしい英語と、他の若者よりかなり身なりに気を使い、立派な刺繍が施されているズボン（袴)、ぴかぴかのエナメル革の靴に帽子を粋にかぶり、ゆったりしたタルマ外套（羽織)、手にはキッド製手袋できわだった。



ニューヨークに入港すると海岸には雲霞の如く見物人が群集となって日本使節団を一目見ようと待ち受けていた。例の条約箱は美しく飾られ、立石斧次郎（トミー）は下役の者数名とそれらを警護していた。警護のための兵士はワシントンの 2 倍で大部隊が繰り出された中を、使節団は行進しユニオン広場で閲兵式に参列した。他の武士とはあまりにも隔たり行き過ぎた彼の風体は、小栗豊後守から小言を言われる原因となったが、彼の人気が日本使節をアメリカ人の間に盛り上げ評判を一層高めたことを残された資料は伝えている。

（「トミー・ポルカ」NCM の資料より 2011.2）

（日本風景のあるドレス、NCA 資料 2011.2）

もう一枚の資料*“Dusting Offer a 150-Year-old Melody, an Ode to the City’FavoriteSamurai”*nytimes.com には、立石斧次郎の人気を再現しようと、当時大流行した「トミーポルカ」を紹介し、150 周年記念では現在誰も聴いた事のないこの曲を流す計画をしたのである。

また日本の風景が彼女たちのドレスの模様に描かれ、日米の異文化交流が、

277 『ザ・ニューヨーク・ヘラルド』

一人の若侍の大胆な外見から女性達に迎えられた熱狂を物語っている。伝統を守る年齢の高い武士たちとは別に、若い武士達が西洋文明に触発され、西洋と東洋を問わずお互いの文化の違いを越えて自然の成り行きで異文化交流する様子が 100 年後の現在も新鮮に伝わってくる。日本使節団はアメリカの土を踏んで以来、ニューヨーク市上げての熱狂的な大歓迎を受け、新聞雑誌も連日大きな紙面に日本や日本人について報道した。岡倉はこれから 40 年後の 1904 年にニューヨークに到着し、まだこの興奮が記憶に新しい時期に弟子たちとともに羽織袴に身を包んで報道のインタビューに答えるのである。彼のアメリカ上陸の戦略性はここにも表れている。150 年後の SAMURAI IN NEW YORK 展は、西洋文明主導のグローバル化の影響を受ける直前の日本人の姿を伝え、日本を開国させたアメリカの自負心と、開国直後の日本との親密な関係がここから始まったことを伝えている。派遣された使節団には、近代的西洋文明に衝撃を受けて明治の教育家となった福沢諭吉が参加しており特に若い武士達はその後の明治維新への動きの原動力となり、サムライの時代から数年で一気に西洋近代化の波に飲み込まれる。この展示による写真と資料の提供は、近代化以前の日本人の姿を公開し、過去と現代の日本を比較しどのように文明が動いたのかを知るうえで貴重な展覧会となった。

第 2 項　茶文化に見る日本：THE IDEOLOGIES OF JAPANESE TEA

岡倉は『茶の本』の中で、茶会での点前動作や茶道具の取り合わせといった最も日本らしさが凝縮された基本的な茶の知識を省略し、旧式の伝統儀礼を否定し、近代的な茶道を描いている。そのため『茶の本』から日本人の感性を知ることは難しい。しかし伝統的な形式の主客のコミュニケーションにこそ日本人の倫理や感性といった宗教性や芸術性が残され、時代による変化を遂げてきた。そこで岡倉が省略した実践的茶道から日本人を捉える 2 冊の本――Tim Cross の *THE IDEOLOGIES OF JAPANESE TEA: Subjectivity, Transience and National Identity,* 2007 と、Kristin Surak の *Making Tea, Making Japan,*

2013―が出版された。彼らは茶道からどのように日本を知るのか。

2007 年の Tim Cross の著の *THE IDEOLOGIES OF JAPANESE TEA: Subjectivity, Transience and National Identity,* by Tim Cross は、茶道の実践から、日本人を理解しようとする本である。全十章の構成で、第一章は実際の茶事を再現し、第二章以降は全く違う視点から国家と茶道との歴史的関係を分析する。

オーストラリア東部出身の Tim Cross は 1980 年代後半にサーフィングビーチから九州福岡に来日し、茶道経験が 20 年間という経歴を持つ。そのきっかけが岡倉天心の『茶の本』であり、彼にとって全てはここから始まり、茶道についてそれほど興味を持っていなかった彼が実際に茶道に触れて魅了され、日本に来て 2 年後、茶道とは純粋な文化であること、また 16 世紀の茶道の宗匠千利休（1522-91）は、政治経済には全くかかわりのない単なる唯美主義者であったというこの 2 点に彼は気づく。ではなぜ純粋に美学を追求する日本伝統文化の茶道が、政治・国家と結びついてきたのか。未知の世界へ入り込み、異文化に触れる感動がこの本の第一章から伝わり、さらにその後の章では文化と国家・権力とのつながりへの分析がそれと並行して行われる。ここでは著者の感じた異文化交流でのギャップこそが異文化へのアプローチとなる。

第一章 What is Twenty-first Century Tea？で彼は、日本での茶道の経験を生かして、茶道の魅力を海外に紹介する。現代の博多の茶道が、「暁の茶事」という極寒の早朝に行われる茶事を通して事細かに表現されており、「和・敬・清・寂」の世界をありありと思い浮かばせる。第一章で茶道の醍醐味を述べた後、第二章 Inventing the Nation: Japanese Culture Politicizes Nature では一転して、茶道と権力に焦点を移し、文化と国家との関係を分析し、政治と権力にかかわる茶の関係に焦点を移し、文化と国家との関係を分析していく。

茶禅一味といわれるように茶道は精神性を重んじ、利休以前の生死をかけた場での茶は「生」であった。茶道は総合的に文化を取り込み、身体動作までも洗練させた藝術であり、創造する文化形態である。この文化的な茶道がどのよ

うにして国家とつながるのかを日本の古典文学から探り、その中で日本人の「花」に対するイメージに注目し、茶室の床の間空間での「花」が古典文学に存在する「美しい」「散る」「はかない」「命」へと連想させると分析する。第三章 Lethal Transience では、日本の美とされる「桜」が神聖な花であり、戦争時と 1990 年代における「桜」のイメージの比較から、「花」と日本人の関係を政治的にとらえ、自然観とあいまって茶道の情感に存在する「はかなさ」と命の「はかなさ」の感情を高め、国家・戦争へとつながるとする。第四章 Japanese Harmony as Nationalism: Grand Master Tea for War and Peace では、国粋主義の茶のあり方を述べ、戦争時に茶道の家元がどのように権力と国家に関わったかについて千家茶道の頂点に立つ家元の権力に焦点を当てる。具体的には 1937 年発行の『国体の本義』にもとづいて日本国民の天皇への従属を強く唱え、いかに日本人が戦争に向かって強化されていったか。そこで国民を統一していく過程における茶道のかかわりを批判的に分析する。第五章 Wartime Tea Literature :Rikyu, Hideyoshi, and Zen では、利休の存在をとりあげ、三千家が利休にかかわる行事を行うことで、常に歴史上の人物を日本人に意識させ、歴史伝統がいかに茶道家元制度と政治の問題を分析する。また豊臣秀吉と千利休の関係を、京都の北野大茶会を通して明らかにし、茶道とつながる千利休や秀吉といった歴史的人物の存在を国家が利用したとして家元制度と政治の問題を分析する。茶禅一味に言及し、宗教界の果たした役割も明らかにする。第六章 Grand Master: *Iemoto* では、川端康成の『千羽鶴』を例にとり、家元制度がどのように日本文化に取り入れられたかを歴史的事実にもとづいて述べ、家元制度への疑問を投げかける。第七章 Tea Teaching as Power: Questioning Legitimate Authority においては、茶道の教義の影響、そしてこれによる日本人の伝統への回帰が家元制度を支えているとし、さらに現在の裏千家家元制度の国際的な成功に焦点を当てる。

Tim Cross が注目する千家茶道の家元制度は、江戸時代に創設されたもので、茶道の流派の頂点に位置し、千利休の子孫として現代まで続いている。日

本では他の伝統文化にも家元は存在し、自己の流派を守り、技術を伝える役割を果たしている。なぜ茶道の家元制度は内紛もなく成功してきたのか。そこには、歴史的人物の千利休の存在がある。天下人の豊臣秀吉の側近として権力を持ち、謎の自刃に追い込まれたという事実や、現在千家に伝わる茶道具類により浮かび上がる歴史的人物として、利休の教義が資料により多く残され明らかであること、建築物や道具類など約 400 年前の遺物が多く残され伝統を誇っていること、そして封建社会の中で支配階級に擁護されてきたことなども茶道の付加価値を高め支持される理由であると考えられる。また多くの社中が日本中に存在することで得る強力な経済力も家元制度を支えている源である。このような独占的支配力を持つ家元の動きは、時代によりさまざまな権力と近づくことなり、国家と連動する茶の動きとなった。

第八章　Teshigahara's Rikyu as Historical Critique: Representations, Identities and Relations では、映画が果たす茶道のイメージつくりへの批判を時代劇、歴史映画から行う。伝統文化と国家の結びつきは映像によりさらに強固になる。つまり映画は民衆の深層心理に作用し、映画の作り手による民衆への心理操作を可能にするのである。これは世界共通であり、映画という娯楽の名のもとに民衆が容易に洗脳されていく危機感を述べる。特に第九章 Lethal Transience as Nationalist Fable: Kumai kei's *Sen no Rikyu: honkakubo Ibun* では具体的に映画の中に人物が描かれ、歴史映画の中に、意図を持って作り上げられた利休像が、現実に受け継がれている現代の茶道と重ねあわされて現実味を増していく中で、民衆を操る役目を担う映画を批判する。最終章の第十章 National Identity and Tea Subjectivities では、最新の日本のテクノロジーが飛躍的に発展した中で、旧式と思われる伝統文化の技術が、基本的な面で依然として日本人の生活文化を支えており、新旧のこの二重構造から日本人の現代性を見抜こうと試みる。さらに著者にとって日本人の不可思議さを解明するために、他世界との異文化比較をおこない、「自然」に重きをおき融合していく伝統文化としての茶道の存在を問う。

日本において豊潤な伝統文化である茶道を通して守り抜かれた価値観が存在し、一方ではプラスチックという無機質な物質から生み出されたクレジットカードなどの登場で、文化をも時間で切り刻んで購入するという価値観が存在する。このような過去と現在が交差する中で、テクノロジーの発展により文化という抽象的な価値観が、現実的な価値観に変化するという点に疑問と警告を発する。歴史の流れから考えて日本人からすればあたり前である現象が、外国人の異文化理解においてかなり難しい存在であることが、著者の異文化摩擦への疑問から浮き彫りになり、彼がどのように異文化に対処しようとするのかがここでは述べられている。

かつて岡倉天心が西洋に対する東洋文化を『茶の本』を通じて主張し、西洋を驚かせた。彼が日本の将来を文化国家として登場させることに全力を傾けこだわった文化の重みとは、一体何であったのか。これからさらに広がりを見せるグローバリゼーションの中で、文化に対する日本国民の自覚はどこまで変化していくのか。また茶の存在の行方はどうなるのか。外国人の視点から見た日本の近未来のあり方についての問いかけは続く。

第 3 項　現象としての茶：Making Tea, Making Japan

2013 年 Kristin Surak の"*Making Tea, Making Japan*"は、歴史的、民俗学的研究分野からを日本で数年間調査を行い、のちには茶の世界に入り茶道を日本で学びながら、茶に関するあらゆる場所で外国人の視点から日本を観察し、多くの資料から現在の日本社会を解説し浮き彫りにする．全五章からなり、第一章 Preparing Tea Performances　では、有名な建築家が便利さと機能の良さが茶室の異空間を身近にし、Space として使い勝手を良くした教室として貸し出している。六本木という、ビルが連立するごみごみした場所の一角にあるコンクリート建築のマンションの一室に作られた空間に、露地を設けた本格的な畳敷きの木造の茶室の、伝統と近代のミックスした空間は、まさしく別世界である。茶室におかれた茶道具について、Objects として茶室で使用される茶道

具の取り合わせや、道具の拝見を紹介し、Performances としての茶道の稽古の中で、最も基本となる茶室、茶道具、点前を映し出す。最新の茶道事情には日本社会が反映されている。第二章 Creating Tea：The National Transformation of a Cultural Practice、第三章 Selling TeaAn Anatomy of the Iemoto System、第四章 Enacting Tea：Doing and Demonstrating Japaneseness、第五章 Beyond the Tea Room：Toward と続く。外国人であるが故に許される優位な立場から、各方面での茶道界の情報を徹底的に蒐集して現代の日本人の持つ近代性と伝統性に迫る。

Tim Cross との共通性は、二人が日本で茶道を本格的に学び、実際の点前動作を通して日本人を理解している点である。彼らの疑問は茶道の許状を授与する「家元制度」への疑問である。茶道世界にも三つの家元[278]が存在するが、彼らにとって、何故家元制度が日本社会では成り立つかについては、日本を知るうえで最も重要な問題である。青木保[279]は、イギリス人の社会人類学者エドマンド・リーチにならって異文化を理解するには三つのレベルがあり、本能的に理解できる自然のレベルは「信号」、社会的な習慣とか取り決めを知るための社会的レベルが「記号」、そしてその価値とか意味を共通している人間にしかわからないというレベルが「象徴」のレベルであるという。飲茶の儀式として中国から伝えられた茶道がサムライの文化として発展し、さらには戦国時代の生死をかける戦国大名の茶の「もてなし」となり、天下統一後の鎖国による日本独自の文化の発展の歴史的事実の中で受けつがれてきた茶は、外国人が最もわかりにくいレベルであり、様々な解釈が可能である。たとえば、国家と国民との強い絆、宗教と歴史文化という平和的な響き、日本中に存在する茶の愛好家を結束させる家元とその資金力など、彼らは変化する国民性に注目する。相違点は、Tim は国家と茶の関係に国家を追求し、Kristin は、現在広告される現象的な茶に日本のイメージを求め、そこに日本人を理解しようとする。外国

[278] 表千家、裏千家、武者小路千家
[279] 青木保, 2007,『異文化理解』岩波書店 p.142-145

人にとっての「象徴」レベルはこれからも変化に飛んだ側面からの理解が期待されるであろう。

第 2 節　今後の課題

20 世紀は戦争の世紀であり、ようやく前世期の後半からの異文化理解による外交が政治外交に重要な要素となった。

21 世紀は宗教による対立や文化の違いや国家間の格差による貧困から民族紛争が拡大し、テロの脅威が広まりつつある。青木保は 2001 年 9 月の同時多発テロ事件の直前 7 月に出版した著『異文化理解』(2001)の中で、第二次大戦後の東西冷戦状態の中でそれぞれの地域や文化の違いは、社会主義という守るべき大前提の中に表面的に吸収され、西側の自由主諸国においても、西欧的な自由主義と民主主義という普遍主義の大前提で、「文化の違い」は問題としないという暗黙の前提が「建て前」としてあったが、東西冷戦構造が崩壊した時に「文化の違い」が政治問題として現れたと語り、戦後の政治外交的なマクロ的異文化理解の方向をしめした。2 年後同時多発テロ直後に出版した青木保の『多文化世界』(2003) では、「文化の多様性」と個別的なミクロ的異文化理解を示して、テロを境にしてこの短期間に文化意識の転換を示している。この背景には携帯やパソコンによる情報の共有化が、より身近に異文化を取り入れることを可能にし、国家間の公的情報発表を待つまでもなく個人レベルで正確な情報収集が可能になった背景が大きい。東西冷戦という大きな枠が外れ、グローバル化が進む中で、発展途上国や後進国は生き残りをかけて自国のアイデンティティーの主張をどう行うべきかが問われる。

150 年前の西洋列強の侵攻によるグローバル化の中で、サイードが定義した西洋の東洋に対する支配の様式の、東洋の後進性・官能性・受動性・神秘性といったオリエンタリズムに対して、日露戦争を背景に国家存続の危機を迎えた日本から、英文書物と講演により、岡倉は先見性と国際性をもって唯一真っ向から西洋に反論した。岡倉がアメリカで活動するわずか 40 年前に、200 年の鎖国か

ら開国した島国の小国日本が近代化のもとで周辺国との摩擦に喘ぐ日本を背負い、英文書物の出版と講演を通して自国を弁護し、西洋支配と、いまだ自然と東洋被支配の無慈悲な矛盾を世論に訴え彼らに協力を求めた。彼の主張は、現代が抱えるグローバル化に通じる普遍的テーマである。20 世紀の目に見える宗教、民族、国家間の対立問題から、21 世紀は地球的規模の天候異変や、放射能汚染、病原菌の拡大といった目に見えない敵との戦いであり、自然の猛威に対して医療開発、宇宙への進出など生存のための国家、人種を超越したグローバル化の時代になる。

岡倉は、『茶の本』の The Cup of Humanity の章で、地球を一つの茶椀に例え、「現代における人間性の天は、じっさい、富と権力とを求めるための恐ろしい大闘争の中に粉砕されている。世界は利己と俗悪の闇中を模索しつつある。知識は悪しき良心によってもたらされ、徳行は功利のために施される。東洋と西洋とは、狂乱の海中に翻弄される 2 頭の竜さながら、失われた人生の宝玉を手に入れようといたずらに努力するのみ」と、達観した立場で西洋ばかりでなく、東洋（日本）へも警告を発している。彼が死去した翌年には第一次世界大戦が勃発し、20 世紀は世界を巻き込む大戦争へと進んだのである。それから 100 年、世界はどのように変化すべきか。

岡倉天心のアメリカは、岡倉のボストン美術館の顧問として日本コレクションの整理に明け暮れる美術家としての岡倉像と、近代国家を推進する国家に降りかかる西洋の東洋への容赦ない攻撃に立ち向かう官僚としての岡倉像を抜きにして考えることはできない。岡倉の死去以後 20 世紀は戦争の時代であった。『茶の本』には西洋の傲慢さを批判するためにユーモアという言葉で厳しい東西の関係を吹き飛ばさなければならないバランスの悪さを一杯の茶椀の中に込めた岡倉の真意は、どうにもならない現状の変化をもとめる苦肉の策であった。岡倉が唱えた文明の「変化」への覚醒は、現在の中国の動きに反映している。100 年後の現在、私たち日本人は、岡倉天心から学べるものは何か

第 7 章　結論

以上異文化交流の中の茶を通して岡倉天心とアメリカを論じ、岡倉が、何故アメリカでこの時『茶の本』を書いたのか、を中心にして新しい岡倉天心像を明らかにした。本論文で最も重要とした問題は、近代日本絵画界を牽引して頂点にいた彼に対して、誹謗中傷した一枚の怪文書を根拠に調査も十分行わずに罷免解雇という屈辱的な解雇が行われたのか。あまりにも不当に思える処分に何故岡倉が即刻辞職したのかという点であった。さらに日本でほとんど取り上げられなかった『茶の本』について、何故この時アメリカで書いたのかについて、前二冊『東洋の理想』『日本の覚醒』と『茶の本』を茶の倫理から詳細に分析し、岡倉が目指した英文著書による日本主張から、岡倉の「国家論」と「芸術論」の視点からアメリカにおける活動の真意を本論で導き出せた。これは、先行研究に異論を唱えた新しい視点であり、岡倉覚三のアメリカが逃避行であるとの説を覆すものである。

岡倉が『茶の本』に書かなかった身体動作による茶道の点前は、日本人独自の非言語コミュニケーションによる感情の表現法であり、何百年も受け継がれ型を守り伝えることで伝統の崩壊を免れてきた。日本人の生活空間に習慣としてある目に見えない伝統習慣や精神性は、日本建築や生活の洋風化から、確実に伝統空洞化は進んでいる。2009 年 11 月来日したアメリカのオバマ大統領は皇居に到着した際、天皇、皇后両陛下に、握手と日本式「礼」の動作を同時に行った。その写真が日米の新聞に掲載され、アメリカではオバマ大統領が深く身体をかがめた日本式挨拶について批判がおきたと記載しているが、彼らにとってこの伝統的

な「礼」が、日本の象徴として認識されていることを物語っている。戦後マッカーサー元帥と昭和天皇の直立の姿が日本国民に敗戦を強く感じさせたことと比較して、黒人の大統領として白人社会に変化をもたらしたオバマ大統領の日本式「礼」による外交姿勢は、同じく時代の「変化 change」を象徴している。150 年前の西洋列強主導のグローバル化は厳しい支配・被支配の関係の中で行われた流れであり、西洋に牛耳られながら東洋の小国から文化国家としての日本主張を世界に発信した岡倉の思想は、21 世紀の新たなグローバル化による支配・被支配に直面している現代に通じるものがあり、世界が混迷する社会の中で今以上に政治外交の主流となるであろう。

参考文献

青木保、2009、『異文化理解』岩波新書

青木保、2009、『日本文化論の変容－戦後日本の文化とアイデンティティー　』中央公論社

青木保、2006、『多文化世界』岩波新書

浅野秀剛、2010、『浮世絵は語る』講談社現代新書

有賀貞/大下尚一/他編、1994、『世界歴史体系　アメリカ史 1―17 世紀～1877 年―』山川出版社

イザベラ・バード/高梨健吉訳『日本奥地気候』2008、平凡社

稲賀繁美、2003、『絵画の東方○オリエンタリズムからジャポニズムへ○』名古屋大学出版

稲木明子/沖田知子、2010、『謎解き「アリス物語」』ＰＨＰ新書

茨城大学五浦美術文化研究所監修/中村愿編、2000、『岡倉天心アルバム』中央公論美術出版

色川大吉、1995、『日本の名著 39　岡倉天心』中央公論社

ウォレン.I.コーエン著/川島一穂訳、1999、『アメリカが見た東アジア美術』スカイドア

梅原猛編集解説、1976、『近代日本思想 7 岡倉天心集』筑摩書房

ウルリッヒ・ベック/木前利秋／中村健吾監訳、2006、『グローバル化の社会学　グローバリズムの誤謬―グローバル化への応答』国文社

エドワード・W・サイード/今沢紀子、1993、『オリエンタリズム』平凡社

大岡信、2006、『岡倉天心』朝日新聞社

大井一男、2008,『美術商・岡倉天心』文芸社

岡倉天心/大久保喬樹訳、2009、『新訳　茶の本』角川学芸出版

岡倉天心・岡倉一雄編『岡倉天心全集』

岡倉天心、1980、『岡倉天心全集』1～8 別巻　平凡社

岡倉天心、1983、『明治文学全集 38 岡倉天心集』筑摩書房

岡倉一雄、1940、『父岡倉天心』聖文閣

岡倉一雄、1998、『岡倉天心をめぐる人々』中央公論美術出版

岡倉古志朗、1999、『祖父岡倉天心』中央公論美術出版.

岡倉登志、2006、『世界史の中の日本―岡倉天心とその時代』明石書店

岡倉登志・岡本佳子・宮瀧交二、2013、『岡倉天心思想と行動』吉川弘文館

岡倉天心国際シンポジューム、2007、『「茶の本」の 100 年』小学館スクウェアー

大久保純一、2008、『浮世絵』岩波新書

大久保喬樹、1989、『岡倉天心－驚異に満ちた空虚』小沢書店

大久保喬樹、2007、『日本文化の系譜』中公親書

小暮修二、2008、『アメリカ雑誌に映る<日本人>　オリエンタリズムへのメディア論的接近』青弓社

亀井勝一郎・宮川寅雄編、1983、『岡倉天心集　明治文学全集 38　』筑摩書房

河上徹太郎、『岡倉天心と日本の覚醒』

北康利、2008、『九鬼と天心―明治のドン・ジュアン達』PHP 研究所

木村宗慎、2009、『茶の湯デザイン』Pen BOOKS

木下長宏、2005、『物二観ズレバ竟二吾無シ　岡倉天心』ミネルヴァ書房
清美睦朗、1980、『天心岡倉覚三』　中央公論美術出版
久我なつみ、1999、『フェノロサと魔女の町』河出書房新社
久我なつみ、2004、『日本を愛したティファニー』河出書房新社、
九鬼周造/奈良博訳、2008、『「いき」の構造　*The Structure of Iki*　』講談社インターナショナル
熊倉功夫、1983、『南方録を読む』淡交社
熊倉功夫、2007、『井伊直弼の茶の湯』　国書刊行会
熊倉功夫、2008、『「山上宗二記」付　茶話指月集』岩波文庫
隈元謙次郎他編、1979~80、『岡倉天心全集（全八巻・別巻一巻)』平凡社
雲井昭、1978、『インド仏教思想と経典をたどる』平河出版社
倉澤行洋、1983、『増補　芸道の哲学　宗教と芸の相即』　東方出版
倉澤行洋、2000、『増補　対極　桃山の美』　淡交社
倉澤行洋、2002、『珠光　茶道形成期の精神』淡交社
クリスティン・スラク、2012、*“MAKING TEA, MAKING JPAN —CULTURAL NZTIONALISM IN PRACTICE“* STANFORD UNIVERSITY PRESS
黒田日出男、2005、『吉備真備大臣入唐絵巻の謎』小学館
1998、『全集　黒澤明　蜘蛛巣城』　岩波書店
桑田忠親、1996、『茶道の歴史』講談社学術文庫
ケヴィン・ニュート/大木純子、1997、『フランク・ロイド・ライトと日本文化』鹿島出版会
五島茂責任編修、1971、『ラスキン/モリス』中央公論社
権左武志、2013、『ヘーゲルとその時代』岩波新書
斉藤隆三、1969、『岡倉天心』（「人物叢書」）吉川弘文堂
三徳庵＋ワタリウム美術館、2006、「『茶の本』の 100 年」小学館スクウェアー
司馬遼太郎、2010、『坂の上の雲』（一～八）文芸春秋
清水恵美子、2012、『岡倉天心の比較文化史的研究―ボストンでの活動と藝術思想』思文閣出版
清水靖夫監修、2010、『地図で読む『坂の上の雲』』日本文芸社
志村有弘、2003,『宮本武蔵を読む　新訳『五輪書』』大法輪閣
ジョアン・ロドリゲス/江馬務他訳、1973、『日本教会史上』岩波書店
ジョナサン・スウィフト著/平井正穂訳、2009、『ガリヴァー旅行記』岩波書店
ジル・ドウルーズ/財津理/斎藤範訳、2008、『シネマ 1✻運動イメージ』法政大学出版局
鈴木大拙、2006、『禅と日本文化』岩波新書
鈴木健夫、2008、『ヨーロッパ人の見た幕末使節団』講談社
関秀夫、2005、『博物館の誕生―町田久成と東京帝室博物館』岩波新書
関根宗中、2009、『綜合芸術としての茶道と易思想』淡交社
千宗室 XV /浅野晃訳、2008、『対訳『茶の本』[序と跋] 』バイリンガルブックス
千宗室、1997、『風興集』淡交社
千宗室監修/ポール・ヴァレー編、2000、『茶道学大系別巻　海外の茶道』淡交社

高階絵里加、2000、『異界の海―芳翠・清輝・天心における西洋』三好企画
田中秀隆、2007、『近代茶道の歴史社会学』思文閣出版
谷端昭夫、2007、『よくわかる茶道の歴史』淡交社
谷端昭夫、2010、『日本史のなかの茶道』淡交社
高橋真司、2008、『九鬼隆一の研究―隆一・初子・周造』未来社
立木知子、1998、『岡倉天心『茶の本』観賞』淡交社
淡交社編集局編、2010、『茶の湯と陰陽五行』淡交社
筒井紘一、2013、『南方録（覚書・滅後）』淡交社
坪内隆彦、1998、『岡倉天心の思想探訪　迷走するアジア主義』勁草書房
ティム・クロス、2009、“*THE IDEOLOGIES OF JAPANESE TEA —SUBJECTIVITY, TRASCIENCE AND NATIONAL IDENTITY*“ GLOBAL ORIENTAL LTD,UK
ディーナ・リチャード・ヴィラ/青木隆嘉訳、2004、『アレントとハイデガー』法政大学出版局
東京文化財研究所編、2002、『黒田清輝《知・感・情》美術建久作品資料第一冊』中央公論美術出版
ドナルド・キーン/司馬遼太郎対談、2011、『日本人と日本文化』中公文庫
中島誠、1998、『司馬遼太郎と丸山真男』現代書館
中村菊男、1974、『伊藤博文』時事通信社
西田幾多郎、2012、『善の研究』岩波文庫
新渡戸稲造/奈良本辰也訳、2007、『武士道』三笠書房
ニーチェ/竹山道雄訳、1963、『ツァラトストラはかく語りき』上下新潮文庫
成田重行、1998、『茶聖陸羽』淡交社
Ｖ・Ｆ/アルミニヨン/大久保昭夫訳、1987、『イタリア施設の幕末見聞記』新人物往来社
久松真一著/藤吉慈海、2010、『茶道の哲学』講談社
久松真一『久松真一著作集』第四巻増補
久松真一、2010、『茶の精神』弘文堂
平山郁夫他、2003、『今なぜ天心化バルビゾンか』新潟日報社
古田紹欽、1990、『草庵茶室の美学―茶と禅のつながり』淡交社
福永光司、1982、『道教と日本文化』人文書院
藤田治彦、1996、『ウイリアム・モリスへの旅』淡交社
福沢諭吉/内村鑑三/岡倉天心著、1958、『現代日本文学全集 51 福沢諭吉集/内村鑑三集/倉天心集』筑摩書房
堀岡弥寿子、2000、『岡倉天心との出会い』近代文芸社
堀岡弥寿子、1974、『岡倉天心―アジア文化宣揚の先駆者』吉川弘文堂
堀田謹吾、2001、『名品流転―ボストン美術館の「日本」』NHK 出版
本田済、2007、『易』朝日新聞社
増谷文雄編集解説、1964、『現代日本思想体系 8　鈴木大拙』筑摩書房
松田延夫、2002、『益田鈍翁をめぐる 9 人の数寄者たち』里文出版
松村正義、1987、『日露戦争と金子堅太郎　広報外交の研究』新有堂
松本清張、2012、『岡倉天心　その内なる敵』河出文庫

丸山真男、2010、『日本の思想』　岩波新書
丸山真男、『丸山真男全集』（第 1 巻、第 7 巻）
宮永孝、2005、『万延元年の遣米使節団』講談社
御手洗昭治、2008、『サムライ異文化交渉史』ゆまに書房
村井康彦、1979、『茶の文化史』岩波新書
村岡博、1977、『岡倉天心』岩波書店
村形明子編訳、2008、『フェノロサ夫人の日本日記』ミネルヴァ書房
村上陽一郎、2006、『文明の死/文化の再生』岩波書店
E.S.モース著/石川欣一、1970~71、『日本その日その日（全三巻）』（東洋文庫）平凡社
E.S.モース著、1979、『日本人のすまい―内と外』鹿島出版会
矢代幸雄、1972、『私の美術遍歴』岩波書店
山口静一、1982、『日本文化の宣揚に捧げた一生　フェノロサ・上　』三省堂
山口静一、1982、『日本文化の宣揚に捧げた一生　フェノロサ・下　』三省堂
山口宗之、1974、『橋本左内』吉川弘文道
山室信一、2005、『日露戦争の世紀―連鎖視点からみる日本と世界―』岩波新書
ユルゲン・ハ―ヴァ―マス著三島健一他訳、2009、『引き裂かれた西洋』法制大学出版
ユルゲン・ハーヴァーマス著高野昌行訳、2004、『他社の受容―多文化社会の政治理論に関する研究』法政大学出版局
横浜開港資料館・横浜近世史研究会、1993、『19 世紀の世界と横浜』山川出版社
横山大観、1981、『大観自伝』講談社
吉田千鶴子、2011、『<日本美術>の発見』吉川弘文館
吉田千鶴子/大西純子、2009、『六角紫水の古社寺調査日記』東京藝術大学出版会
ヨーゼフ・九ライナー、1992、『ケンペルのミタトクガワジャパン』六興出版
ルイス・キャロル/河合祥一郎訳、2010、『不思議の国のアリス』角川書店
ルイス・キャロル/北村太郎訳、2008、『不思議の国のアリス』集英社
ルース・ベネディクト/長谷川松治訳、2005、『菊と刀』講談社
ルース・ベネディクト/米山俊直訳、1973、『文化の型』社会思想社
ワタリウム美術館、2005、『岡倉天心　日本文化と世界戦略』平凡社
ワタリウム美術館、2005、『ワタリウム美術館の岡倉天心・研究会』右文書院
和辻哲郎、2009、『風土』岩波文庫
和辻哲朗、1962、『和辻哲郎全集』（第三巻）

【論文・論説】

安部崇慶「芸道における「型」の形成に関する実証的研究」（兵庫教育大学研究結果報告書）
池内恵「岡倉天心『茶の本』と東洋のかたち」2004，文芸春秋
五十嵐太郎「葵國強の茶室・岡倉天心へのオマージュ・穏やかにして過激なる茶室リノベーション」
伊田徹「岡倉天心における ideal の位相―「妙想」から「理想」へ」五浦論叢第 13 号
池田久代「キャサリン・マンスフィールドと岡倉天心―ジャポニズムの流れの中で」
稲賀繁美「理念としてのアジア―岡倉天心と東洋美術史の構想　そしてその顛末」1999,

全米アジア研究協会（AAS）年次総会、岡倉天心の再検討
岡倉登志「岡倉天心とブラーミンズ（1）ジョン・ラファージを中心に」大東文化大学東洋研究所
岡倉登志「岡倉天心とブラーミンズ（2）ラングドン・ウォーナー」大東文化大学東洋研究所
岡倉登志「日露戦争前後の岡倉天心」五浦論叢第 12 号
大久保喬樹「岡倉天心と脱近代思考の可能性―その言葉、時間、空間意識」五浦論叢第 9 号
大久保喬樹「自然の語る物語を聞くこと―岡倉天心の思想をめぐって」
呉善花「岡倉天心の<東洋の理想>－儒教・道教・仏教のテーマとしての自然との合一」拓殖大学日本研究所『新日本学』第 6 号
幸田未央「「日本美術史」という概念の成立と近代―フェノロサと岡倉天心を中心に」卒業研究
小林徹「現代社会における茶道と武士道の役割」（長崎国際大学）2009.6
小林康夫「他へのカップ―あるいは岡倉天心の「花」の哲学」2006，ミラノプラダホール
柴田馨「岡倉天心の国際感覚―英文著作を貫く理念」五浦論叢第 15 号
清水恵美子「アメリカ人画家の描いた日本のイメージ―ボストン・コネクション：ジョン・ラファージと岡倉天心」比較日本学研究センター研究年報創刊号
鈴木博之「ナショナル・アイデンティティーの発見」2001，中央公論
鈴村裕輔「『茶の本』における岡倉天心の文明論と藝術論について」
田中秀隆「岡倉天心の日本文化論―茶の体位法」(名古屋大学) 2009.6
田中秀隆「信長茶会の政治的意図再考」(名古屋大学) 2009.6
田中秀隆「岡倉天心の日本文化論―『茶の本』の対位法」
谷晃「岡倉天心著『茶の本』―茶の湯を通して日本文化を紹介」淡交記載
寺島実朗「アジアの再考を図ろうとした岡倉天心の見た夢」2001，Foresight
土井通弘「岡倉天心序説」
時野谷浩「「以心伝心」の分析―非言語コミュニケーションについての一試論―」（東海大学文学部紀要）
東郷登志子「岡倉天心 *The Book of Tea* の多種構造と公共的音楽構成」
中谷伸生「建築と美術・岡倉天心と日本の文化」1998，電気設備学会誌
中谷伸生「岡倉天心が評価したもの・しなかったもの―江戸の狩野派と大阪の文人画」美術フォーラム 21
中西晴子「茶道の所作―社会学的考察―」（仏教大学大学院紀要）
前原祥子「岡倉天心の『茶の本』を読む　その 1 出版の周辺」
前原祥子「岡倉天心の『茶の本』を読む　その 2 茶の心を読む」
前原祥子「岡倉天心の『茶の本』を読む　その 3 茶の演劇性―見立てを背景に」
藤吉慈海「「茶道の哲学」を読んで」（愛知県立看護大学）
村杉明子「ボストンにおける岡倉天心の先行者たち―金子堅太郎と松本文恭―」（関西大学）2009.6
中川邦明「『茶の本』と共に」
中西進「宇宙の総体を宿す美を求めて　苦悩に負けなかった天心」2007，WEDGE

堀内隆彦「岡倉天心の思想探訪：迷走するアジア主義」
森田・小泉「岡倉天心と五浦」
森田義之「岡倉古志朗先生と『祖父岡倉天心』追悼文」五浦論叢第 9 号
安野光雅「『茶の本』は理屈を越えて感情に触れてくる。だからラブレター」
横山久美子「岡倉天心の Teaism」
吉田丈夫「100 年前の国際人―岡倉天心とセレンディピティー」2006, ほすぴらいぶらりー
吉田千鶴子「岡倉天心の「万国歴史」講義」上下, 五浦論叢第 13,14
吉田千鶴子「岡倉天心と久保田県―久保田家資料を中心に」五浦論叢第 10 号

【図録】
『William Morris』1997, 京都国立近代美術館
『岡倉天心とボストン美術館』1999, 名古屋ボストン美術館 N.C.P.
『岡倉天心―藝術教育の歩み―』2007, 東京藝術大学岡倉天心展実行委員会
『生誕一五十年記念　岡倉天心　近代美術の師』監修/古田亮, 2013, 平凡社
『西洋の衝撃と日本』東京大学出版会
『所蔵資料目録』2007, 茨城県天心記念五浦美術館
『東京藝術大学百年史』第一巻、第二巻
『日本美術の薫陶』サライ美術館
『ボストン美術館　日本美術の至宝』2012、東京国立博物館他
『北斎』山口県萩美術館・浦上記念館

【その他】
「岡倉天心の眼」東京美術倶楽部＋東京美術商共同組合
「日本古美術展覧会報国書　昭和 28 年 1 月～12 月」文化財保護委員会
「開港場　横浜ものがたり 1859-1899」2010,編集発行 横浜開港資料館・横浜市歴史博物館
「ペリー来航と横浜」2012, 編集発行 横浜開港資料館
「資料がかたる　横浜の 157 年　「たまくす」（楠の木）が見た国際港都のあゆみ」横浜市ふるさと歴史財団 2011 編集横浜開港資料館
NHK「その時歴史が動いた―岡倉天心」2008 5.14　放送分

【英文一次資料】
BOSTON PUBLIC LIBRARY
HARVARD UNIVERSITY ARCHAIVES
Harvard University Wildener Library RmG81
Harvard-Yenching Library
Information on E.F.Fenollosa at P.A.in Harvard
The articles about Theodore Roosevelt 1902~, 2011, in the Harvard University Archives Pusey library
The letter and poem of Kakuzo Okakura to Mrs. Gardner （Okakura's own handwriting）, 2011, in the Copley Public Library
The letter of Okakura's family and his disciples to Mrs.Gardner in the C.P.L

Photos, 2011, M.F.A. in Boston, M.M.A in New York, P.E.M. in Salem
The Museum of the City of New York ,2010 "SAMURAI IN NEW YORK"
The New York Times, " *When Stoic Samurai Faced the Camera*" Friday , August 27, 2010
*" Dusting Offer a 150-Year-old Melody, an Ode to the City'FavoriteSamurai"*nytimes.com

【英文二次資料】

CHRISTOPHER BENFEY, 2004, *THE GREAT WAVE, GILDED AGE MISFITS, JAPANESE ECCENTRICS, and THE OPENING OF Old JAPAN*
Christine Guth, 1996 , *Art of Edo Japan, The Artist and the City 1615-1868*, Yale University Press, New Heave and London
Everett F. Bleiler, 1906, *KAKUZO OKAKURA, THE BOOK OF tea,* 2010 Fox, Duffield and company, New York
Hilliard T. Goldfarb, 1995, *The Isabella Stewart Gardner Museum*, A COMPANION GIDE AND HISTORY, YALE UNIVERSITY PRESS, NEW HEAVEN & LONDON
HENREY JAMES, 2010, *Letter to Isabella Stewart Gardner,* 2009 Pushkin Press London
Junya Nagakuni and Junji Kitadai, 2003, *DRIFTING TOWARD THE SOUTH EAST, The Story of Five Japanese Castaways told in1852 by John Manjiro*, Spinner Publications, Inc.
KAKUZO OKAKURA, 2009, *The Ideal East with Special Reference to the Art of Japan,* IBC Publishing
KAKUZO OKAKURA*,* 2007, *Ideals of the East: Spirit of Japanese Art*, Cosimo, inc.
KAKUZO OKAKURA*, The Book of Tea*, *with an Introduction by* CHRISTOPHER BENFEY
KAKUZO OKAKURA, 2011," *THE AWAKENING OF JAPAN ",* Forgotten Books *THE BOOK OF TEA by Okakura Kakuzo, with foreward & Biograohical Sketch by Elise Grilli*, TUTTLE PUBLISHING
KRISTIN SURAK, MAKING TEA, 2013, *MAKING JAPAN CULTURAL NATIONALISM IN PRACTICE*, STANFORD UNIVERSITY PRESS
LEWIS CARROLL, 1994, *ALICE'S IN WONDERLAND*, PENGUIN BOOKS
LEWIS CARROLL, 1994, *THROUGH THE LOOKING GRASS*, PENGUIN BOOKS
TIM CROSS, 2009, *The Ideologies of Japanese Tea*, GROBAL ORIENTAL LTD
Louise Hall Tharp, *MRS. JACK　A biography of Isabella Stewart Gardner*Isabella Stewart Gardner Boston
Max Put, 2000, *Plunder and pleasure, Japanese art in the West 1860-1930*, Hotei Publishing
Maureen Melton, 2009, *INVITATION TO ART*: A History of the Museum of fine Arts, Boston, MFA Publications
Patrick L. Kennedy, 2008, *Boston THEN AND NOW,* Salamander Books

ERIC HOMBERGER, 1994, *THE HISTORICAL ATRAS OF NEW YORK CITY, A VISUAL CELEBLATION OF 400 YEARS OF NEW YORK CITY'S HISTORY,*HENRY HOLT AND COMPANY NEW YORK
Magazine of Peabody Essex Museum, *Orientations June2003*
Christine M.E. Guth, 2004, *LONGFELLOW'S TATTOS, TOURISM, COLLECTING, AND JAPAN,* UNIVERSITY OF WASHINGTON PRESS
Urasenke Foundation, *CHANOYU Quarterly,* No.85*:Isabella Stewart Gardner and Okakura Kakuzo*, Nissha Inc., Kyoto
BULLETIN MUSEUM o f FINE ARTS, BOSTON 1 (1903-1909)
BULLETIN MUSEUM of FINE ARTS, BOSTON 2 (1910-1915)
BULLETIN MUSEUM of FINE ARTS, BOSTON 3 (1916-1923)
BULLETIN MUSEUM of FINE ARTS, BOSTON 4 (1924-1926)
BULLETIN MUSEUM of FINE ARTS, BOSTON 5 (1927-1930)
BULLETIN MUSEUM of FINE ARTS, BOSTON 6 (1931~34)
BULLETIN MUSEUM of FINE ARTS, BOSTON 7(1935~38)
BULLETIN MUSEUM of FINE ARTS, BOSTON 8(1939~42)
MFA INDEX (1903~1942)
BULLETIN MUSEUM of FINE ARTS, BOSTON (1943~44)(1945~46)(1947~48)
BULLETIN MUSEUM of FINE ARTS, BOSTON (1949~50)(1951~52)
BULLETIN MUSEUM of FINE ARTS, BOSTON (1953~54)(1955~56)
BULLETIN MUSEUM of FINE ARTS, BOSTON (1957~58)(1959~62)
BULLETIN MUSEUM of FINE ARTS, BOSTON (1962~63)(1964~65)
BULLETIN MUSEUM of FINE ARTS, BOSTON (1966~67)(1968~69)

さいごに

岡倉が何故『茶の本』を書いたのか、というこの論文の核となる『茶の本』を茶人の立場から分析するにあたり、筆者の茶道歴は 1970 年の大学入学と同時に始まる。裏千家に入門し、京都の双ヶ岡を借景とした吉田兼好ゆかりの寺で小島宗諦師の指導のもと稽古を続け現在に至る。この間多くの茶会、茶道指導の実践経験を国内外で積み、合理的で洗練された身体動作に日本人の本質を見てきた。2007 年に母校の大学院に入学し河原俊昭教授指導のもとで『茶道における動作と非言語コミュニケーション「ひらく」「たたむ」「しまう」の視点から』で修士学位をとり、何百年と続いた茶道の身体動作に受け継がれてきた日本人の姿を論じたが、日本国内では生活様式の変化から身近な場所で茶道の感性を受け継ぐ場が失われてきている。またコーヒーのように機械による煎茶販売が一般化する中で、茶室の時空間を必要とする粉茶（抹茶）の茶道離れが進む。2009 年岡倉天心研究のため大阪大学大学院人間科学研究科文明動態学研究室に入学し、マックス・ウエーバー研究者として知られるヴォルフガング・シュヴェントカー（Wolfgang Schwentker）教授の指導の下でドイツフランクフルト学派のメンバーの哲学理念を学び、研究室の研究課題である「グローバル化の過程における社会変動」のテーマから、日本の知識人岡倉天心が行ったアメリカにおける活動とその意図の研究解明を進めた。歴史学博士のシュヴェントカー教授からは、2011 年ボストンのエマニエル大学留学の際のボストン美術館の調査時に、新しい側面からニューヨーク市美術館の開催した SAMURAI IN NEW YORK 展を調査するようにアドバイスを受け、アメリカでの本論文の方向性と貴重な資料を得ることができ、論文完成につながった。この留学の決定直後にフィールド調査とフィールド実践の授業を本大学で半年間履修し、初めての留学での緊急時の目的変更や情報の蒐集についての実践的な授業は、ボストンでの研究がはかどらない中での時間節約に役立った。また研究室の課題の一つである「記憶の媒体」としては、ボストン美術館とイザベラ・ガードナー美術館を行来して残された交流資料を比較し、ガードナー夫人

との親交の接点を求めた。天候の許す限り毎日通ったボストン美術館では 100 年前の岡倉覚三の残像を展示に求め、研究ノート『ボストン美術館における岡倉覚三残像―2011 年春の「茶道具展」展示をもとに』をまとめた。研究ノートをまとめるにあたり、日本以外では世界で最も充実した日本美術コレクションを誇るボストン美術館を、何の知識もなく批評することを避けるため、帰国後本大学で 2 年間の博物館学を履修し、現代の博物館の現状と課題を学び、最終的に館外実習を大阪歴史博物館で行い、一定期間展示や修復にかかわり学芸員資格を得て、様々な側面から博物館を考察することができた。また 2009 年の大学院入学と同時に、西洋文明に対峙する東洋文明を深く理解するために、宝塚藝術大学（現宝塚大学）の倉沢行洋教授の日本伝統芸術の授業を週 1 度聴講し、最先端の日本芸道論・美学を井尻益郎教授に、また茶道の易学を関根秀治教授に集中講義を受けた。多くの先生方の協力を得て東西文明の学術的知識と実践を蓄積し、岡倉天心のアメリカを新しい視点から捉え本論を完成するに至った。

謝辞

本論文を完成するに際し、貴重な助言と御指導を頂きました大阪大学大学院人間科学研究科のヴォルフガング・シュヴェントカー教授に心より感謝いたします。また数々の御教示を承りました大阪大学大学院人間科学研究科の中山康雄教授と檜垣立哉教授に深く感謝いたします。そしてさまざまな疑問に答えていただき、ご協力くださいました大学職員の皆様方にお礼申し上げます。

2015 年 9 月